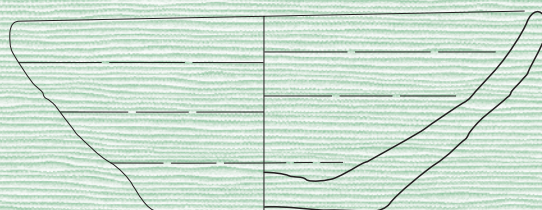


# ひびのきサウジ遺跡Ⅲ

都市計画道路高知山田線発掘調査報告書Ⅲ



2010.1

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



# ひびのきサウジ遺跡Ⅲ

都市計画道路高知山田線発掘調査報告書Ⅲ

2010.1

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 序

都市計画道路高知山田線は県の中心部と土佐山田町を結ぶ幹線道路として整備が進められており、一部はあけぼの道路としてすでに開通しています。今回の調査は都市計画道路高知山田線の建設に伴うものであり、平成19年度に調査を行いました。平成18年度には伏原遺跡の調査を行い、すでに報告書も刊行されています。

ひびのきサウジ遺跡が所在する長岡台地は県内でも特に多くの遺跡がみられる地域であり、古くから調査も実施されています。今回報告するひびのきサウジ遺跡も以前に調査が行われており、多くの成果があがっています。また、隣接するひびのき遺跡は県内でも早くに調査が行われており、多くの人の知るところとなっています。

今回の調査では弥生時代の溝跡から土器が多量に出土し、集落の構造や広がりを知ることができました。中世では山田氏が活躍した時代の屋敷跡や道路状遺構が検出され城下町の一端を垣間みることができました。この報告書が地域の歴史研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたってご配慮とご協力を頂いた地域の皆様方や関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成22年1月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター  
所長 小笠原孝夫



## 例言

1. 本書は(財)高知県文化財団が高知県中央東土木事務所より委託を受けて平成19年に実施したひびのきサウジ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. ひびのきサウジ遺跡は高知県香美市土佐山田町楠目に所在する。
4. 調査面積は1,212m<sup>2</sup>、調査期間は平成19年5月21日から平成20年2月8日であった。
5. 発掘調査・整理作業は以下の体制で行った。

平成19年度

総括：埋蔵文化財センター所長 汲田幸一  
総務：次長 森田尚宏， 総務課長 戸梶友昭， 主任 谷真理子  
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久  
調査担当：主任調査員 坂本幸繁

平成20年度

総括：埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫  
総務：次長 森田尚宏， 総務課長 恒石雅彦， 主任 谷真理子  
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久  
調査担当：主任調査員 坂本幸繁

平成21年度

総括：埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫  
総務：次長 森田尚宏， 総務課長 里見敦典， 主任 弘末節子  
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久  
調査担当：主任調査員 徳平涼子

6. 本書の執筆は第I章の1, 2, 3, 5, 第II章の1, 2, 第V章の4を坂本, 第I章の4, 第II章の3, 第V章の1, 2, 3を徳平, 第III章を坂本と徳平が担当し, 編集は徳平が行った。現場写真は坂本が撮影し, 遺物写真は徳平が撮影した。
7. 遺構については通し番号とし, SB(掘立柱建物跡), ST(竪穴式住居跡), SK(土坑), SD(溝跡), P(ピット)等の略号も使用した。掲載している挿図の縮尺はそれぞれに記載しており, SBの模式図は200分の1である。方位Nは世界測地系による座標北である。
8. 遺物については弥生土器が縮尺1/4, その他は縮尺1/3を基本とし, 一部の遺物については, 1/2及び1/5に縮尺を変えているが, 各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は通し番号とした。
9. 発掘調査, 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また, 同センター諸氏より貴重な助言を頂いた。記して感謝する次第である。

発掘調査：測量補助員 岩原明美

現場作業員 猪原昭二, 大石嘉久, 大原武, 岡上功, 金田穂, 久家瑞, 窪田泰昭, 黒岩幸子, 清藤澗唯, 清遠正, 公文朱美, 澤本昌明, 田中穰, 中沢二男, 橋本佐与子, 萩野博行, 浜

田友喜, 久竹孝, 宮本幸子, 横田輝子, 吉川誠喜, 吉川徳子

整理作業：整理作業員 井澤久未, 入野三千子, 岩原明美, 大谷亜紀子, 門田美知子, 久家朋子, 公文美和, 芝真由美, 高橋加奈, 高橋由香, 田村奈織美, 長瀬愛弓, 永森亜紀, 西田由紀, 藤原ゆみ, 松山真澄, 森睦美, 山崎由理, 山中美代子

10. 調査にあたっては, 高知県中央東土木事務所, 高知県教育委員会, 香美市教育委員会に御協力を頂いた。また, 地元住民の方々に遺跡に対する深い御理解と御援助を頂き, 厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物は本調査を「07-4YH」, 試掘調査を「07-6YH」と「07-7YH」と註記し, 高知県立埋蔵文化財センターで保管している。



# 目次

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経過	1
2. 立会・試掘調査	2
3. 調査の方法	3
4. 調査の概要	4
5. 調査日誌抄	4

## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境	9
2. 歴史的環境	12
3. 周辺の調査	13

## 第Ⅲ章 調査の成果

1. I区	17
(1) 調査区の概要	17
(2) 基本層序	17
(3) 堆積層出土遺物	17
(4) 検出遺構	20
2. II区	39
(1) 調査区の概要	39
(2) 基本層序	39
(3) 堆積層出土遺物	39
(4) 検出遺構	40
3. III・IV区	43
(1) 調査区の概要	43
(2) 基本層序	43
(3) 堆積層出土遺物	44
(4) 検出遺構	50
4. V区	76
(1) 調査区の概要	76
(2) 基本層序	76
(3) 堆積層出土遺物	77
(4) 検出遺構	77
5. VI区	77
(1) 調査区の概要	77
(2) 基本層序	77

(3) 検出遺構	77
6. VII区	78
(1) 調査区の概要	78
(2) 基本層序	78
(3) 検出遺構	78
7. VIII区	79
(1) 調査区の概要	79
(2) 基本層序	79
(3) 堆積層出土遺物	79
(4) 検出遺構	80
第IV章 自然科学分析	
1. 試料	81
2. 分析方法	81
3. 結果	81
4. 考察	81
第V章 考察	
1. 弥生時代	85
2. 中世	85
3. SX1について	87
4. おわりに	87

## 挿図目次

図 1	高知山田線関連遺跡位置図(S = 1/5,000)	1
図 2	試掘調査位置図(S = 1/2,000)	2
図 3	試掘調査出土遺物(S = 1/3)	3
図 4	調査区位置図(S = 1/2,000)	3
図 5	作業風景1	5
図 6	作業風景2	5
図 7	作業風景3	6
図 8	作業風景4	7
図 9	香美市位置図(300万分の一)	9
図10	周辺の遺跡位置図(S = 1/50,000)	10
図11	周辺の主な調査地点(S = 1/3,000)	14
図12	調査区周辺の小字図(S = 1/5,000)	15
図13	I区西壁セクション図	17
図14	I区第II層出土遺物実測図1(弥生土器)	18
図15	I区第II層出土遺物実測図2(弥生土器)	19
図16	I区第II層出土遺物実測図3(弥生土器・土師質土器・土製品)	20
図17	SB1	20
図18	I区遺構平面図(S=1/100)	21
図19	SK2	22
図20	SB1・SK2出土遺物実測図(弥生土器・土師質土器・瓦質土器・土製品)	22
図21	SD1 ~ 3・6	23
図22	SD1出土遺物実測図(弥生土器・鉄製品)	24
図23	SD2出土遺物実測図1(弥生土器)	26
図24	SD2出土遺物実測図2(弥生土器)	28
図25	SD2出土遺物実測図3(弥生土器・土師器・石製品)	30
図26	SD3出土遺物実測図1(弥生土器)	31
図27	SD3出土遺物実測図2(弥生土器)	33
図28	SD3出土遺物実測図3(弥生土器・土製品・ガラス製品)	34
図29	SD4	35
図30	SD5	35
図31	SD6	35
図32	SD4・6出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・青磁・石製品)	36
図33	SD7	36
図34	P1 ~ 7出土遺物実測図(弥生土器・土師質土器・石製品・鉄製品)	38
図35	II区西壁セクション図	39

図36	Ⅱ区遺構平面図(S = 1/100)	40
図37	SB2	40
図38	SK4	41
図39	Ⅱ区出土遺物実測図(弥生土器)	42
図40	SK3・SD8・9	43
図41	SD11	43
図42	SD12	43
図43	Ⅳ区南壁セクション図	44
図44	Ⅲ・Ⅳ区第Ⅱ層出土遺物実測図(土師器・須恵器・土師質土器・備前焼・近世磁器・古銭)	45
図45	Ⅲ・Ⅳ区第Ⅲ層出土遺物実測図1(弥生土器)	47
図46	Ⅲ・Ⅳ区第Ⅲ層出土遺物実測図2(弥生土器・土製品・石製品)	49
図47	SB3	50
図48	SB4	50
図49	SB5	50
図50	SB5出土遺物実測図(弥生土器・土製品)	50
図51	SK6	51
図52	SK7	51
図53	SK6・8～10出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師質土器・鉄製品)	52
図54	SK11	53
図55	SK12	53
図56	SD13・15・18・SX1	53
図57	SD13出土遺物実測図1(弥生土器)	55
図58	SD13出土遺物実測図2(弥生土器)	56
図59	SD13出土遺物実測図3(弥生土器)	58
図60	SD13出土遺物実測図4(弥生土器)	60
図61	SD13出土遺物実測図5(弥生土器)	61
図62	SD13出土遺物実測図6(弥生土器)	63
図63	SD13出土遺物実測図7(弥生土器)	64
図64	SD13出土遺物実測図8(土製品・石製品)	65
図65	SD13・14	65
図66	SD14・16・17出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師質土器・備前焼・青磁・石製品)	66
図67	SD19	67
図68	SD22	68
図69	SD24・25	69
図70	SD18・19・24・25出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・石製品)	69
図71	SD16・SX1	70
図72	SX1平面図	71
図73	SX1出土遺物実測図1(須恵器・備前焼・陶器・瓦・石製品)	72

図74	SX1出土遺物実測図2(石製品・鉄製品)	73
図75	P 8 ～ 15出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師質土器)	75
図76	V区北壁セクション図	76
図77	V区第Ⅲ層出土遺物実測図(須恵器)	77
図78	V区遺構平面図(S = 1/200)	77
図79	VI区北壁セクション図	77
図80	VI区遺構平面図(S = 1/200)	78
図81	VII区南壁セクション図	78
図82	VII区遺構平面図(S = 1/200)	78
図83	SD28	78
図84	VIII区東壁セクション図	79
図85	VIII区出土遺物実測図(弥生土器)	79
図86	VIII区遺構平面図(S = 1/200)	80
図87	SD29	80
図88	粒度分析結果	82
図89	粒度分析結果三角ダイアグラム	83
図90	Ⅲ区南壁セクション図	84
図91	調査区周辺の中世の遺構(S = 1/2,000)	86

## 表目次

表1	調査区一覧表	8
表2	遺跡一覧表	11
表3	粒度分析試料一覧	81
表4	粒度組成	82
表5	粒度組成解析結果	82

## 遺物観察表目次

遺物観察表1	91
遺物観察表2	92
遺物観察表3	93
遺物観察表4	94
遺物観察表5	95

遺物観察表6	96
遺物観察表7	97
遺物観察表8	98
遺物観察表9	99
遺物観察表10	100
遺物観察表11	101
遺物観察表12	102
遺物観察表13	103
遺物観察表14	104
遺物観察表15	105
遺物観察表16	106
遺物観察表17	107
遺物観察表18	108
遺物観察表19	109
遺物観察表20	110
遺物観察表21	111
遺物観察表22	112
遺物観察表23	113

## 写真図版目次

図版1	IV区調査前風景(東より)	III区SD16・SX1完掘状態(西より)
	V区調査前風景(東より)	図版9
図版2	I区上面遺構検出状態(北より)	IV区遺構検出状態(東より)
	I区上面遺構完掘状態(北より)	図版10
図版3	I区下面遺構完掘状態(北より)	IV区下面遺構検出状態(西より)
	I区SD3完掘状態(南より)	IV区南壁セクション(北より)
図版4	II区遺構検出状態(南より)	図版11
	II区遺構完掘状態(南より)	IV区SX1検出状態1(東より)
図版5	II区西壁セクション(東より)	IV区SX1検出状態2(西より)
	II区SK4検出状態(南より)	図版12
図版6	III区遺構検出状態(東より)	IV区SX1検出状態3(西より)
	III区遺構検出状態(西より)	IV区SX1検出状態4(南より)
図版7	III区遺構完掘状態(東より)	図版13
	III区遺構完掘状態(西より)	IV区SX1検出状態5(南より)
図版8	III区SD17完掘状態(西より)	IV区SX1セクション(西より)
		図版14
		IV区SD24・25完掘状態(東より)
		IV区SD16・22・23完掘状態(北より)
		図版15
		V区遺構検出状態(西より)
		V区遺構完掘状態(西より)

- 図版16 VII区SD28遺物出土状態(西より)  
VII区遺構完掘状態(西より)
- 図版17 VIII区遺構検出状態(東より)  
VIII区遺構完掘状態(西より)
- 図版18 H19年度試掘調査(TP5)検出状態  
(東より)  
H19年度試掘調査(TP5)北壁セクション(南より)
- 図版19 SK2完掘状態(南より), SD1・2セクション(西より), SD2完掘状態(南より), SD2遺物出土状態1(南より), SD2遺物出土状態2(南より), SD2弥生土器高杯(124)出土状態(西より), SD2石製品石包丁(127)出土状態(南より), SD3完掘状態(南より)
- 図版20 SD3遺物出土状態1(南より), SD3遺物出土状態2(南より), SD3弥生土器高杯(174)出土状態(南より), SD3弥生土器手捏ね土器(179)出土状態(南より), SD6セクション(南より), P2鉄製品釘(189)出土状態(南より), 第三層弥生土器甕(200)出土状態(南東より), SK4セクション(北東より)
- 図版21 SK4弥生土器高杯(210)出土状態(南より), SD11セクション(東より), SD11・12完掘状態(東より), 柱穴礎板検出状態(南より), III区西部遺構検出状態(北より), III区東部南壁セクション(北より), III区西部南壁セクション(北より), 第三層石製品石包丁(261)出土状態(南より)
- 図版22 SK5根石検出状態(南より), SK6セクション(南より), SK6土師質土器小皿(266)出土状態(南より), SK6鉄製品刀子(267)出土状態(南より), SK8セクション(南より), SK10セクション(南より), SK12セクション(南より), SD13・18セクション(東より)
- 図版23 SD13弥生土器壺(301)出土状態(西より), SD13遺物出土状態1(南より), SD13遺物出土状態2(北より), SD13弥生土器壺(283)出土状態(北より), SD13弥生土器壺(287)出土状態(北より), SD13弥生土器壺(300)出土状態(南より), SD13弥生土器高杯(383)出土状態(北より), SD15検出状態(東より)
- 図版24 SD15・SX1検出状態(南より), SD15セクション(東より), SD16・20・SX1完掘状態(東より), SD17石製品石鏃(414)出土状態(北より), SD19セクション(西より), SD19完掘状態(西より), SD22セクション(北より), SD24・25完掘状態(北より)
- 図版25 P15根石検出状態(南より), P15土師質土器皿(453)出土状態(南より), SX1検出状態1(南より), SX1検出状態2(北より), SX1検出状態3(南より), SX1検出状態4(南より), SX1セクション1(西より), SX1セクション2(西より)
- 図版26 SX1須恵器蓋(425)出土状態(南より), SX1瓦(430)出土状態(北より), V区遺構完掘状態(東より), V区焼土検出状態(南より), VI区遺構検出状態(北東より), VI区遺構完掘状態(北西より), VII区遺構検出状態(東より), VII区南壁セクション(北より)
- 図版27 VIII区遺構検出状態(東より), VIII区遺構完掘状態(東より), VIII区土坑セクション(北東より), SD29セクション(東より), H19年度試掘調査TP1検出状態(東より), H19年度試掘調査TP1セクション(南より), H19年度試掘調査TP2検出状態(西より), H19年度試掘調査TP6セクション(東より)
- 図版28 弥生土器(甕・高杯)
- 図版29 弥生土器(壺・甕・高杯)

- 図版30 弥生土器(壺・甕・高杯),須恵器(蓋),土製品(支脚)
- 図版31 弥生土器(壺・甕・鉢),土製品(支脚・土錘)
- 図版32 弥生土器(壺・甕・鉢・高杯),石製品(石包丁)
- 図版33 弥生土器(壺・甕・手捏ね土器),土師器(鍋),土師質土器(小杯),近世磁器(皿)
- 図版34 弥生土器(壺・鉢・高杯・器台),土師質土器(杯),石製品(石包丁)
- 図版35 弥生土器(壺・甕・鉢)
- 図版36 弥生土器(ミニチュア土器),備前焼(甕),瓦質土器(釜),青磁(碗),瓦(平瓦),土製品(支脚),石製品(石包丁)
- 図版37 弥生土器(壺・手捏ね土器),土師質土器(杯・小皿),石製品(石鏃),鉄製品(刀子),ガラス製品(小玉)
- 図版38 弥生土器(壺・高杯・手捏ね土器),土師質土器(皿・小皿),土製品(杓子形土器),石製品(石鏃)

## 付図目次

- 付図1 Ⅲ・Ⅳ区遺構平面図(S=1/150)



# 第 I 章 調査に至る経緯と経過

## 1. 調査に至る経過

一般国道195号線は県都高知市と周辺地域を結ぶ主要な幹線道路であり、生活・産業・経済・文化の発展に重要な役割を果たしている。近年は都市の周辺で進む市街地化・車の増加等により、交通渋滞は慢性化の一途をたどっており深刻なものになっている。また歩道の整備についても、安全面で不十分であるといえる。これらの状況は南国市、香美市など物部川流域でも同様な事象である。このような交通渋滞の解消や交通安全対策を充実させるべく、国道195号線(通称あけぼの道路)改築事業が行われることとなった。国道195号線の道路工事は高知市から土佐山田町中組までの区間であり、一部が開通している。この区間においては、平成6・7年度に小籠遺跡<sup>(1)</sup>、7・8年度に陣山遺跡<sup>(2)</sup>、17年度にミトロ遺跡<sup>(3)</sup>、19年度に土島田遺跡の本発掘調査が行われた。

今回の調査は、あけぼの道路の延長として計画されている都市計画道路高知山田線の建設に伴う部分である。今回の調査区の西側には伏原遺跡が隣接しており、都市計画道路高知山田線の建設に先立ち、平成18年度に伏原遺跡Ⅰ、平成19・20年度に伏原遺跡Ⅱとして調査が行われている。今回の調査対象地は周知の遺跡であるひびのきサウジ遺跡及び、ひびのき遺跡に所在する。ひびのきサウジ遺跡及び、ひびのき遺跡は過去の調査で遺構及び遺物包含層が確認されており、また道路建設予定地の周りには、ひびのき岡ノ神母遺跡や伏原大塚古墳、大塚遺跡など数多くの遺跡が存在しており、事前の試掘調査が必要と判断された。試掘調査の結果、遺構と遺物の確認がなされ、協議の結果、遺

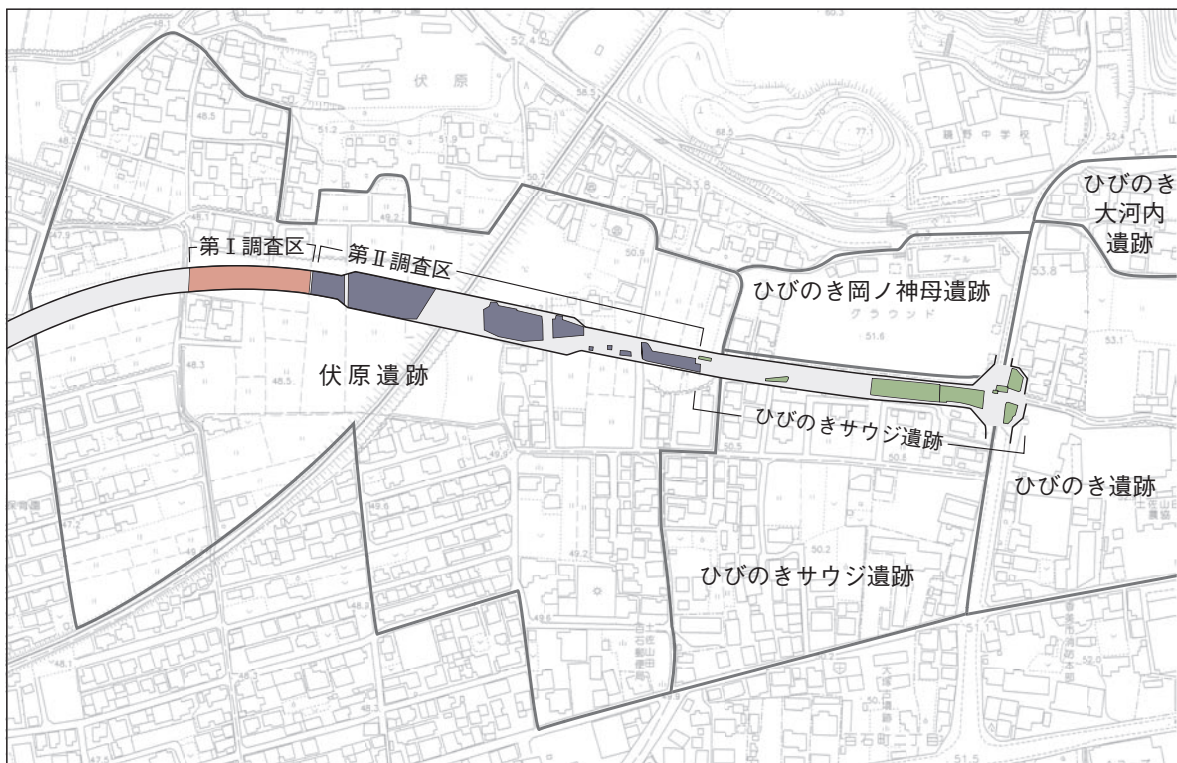


図1 高知山田線関連遺跡位置図(S=1/5,000)

## 2. 立会・試掘調査

構及び遺物が確認された範囲について記録保存を目的とした本発掘調査を行うこととなった。

### 註

- (1) 『小籠遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第20集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995
- (2) 『陣山遺跡・陣山北三区遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第31集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
- (3) 『ミトロ遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第99集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2007

## 2. 立会・試掘調査

調査対象地の試掘確認調査は、平成15年度に1回、平成17年度に2回、平成19年度に1回の計4回実施した。調査に際して、試掘トレンチを設定し、掘削には重機と人力を併用し、遺構及び遺物の有無・その分布範囲・深度を確認し、写真及び図面を作成して記録保存を行った。また、遺構は検出にとどめ、調査終了後は埋め戻しを行った。

平成15年8月9日～9月7日(現地調査8月12日)に、ひびのき岡ノ神母遺跡試掘調査として実施した。調査対象地に2×6mの試掘トレンチ2箇所(TP1・4)、3×3m(TP2・3)の試掘トレンチ2箇所を設定し、調査を実施した。TP1～3では弥生時代～古墳時代にかけての遺物包含層が確認された。TP4においては、現表土下1m前後で弥生時代後期末の遺構を確認し、弥生土器の甕などが出土した。TP4周辺は弥生時代後期の集落遺構の存在する可能性が考えられた。

平成17年11月28日・30日及び平成18年2月27日に、ひびのきサウジ遺跡・ひびのき遺跡試掘確認調査として実施した。調査対象地に3×3mの試掘トレンチを4箇所(TP1～3・5)と2×1mの試掘トレンチ(TP4)を1箇所設定し、調査を実施した。

TP1～5は弥生時代～古墳時代の遺物包含層が確認された。また、一部では弥生時代～古墳時代と中世の二層の遺物包含層が確認された。TP1では弥生時代の溝1条とピット5個を検出した。TP1～

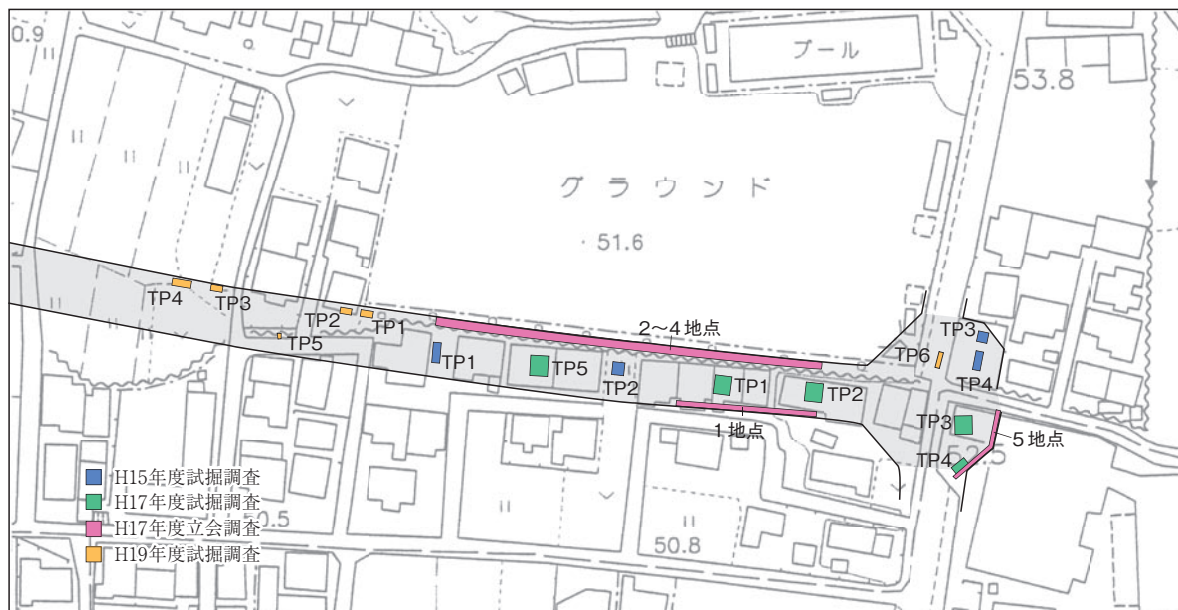


図2 試掘調査位置図(S=1/2,000)

4では弥生時代～古墳時代の溝跡・ピットなどが多数確認され、本調査が必要と判断された。

平成19年7月5日・23日には、ひびのきサウジ遺跡試掘確認調査が行われた。調査対象地であるIV区の西側付近に2×1mの試掘トレンチ(TP1～4)を設置し、調査を実施した。TP1～4では遺物包含層が確認され、IV区の西側についても遺跡の拡がりが見込まれた。これらの状況により、本発掘調査が必要であると判断された。本発掘調査の期間は平成19年5月21日～平成20年2月8日で、調査面積は1,212㎡である。

平成17年12月2日～5日にはひびのきサウジ遺跡の立会調査を行った。道路南側に埋設される側溝部分(1地点)、平成18年1月10日・27日に道路北側(2～4地点)、同年2月9日にJA倉庫前(5地点)について立会調査を実施した。調査は遺構の調査と記録保存を行い、埋め戻した。1地点で、中世のピット1個、弥生時代のピット11個確認した。中世のピットからは、ほぼ完形の青磁碗が1点出土した。弥生時代のピットからは、弥生土器が出土した。また、配置状況から建物跡になると思われるピットを5個検出した。溝は南北方向に延びるものを1条検出した。2地点では、弥生の溝跡と土坑を検出した。3地点では、ピット5個を検出した。よって、弥生時代・古墳時代・中世の遺構が展開していることが確認された。

図3は平成17年度に行った立会調査で、1地点のピットより出土した遺物である。龍泉窯系の青磁碗で、底部が完存する。底部は器壁が厚く、断面台形を呈する削り出し高台を有する。内面と外面の畳付までは灰オリーブ色の釉を0.5mmの厚さに施す。外面には線描きの蓮弁文がみられる。

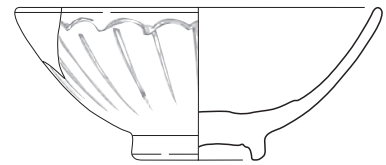


図3 試掘調査出土遺物(S=1/3)

### 3. 調査の方法

調査対象地にI～VIII区を設定した。発掘調査にあたっては街区三角点及び街区多角点から基準点の設置を行った。調査対象地に4mグリッドを設定し、各調査区には4m毎に木杭もしくはスタイラッ



図4 調査区位置図(S=1/2,000)

## 5. 調査日誌抄

クの設置を行った。調査区の遺構配置図は平板を用いて測量した。遺構平面図及びセクション図は20分の1を基本として図面を作成した。遺構のうち、規模の大きいものについては、半裁・完掘の状態を写真と図面に記録した。同様に出土遺物についても写真と図面以外に光波による測量を実施し、記録をとどめた。遺構番号は各調査区で通し番号とした。尚、Ⅷ区の調査時には、再び基準点を設けて測量等の記録保存に努めた。また、調査後は埋め戻しを行った。

## 4. 調査の概要

今回の調査は、Ⅰ・Ⅱ区がひびのき遺跡、Ⅲ～Ⅶ区がひびのきサウジ遺跡、Ⅷ区は伏原遺跡に所在する。地形は調査対象地の南東部に位置するⅡ区が最も標高が高く、西に向かって緩やかに傾斜していた。遺構は標高の高い調査区東部で多く検出し、調査区西部では遺構は少なく、遺物も少ない傾向が見られた。遺物包含層は調査区中央部に位置するⅣ区では弥生時代と中世の二層が確認されたが、その他の調査区では後世の削平を受けたとみられ一層のみであった。

検出された遺構は主に弥生時代後期と中世後期であった。弥生時代の遺構は溝跡がそのほとんどを占める。弥生時代の溝跡は大きく蛇行し、西に向かって傾斜し、溝跡SD1～3とSD13には多量の遺物がみられた。遺物の大半はこれらの溝跡からの出土である。今回の調査では竪穴式住居跡は確認されておらず、この時期の居住地は東に位置するひびのき遺跡とみられ、今回の調査地は遺跡の縁辺部と捉えることができる。

中世の遺構はほぼ全面で認められた。遺構は溝跡や掘立柱建物跡等で、溝跡はL字状を呈するものもみられ屋敷跡とみられる。溝跡の主軸方向はほぼ一定で、調査区周辺に計画的に屋敷跡が配置されていたものと考えられる。また、道路状遺構または土地の区画ラインともみられる礫敷の遺構(SX1)を確認した。この遺構の西端は馬蹄形状を呈し、石を三段積んでいる箇所もみられた。ちょうど現在の小字の境に位置しており道路状遺構とも考えられるが、西端は馬蹄形状を呈している点等疑問が残る。中世の出土遺物は後世の削平及び攪乱を受けているものとみられ比較的少なく、土師質土器のほか瓦質土器、青磁などが出土している。15～16世紀とみられる。

## 5. 調査日誌抄

2007年

- |   |   |
|---|---|
| 5.21(月) 機材を搬入し、Ⅰ区に安全柵を設置する。<br>Ⅰ区の重機掘削を開始する。        | と併行して、人力掘削を行う。セクションの分層を行う。Ⅲ・Ⅳ区の北側に安全柵を設置する。   |
| 5.22(火) 重機掘削に併行して、遺構検出作業を行う。Ⅱ区の調査区設定を行う。            | 5.29(火) Ⅰ区の遺構調査を行う。                           |
| 5.23(水) Ⅰ区遺構検出状態の写真撮影と遺構配置図を作成する。引き続きⅡ区の調査区設定を行う。   | 5.30(水) 引き続きⅠ区の遺構調査を行う。                       |
| 5.24(木) Ⅰ区で検出した遺構の調査を始める。Ⅱ区の安全柵・ガードフェンス設置及び重機掘削を行う。 | 5.31(木) Ⅰ区の遺構調査を行う。遺物出土状態・完掘状態・セクションの写真撮影を行う。 |
| 5.25(金) 雨天のため現場作業を中止する。                             | 6.1(金) Ⅰ区の遺構調査を行う。Ⅰ区完掘状態・遺物出土状態の写真撮影を行う。      |
| 5.28(月) Ⅰ区の遺構調査を行う。Ⅱ区の重機掘削                          | 6.4(月) Ⅰ区の遺構調査を行う。Ⅰ区遺物出土状態の平面図を作成する。          |
|   | 6.5(火) Ⅰ区の遺構調査を行う。Ⅱ区遺構検出状                     |

態の写真撮影を行う。

- 6.6(水) I・II区の遺構調査を行う。
- 6.7(木) I・II区の遺構調査及びレベル測量を行う。I区遺物出土状態の写真撮影と遺物出土状態の平面図作成を行う。II区遺構セクションの写真撮影と測量を行う。
- 6.8(金) II区南東部の重機掘削による調査区拡張を行う。
- 6.11(月) 引き続きI・II区の遺構調査を行う。IV区調査前状況の写真撮影を行う。
- 6.12(火) 引き続きI・II区の遺構調査を行う。IV区重機掘削を開始する。
- 6.13(水) 引き続きI・II区の遺構調査を行う。IV区北側部分の重機掘削を行う。
- 6.14(木) 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.15(金) 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.18(月) 午前中、II区の遺構平面図の作成を行う。
- 6.19(火) 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.20(水) 引き続きI区の遺構調査を行う。II区精査後、遺構完掘状態の写真撮影と図面作成を行う。IV区は重機掘削を行う。
- 6.21(木) 引き続きI区の遺構調査を行う。II区は午前中レベル測量を行い、午後より埋め戻し作業を行い、すべて完了する。IV区は重機掘削及び人力掘削を行う。
- 6.22(金) 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.25(月) 引き続きI区の遺構調査及びレベル測量を行う。IV区は引き続き重機掘削及び人力掘削を行う。
- 6.26(火) 引き続きI区の遺構調査及びレベル測量を行う。
- 6.27(水) I区上面遺構完掘状態の写真撮影を行う。

- 6.28(木) I区の遺構平面図の作成を行う。IV区は遺構検出作業を行う。調査区北側において、SX1が検出される。
- 6.29(金) 引き続きI区の遺構平面図の作成及びIV区の遺構検出作業を行う。
- 7.2(月) 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.3(火) 午前中排水作業を行う。I区のレベル測量後、下層の遺物包含層掘削を行う。
- 7.4(水) 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.5(木) I区下面の遺構検出作業を行い、遺構検出状態の写真撮影を行う。IV区の西側TP1・2の試掘調査を行う。
- 7.6(金) 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.9(月) 雨天のため現場作業を中止する。午前中、調査区の排水作業を行う。
- 7.10(火) IV区にグリッド杭を設置する。
- 7.11(水) I区は午前中排水作業、IV区は午後よりグリッド杭の設置作業を行う。
- 7.12(木) I区排水作業・グリッド杭の設置作業を行う。
- 7.13(金) 雨天のため現場作業を中止する。午前中、排水作業を行う。
- 7.17(火) 排水作業後、I区下面とIV区の遺構検出作業を行う。
- 7.18(水) I区下面遺構検出状態と完掘状態の写真撮影と下面遺構平面図の作成を行う。IV区は引き続き遺構検出作業を行う。また、重機で調査区北側の拡張掘削を行う。
- 7.19(木) I区下面の遺構平面図の作成を行う。IV区は西側部分の遺構検出作業と下層確認調査を行う。



図5 作業風景1



図6 作業風景2

## 5. 調査日誌抄

- 7.20(金) 現場作業を中止する。
- 7.23(月) 排水作業後、Ⅰ区下面の遺構平面図の作成及びレベル測量を行う。Ⅳ区は引き続き遺構検出作業を行う。Ⅳ区西側の試掘調査(TP3・4)を行う。
- 7.24(火) Ⅰ区は埋め戻し作業がすべて完了する。Ⅳ区は引き続き遺構検出作業を行う。
- 7.25(水) 引き続きⅣ区の遺構検出作業を行う。
- 7.26(木) 引き続きⅣ区の遺構検出作業を行う。SX1の写真撮影及びレベル測量を行う。
- 7.27(金) 引き続きⅣ区の遺構検出作業を行う。
- 7.30(月) 引き続きⅣ区の遺構検出作業を行う。
- 7.31(火) Ⅳ区精査後、遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 8.1(水) Ⅳ区の遺構調査を始める。
- 8.2(木) 台風のため、現場作業を中止する。
- 8.3(金) 台風のため、現場作業を中止する。
- 8.6(月) Ⅳ区の遺構調査を行う。遺物出土状態及びセクションの写真撮影を行う。
- 8.7(火) 引き続きⅣ区の遺構調査を行う。遺物出土状態の写真撮影を行う。
- 8.8(水) Ⅳ区排水作業後、引き続き遺構調査を行う。
- 8.9(木) 引き続きⅣ区の遺構調査を行う。遺構平面図の作成を行う。
- 8.10(金) 引き続きⅣ区の遺構調査を行う。遺構の光波測量を行う。
- 8.16(木) 引き続きⅣ区の遺構調査を行う。
- 8.17(金) 引き続きⅣ区の遺構調査を行う。
- 8.20(月) 引き続きⅣ区の遺構調査を行う。SX1セクションの写真撮影とセクション図の作成と出土遺物の光波測量を行う。
- 8.21(火) 引き続きⅣ区の遺構調査を行う。
- 8.22(水) 引き続きⅣ区の遺構調査と並行して、調査区の南西部の遺構検出作業を行う。SX1遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 8.23(木) SX1 検出状態の写真撮影及び測量を行う。Ⅳ区西側の立会を行う。
- 8.24(金) SX1 及びSD13の精査後、完掘状態の写真撮影を行う。調査区北西部の拡張を重機で行う。
- 8.27(月) SX1平面図の作成及び測量を行う。
- 8.28(火) 調査区西側の調査を行う。SX1の西側部分の遺構平面図及びレベル測量を行う。
- 8.29(水) SD14の調査及び上面の遺構平面図作成を始める。
- 8.30(木) 引き続きSD14の調査及び上面の遺構平面図作成を行う。
- 8.31(金) 現場作業を中止する。
- 9.3(月) SD15・22・24の調査及びレベル測量・完掘状態の写真撮影を行う。
- 9.4(火) 遺構の残りの調査と調査区全体の精査を行い、完掘状態の写真撮影と遺構平面図の作成を行う。SX1の調査を行う。
- 9.5(水) 遺構平面図の作成と調査区北西部のSX1の続き部分について、調査を行う。
- 9.6(木) 引き続き、遺構平面図の作成と調査区北西部のSX1の続き部分について、調査を行う。
- 9.7(金) SX1の検出を行うとともに、下面の遺構平面図及びレベル測量を行う。
- 9.10(月) 拡張した調査区西側部分の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 9.11(火) 拡張した調査区西側部分の遺構完掘状態の写真撮影及び遺構平面図作成とレベル測量を行う。SX1西端部の写真撮影及び平面図作成を行う。
- 9.12(水) 引き続き遺構の調査を行う。
- 9.13(木) 南壁セクション図作成及び写真撮影を行う。同時に埋め戻しを行う。
- 9.14(金) 引き続き南壁セクション図作成と埋め戻し作業を行う。
- 9.18(火) 引き続き南壁セクション図作成を行う。埋め戻しが終了し、Ⅳ区の調査をすべて完了する。
- 9.19(水) 重機による整地作業を行う。



図7 作業風景3

- 9.20(木) Ⅲ区の調査を開始する。重機による掘削を始める。
- 9.21(金) 重機掘削及び人力掘削を行う。
- 9.25(火) 引き続き重機掘削及び人力掘削を行う。南壁セクションの写真撮影を行う。
- 9.26(水) 遺構検出作業とグリッド杭の設置作業を行う。
- 9.27(木) 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.28(金) 精査後、遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 10.1(月) SD15・17セクションの写真撮影と遺構配置図の作成を行う。
- 10.2(火) 引き続き遺構調査を行う。遺構埋土を調べ、グリッド杭の設置作業を行う。
- 10.3(水) 引き続き遺構調査を行う。
- 10.4(木) 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.5(金) 引き続き遺構調査を行う。
- 10.9(火) SD15・18の完掘状態の写真撮影を行う。
- 10.10(水) 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.11(木) 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.12(金) 引き続き遺構調査を行う。
- 10.15(月) 引き続き遺構調査を行う。
- 10.16(火) 午前中、精査後にSD17遺物出土状態の写真撮影及び、完掘状態の写真撮影を行う。午後から遺構平面図の作成を行う。
- 10.17(水) 引き続き遺構平面図の作成を行う。
- 10.18(木) 引き続き遺構平面図の作成とレベル測量を行う。
- 10.19(金) 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.22(月) 南壁セクションの写真撮影と重機及び人力による調査区南西端の拡張を行う。
- 10.23(火) Ⅲ区南壁トレンチを設定し、セクションの写真撮影及びセクション図作成を行う。拡張部分の遺構調査を行う。V区は重機掘削を始める。
- 10.24(水) 南壁西側のセクション図作成、土のサンプルの取り上げ、調査区の座標測量を行う。埋め戻しを始める。V区重機掘削及び人力掘削を行う。
- 10.25(木) Ⅲ区の埋め戻しを終了し、Ⅲ区の調査をすべて完了する。V区は重機掘削及び人力掘削を行う。
- 10.26(金) 雨天のため午前中で現場作業を中止する。
- 10.29(月) V区の遺構調査を行う。
- 10.30(火) 引き続きV区の遺構調査を行う。

- 10.31(水) V区の精査を行い、午後から遺構検出状態の写真撮影及び西壁と北壁セクションの写真撮影を行う。
- 11.1(木) V区の遺構配置図及びセクション図作成を行う。
- 11.2(金) V区の遺構調査を終了する。精査後遺構完掘状態の写真撮影を行う。午後より遺構平面図及び北壁セクション図作成を始める。
- 11.5(月) 引き続き図面の作成を行う。埋め戻しを始める。
- 11.6(火) 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.7(水) 雨天のため現場作業を中止する。
- 11.8(木) V区の埋め戻しを終了し、V区の調査をすべて完了する。
- 11.26(月) VI区の立会調査を行い、調査をすべて完了する。

2008年

- 1.17(木) 試掘調査(TP6)及びⅦ区の遺構調査を始める。TP6の西壁セクション図作成及び写真撮影を行う。Ⅶ区の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 1.18(金) Ⅶ区の南壁と西壁のセクション図作成を行う。
- 1.19(土) 遺構調査後、埋め戻しを行い、Ⅶ区の調査をすべて完了する。
- 1.30(水) Ⅶ区の調査前状況の写真撮影を行い、重機及び人力掘削を開始する。
- 1.31(木) 引き続き遺構調査を行う。
- 2.1(金) 引き続き遺構調査を行う。
- 2.5(火) 引き続き遺構調査を行う。
- 2.6(水) 午後より、精査後遺構検出状態の写真撮



図8 作業風景4

5. 調査日誌抄

影を行う。  
 2.7(木) 遺構の図面作成及び写真撮影を行う。精  
 査後, 完掘状態の写真撮影を行う。

2.8(金) レベル測量及び埋め戻し作業を終了し,  
 VII区の調査をすべて完了する。

表1 調査区一覧表

調査区	調査面積	調査期間	主な検出遺構
I区	112㎡	2007.5.21～7.24	弥生(溝跡・ピット), 中世(掘立柱建物・溝跡・土坑・ピット)
II区	90㎡	2007.5.28～6.21	弥生(土坑・ピット), 中世(掘立柱建物・溝跡・ピット)
III区	329㎡	2007.9.20～10.25	弥生(溝跡・土坑・ピット), 中世(掘立柱建物・溝跡・土坑・ピット)
IV区	469㎡	2007.6.12～9.18	弥生(溝跡・土坑・ピット), 中世(掘立柱建物・溝跡・土坑・ピット)
V区	100㎡	2007.10.23～11.8	弥生～中世(溝跡・土坑・ピット)
VI区	30㎡	2007.11.26	弥生(溝跡)
VII区	60㎡	2008.1.17～1.19	弥生～中世(溝跡・土坑・ピット)
VIII区	22㎡	2008.1.30～2.8	弥生(溝跡・ピット)



## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

ひびのきサウジ遺跡の所在する香美市土佐山田町は、高知県中央部のやや北東寄りに位置し、香美市の南西部に位置する。土佐山田町は、面積116.46km<sup>2</sup>、人口22,182人(平成17年10月1日現在)を有しており、県下最大の穀倉地帯である高知平野の北端、県下三大河川の一つである物部川の下流域から北の台地・山間部に広がる。北方は本山町や大豊町と隣接しており、国見山・明神岳・鉢ヶ森などが連なり、三嶺・中東山・石立山が徳島県との境となる。物部川は剣山国定公園地域内の三嶺・石立山連山より発しており、上流にあたる槇山川と上葦生川は香美市物部町大栃で合流し、物部川となって香美市の流域を集めながら流下し、土佐山田町神母ノ木付近で平野に出で、運ばれてきた砂礫を堆積し、香長平野の扇状地を見事に形成している。神母ノ木より下流は、平野部を南下し、高知平野東部に所在する香南市吉川町を経て太平洋に注いでいる。全長は約53km、流域面積は490.4km<sup>2</sup>である。物部川上流域は香美市北部の山間部を通り、見事な河岸段丘が発達しており、神母ノ木周辺で進路を南に変え、下流域に肥沃な香長平野を形成している。

香長平野は高知平野の東部、南国市を流れる国分川中・上流の平野部と物部川下流域の平野部にまたがる地域である。この香長平野の北端部に長岡台地が立地し、ひびのきサウジ遺跡はこの台地上に立地している。長岡台地は物部川右岸、香美市土佐山田町の中心地、すなわち土佐山田町神母ノ木から南国市東崎方面へなだらかに続く。最大幅2km、長さ8.5kmの洪積世台地である。この台地上の長軸方向に沿って、国道195号やJRの路線が続いている。長岡台地を含む物部川流域の土佐山田町神母ノ木周辺の扇頂部付近では標高50m、扇端部の南国市後免町付近では標高15mであり、同心円状な広がりを見せている。

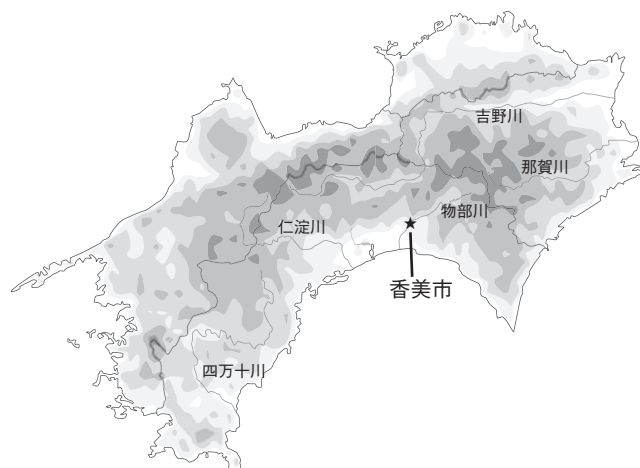


図9 香美市位置図(300万分の一)



図10 周辺の遺跡位置図(S=1/50,000)

表2 遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	51	稻荷前遺跡	弥生～近世
2	東谷1・2号窯跡	奈良・平安	52	原遺跡	弥生～近世
3	小山田1号墳	古墳	53	原南遺跡	弥生～近世
4	小山田2・3号窯跡	古墳・奈良	54	高柳遺跡	弥生～中世
5	林ノ谷1・2・3号窯跡	古墳～平安	55	加茂遺跡	古墳～中世
6	西ノ内1号墳	古墳	56	賀茂神社西遺跡	古墳～中世
7	西ノ内窯跡	古墳	57	加茂城跡	中世
8	椎山1・2号墳	古墳	58	町田遺跡	弥生～中世
9	新改2・3・4号墳	古墳	59	町田堰東遺跡	縄文～中世
10	亀ヶ谷1・2号墳	古墳	60	烏ヶ森城跡	中世
11	田村氏古墳	古墳	61	西佐古遺跡	平安・中世
12	次郎ヶ谷西古墳	古墳	62	大領遺跡	古墳～中世
13	西久保古墳	古墳	63	金地遺跡	弥生・平安・中世
14	須江ツカアナ古墳	古墳	64	野村丸遺跡	弥生～平安
15	屋舗田丸遺跡	中世	65	三添遺跡	弥生～中世
16	タンガン古墳	古墳	66	土島田遺跡	弥生～近世
17	タンガン窯跡	飛鳥	67	野中廢寺跡	平安
18	須江上段遺跡	古墳～近世	68	東崎遺跡	弥生～室町
19	白猪田遺跡	古墳～平安	69	包末井ノ内遺跡	縄文・古墳～平安
20	国分寺遺跡群	古墳～近世	70	垣添遺跡	古墳～中世
21	土佐国分寺	奈良	71	芝田遺跡	古墳～中世
22	土佐国衙跡	弥生～中世	72	岩村遺跡群	弥生・中世・近世
23	比江廢寺跡	古代	73	深淵北遺跡	弥生～中世
24	三畠遺跡	弥生～平安	74	母代寺遺跡	平安・中世
25	山田三ツ又遺跡	古墳～平安	75	龜山窯跡	平安
26	前山1・2・3号墳	古墳	76	アゴデン白岩窯跡	平安
27	深坂古墳	古墳	77	溝淵山古墳	古墳
28	中沢古墳	古墳	78	大谷城跡	中世
29	溝淵古墳	古墳	79	大谷古墳	古墳
30	桜ヶ谷古墳	古墳	80	西上野遺跡	弥生
31	杖坂東古墳	古墳	81	深淵遺跡	縄文～近世
32	前行山1号墳	古墳	82	西野遺跡群	弥生・古墳・平安
33	前行山2号墳	古墳	83	横落遺跡	弥生～平安
34	大元神社北古墳	古墳	84	平杭遺跡	弥生・古墳
35	大元神社古墳	古墳	85	高添遺跡	弥生～平安
36	神母古墳	古墳	86	修理田遺跡	弥生～平安
37	予岳古墳	古墳	87	西野々遺跡	弥生～中世
38	旧予岳寺跡	弥生～中世	88	中組遺跡	弥生～中世
39	山ノ間遺跡	中世	89	里改田遺跡	弥生～中世
40	山ノ間古墳	古墳	90	田村遺跡群	縄文～近世
41	メウカイ遺跡	弥生～中世	91	田村城跡	中世
42	長谷川丸遺跡	古墳～平安	92	千屋城跡	中世
43	伏原遺跡	弥生～平安	93	下ノ坪遺跡	弥生～平安
44	鏡野学園古墳	古墳	94	北地遺跡	弥生
45	小倉山古墳	古墳	95	高田遺跡	平安
46	楠目城跡	中世	96	野口遺跡	弥生～中世
47	大塚遺跡	弥生・古墳・中世	97	浜口遺跡	弥生・古墳
48	伏原大塚古墳	古墳	98	東野土居遺跡	古墳～平安
49	ひびのき遺跡	弥生・古墳	99	平井遺跡	古墳～平安
50	楠目遺跡	弥生～近世	100	住吉砂丘遺跡	弥生

## 2. 歴史的環境

香美市土佐山田町は、高知平野の一角を担う穀倉地帯であり、原始以来人々の生活の営みを支えてきた。

土佐山田町の歴史は、土佐山田町繁藤地区の飼古屋岩陰遺跡<sup>(1)</sup>の調査によって、縄文時代早期まで遡ることになる。この遺跡からは縄文時代早期の押型文土器・無文厚手土器・条痕文土器が出土しており、石鏃では早期に伴うものが数多く、一部中期や後期のものが確認されている。石材の一部にサヌカイトが使用されており、当時から讃岐との交流が伺える。

弥生時代では、前期に該当する遺跡の確認には至っておらず、中期後半に位置付けられる最も古い遺跡として龍河洞洞窟遺跡がある。龍河洞洞窟遺跡は、全山石灰岩でできた標高322mの三宝山の中腹に位置しており、昭和8年に炉跡が発見され、同9年には天然記念物及び史蹟として指定をうけている。洞内からの出土遺物として、龍河洞式土器をはじめ、貝輪・鹿角製品・瑪瑙製勾玉・骨製管玉・鉄鏃・石錘などの装身具である人工遺物や貝類・獣骨類である自然遺物が確認されている。龍河洞洞窟遺跡と同じく、中期後半に属する遺跡には予岳遺跡や雪ヶ峯遺跡がある。両遺跡ともに山の傾斜面か丘陵上につくられており、予岳遺跡からは磨製石包丁、雪ヶ峯遺跡からは太形蛤刃石斧が龍河洞式土器と伴って確認されている。谷水田を農耕地利用した高地性集落遺跡であると考えられる。

弥生時代後期前半に属する遺跡には、ひびのき岡ノ神母遺跡<sup>(2)</sup>(鏡野中学校校庭遺跡)・ひびのき遺跡<sup>(3)</sup>・伏原遺跡などがある。ひびのき岡ノ神母遺跡から北部丘陵地上で中学校が建築される際、多量の弥生土器が出土している。ひびのき遺跡から出土した土器群はヒビノキⅠ式・Ⅱ式・Ⅲ式と命名され、高知県中央部以東の標式土器とされるときともに、同遺跡がその時期に集落遺跡として栄えたことを示している。

古墳時代に入ると、弥生時代に確立された農村社会が発展し、集落の枠を広げ、墳墓の形成を始める。土佐山田町では、古墳時代の前中半、いわゆる4～5世紀では、生活地域を示す住居跡やヒビノキⅢ式土器は確認されるも、墳墓の出現は確認されていない。ひびのき遺跡に近い伏原大塚古墳<sup>(4)</sup>は、6世紀中葉に築造されたと考えられる。また、この古墳の周溝からは須恵器の円筒埴輪が出土している。この期の須恵器の窯跡は今のところ発見されていないが、古墳出土の埴輪の存在を考えれば、築造期まで遡ると考えられる。また、これらの地域を特徴付ける遺跡として、窯跡をあげることができる。5世紀に入ると、日常容器として土師器とともに須恵器が伝来され、煮沸を主とする土師器と、それを盛る須恵器というように、生活容器の使用に大きな変化が見られるようになる。土佐山田町北部の新改地区とその周辺には須江上段遺跡・須江北遺跡等20箇所ほどの須恵器の窯跡が知られており、古代には比江廃寺跡の瓦を焼成したタンガン窯跡や国分寺の瓦を焼成した東谷窯跡など、西方約3km離れた土佐国衙跡と密接な関係にあったと思われる。

古代には、加茂ハイタノクボ遺跡<sup>(5)</sup>で軒丸瓦や軒平瓦などが出土している。これらの瓦の中には、香川県善通寺跡の瓦と同范関係にあることが判明している。

中世になると、戦国時代に土佐国守護七雄の山田氏がこの地を治めることとなる。建久4年(1193年)に入部し、以来領土を拡大しつつ勢力を強める。楠目城<sup>(6)</sup>を築城し、城下町建設をはじめ、この地を治めるようになる。また、物部川左岸には烏ヶ森城跡が確認されている。これは楠目城を拠点とする山田氏の重臣西内常陸の居城とされ、東のおさえとして重要な役割を担ったと思われる。その後天文18年(1590年)、長宗我部国親に敗北し落城、長宗我部氏の支配を受けるようになる。関ヶ原の

戦い以降、長宗我部氏に変わり、山内氏が土佐入国を行うと、郷村にも大きな変遷がはじまり、それまでの領主関係を一掃した行政単位としての区画が行われ、新しく村役人が選出されるなど新たな体制固めが急速に完了するようになる。

近世になると長岡台地に大きな転機が訪れる。野中兼山による山田堰及び用水路を利用した拡張工事によって、台地開拓に大きな功績を残すこととなる。土佐山田町は香美市北部と物部川下流域の平野部との物産の集散地となり、また物部川からの流れを組む舟入川により、高知城下と密接な結びつきを持つようになる。

### 3. 周辺の調査

調査対象地の周辺は県内でも特に遺跡の密度が高い場所であり、以前より多くの調査が行われている。ひびのき遺跡や大塚遺跡、伏原遺跡等隣接する遺跡も多く、一連の遺跡として捉えることができる。

周辺の遺跡で最初に行われた調査はひびのき遺跡である。昭和49年に土佐山田町農業協同組合の本部建設工事の際に弥生土器片が発見され、土佐山田町教育委員会によって緊急調査が行われた。<sup>(7)</sup>昭和49・50年に1～4次にわたる調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居が12棟検出された。また多量の遺物が出土し、その後の高知県の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年の指標となるヒビノキ式も設定された。今回の調査のⅠ区、Ⅱ区もひびのき遺跡に所在する。

ひびのき岡ノ神母遺跡は今回の調査地の北側に隣接し、以前は鏡野中学校校庭遺跡とされていた。調査は土佐山田町教育委員会によって昭和59年と平成15年の2回行われている。昭和59年の調査<sup>(8)</sup>は工事中に土器片が出土し、トレンチ調査が行われている。調査では弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層や遺構が確認され、竪穴式住居跡が確認されているひびのき遺跡と一連の遺跡であると考えられた。また、ひびのき岡ノ神母遺跡の北側にある小倉山斜面より弥生時代中期の遺物が採集されていることも報告されている。平成15年の調査<sup>(9)</sup>は町民グラウンドの防球ネット新設工事に伴うもので、弥生時代後期の自然流路や土坑等が検出され、集落が更に西へ広がっていることが確認された。

今回の調査のほとんどはひびのきサウジ遺跡に所在する。ひびのきサウジ遺跡は平成元年と平成2年の2回調査が行われている。平成元年の調査<sup>(10)</sup>は今回の調査地の南側に位置する。この調査は四国電力株式会社山田寮新築事業に伴うもので土佐山田町教育委員会によって行われている。調査では古墳時代初頭と古墳時代後期の竪穴式住居跡が確認されているほか、SE1からは10世紀後半の一括資料が出土している。中世においても15～16世紀の区画溝が確認されている。平成2年の調査<sup>(11)</sup>は今回の調査の南西に位置する。この調査は土佐山田観光開発株式会社寮建設に伴うもので、当センターによって調査を行っている。調査では弥生時代後期のピットや、15世紀後半の掘立柱建物跡、溝跡等が確認された。中世の建物跡や溝跡には規格性があり、山田城跡との関連も指摘されている。

ひびのきサウジ遺跡の南側には大塚遺跡<sup>(12)</sup>が隣接する。大塚遺跡は平成2年と平成7年に土佐山田町教育委員会によって調査が行われている。平成2年の調査は個人宅地造成に伴うもので、弥生時代後期の溝跡の他、中世の屋敷の区画溝や中世墓群が確認された。また、大塚古墳の周溝の可能性がある遺構が検出され円筒埴輪状の須恵器が出土している。平成7年の調査は個人病院の駐車場整備に

### 3. 周辺の調査

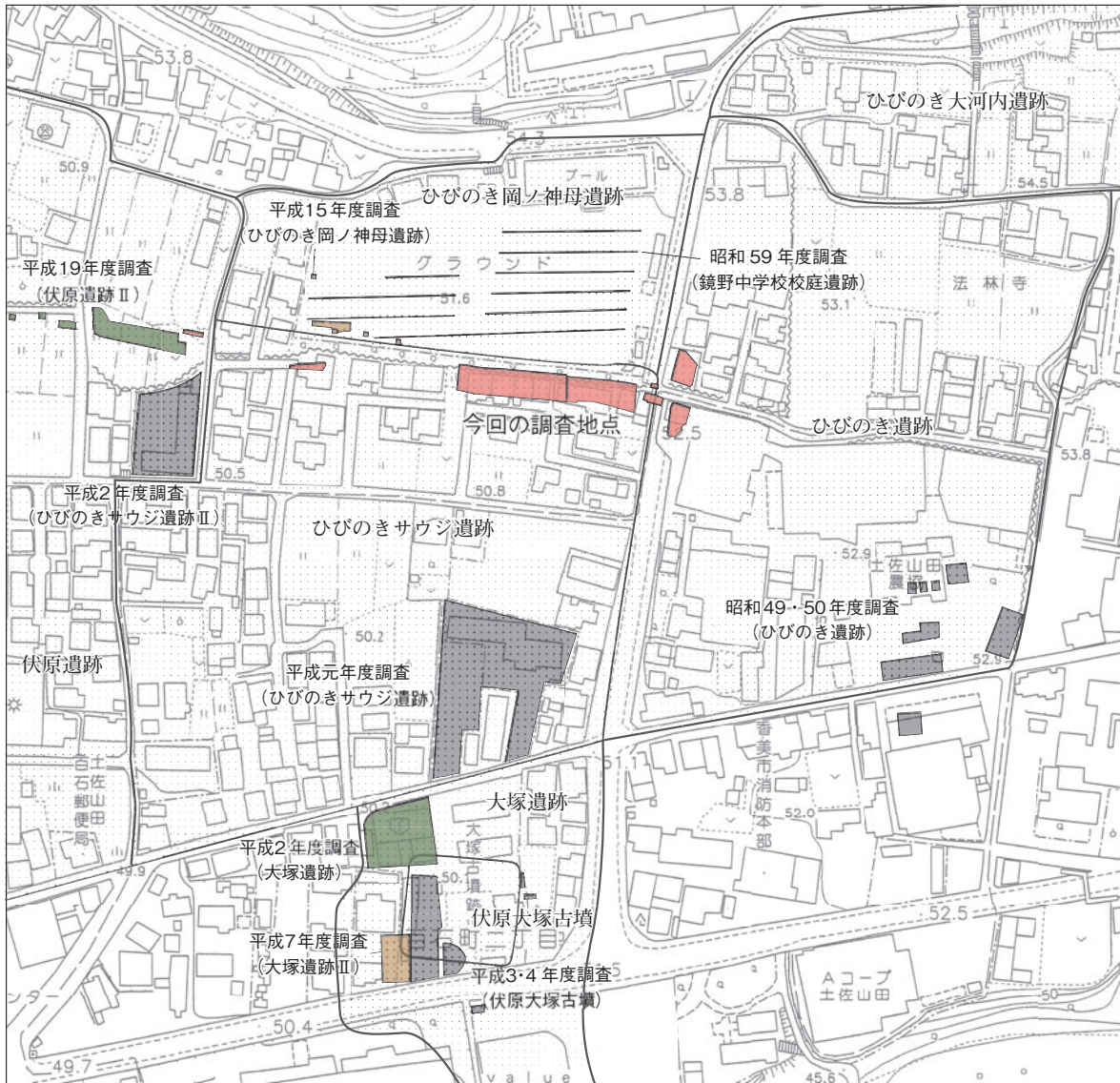


図11 周辺の主な調査地点(S=1/3,000)

伴うもので、15～16世紀の土坑墓2基が検出され、中世後期の墓地がさらに南に広がることが確認された。

大塚遺跡内には伏原大塚古墳も含まれている。伏原大塚古墳は当初県下に残る唯一の前方円墳と推定されており、昭和52年には主体部の調査が行われ、多量の須恵器が出土している。<sup>(3)</sup>平成3年には病院駐車場建設に伴い土佐山田町教育委員会によって緊急発掘調査が行われ、前方後方墳の可能性が高まった。平成4年には墳形や規模を確認する目的で国庫補助事業により調査が行われ、6世紀半ばに築造された一辺34mの大型方墳であることが確認された。また、中世には周溝が埋没し、15世紀後半から16世紀前半には中世墓群が形成されている。この中世墓群は集石土坑墓と掘方を伴わない配石墓で構成されており、配石墓には火葬された痕跡が認められるものも確認されている。

ひびのきサウジ遺跡の西側には伏原遺跡が隣接する。今回の調査のⅧ区は伏原遺跡の東端部に位置する。都市計画道路高知山田線建設に伴い平成18年度から20年度にかけて当センターによって調査を行っている。調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての多数の竪穴式住居跡や壺棺墓

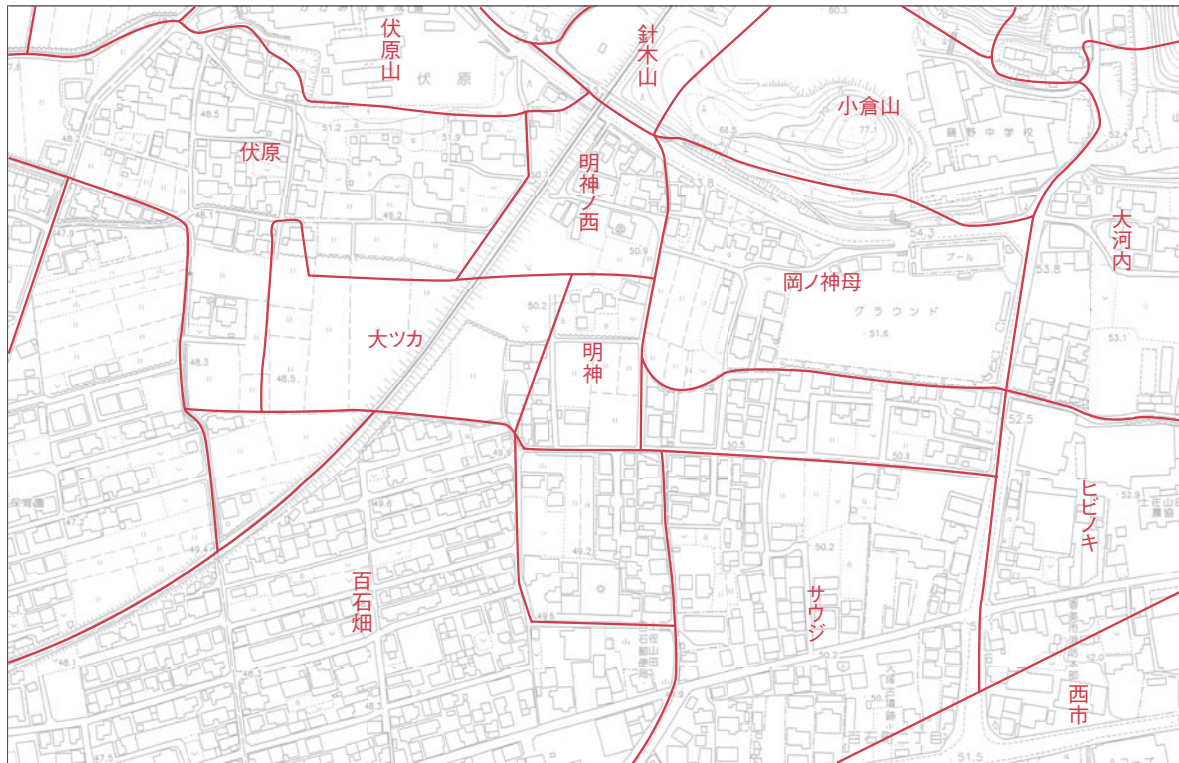


図12 調査区周辺の小字図(S=1/5,000)

が確認された。また、古墳時代後期のカマド付きの竪穴式住居跡のほか、古代の掘立柱建物跡や溝跡なども確認されている。

註

- (1) 『飼古屋岩陰遺跡』 高知県教育委員会・日本道路公団 1990
- (2) 『ひびのき岡ノ神母遺跡』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 土佐山田町教育委員会 2004
- (3) 『ひびのき遺跡』 土佐山田町教育委員会 1977
- (4) 『伏原大塚古墳』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 土佐山田町教育委員会 1993
- (5) 『加茂ハイタノクボ遺跡』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第28集 土佐山田町教育委員会 2000  
『加茂ハイタノクボ遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第98集 (助)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2007
- (6) 『楠目城跡(山田城跡)』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第26集 土佐山田町教育委員会 2002
- (7) (3)に同じ
- (8) 『鏡野中学校校庭遺跡』 土佐山田町教育委員会 1984
- (9) 『ひびのき岡ノ神母遺跡-町民グラウンド防球ネット新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 土佐山田町教育委員会 2004
- (10) 『ひびのきサウジ遺跡』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 土佐山田町教育委員会 1990
- (11) 『ひびのきサウジ遺跡Ⅱ-土佐山田観光開発株式会社寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集 (助)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- (12) 『大塚遺跡発掘調査報告書-個人宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』土佐山田町埋蔵文化財報告書第9集 土佐山田町教育委員会 1991  
『大塚遺跡Ⅱ-個人病院駐車場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』土佐山田町埋蔵文化財報告書第24

### 3. 周辺の調査

集 土佐山田町教育委員会 2004

(13) 『伏原大塚古墳』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 土佐山田町教育委員会 1993

#### 参考文献

『土佐山田町史』 土佐山田町教育委員会 1979

『土佐山田北部遺跡群』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 土佐山田町教育委員会 1992

『高知県遺跡地図』 高知県教育委員会 1998

『南国市史 上巻』 高知県教育委員会 1979

『高知の研究1 地質・考古編』 清文堂 1983

『高知の研究2 古代・中世編』 清文堂 1982

『日本の古代遺跡39高知』 保育社 1989

『高知県の地質』 高知市民図書館 1969

『角川 日本地名大辞典 39高知』 角川書店 1986

『林ノ谷古窯跡発掘調査報告書』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第21集 土佐山田町教育委員会 2003



# 第Ⅲ章 調査の成果

## 1. I区

### (1) 調査区の概要

I区は今回の調査の北東部に位置し、ひびのき遺跡に所在する。遺物包含層及び遺構は全面で確認され、調査面積は112㎡である。遺構検出は遺物包含層である第Ⅱ層の上面と下面の2回行い、上面では弥生時代と中世の遺構、下面で弥生時代の遺構を確認した。出土遺物は弥生土器が大半で、ほとんどが溝跡からの出土である。

### (2) 基本層序

本調査区では約80cmの客土の堆積が認められ、客土下に以下の堆積がみられた。(図13)

第Ⅰ層 灰黄褐色粘土質シルト層

第Ⅱ層 黒褐色粘土質シルト層

第Ⅲ層 におい灰黄橙色シルト層

第Ⅰ層は旧耕作土で、約10cmの堆積がみられた。攪乱及び削平を受けたとみられ、第Ⅰ層が認められない箇所もあった。

第Ⅱ層は遺物包含層でほぼ全面で認められた。厚さは約15cmを測り、ほぼ水平に堆積する。遺物包含層からは弥生土器及び中世の遺物が出土している。

第Ⅲ層は自然堆積層で、全面で認められた。

### (3) 堆積層出土遺物

#### 第Ⅱ層出土遺物

弥生土器(図14~16-1~37)

1~15は壺である。1~4は広口壺とみられる。1は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は頸部より屈曲して上方に立ち上がる。調整は頸部内面が斜め方向の粗いハケ、口縁部がヨコナデとみられるが磨耗するため不明瞭である。頸部外面は縦方向の粗いハケ調整で、上部には指頭圧痕が顕著に残る。2は口縁部の約1/4が残存する。口縁部が大きく外反し、端部は若干肥厚する。調整は内面が横方向のハケ、外面が縦方向のハケである。口縁部はヨコナデ調整とみられるが磨耗するため不明である。3は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は大きく外反し、端部を四角く収める。口縁端部には円形浮文を貼付する。調整は磨耗するため不明である。4は口縁部の一部が残存する。口縁部は短く外反し、端部を丸く収める。調整はヨコナデである。5~7は複合口縁壺である。5は口縁部の約1/10が残存する。口縁部は短く直線的に伸び、内傾する。調整は頸部がナデでハケがわずかに残り、口縁部はヨコナデである。6は頸部の約1/6が残存する。頸部はやや外反して立ち上がる。調整は内面が横方向のハケ、外面が縦方向のハケで、磨耗するためわずかに残る。7は頸部の約1/5が残存する。頸部は大きく外反して立ち上がる。調整は内面が横方向の粗いハケ及びナデ、外面が縦方向の粗いハケである。口縁部外面には櫛描の波状文とみられる文様がわずかに残る。8~15は底部である。8は底部の約2/3が残存する。小さな平底を呈し、胴部はやや内湾して立ち上がる。調整は内面

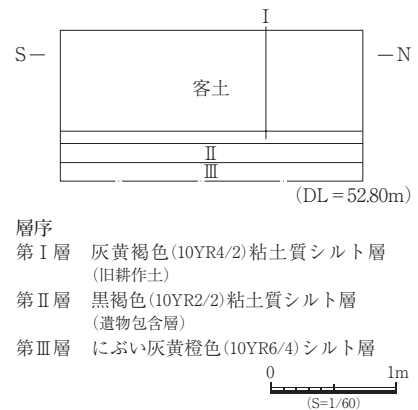


図13 I区西壁セクション図

1. I区

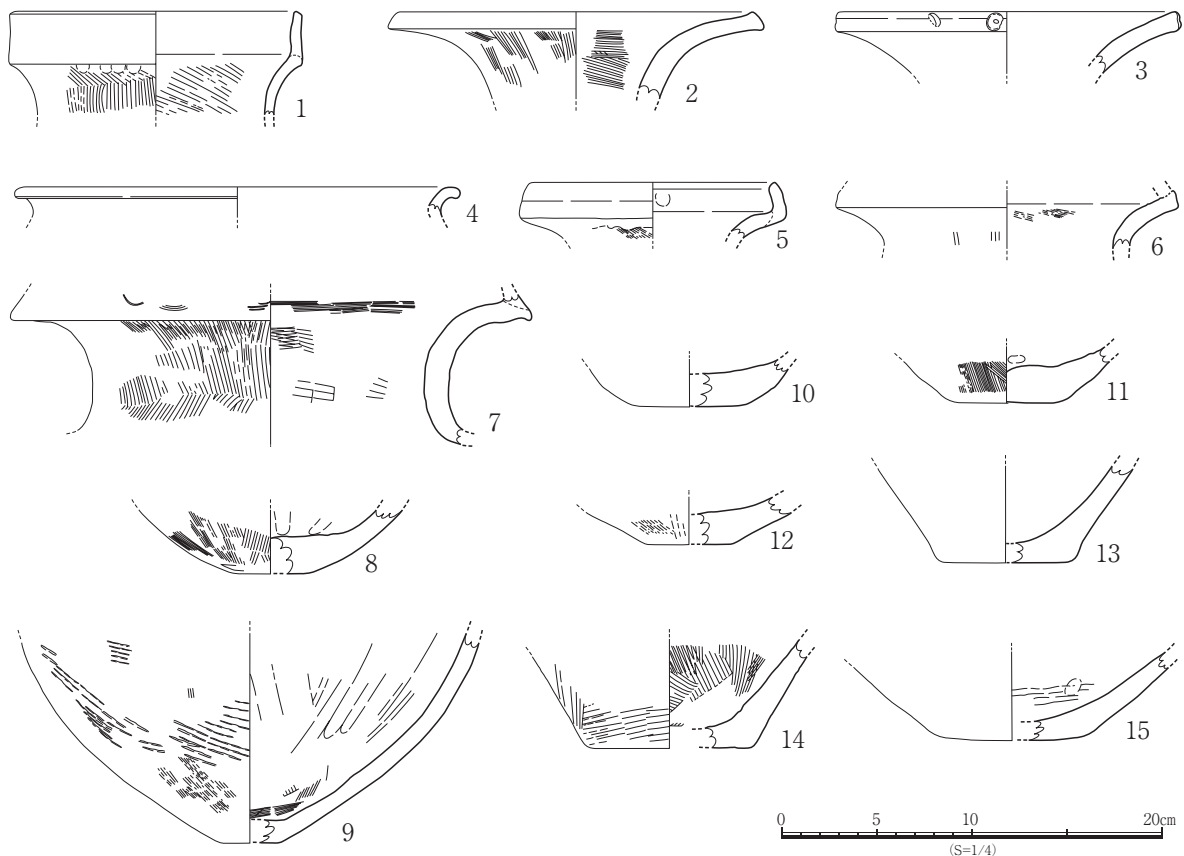


図14 I区第Ⅱ層出土遺物実測図1 (弥生土器)

が粗雑なナデで、黒斑がみられる。胴部外面は縦方向のハケ調整、底部外面はナデ調整である。9は底部の約1/4が残存する。底部は小さな平底を呈し、胴部は大きく膨らむ。調整は底部内面がハケ、胴部内面が縦方向のナデ、外面はタタキ後縦方向のハケである。器面は著しく磨耗する。10は底部の約1/4が残存する。器壁が厚く、平底を呈する。器面は著しく磨耗するため調整は不明である。11は底部の約1/8が残存する。平底を呈し、胴部は外上方に真っすぐ立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面はナデである。12は底部の約1/3が残存する。小さな平底を呈し、胴部は外上方に大きく開く。調整は内面がナデ、胴部外面は縦方向のハケがわずかに残る。底部外面はナデ調整である。13は底部の約1/3が残存する。平底を呈し、胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がナデ、外面はナデとみられるが磨耗するため不明である。14は底部の約1/5が残存する。平底を呈し、胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がハケ後一部ナデ、胴部外面は粗いハケがわずかに残る。底部外面はナデである。15は底部の約1/4が残存する。平底を呈し、胴部は底部より緩やかに立ち上がる。内面の調整は一部ハケとみられるが磨耗するため不明瞭である。胴部外面はナデ調整で、底部外面は磨耗するため不明である。

16～32は甕である。16～20は口縁部である。16は口縁部の約1/6が残存する。器壁が厚く、口縁部は頸部より緩やかに湾曲し、端部を四角く収める。調整は頸部内面が横方向のハケ、口縁部がヨコナデ、頸部外面がナデである。17は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は外上方に直線的に伸び、端部を四角く収める。器面が磨耗するため調整は不明である。18は口縁部の約1/8が残存する。小型で、器壁が薄いものである。口縁部は叩き出し成形で、調整は胴部内面がハケ後ナデ、口縁部内面が

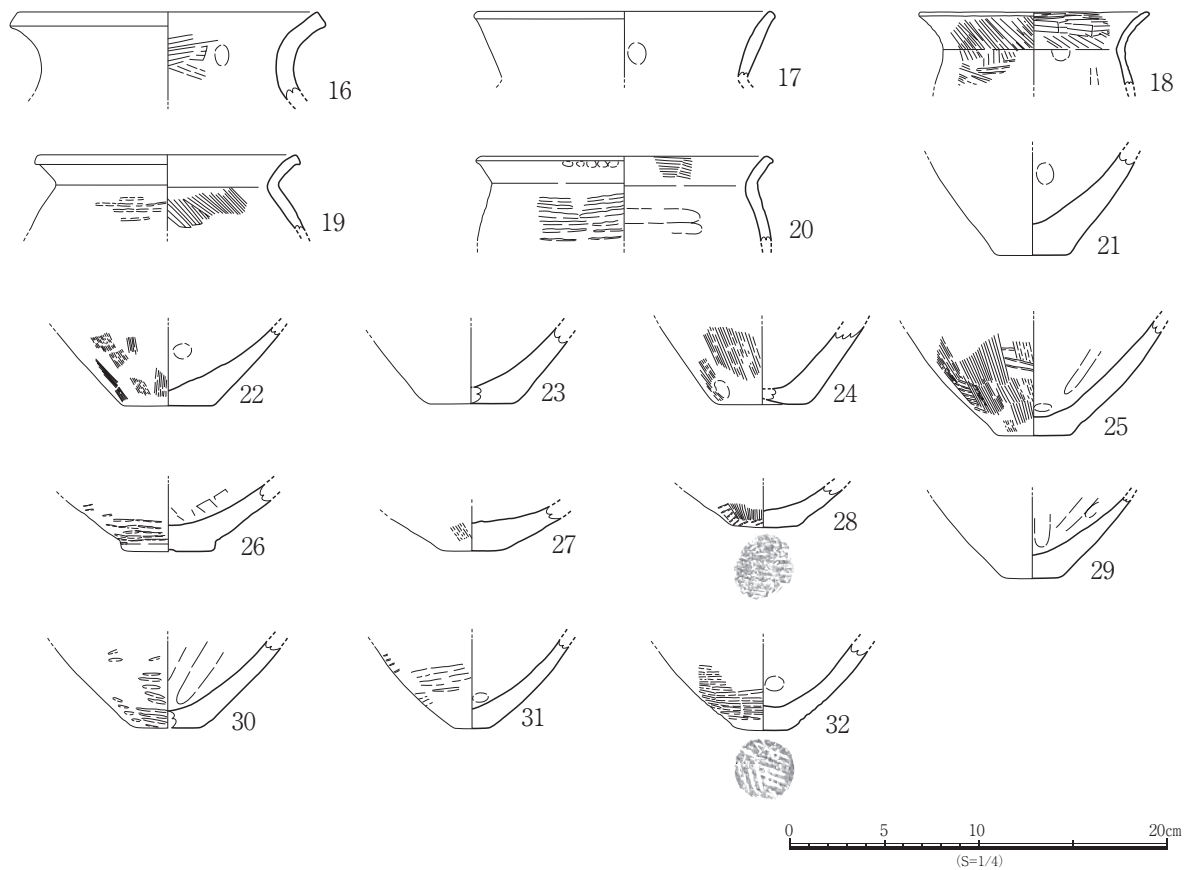


図15 I区第Ⅱ層出土遺物実測図2 (弥生土器)

ハケ, 口縁部外面が縦方向のハケ, 胴部外面がタタキである。19は口縁部の約1/8が残存する。頸部はくの字状に屈曲し, 口縁端部は若干肥厚する。調整は胴部内面が斜め方向のハケ, 胴部外面はタタキがわずかに残る。口縁部は著しく磨耗するため調整は不明である。20は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は短く, 端部を四角く収める。調整は胴部内面が横方向のナデ, 口縁部はヨコナデの後内面に横方向のハケを加える。外面はタタキ調整の後ナデ調整を行う。21~32は底部で, 平底を呈する。21は底部の約1/3が残存する。底部は器壁が厚く, 胴部は直線的に伸びる。調整はナデとみられるが, 外面は磨耗するため不明瞭である。22は底部の約1/4が残存する。器壁が薄く, 胴部は直線的に伸びる。内面の調整はナデとみられるが磨耗するため不明である。胴部外面は縦方向のハケ調整, 底部外面はナデ調整である。23は底部の約1/2が残存する。胴部は外上方に直線的に伸びる。調整はナデとみられるが, 磨耗するため不明である。24は底部の約1/4が残存する。胴部は外上方に直線的に伸びる。調整は内面がナデ, 胴部外面は縦方向のハケ, 底部外面はナデである。25は底部が完存する。底部が小さく, 胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ, 胴部外面がタタキ後縦方向のハケである。底部外面はタタキ調整である。26は底部が完存し, 平高台状を呈する。調整は内面がヘラナデ, 胴部外面がタタキ, 底部外面がナデで工具の圧痕が残る。27は底部がほぼ完存する。底部は小さな平底を呈する。調整は胴部外面にわずかにハケが残る。内面の調整は磨耗するため不明である。28は底部の約2/3が残存する。胴部は外上方に開く。調整は内面がナデ, 胴部外面がタタキ後縦方向のハケ, 底部外面がタタキである。29は底部の約1/4が残存する。小さな平底を呈し, 胴部は直線的に伸びる。調整はナデで, 外面には黒斑がみられる。30は底部の約1/4が残存する。胴部はや

1. I区

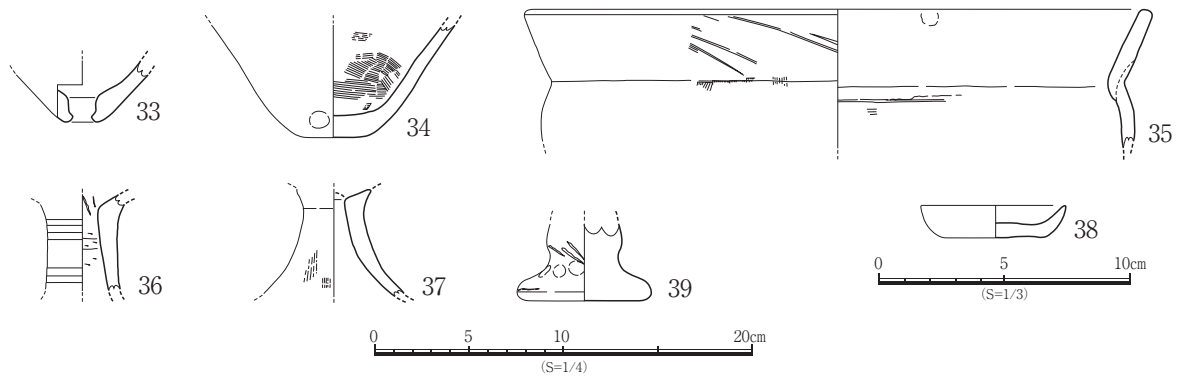


図16 I区第II層出土遺物実測図3 (弥生土器・土師質土器・土製品)

や内湾して立ち上がる。調整は内面が縦方向のナデ, 胴部外面がタタキ, 底部外面がナデである。31は底部の約1/4が残存する。底部は非常に小さく, 胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ, 胴部外面がタタキ後ナデ, 底部外面がナデである。32は底部が完存する。胴部はやや内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ, 外面はタタキで煤が付着する。

33は甌で, 底部の約1/4が残存する。底部は尖底を呈し, 径1.4cmの円孔を1孔穿つ。調整は底部がナデで, 胴部は磨耗するため不明である。

34・35は鉢である。34は底部の約1/4が残存する。平底を呈し, 体部は底部より滑らかに立ち上がる。調整は内面が横方向のハケで, 底部にナデを加える。外面はナデ調整とみられるが磨耗するため不明である。内面には黒斑がみられる。35は口縁部の約1/10が残存する。大型で, 口縁部は頸部より屈曲して外上方に真っすぐ伸びる。調整は体部内面が横方向のハケ, 口縁部外面には斜め方向のハケがわずかに残る。その他は磨耗するため調整は不明である。

36・37は高杯でいずれも脚柱部が約1/4残存する。36は脚柱部が上方に真っすぐ立ち上がるものである。調整は外面がナデ調整で, 櫛描の直線文を施す。内面は横方向のケズリ調整で上部にはしほり目が残る。37は脚柱部がハの字状に開くものである。調整は外面に縦方向のハケがわずかに残るが, 磨耗するため不明瞭である。

土師質土器(図16-38)

38は小皿で, 約2/3が残存する。口縁部は底部より緩やかに内湾して立ち上がり, 端部を細く仕上げ。調整は回転ナデとみられるが磨耗するため不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。

土製品(図16-39)

39は支脚で, 約1/2が残存する。底部は円盤状を呈し, 脚柱部は中実である。調整はナデで, 脚柱部にはしほり目が残る。

(4) 検出遺構

i 掘立柱建物跡

SB1(図17)

L字状を呈する溝跡(SD6)の内側で検出した梁間1間(3.17m), 桁行4間(5.10m)の南北棟建物(N-8°-E)である。柱間寸法は梁間(東西)が3.17m, 桁行(南北)が1.23~1.60mで, 柱穴は径20~35cmの円形または楕円形で, 埋土は黒褐色シルトまたは黒褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片17点, 土師質土器片1点, 土製品1点がみられ, 南東隅の柱穴から出土した土製品(40)が図示できた。

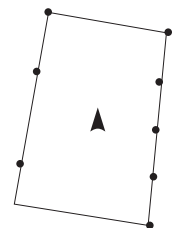


図17 SB1

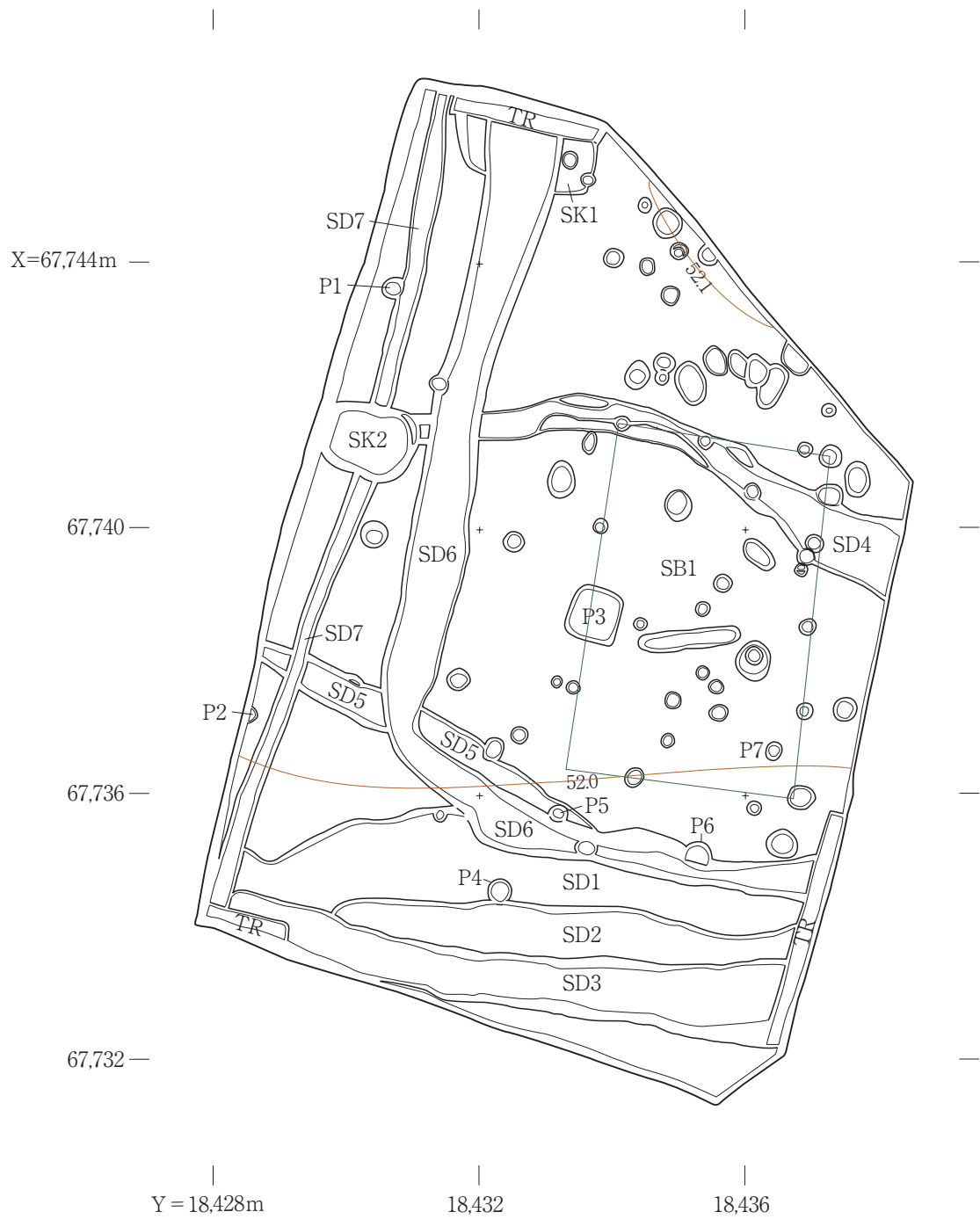


図18 I区遺構平面図(S=1/100)

出土遺物

土製品(図20-40)

40は支脚で,脚部の約1/4が残存する。中空で器壁が薄く,裾部はハの字状に開く。調整はナデで,外面は縦方向に強く施す。

ii 土坑

SK1

I区の北部に位置する。方形を呈するものとみられ,北側は調査区外に続く。SD6に切られる。

1. I区

検出長2.12m, 検出幅0.81m, 深さは30cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片11点, 須恵器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK2(図19)

I区の中央部西寄りに位置する。わずかに西壁に接しており, SD7を切る。平面形は隅丸方形を呈し, 長辺1.43m, 短辺1.22m, 深さは33cmを測り, 断面形は逆台形を呈す。底面は水平な面をなし, 長軸方向はN-18°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで, 灰白色(10YR7/1)粘土質シルトブロックを少量含む。出土遺物には弥生土器片57点, 土師器片1点, 須恵器片1点, 土師質土器1点, 瓦質土器1点, 土製品1点, 鉄滓がみられ, 弥生土器(41), 土師質土器(42), 瓦質土器(43), 土製品(44)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図20-41)

41は手捏ね土器で, 底部がほぼ完存する。底部外面はアーチ状を呈する。調整は粗雑なナデで, 底部内面は中央部を指頭圧により凹ませている。

土師質土器(図20-42)

42は杯で, 底部の約1/4が残存する。器壁が薄く, 底径が小さいものである。内面にはわずかに回転ナデ調整がみられるが磨耗するため不明瞭である。

瓦質土器(図20-43)

43は鍋で, 口縁部の一部が残存する。肩部が張り, 口縁部は頸部より屈曲して内傾する。器面は著しく磨耗するため炭素の吸着は認められず, 調整も不明である。

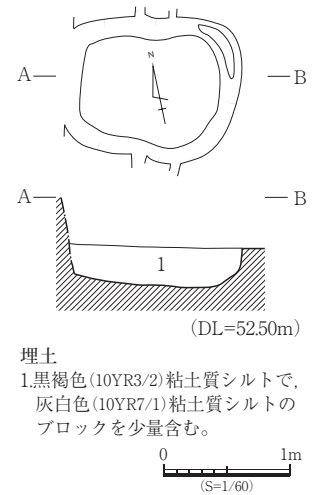
土製品(図20-44)

44は管状土錘で, 一部を欠損する。円柱形を呈し, 調整はナデとみられるが磨耗するため不明である。

iii 溝跡

SD1(図21)

I区の南部で検出した東西溝跡(N-86°-W)であり, SD2・6・7に切られる。東端は調査区外へ続く。検出長8.48m, 検出幅1.35m, 深さは20cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.968m)か



埋土  
1.黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで, 灰白色(10YR7/1)粘土質シルトのブロックを少量含む。

図19 SK2

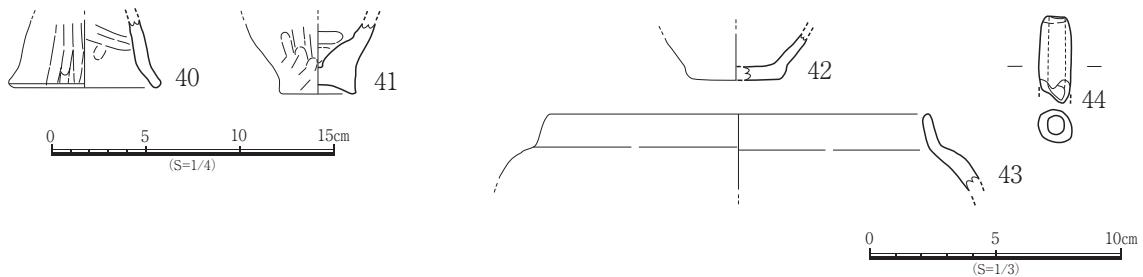


図20 SB1・SK2出土遺物実測図(弥生土器・土師質土器・瓦質土器・土製品)

ら西(51.878m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルトである。出土遺物には弥生土器の壺36点, 甕146点, 甌1点, 鉢20点, 手捏ね土器1点, 細片21点, 鉄製品1点がみられ, 弥生土器24点(45~68)と鉄製品(69)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図22-45~68)

45~52は壺である。45~47は広口壺である。45は口縁部の約1/5が残存する。口縁

部は大きく外反し, 端部を下方に肥厚させる。調整は口縁部外面に粗い縦方向のハケがわずかに残るが, その他は磨耗するため不明である。46は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は頸部より緩やかに外反し, 端部を四角く収める。調整は胴部内面がナデ, 頸部内面がハケ, 口縁部がナデ, 口縁端部がヨコナデ, 外面が縦方向のハケである。47は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は外反し, 端部を四角く収める。調整は頸部内面が横方向のハケ, 口縁端部がヨコナデ, 外面が縦方向の細かいハケである。口縁部内面の調整は磨耗するため不明である。48は複合口縁壺で, 口縁部の約1/4が残存する。頸部から緩やかに外反して立ち上がる。器面は著しく磨耗するため調整は不明である。49は口縁部の約1/8が残存する。肩部が張り, 口縁部は短く端部はわずかに上方に摘み上げる。調整は胴部内面がナデ後ケズリ, 口縁部がヨコナデ, 胴部外面はタタキ後縦方向のハケである。50は底部の約1/3が残存する。器壁が厚く, 平底を呈する。調整は内面がナデで, 外面は磨耗するため不明である。51は底部の約1/6が残存する。器壁が厚く, 平底を呈し, 胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面が粗いハケ後ナデ, 胴部外面がタタキ後縦方向の粗いハケである。底部外面はナデ調整とみられるが磨耗するため不明瞭である。外面には黒斑がみられる。52は胴部の約1/2が残存する。胴部は大きく膨らみ球形を呈する。調整は胴部内面が縦方向のナデ, 頸部内面がヘラナデ, 胴部外面が縦方向の粗いハケを密に行う。

53~57は甕である。53は口縁部の約1/6が残存する。頸部は緩やかに湾曲し, 口縁端部は肥厚する。調整は胴部内面がナデ, 口縁部はヨコナデ後内面に横方向のハケ, 胴部外面は縦方向のハケである。口縁端部には凹線が2条巡る。54は口縁部の約1/5が残存する。頸部は大きく湾曲し, 口縁部はやや外反する。調整は胴部内面にわずかにハケが残り, 口縁部はヨコナデ後端部を面取り, 胴部外面は細かい縦方向のハケである。55は口縁部の約1/5が残存する。頸部はくの字状に屈曲し, 口縁部は比較的長く伸びる。調整は胴部内面が縦方向の強いナデ, 口縁部はヨコナデ後端部を面取り, 胴部外面はタタキ後縦方向のハケである。56は口縁部の約1/5が残存する。頸部は緩やかに湾曲し, 口縁部は短く伸びる。調整は胴部内面がナデ, 胴部外面はタタキである。口縁部は内面が細かい横方向のハケ調整で, 端部は面取りを行う。外面には煤が付着する。57は口縁部の約1/8が残存する。胴部上位に最大径を有し, 口縁部は短く伸びる。調整は胴部内面が斜め方向のハケ, 外面にタタキを施した後口縁部にヨコナデを加え, 端部は面取りを行う。

58は甌で, 底部の約1/2が残存する。底部は器壁が厚く平底を呈し, 中央には径4mmの円孔を1孔穿つ。内面の調整はナデで, 外面はナデとみられるが磨耗するため不明である。

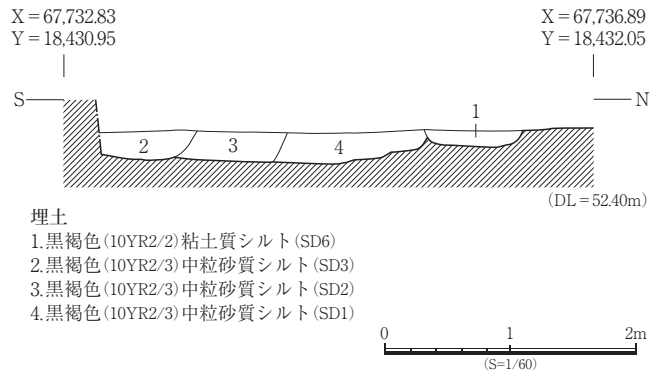


図21 SD1~3・6

1. I区

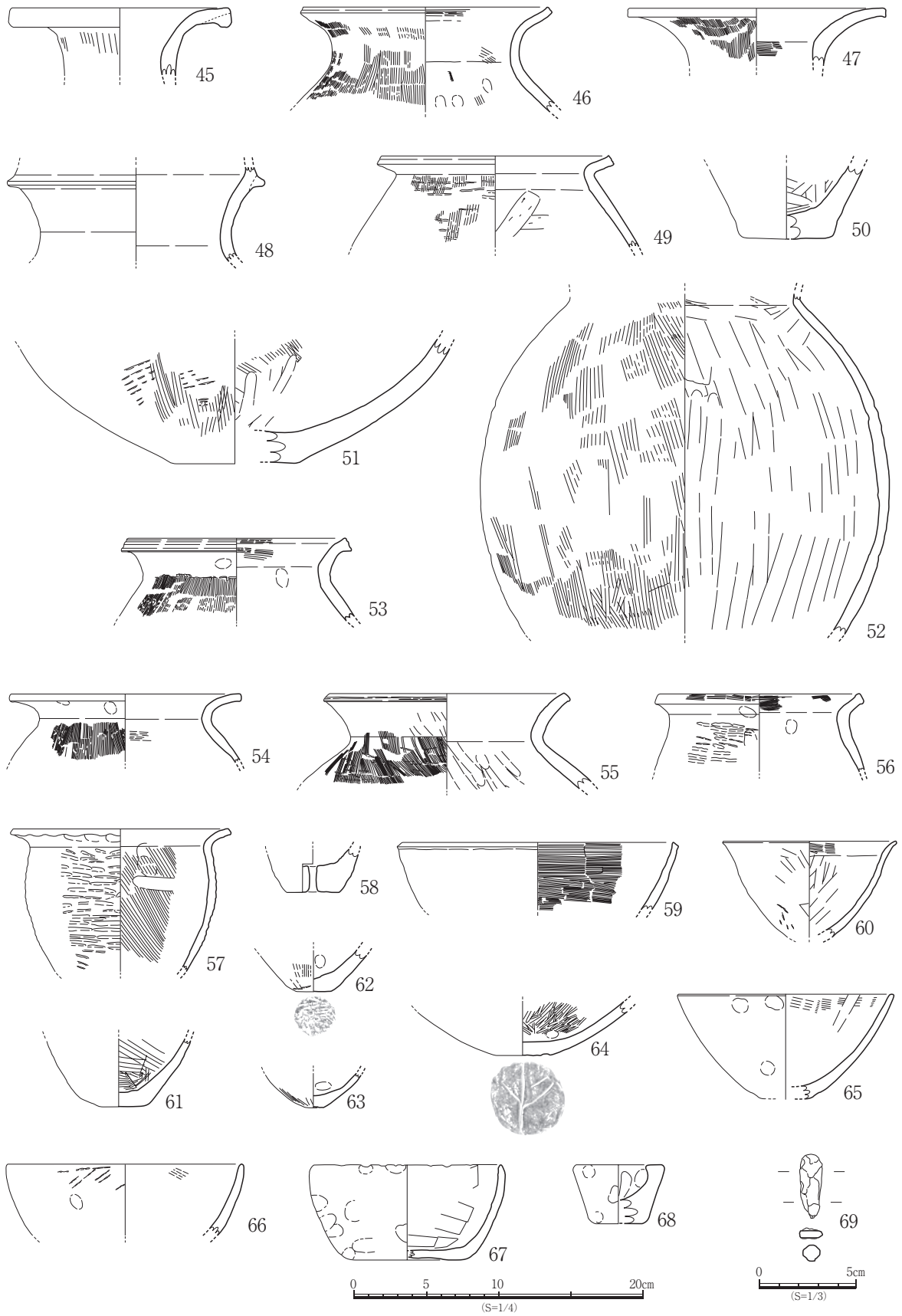


図22 SD1出土遺物実測図(弥生土器・鉄製品)



59～67は鉢である。59は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は内湾し、端部を四角く収める。調整は口縁部にヨコナデを行った後、内面に横方向の細かいハケ、外面は丁寧なナデを施す。60は口縁部の約1/6が残存する。器壁が薄く、口縁部は短く外反する。調整は体部内面がナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面が丁寧なナデで亀裂が入る。61は底部が完存する。平底を呈し、体部は直線的に伸びる。調整は内面が横方向の粗いハケ、外面はナデで体部は丁寧に行う。62は底部が完存する。小さな平底を呈する。調整は内面がナデ、体部外面には縦方向のハケがわずかに残り、底部外面はタタキである。63は底部が完存する。非常に小さな平底を呈し、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、体部外面には縦方向のハケがわずかに残り、底部外面はナデである。64は底部が完存する。やや大振り、丸底を呈する。調整は内面が密なミガキ、体部外面はナデ、底部外面には木葉痕が残る。65は口縁部の約1/3が残存する。口縁部は内湾し、端部を丸く収める。調整は内面が口縁部に横方向のハケを行った後縦方向のナデ、外面がナデである。66は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は緩やかに内湾して端部を丸く収める。調整は内面にわずかにハケが残り、外面はタタキ後ナデである。器面は著しく磨耗するため調整は不明瞭である。67は約1/4が残存する。底径が大きく、杯状を呈する。調整は内面にヘラ状工具の圧痕がわずかに残り、外面はナデである。著しく磨耗するため調整は不明瞭である。

68は手捏ね土器で、約1/4が残存する。平底を呈し、口縁端部は水平な面を有する。調整はナデで、指頭圧痕が残る。

鉄製品(図22-69)

69は釘で、一部が残存する。断面は矩形を呈し、先端を細く仕上げる。全面に錆化がみられる。

SD2(図21)

I区の南部で検出した東西溝跡(N-86°-W)であり、SD1を切りSD3に切られる。東端は調査区外へ続く。検出長7.12m、検出幅0.77m、深さは20cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.969m)から西(51.910m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルトである。出土遺物には弥生土器の壺33点、甕166点、甑1点、鉢95点、高杯9点、細片35点、土師器1点、石製品1点がみられ、弥生土器56点(70～125)、土師器(126)、石製品(127)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図23～25-70～125)

70～82は壺である。70は頸部の約1/3が残存する。口縁部は上方に真っすぐ立ち上がる。調整は内面がナデで指頭圧痕が残る、外面はナデで口縁部に櫛描文、頸部に縦方向の沈線文を施す。71は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は外反し、端部を細く仕上げる。外面には縦方向のミガキ調整がわずかに残るが磨耗するため不明瞭である。72～76は広口壺である。72は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は内傾して立ち上がり、端部は外反する。口縁部にはわずかにハケ調整が残るがその他は磨耗するため不明である。口縁部内面の一部には煤が付着する。73は頸部がほぼ完存する。口縁部は頸部より屈曲してやや外反して立ち上がる。調整は胴部内面が横方向の細かいハケ、口縁部外面には縦方向のハケがわずかに残り、その他は磨耗するため調整は不明である。74は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は緩やかに湾曲し端部を四角く収める。調整は胴部内面がヘラナデ及びナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面は縦方向のハケ後胴部にナデを加える。75は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は大きく外反し、端部を若干細く仕上げる。内面の調整はハケで、工具の圧痕とみられる。

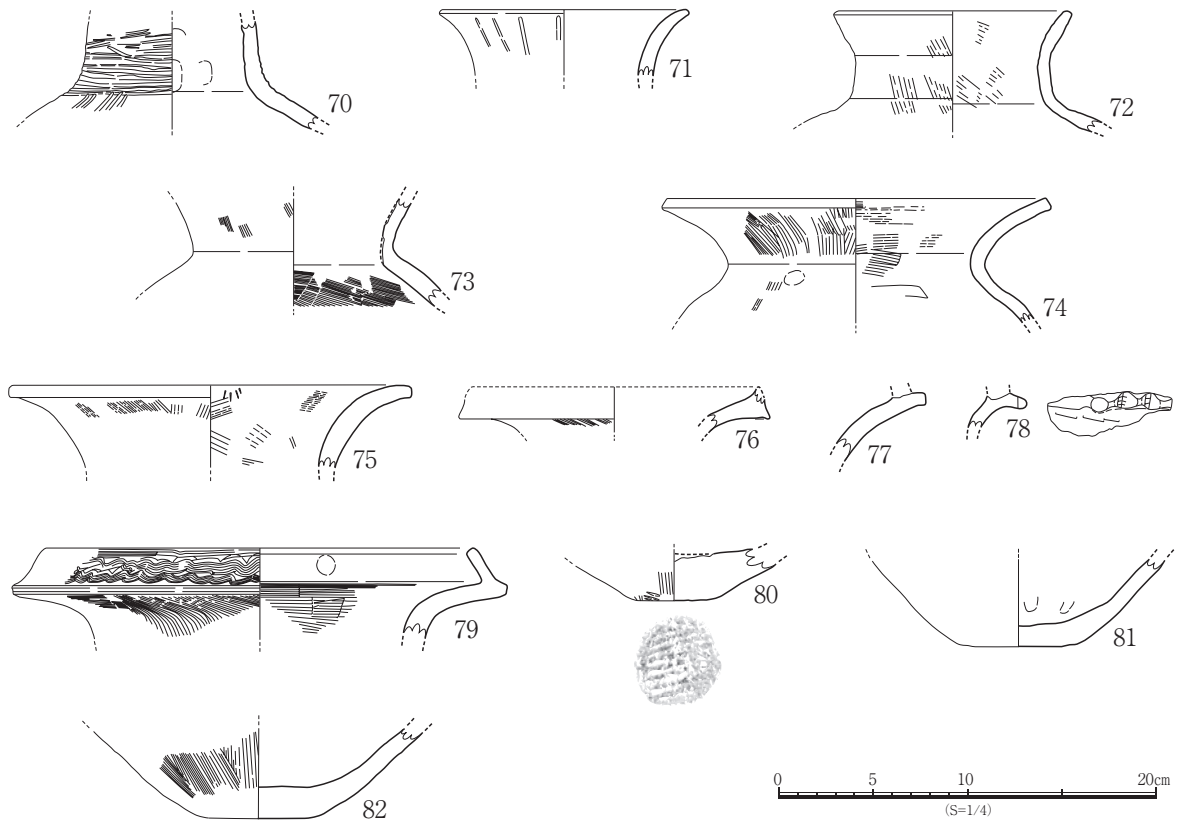


図23 SD2出土遺物実測図1 (弥生土器)

痕跡が残る。外面は横方向のナデ後縦方向のハケである。著しく磨耗するため調整は不明瞭である。76は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は外上方に大きく開き、端部を上下に肥厚させる。調整は外面に縦方向のハケを施した後口縁端部にヨコナデを行う。内面は磨耗するため調整は不明瞭である。77~79は複合口縁壺である。77・78は口縁部の一部が残存する。口縁部は外反して立ち上がり、内傾するものとみられる。77は外面に斜め方向のハケ調整がみられるが、内面の調整は磨耗するため不明である。78は外面にヘラ状工具の圧痕が残るが磨耗するため調整は不明瞭である。口縁部の屈曲部にはハケ状工具で刻み目を施し波状口縁風になる。79は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は外上方に大きく開いた後内傾し端部を四角く収める。調整はハケで、口縁端部はヨコナデである。口縁部外面には櫛描の直線文及び波状文を施す。80~82は底部である。80は底部が完存する。器壁が厚く、平底を呈する。調整は内面がハケ、胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面がタタキである。81は底部の約1/4が残存する。平底を呈し、胴部は直線的に伸びる。調整はナデで、外面は磨耗するため不明瞭である。82は底部の約1/3が残存する。底部の器壁は厚く、平底を呈し、胴部は直線的に伸びる。調整は内面がナデ、胴部外面は縦方向のハケである。底部外面は磨耗するため調整は不明である。

83~113は甕である。83・84は口縁端部を上下に大きく肥厚するもので、口縁端部には凹線を施す。83は口縁部の一部が残存し、調整はヨコナデで、口縁端部には凹線を4条施す。84は口縁部の約1/8が残存し、調整はヨコナデで、口縁端部には凹線を2条施す。85は口縁部の約1/8が残存する。やや器壁が厚く、頸部は緩やかに湾曲する。調整は胴部内面の一部にヘラケズリを行い、口縁部はヨコナデ後外面に縦方向のハケ、胴部外面は斜め方向のハケである。頸部外面には一部煤が付着する。86は口

縁部の約1/5が残存する。器壁が薄く、頸部はくの字状に屈曲する。調整は胴部内面がナデ、口縁部はヨコナデ後外面に縦方向のハケを施し、端部は面取りを行う。胴部外面は磨耗するため調整は不明である。87は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は大きく外傾する。調整は胴部内面がナデ後斜め方向のハケ、口縁部内面が横方向のハケ、外面は平行のタタキである。口縁部は叩き出し成形で、端部は面取りを行う。88は口縁部の約1/5が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は四角く収める。調整は内面が横方向のハケ、口縁部外面がナデ、胴部外面にはわずかに幅広のタタキが残る。口縁端部は面取りを行う。89は口縁部の約1/8が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は四角く収める。調整は内面が斜め方向の細かいハケ、外面がタタキである。口縁部は叩き出し成形で、端部は面取りを行う。90は口縁部の約1/4が残存する。胴部の器壁が厚く、頸部はくの字状に屈曲する。調整は胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデ後内面にハケ、外面には右上がりのタタキを施す。口縁部は叩き出し成形である。91は口縁部の約1/8が残存する。頸部は屈曲し、口縁端部は丸く収める。調整は胴部内面がナデ、口縁部内面がハケ、外面が極太のタタキである。口縁部は叩き出し成形である。92は口縁部の約1/6が残存する。小型で器壁が薄く、頸部は緩やかに屈曲し、口縁端部は丸く収める。調整は胴部内面がナデ後ハケ、口縁部がヨコナデ、外面はタタキ後ナデである。口縁部は叩き出し成形である。93は口縁部の約1/5が残存する。小型で、胴部はあまり膨らまない。調整は内面の胴部下半が縦方向のハケ、胴部上半及び口縁部内面はハケとみられるが磨耗するため不明瞭である。外面の調整はタタキで、口縁部にはナデを加え、端部は面取りを行う。口縁部は叩き出し成形で、外面の胴部下半には煤が付着する。94は口縁部の約1/5が残存する。肩部が張り、口縁部は短く外反する。調整は胴部内面が縦方向のハケ、口縁部内面が斜め方向のハケ、外面はタタキで口縁部には縦方向のハケを加える。口縁部外面にはわずかに煤が付着する。95は口縁部の約1/8が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は四角く収める。調整は胴部内面がナデ及び縦方向のハケ、口縁部内面が横方向のハケ、外面が平行のタタキである。口縁部は叩き出し成形で、端部は面取りを行う。96は口縁部の約1/6が残存する。器壁が薄く、口縁部はわずかに外反する。調整は胴部内面が斜め方向のハケ、口縁部内面が横方向のハケ、外面は右上がりのタタキで、口縁部にはナデを加える。口縁部は叩き出し成形である。97は口縁部の約1/6が残存する。非常に器壁が厚いもので、口縁端部は四角く収める。著しく磨耗するため調整は不明である。98は口縁部の約1/5が残存する。大型で、口縁部は水平に伸びる。調整は胴部内面が縦方向のハケ、口縁部がヨコナデ、胴部外面が丁寧なナデである。99～111は平底を呈するものである。99は底部の約1/4が残存する。器壁が厚いもので、底部外面には工具の圧痕のような凹みがみられる。器面は著しく磨耗するため調整は不明である。内面には黒斑がみられる。100は底部が完存するもので、平高台状を呈する。器面は著しく磨耗するため調整は不明である。101は底部の約1/3が残存する。器壁が薄いものである。内面にはヘラナデ調整がわずかに残り、外面はナデ調整とみられるが磨耗するため不明瞭である。讃岐からの搬入品とみられる。102は底部の約1/5が残存する。器壁が厚く、胴部は比較的上方に立ち上がる。器面は著しく磨耗するため調整は不明である。103は底部の約1/3が残存する。胴部は直線的に立ち上がる。調整は内面が強いナデ、胴部外面にはわずかにハケが残り、底部外面はナデである。104は底部が完存する。底部の器壁が厚く、胴部は外上方に立ち上がる。調整は内面が板ナデ、外面がナデである。105は底部の約1/3が残存する。胴部はやや内湾して立ち上がる。調整は内外面にわずかに縦方向のハケが残るが磨耗するため不明瞭である。内面の一部には煤が付着し、底部外面には黒斑がみられる。106は

1. I区

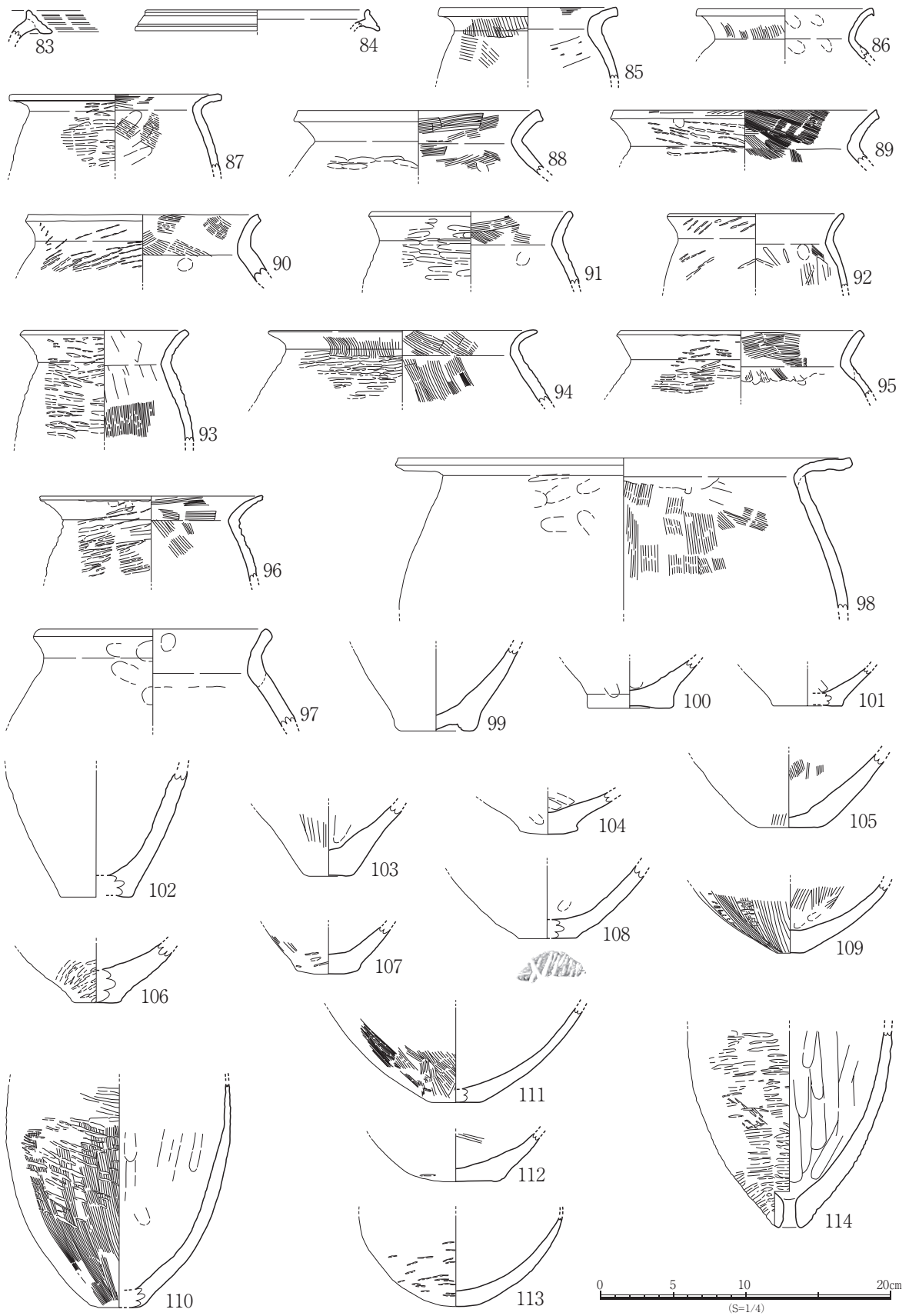


图24 SD2出土遺物実測図2 (弥生土器)

底部の約1/3が残存する。器壁が厚く、小さな平底を呈する。調整は胴部外面が右上がりの螺旋状のタタキ、底部外面はナデである。内面はナデとみられるが磨耗するため不明である。107は底部が完存する。底部の器壁が厚く、胴部は外上方に直線的に立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面にはタタキと縦方向のハケがわずかに残る。底部外面はナデとみられる。内面には一部黒斑がみられる。108は底部の約1/3が残存する。胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、底部外面がタタキである。胴部外面は磨耗するため不明である。109は底部の約1/4が残存する。小さな平底を呈し、胴部は内湾する。調整は内面がハケ後底部にナデ、胴部外面はタタキ後縦方向のハケ、底部外面はナデである。外面には一部黒斑がみられる。110は約1/3が残存する。器壁が薄く、胴部はあまり膨らまず上方に立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面は左上がりのタタキ後縦方向のハケである。外面には一部煤が付着する。111は底部の約1/4が残存する。胴部は大きく内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面がハケ、底部外面がナデである。112は底部が完存する。底部は歪な丸底を呈する。調整は底部内面がナデ、胴部内面がハケ、胴部外面がタタキ後丁寧なナデ、底部外面がナデである。113は底部が完存する。丸底を呈し、胴部の器壁は薄い。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。外面には黒斑がみられる。

114は甌で、約1/3が残存する。底部は小さな平底を呈し、中央に径8mmの円孔を穿つ。胴部は膨らまず上方に立ち上がる。調整は内面がナデで、胴部外面はタタキである。外面には黒斑がみられる。

115～121は鉢である。115は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は内湾し端部を丸く収める。内面の調整は細かい斜め方向のハケである。外面は磨耗するため調整は不明である。116は口縁部の約1/3が残存する。体部は器壁が厚く、口縁部は細く仕上げる。調整は内面が板ナデ、外面はタタキ後丁寧なナデである。117は口縁部の約1/5が残存する。器高が低く、皿状を呈するものである。調整は内面にわずかにハケが残り、外面はタタキ後ナデである。口縁端部は面取りを行う。118は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は緩やかに内湾して端部を四角く収める。調整は体部内面が縦方向のナデ、口縁部内面が横方向のハケ後ナデ、外面は平行のタタキ後ナデである。口縁端部は面取りを行う。119は底部が完存する。底部は器壁が厚く、平高台状を呈する。調整は内面が横方向のハケ、外面がナデである。120は底部の約1/4が残存する。平底を呈し、底部の器壁が非常に厚い。調整は内面が縦方向の強いナデ、胴部外面がタタキ後ハケである。底部外面は磨耗するため調整は不明である。121は口縁部の約1/10が残存する。大型で、口縁部は器壁が厚く外反し、端部を四角く収める。調整は内面が横方向のハケ、外面が縦方向の細かいハケで、口縁端部は面取りを行う。外面には一部黒斑がみられる。

122～125は高杯である。122は脚柱部が残存する。脚部は小型でハの字状に開く。調整は杯底部と脚部外面にわずかにミガキが残る。脚部内面はハケで、上部はナデである。123は脚柱部が残存する。器壁が厚く、脚部はハの字状に大きく開く。調整はナデである。124は脚柱部が残存する。器高が高く、脚部はハの字状に大きく開く。調整は外面の脚部上半が縦方向のハケ、下半がナデ、内面はしぼり目が残る。125は直立する脚柱部が残存する。残存部には2箇所円孔がみられる。脚部内面にはしぼり目が残り、外面の調整は磨耗するため不明である。

#### 土師器(図25-126)

126は壺で、底部の約1/4が残存する。丸底を呈し、胴部は球形を呈する。調整は底部内面がナデ、胴部内面が横方向のハケ、外面は磨耗するため不明である。

1. I区

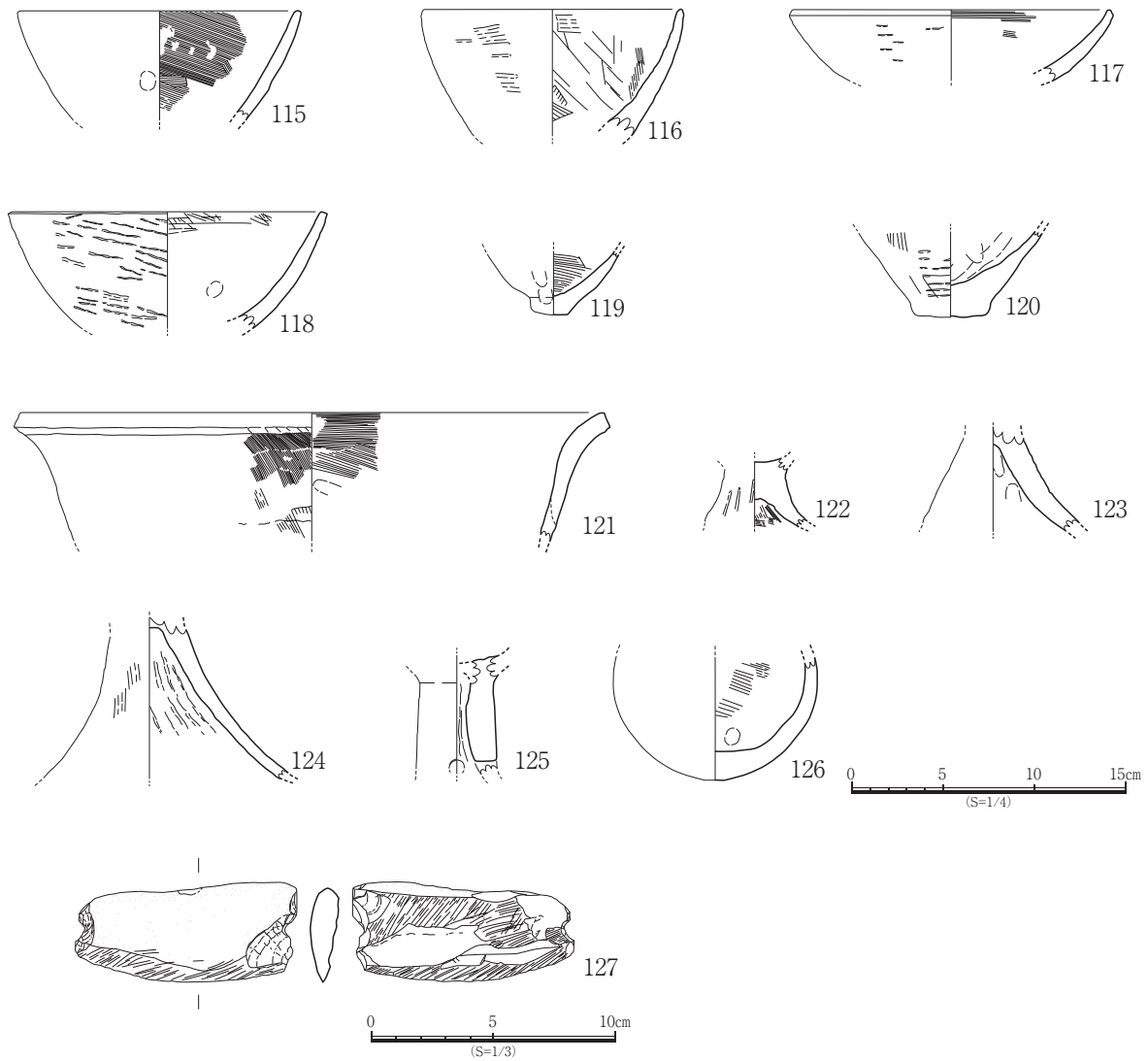


図25 SD2出土遺物実測図3 (弥生土器・土師器・石製品)

石製品(図25-127)

127は打製の石包丁である。河原石を薄く割った後平滑に整え、両端に抉りを入れる。歯は鋭く尖る。石材は泥岩とみられる。

SD3(図21)

I区の南部で検出した東西溝跡(N-81°-W)であり、SD2を切り、SD7に切られる。東端は調査区外へ続く。検出長8.38m、検出幅1.15m、深さは20cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.996m)から西(51.858m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルトである。出土遺物には弥生土器の壺39点、甕166点、甌1点、鉢24点、高杯5点、手捏ね土器2点、細片86点、土製品1点、ガラス製品1点がみられ、弥生土器52点(128~179)、土製品(180)、ガラス製品(181)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図26~28-128~179)

128~139は壺である。128~135は広口壺である。128は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は外反し、端部を丸く収める。外面の調整は縦方向のミガキで、内面は磨耗するため不明である。129は

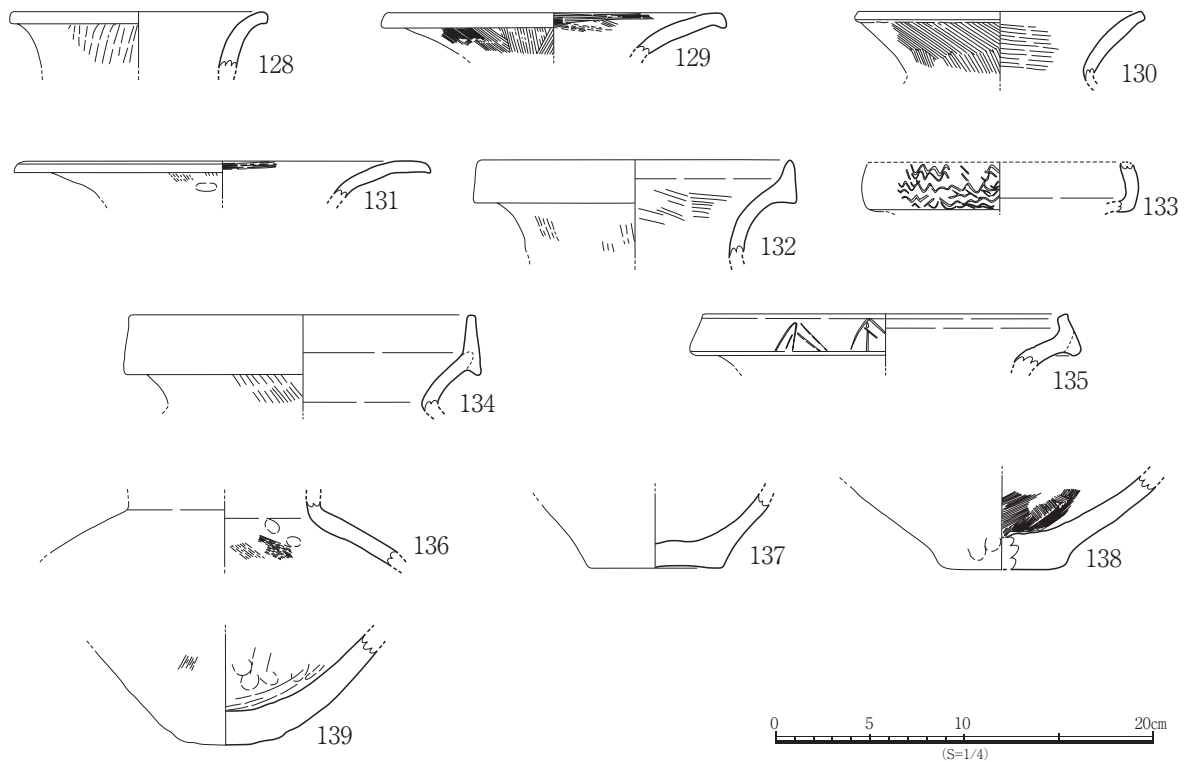


図26 SD3出土遺物実測図1 (弥生土器)

緩やかに外反し端部を下方に肥厚させる。調整は口縁部内面が横方向のハケ，外面が縦方向のハケである。130は口縁部の約1/3が残存する。口縁部はわずかに外反し端部を四角く収める。調整は内面が横方向のハケ，外面が斜め方向のハケである。口縁端部はヨコナデとみられるが磨耗するため調整は不明である。131は口縁部の約1/5が残存する。器壁が薄く，端部は水平に伸びる。調整は内面が横方向のハケ，外面が縦方向のハケである。器面は磨耗するため調整は不明瞭である。132は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は上方に立ち上がった後外反し，端部を上方に細く摘む。調整は内面がナデ及びハケ，外面が縦方向のハケである。口縁端部はヨコナデとみられるが磨耗するため調整は不明である。133は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は水平に伸びた後上方に立ち上がる。調整はヨコナデで，外面には櫛描の波状文を施す。134は口縁部の約1/10が残存する。口縁部は外上方に真っすぐ伸びた後垂直方向に粘土を貼付する。調整は外面に縦方向の粗いハケが残るがその他は磨耗するため不明である。135は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は外上方に伸びた後上下に拡張する。調整は口縁端部がヨコナデ，その他はナデである。外面には鋸歯文風の沈線による文様が施される。136は頸部の約1/8が残存する。肩部が張り，口縁部は上方に立ち上がるものとみられる。調整は内面が斜め方向のハケで，外面はナデとみられるが磨耗するため不明である。137は底部の約1/3が残存する。平底を呈し，胴部はやや内湾して立ち上がる。調整はナデで，外面には黒斑がみられる。138は底部の約1/3が残存する。平底を呈し，底部の器壁は厚く，胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。調整は内面が細かいハケ，外面がナデである。139は底部が完存する。平底を呈し，胴部は底部より稜を持たず湾曲して立ち上がる。調整は内面が強いナデ，外面にはわずかに縦方向にハケが残るが磨耗するため不明瞭である。

140～169は甕である。140は口縁部の一部が残存する。調整はヨコナデとみられるが磨耗するた

## 1. I区

め不明で、外面は凹線風に凹む。141は口縁部の約1/4が残存する。小型で、胴部は上方に立ち上がり、口縁部は短く外上方に伸びる。調整は胴部内面が縦方向の強いナデ、口縁部内面がハケ、外面はナデである。142は口縁部の約1/5が残存する。器壁が厚く、頸部は大きく湾曲し、口縁端部は四角く収める。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面はナデで、口縁端部は面取りを行う。内面は磨耗するため調整は不明である。143は口縁部の約1/5が残存する。肩部が張り、口縁部は短く伸びる。調整は口縁部がヨコナデ、胴部はナデで、口縁端部は面取りを行う。144は口縁部の約1/6が残存する。胴部は上方に立ち上がり、口縁部は外上方に真っすぐ伸び端部を細く仕上げる。調整は胴部内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面はタタキで胴部には縦方向のハケを加える。口縁部は叩き出し成形である。145は口縁部の約1/3が残存する。頸部はくの字状に屈曲する。調整は胴部内面がナデ及びハケ、口縁部内面がヨコナデ後ハケ、外面はタタキ後縦方向のハケである。146は口縁部の約1/8が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は四角く収める。調整は胴部内面がナデ、口縁部内面がヨコナデ、外面はタタキ後ナデで、口縁端部は面取りを行う。丁寧な作りである。口縁部外面には煤が付着する。147は口縁部の約1/10が残存する。器壁が薄く、頸部は緩やかに湾曲する。調整は胴部内面が縦方向のナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面は左上がりのタタキで煤が付着する。148～163は平底を呈する。148は底部の約1/2が残存する。底部外面はアーチ状を呈する。調整はナデで、外面には指頭圧痕が残る。149は底部の約1/3が残存する。胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面が縦方向のケズリ、胴部外面には細かいハケがわずかに残り、底部外面はナデである。150は底部の約1/3が残存する。胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面が縦方向のナデ、胴部外面がタタキ後丁寧なナデ、底部外面がナデである。151は底部の約1/8が残存する。器壁が厚く、胴部は直線的に立ち上がる。器面が著しく磨耗するため調整は不明である。152は底部が完存する。胴部は底部より緩やかに内湾して立ち上がる。調整は内面がハケ、外面はナデとみられるが磨耗するため不明である。153は底部の約2/3が残存する。底部の器壁が非常に厚いものである。器面は著しく磨耗するため調整は不明である。154は底部の約1/3が残存する。胴部は底部より緩やかに立ち上がる。器面が著しく磨耗するため調整は不明である。155は底部の約1/4が残存する。底部は小さく、胴部は外上方に真っすぐ立ち上がる。調整は底部内面がナデ、胴部内面が粗いハケ、外面はナデである。156は底部の約1/3が残存する。胴部は内湾して立ち上がる。器面が著しく磨耗するため調整は不明である。外面には煤が付着する。157は底部の約1/4が残存する。器壁が厚く、底部が小さいものである。調整は内面がナデ、底部外面はタタキである。胴部外面はナデ調整とみられるが磨耗するため不明である。158は底部の約1/2が残存する。胴部は外上方に大きく開く。調整は内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。159は底部の約1/3が残存する。胴部は直線的に伸びる。調整は内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。160は底部の約1/4が残存する。調整は胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。内面の調整は磨耗するため不明である。161は底部の約1/3が残存する。器壁が厚く、胴部は直線的に伸びる。調整は底部内面がハケ、外面がタタキである。外面には黒斑がみられる。162は底部の約1/6が残存する。器壁が厚く、胴部は底部より稜をもたず緩やかに立ち上がる。内面の調整はナデである。外面は磨耗するため調整は不明である。163は底部が完存する。胴部は比較的上方に真っすぐ立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面が細かいハケ、底部外面がナデである。164～168は尖底を呈するものである。164は底部が完存する。底部の器壁が非常に厚いものである。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後



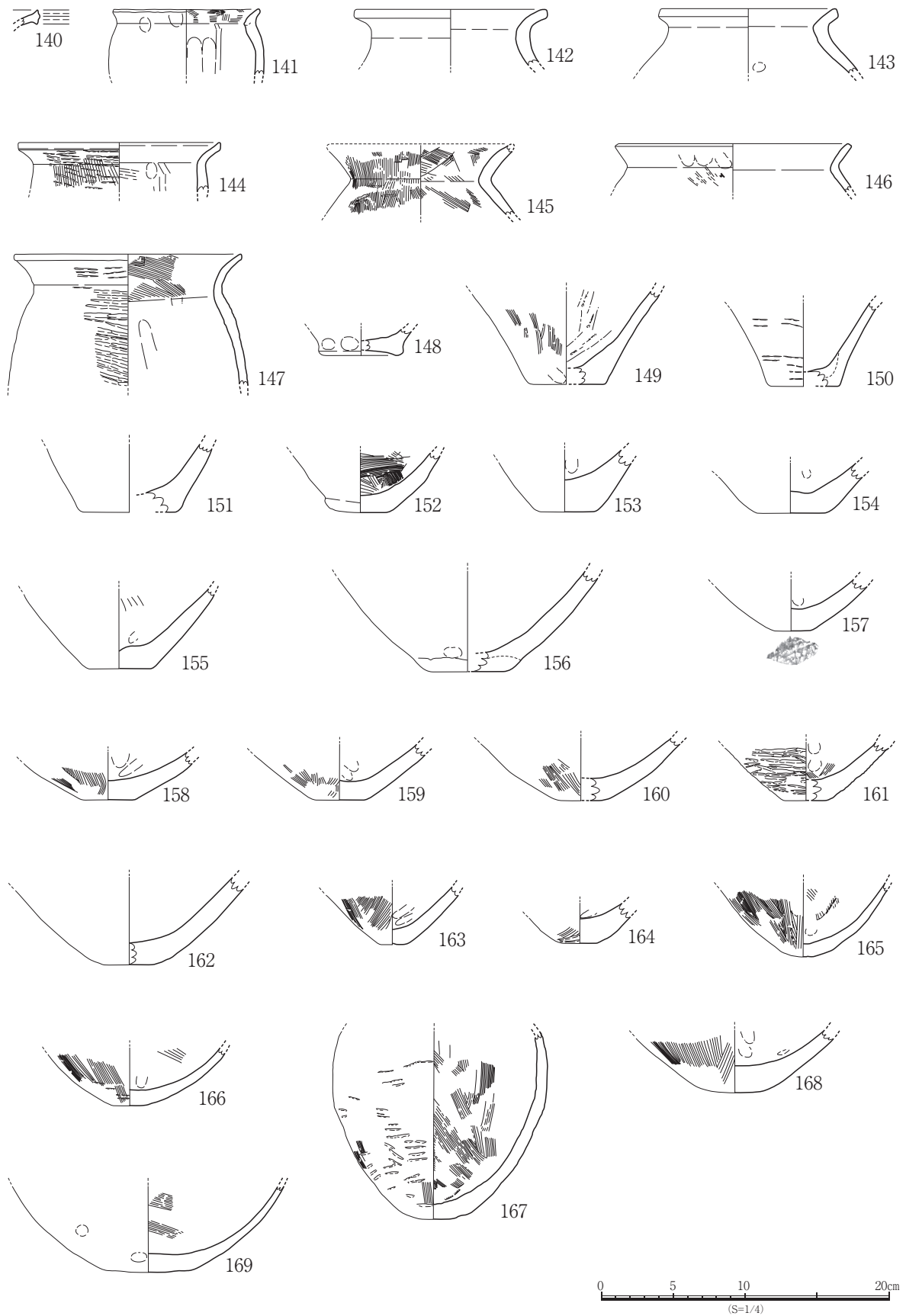


図27 SD3出土遺物実測図2 (弥生土器)

1. I 区

ハケ、底部外面がナデである。165は底部が完存する。器壁が薄く、胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。調整は胴部内面にハケ後底部にナデを加え、外面は縦方向のハケである。内外面に黒斑がみられる。166は底部が完存する。胴部は外上方に内湾して立ち上がる。調整は内面が丁寧なナデで一部ハケを施し、胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面がナデである。167は底部が完存する。胴部中位に最大径を有する。調整は内面がハケ、外面がタタキで胴部下半にはハケを加える。底部外面の調整は磨耗するため不明である。168は約1/4が残存する。底部の器壁が厚く、胴部は直線的に立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。169は底部の約1/3が残存する。器壁が薄く、胴部下半は大きく膨らむ。調整は内面がハケ及びナデ、外面は丁寧なナデである。

170は甑である。底部の約1/2が残存する。丸底を呈し、底部中央には径5mmの円孔を1孔穿つ。調整は内面がナデで一部ハケとケズリが残る。外面は磨耗するため調整は不明である。

171・172は鉢である。171は口縁部の約1/10が残存する。口縁部はやや内湾し、端部を四角く収める。調整は口縁部にヨコナデを行った後体部内面に縦方向のナデ、口縁端部は面取りを行う。外面の調整は磨耗するため不明である。172は約1/4が残存する。器壁が厚く、丸底を呈するものである。調整は体部内面が横方向のハケ後縦方向のナデ、口縁部がヨコナデで端部は面取りを行う。底部外面はナデ調整で、胴部外面の調整は磨耗するため不明である。

173～177は高杯である。173は口縁部の一部が残存する。口縁端部は肥厚し内傾する面を有する。磨耗するため調整は不明である。174は杯底部が残存する。小型で、杯部は椀状を呈するものとみられる。磨耗するため調整は不明である。175は脚部の約1/6が残存する。裾部はハの字状に開く。調整は外面が縦方向のミガキ、内面にはわずかにハケが残るが磨耗するため不明瞭である。176は杯部の一部が残存する。杯部は稜をもって口縁部に至る。器面は著しく磨耗するため調整は不明である。177は裾部の一部が残存する。端部は肥厚し直立する面をもつ。調整は裾端部がヨコナデ、内面が横方向のケズリである。讃岐からの搬入品である。

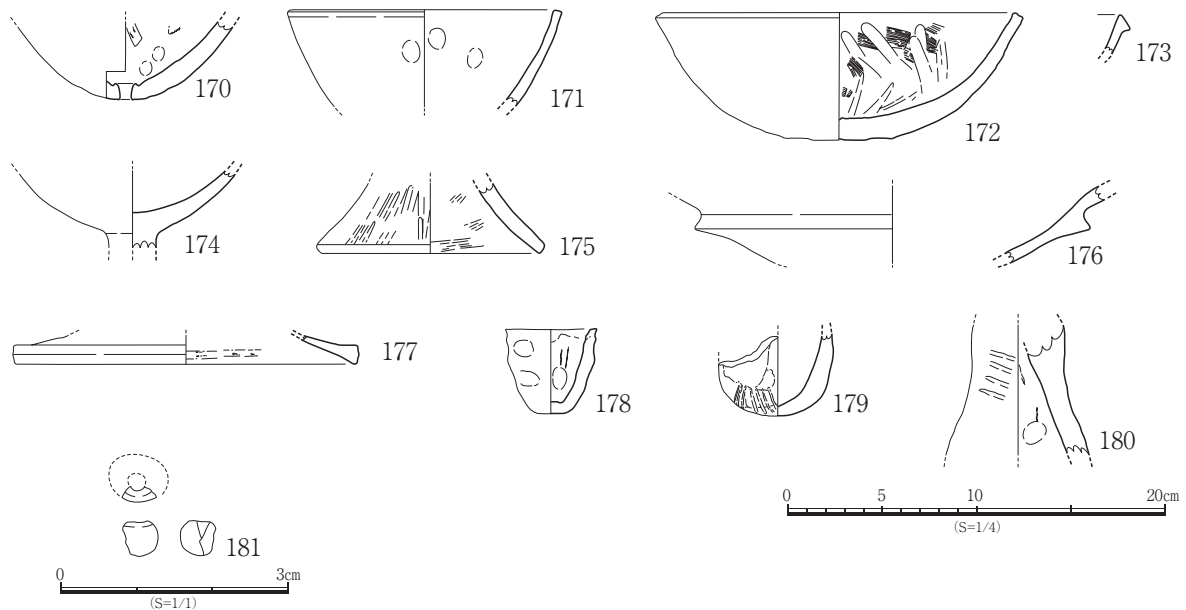


図28 SD3出土遺物実測図3 (弥生土器・土製品・ガラス製品)

178・179は手捏ね土器である。178は約1/4が残存する。深い鉢形を呈し、底部は平底である。調整はナデで指頭圧痕が顕著に残り、内面にはしぼり目がみられる。179は底部が完存し、丸底を呈する。調整は内面と体部外面がナデ、底部外面はタタキである。

土製品(図28-180)

180は支脚である。脚部の約1/2が残存する。中空でハの字状に開く。調整は外面の一部にタタキを行った後ナデで、内面にはしぼり目が残る。著しく凹凸があり粗雑な作りである。被熱の痕跡がみられる。

ガラス製品(図28-181)

181はガラス玉で、一部が残存する。明青色を呈し、全長4.5mm、全幅4.0mm、全厚1.9mm、重量0.1gを測る。

SD4(図29)

I区の中央部で検出した東西溝跡(N-63°-W)であり、第II層の下面で検出した。西端はSK2に切られ、東端は調査区外に続く。検出長7.68m、検出幅1.06m、深さは26cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は西(51.983m)から東(51.814m)へ緩やかに傾斜する。埋土は上層が黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト、下層が黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片3点、石製品2点がみられ、石製品2点(182・183)が図示できた。

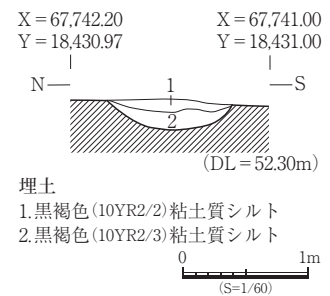


図29 SD4

出土遺物

石製品(図32-182・183)

182は打製石鏃で、基端の一部を欠損する。凹基式で、全長2.1cm、全幅1.3cm、全厚0.4cm、重量0.6gを測る。石材は姫島産黒曜石である。183は叩石で、一部を欠損する。平面形は不整楕円形を呈する。一面に敲打痕が残る。石材は砂岩の河原石である。

SD5(図30)

I区の中央部で検出した東西溝跡(N-62°-W)であり、第II層の下面で検出した。SD6とSD7に切られ、両端は調査区外へ続く。検出長5.73m、検出幅0.58m、深さは23cmを測り、断面形は皿状を呈す。基底面は東(51.912m)から西(51.898m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトで細粒砂を少量含む。出土遺物には弥生土器片1点がみられたが図示できなかった。

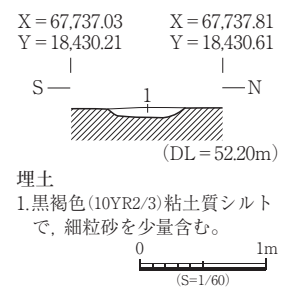


図30 SD5

SD6(図31)

I区の中央部南西寄りで検出したL字状を呈する溝跡であり、SD1・5を切る。東西方向(N-74°-W)から途中南北方向(N-12°-E)へ向きを変えており、両端は調査区外に続く。検出長15.98m、検出幅0.98m、深さは11cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(52.016m)と北(51.949m)からコーナー部(51.917m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片355点、須恵器1点、青磁1点がみられ、弥生土器2点(184・185)、須恵器(186)、青磁(187)が図示できた。

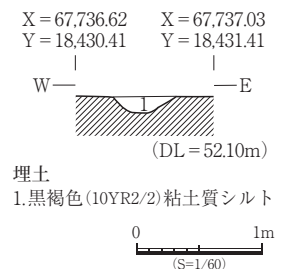


図31 SD6

1. I区

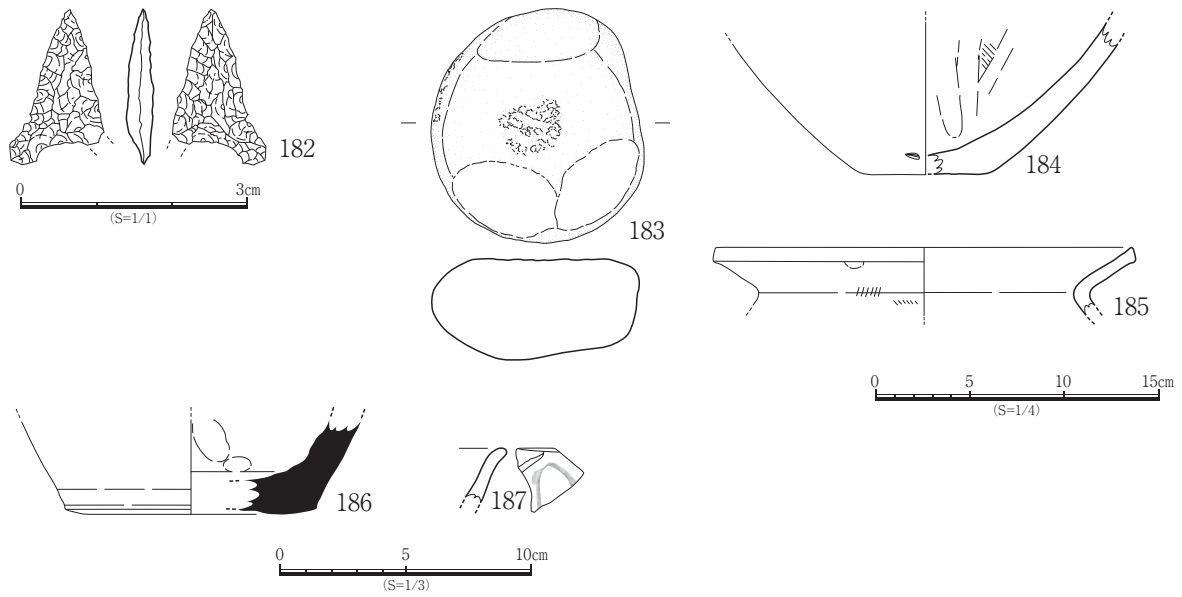


図32 SD4・6出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・青磁・石製品)

出土遺物

弥生土器(図32-184・185)

184は壺で、底部の約1/4が残存する。平底を呈し、胴部は緩やかに内湾する。内面の調整はハケ後縦方向のナデで、外面は磨耗するため調整は不明である。外面には靱殻痕が残る。185は甕で、口縁部の約1/10が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は四角く収める。調整は胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデで外面にはハケがわずかに残る。

須恵器(図32-186)

186は壺または甕の底部で、約1/5が残存する。器壁が厚く、平底を呈する。調整は胴部が回転ナデで内面にはナデを加える。底部外面はナデ調整である。

青磁(図32-187)

187は龍泉窯系の碗で、口縁部の一部が残存する。口縁部はわずかに外反する。濃緑色の釉を約1mmの厚さに施し、外面には鎬蓮弁文がみられる。

SD7(図33)

I区の西部で検出した南北溝跡(N-18°-E)であり、SK2に切られ、両端は調査区外に続く。検出長12.78m、検出幅42cm、深さは18cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は北(51.962m)から南(51.890m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片47点、須恵器片2点、瓦質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

ivピット

P1

I区の北西部に位置し、SD7を切る。平面形は楕円形を呈する。長径37cm、短径30cm、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には図示した弥生土器(188)がみられた。

出土遺物

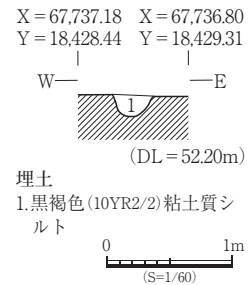


図33 SD7

## 弥生土器(図34-188)

188は鉢で口縁の約1/6が残存する。口縁部はやや内湾し端部は四角く収める。調整は口縁部にヨコナデを施した後内面にハケ, 外面にタタキ後ナデまたはハケを行う。口縁端部は面取りを行う。

## P2

I区の南西部に位置する。平面形は円形を呈すると見られるピットで, 西側は調査区外へ続く。径27cm, 深さは15cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には図示した鉄製品(189)がみられた。

## 出土遺物

## 鉄製品(図34-189)

189は釘で, 一部を欠損する。上端は丁字形を呈し, 下端は細く仕上げ, 断面は方形を呈する。全面に錆化がみられる。

## P3

I区の中央部に位置し, 平面形は隅丸方形を呈する。一辺0.8m, 深さは18cmを測る。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片4点がみられ, 甕(190)が図示できた。

## 出土遺物

## 弥生土器(図34-190)

190は甕で, 底部の約1/4が残存する。器壁が厚く, 平底を呈する。調整は内面がナデ, 胴部外面がハケ, 底部外面がナデである。

## P4

I区の南部に位置し, 平面形は円形を呈する。径35cm, 深さは11cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片93点, 石製品1点がみられ, 弥生土器4点(191~194)と石製品(195)が図示できた。

## 出土遺物

## 弥生土器(図34-191~194)

191~193は甕である。191は口縁部の約1/6が残存する。頸部は緩やかに屈曲する。胴部内面は縦方向のハケ後縦方向のナデ, 口縁部内面が板ナデ, 外面はタタキ後ナデ及びハケを施す。口縁端部はナデ後ヨコナデ調整とみられる。口縁部は叩き出し成形である。192は底部が完存する。底部は器壁が厚く, 平底を呈する。調整は外面にハケがわずかに残るが, その他は磨耗するため不明瞭である。193は底部の約1/4が残存する。底部は器壁が厚く, 平底を呈する。調整は内面にハケがわずかに残り, 胴部外面は左上がりのタタキ, 底部外面はタタキ後ナデである。194は高杯で, 脚部の約1/8が残存する。裾部はハの字状に開き, 径1cmの円孔が1箇所のみ残存する。調整は外面に縦方向のハケがわずかに残り, 内面は横方向のナデである。

## 石製品(図34-195)

195は砥石で, 一部が残存するものとみられる。残存部で一面に擦痕が残り, 使用面は平滑になる。石材は砂岩の割石である。

## P5

I区の中央部南よりに位置し, 平面形は楕円形を呈する。長径35cm, 短径30cm, 深さは28cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片5点がみられ, 甕(196)が図示

1. I区

できた。

出土遺物

弥生土器(図34-196)

196は甕で、口縁部の一部が残存する。口縁部は外反し端部を四角く収める。頸部外面には縦方向のハケが残るが、その他は著しく磨耗するため調整は不明である。口縁端部は面取りを行う。

P6

I区の南東部に位置し、平面形は円形を呈する。径45cm、深さは11cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片27点がみられ、2点(197・198)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図34-197・198)

197は壺で、頸部の約1/8が残存する。口縁部は上方に立ち上がる。調整は内面が横方向のハケ及びナデ、外面はタタキ後縦方向のハケである。198は鉢で、底部の約1/3が残存する。小さな平底を呈する。調整は内面がナデ、体部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。

P7

I区の東部に位置し、平面形は円形を呈する。径26cm、深さは13cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺物には図示した土師質土器の杯(199)がみられた。

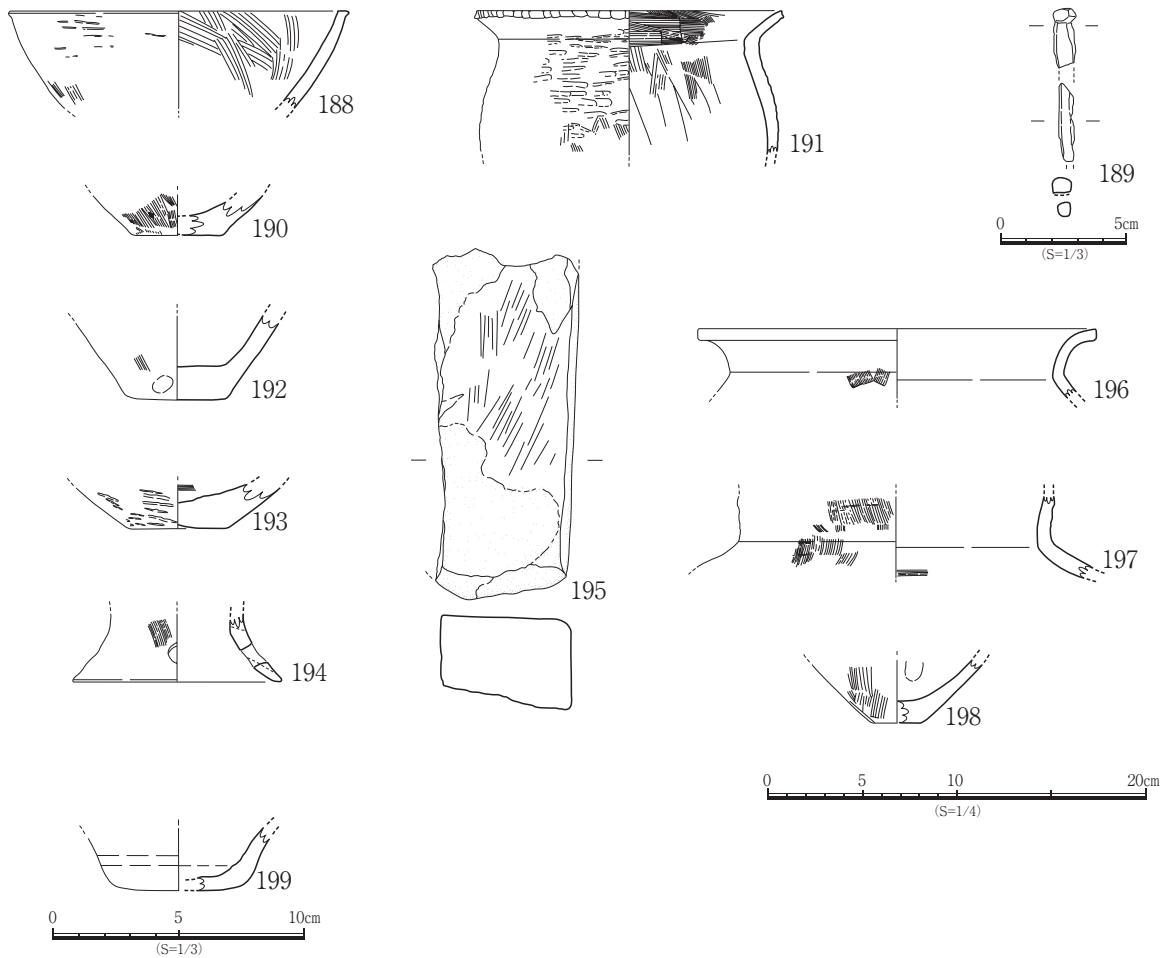


図34 P1～7出土遺物実測図(弥生土器・土師質土器・石製品・鉄製品)

出土遺物

土師質土器(図34-199)

199は杯で、底部の約1/3が残存する。平底を呈する。調整は回転ナデとみられるが著しく磨耗するため不明である。

2. II区

(1) 調査区の概要

本調査区はI区の南に位置し、I区と同じひびのき遺跡に所在する。今回の調査で最も地形が高い地点に位置する。遺物包含層及び遺構は全面で確認され、調査面積は90㎡である。遺構検出は遺物包含層である第Ⅲ層の下面で行い、弥生時代後期及び中世の遺構が検出された。遺物包含層は攪乱を受けており、出土遺物は非常に少量であった。

(2) 基本層序

全面に厚さ約20cmの客土の堆積が認められ、攪乱を受けていた。調査区西部では以下の堆積が認められた。(図35)

第Ⅰ層 暗褐色細粒砂質シルト層

第Ⅱ層 黒色細粒砂質シルト層

第Ⅲ層 暗褐色粘土質シルト層

第Ⅳ層 黒褐色粘土質シルト層

第Ⅰ層は一部で認められた層で、中粒砂を少量含んでいた。厚さ約15cmを測る。

第Ⅱ層も一部で認められた層で、削平及び攪乱を受けているとみられる。床土で、厚さ約10cmを測る。

第Ⅲ層は遺物包含層ではほぼ全面で認められた。厚さ10～15cmを測り、南から北に緩やかに傾斜する。

第Ⅳ層は自然堆積層で、全面で認められた。

(3) 堆積層出土遺物

第Ⅲ層出土遺物

弥生土器(図39-200)

200は甕で、約3/4が残存する。胴部上位に最大径を有する。調整は胴部内面がナデ、口縁部はヨコナデ後内面に横方向のハケ、外面は縦方向のハケである。外面の胴部下半には煤が付着する。

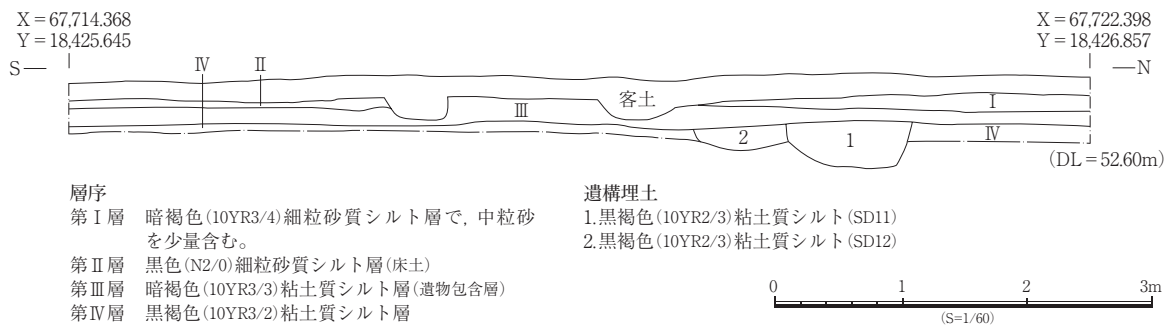


図35 II区西壁セクション図

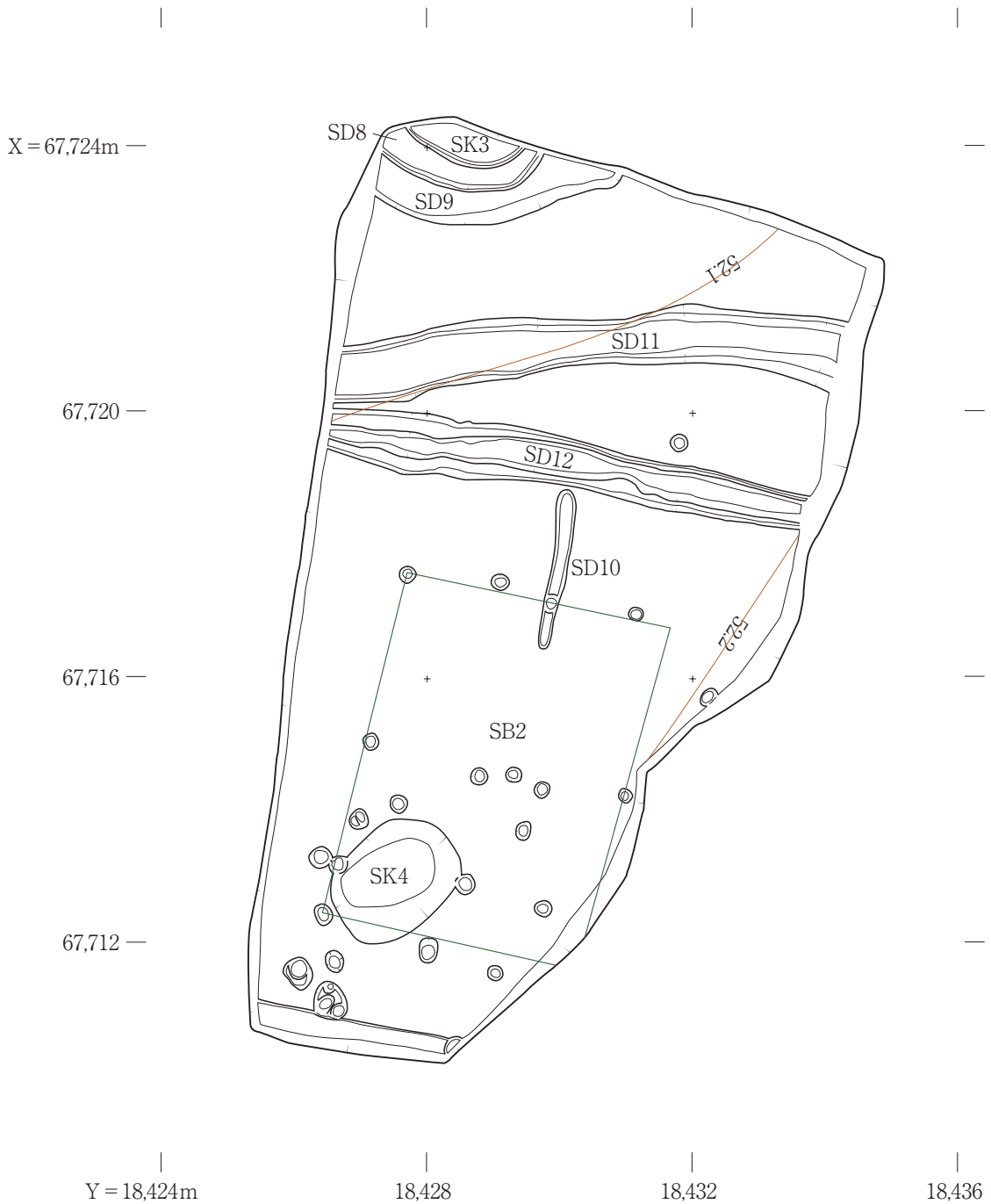


図36 II区遺構平面図(S=1/100)

(4) 検出遺構

i 掘立柱建物跡

SB2(図37)

SD12の南で検出した梁間2間(4.00m), 桁行2間(5.25m)の南北棟建物(N-13°-E)である。柱間寸法は梁間(東西)が1.75~2.25m, 桁行(南北)が2.55~2.80mで, 柱穴は径20~35cmの円形または楕円形で, 埋土は黒褐色シルトまたは黒褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片2点がみられたが図示できるもの

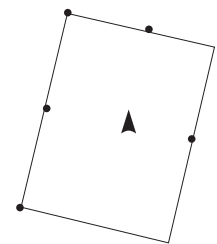


図37 SB2



はなかった。

ii 土坑

SK3(図40)

Ⅱ区の北部に位置し、SD8を切り北側は調査区外に続く。検出長1.65m, 検出幅0.50m, 深さは13cmを測り、断面形は舟底状を呈す。長軸方向はN-27°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

SK4(図38)

Ⅱ区の南部に位置し、平面形は楕円形を呈す。長径2.00m, 短径1.53m, 深さは28cmを測り、断面形は舟底状を呈す。長軸方向はN-61°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器の壺1点, 甕13点, 高杯3点, 細片607点がみられ, 甕8点(201~208), 高杯3点(209~211)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図39-201~211)

201~208は甕である。201は口縁部の約1/3が残存する。器壁が薄く、頸部は緩やかに湾曲し口縁部は短く伸びる。調整は胴部内面が縦方向のナデ, 口縁部内面が横方向のハケ, 外面は縦方向のハケである。外面には煤が付着し, 黒斑がみられる。202は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は外上方に大きく開き, 端部は上方に少し摘む。調整は胴部内面がナデ, 頸部内面が横方向のハケ, 外面は縦方向のハケで, その後口縁部にはヨコナデを施す。203は胴部の約3/4が残存する。胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がナデ, 外面が縦方向のハケで, 外面には煤が付着する。204は底部の約1/4が残存する。平底を呈し, 胴部は真っすぐ伸びる。調整は内面がナデ, 胴部外面が縦方向のハケ, 底部外面がナデである。205は底部の約1/4が残存する。平底を呈し, 胴部はやや内湾して立ち上がる。調整は内面と胴部外面が縦方向のハケ, 底部外面がナデである。206は底部の約1/3が残存する。器壁が厚く, 平底を呈する。調整は内面が縦方向の強いナデ, 外面はナデとみられるが磨耗するため不明瞭である。207は底部の約1/2が残存する。器壁が薄く, 平底を呈し胴部は直線的に伸びる。底部外面はナデ調整であるが, その他は著しく磨耗するため調整は不明である。208は約1/2が残存する。胴部は砲弾形を呈し, 底部は平底である。底部外面にはナデ調整を施す。その他はナデ調整とみられるが著しく磨耗するため調整は不明瞭である。外面には黒斑がみられる。

209~211は高杯である。209は脚部の約1/6が残存する。ハの字状に開き, 裾部は緩やかに屈曲する。調整は外面が縦方向の粗いハケ, 端部がヨコナデ, 裾部内面が横方向のハケ, 脚柱部内面が縦方向の粗雑なナデである。210は脚部の約3/4が残存する。中空で, 裾部はハの字状に大きく開く。調整は外面が裾部に縦方向のハケを施した後ミガキ, 端部はナデ, 内面は横方向のハケがわずかにみられ, 脚柱部にはしぼり目が残る。脚裾部には径9mmの円孔が3箇所みられる。211は脚裾部を欠損する。杯部は深い椀形を呈し, 口縁部は短く外傾する。脚部は太く, 中空でハの字状に開く。調整は杯部内面に幅広のミガキを放射線状に施し, 口縁部はヨコナデ後内面に横方向のハケ, 杯部外面は縦方向の粗いハケである。脚部は外面にヘラナデ調整, 脚部内面は横方向のハケ調整で脚柱部にはしぼ

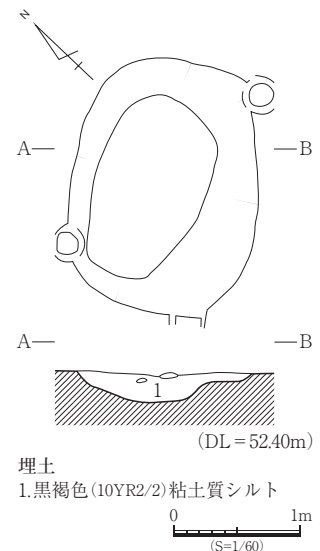


図38 SK4

2. II区

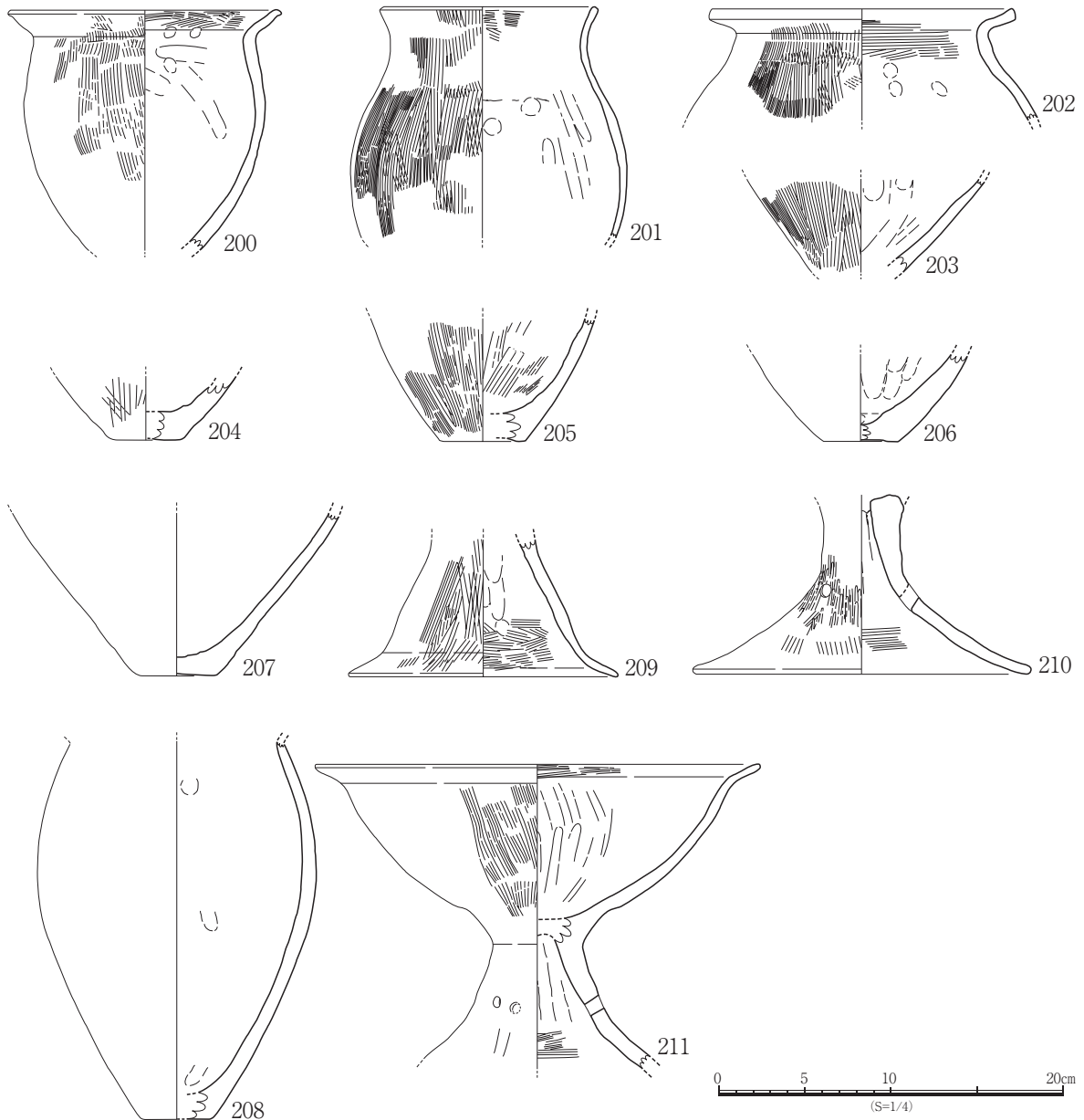


図39 II区出土遺物実測図(弥生土器)

り目が残る。脚柱部には2孔1対の円孔を4箇所配置する。

iii 溝跡

SD8(図40)

II区の北部で検出した東西溝跡(N-85°-W)であり、SK3に切られ、両端は調査区外へ続く。検出長2.43m、検出幅43cm、深さは10cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.979m)から西(51.948m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/2)細粒砂質シルトである。出土遺物は皆無であった。

SD9(図40)

II区の北部で検出した東西溝跡(N-89°-E)であり、SD8に切られる。両端は調査区外へ続く。検出長3.13m、検出幅43cm、深さは10cmを測り、断面形は皿状を呈す。基底面は51.998m前後でほぼ平

らである。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

**SD10**

Ⅱ区の中央部で検出した南北溝跡(N-8°-E)である。検出長2.17m, 検出幅25cm, 深さは10cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。基底面は南(52.162m)から北(52.081m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

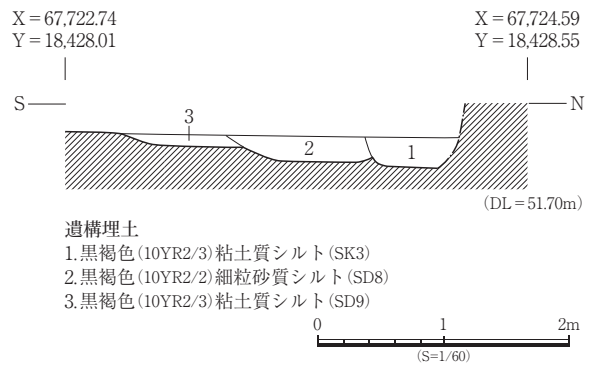


図40 SK3・SD8・9

**SD11(図41)**

Ⅱ区の北部で検出した東西溝跡(N-86°-E)であり, 両端は調査区外へ続く。検出長7.52m, 検出幅0.95m, 深さは20cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.921m)から西(51.859m)へ傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片6点, 須恵器片3点, 土師質土器片26点, 瓦質土器片2点, 青磁片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

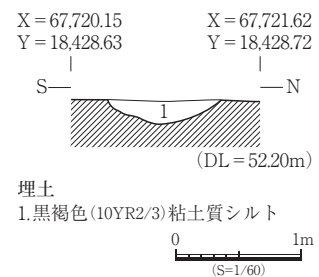


図41 SD11

**SD12(図42)**

Ⅱ区の中央部で検出した東西溝跡(N-80°-W)であり, 両端は調査区外へ続く。検出長7.18m, 検出幅0.94m, 深さは15cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。基底面は東(52.031m)から西(52.008m)でほぼ平らである。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片11点, 土師質土器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

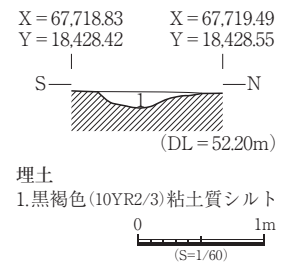


図42 SD12

**3. Ⅲ・Ⅳ区**

(1) 調査区の概要

本調査区はⅡ区の西に位置し, ひびのきサウジ遺跡に所在する。東側をⅢ区, 西側をⅣ区として二回に分けて調査を行った。遺物包含層及び遺構は全面で確認され, 調査面積は798㎡である。遺物包含層は調査区西部のⅣ区では二層みられ, 遺構検出は一部では二度行い, 弥生時代後期及び中世の遺構が検出された。遺構検出面は東から西に傾斜し, 調査区東端と西端では約45cmの比高差が認められた。

(2) 基本層序

調査区西部のⅣ区では厚さ25～60cmの客土下に以下の堆積が認められ, 堆積層はすべて東から西に緩やかに傾斜していた。(図43)

- 第Ⅰ層 黒褐色細粒砂質シルト層(旧耕作土)
- 第Ⅱ層 黒褐色粘土質シルト層(遺物包含層)
- 第Ⅲ層 黒褐色細粒砂質シルト層(遺物包含層)
- 第Ⅳ層 黄褐色細粒砂質シルト層
- 第Ⅴ層 オリーブ褐色細粒砂質シルト層

3. III・IV区

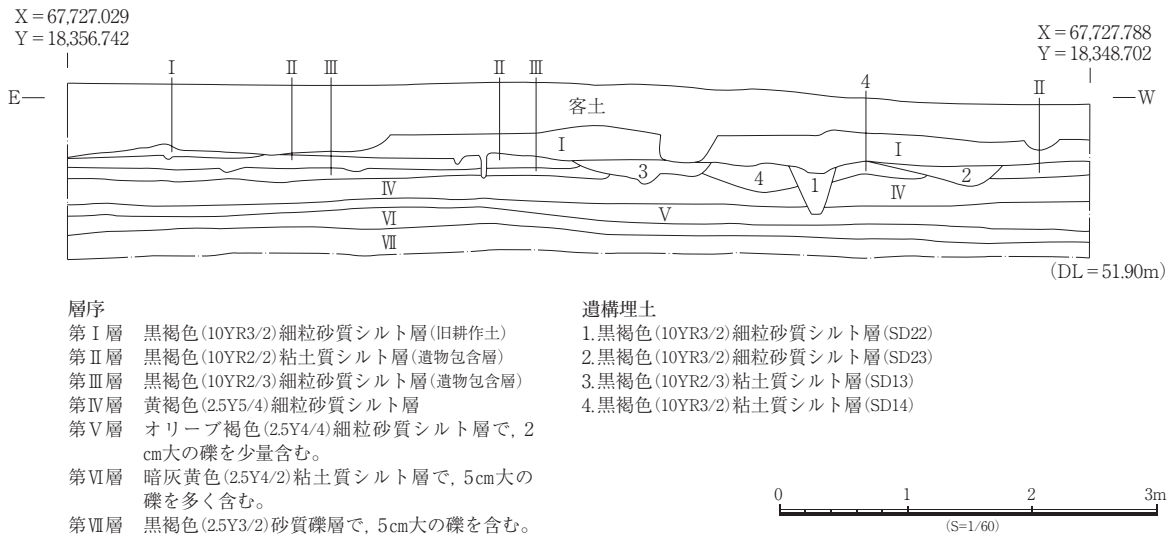


図43 IV区南壁セクション図

第Ⅵ層 暗灰黄色粘土質シルト層

第Ⅶ層 黒褐色砂質礫層

第Ⅰ層は旧耕作土で、一部では攪乱を受けていた。厚さ5～37cmを測る。

第Ⅱ層は古代から近世にかけての遺物包含層で、中央部でのみみられた。厚さ8～15cmを測り、東から西に傾斜する。第Ⅱ層の下面で一回目の遺構検出を行った。

第Ⅲ層は弥生時代の遺物包含層で、Ⅲ区・Ⅳ区の全面で認められた。厚さ5～13cmを測り、東から西に傾斜する。第Ⅲ層の下面で二回目の遺構検出を行った。

第Ⅳ層以下は自然堆積層である。第Ⅳ層から第Ⅶ層は調査区中央部から西部でみられ、東から西に傾斜する。第Ⅳ層は厚さ6～15cmを測る。第Ⅴ層は2cm大の礫を少し含み、厚さ6～25cmを測る。第Ⅵ層は5cm大の礫を多く含んでいた。

第Ⅶ層はⅢ区・Ⅳ区の全面で認められ、5cm大の礫を含んでいた。

(3) 堆積層出土遺物

第Ⅱ層出土遺物

須恵器(図44-212～214)

212は蓋で、口縁部の約1/8が残存する。口縁端部は丸く収め、調整は回転ナデである。213は高杯で、脚部の約1/3が残存する。裾部は直線的に開く。調整は回転ナデで内面には一部ナデを加える。外面には凹線が2条巡り、長方形の透かしが2段みられる。214は椀で、底部の約1/2が残存する。平高台を呈し、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。

土師質土器(図44-215～219)

215は椀で、底部の約1/2が残存する。底部には断面台形を呈する扁平な高台を貼付する。器面は著しく磨耗するため調整は不明である。216・217は杯である。216は底部の約1/3が残存する。器壁が薄く体部は直線的に伸びる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。217は小杯で、ほぼ完存する。器壁が厚く、口縁部は内湾する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切

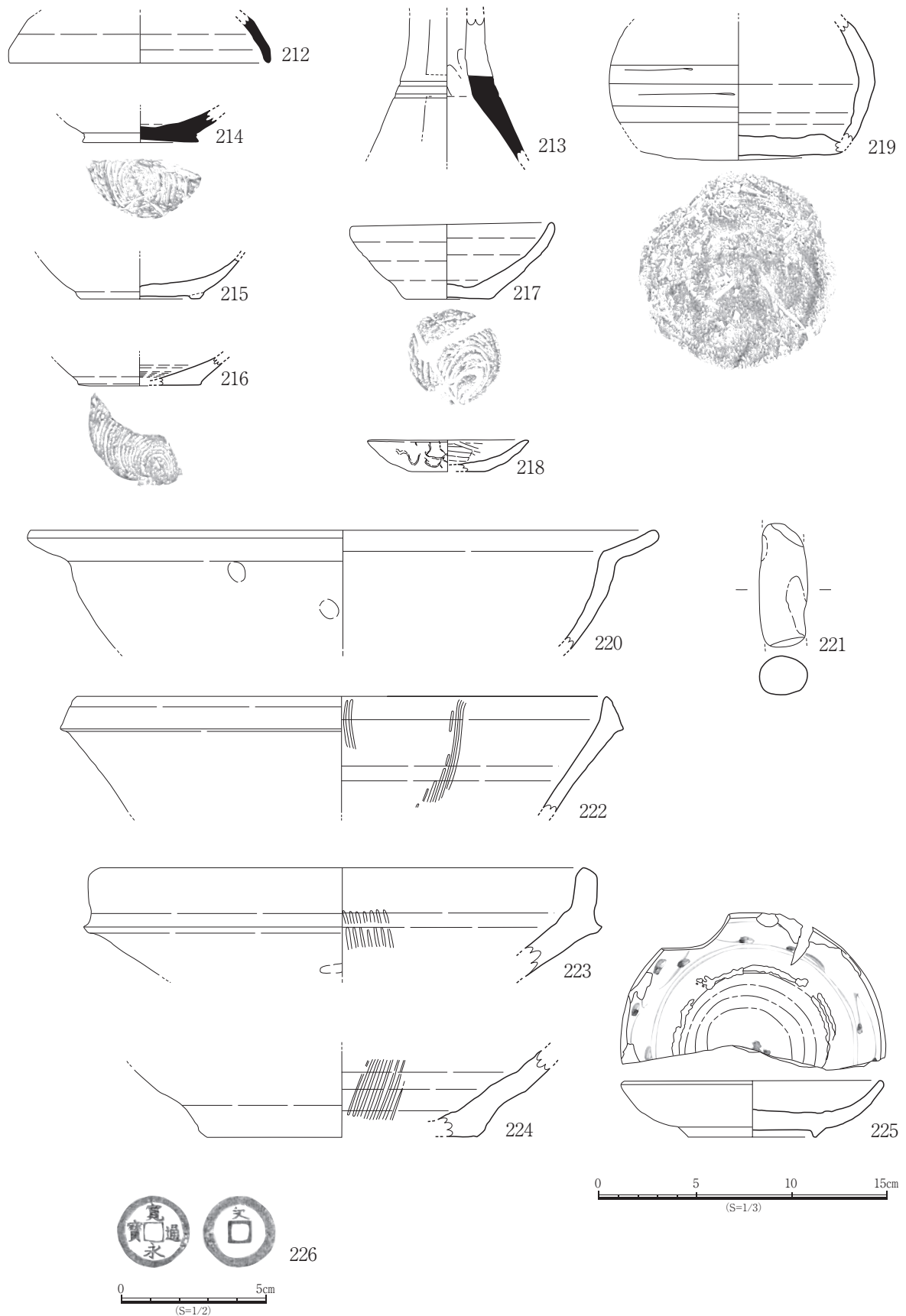


図44 Ⅲ・Ⅳ区第Ⅱ層出土遺物実測図(土師器・須恵器・土師質土器・備前焼・近世磁器・古銭)

りである。218は小皿で、約1/4が残存する。口縁部は底部より緩やかに内湾して立ち上がる。調整は内面が板ナデ、外面はナデで著しく亀裂が入る。219は器形が不明のもので、底部と胴部がほぼ完存する。平底を呈し、胴部は丸く膨らむ。調整は回転ナデで、胴部外面の下半には回転ヘラケズリを施す。底部外面は回転ヘラ切り後ナデである。

#### 土師器(図44-220・221)

220は鍋で、口縁部の約1/5が残存する。口縁部はやや内湾し端部を丸く収める。内面は著しく磨耗するため調整は不明である。外面は全面に煤が付着するため調整は不明である。備前型である。221は足釜の脚部で一部が残存する。断面は楕円形を呈し、真っすぐ伸びる。調整はナデとみられるが磨耗するため不明である。

#### 備前焼(図44-222~224)

222~224は擂鉢である。222は口縁部の約1/8が残存する。口縁端部は上方に拡張する。調整は回転ナデで、内面には残存部で6条の摺目が残る。口縁部には重ね焼き痕が残る。223は口縁部の一部が残存する。器壁が厚く、口縁部は上方に立ち上がる。調整は回転ナデで、内面には残存部で7条の摺目が残る。224は底部の約1/8が残存する。平底を呈し、体部はやや内湾する。調整は回転ナデで、底部外面はナデである。内面には8条単位の摺目が1箇所に残存する。

#### 近世磁器(図44-225)

225は皿で、約1/2が残存する。全面に透明釉を薄く施し、畳付を釉ハギ、見込みに蛇の目釉ハギを行う。内面には草花文と圏線の染め付けがみられ、重ね焼き痕が残る。肥前系(波佐見)である。

#### 古銭(図44-226)

226は寛永通宝で、完存する。外径2.54cm、内径2.02cm、穿径0.57cm、銭厚0.13cm、重量2.8gを測る。背面には「文」字がみられる。

### 第Ⅲ層出土遺物

#### 弥生土器(図45・46-227~261)

227~234は壺である。227~233は広口壺である。227は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は緩やかに外反し、端部を下方に大きく拡張する。調整は内面が横方向のハケ、口縁部がヨコナデ、外面が斜め方向のハケである。口縁部外面にはヘラ描きの斜格子文を施す。228は口縁部の約1/8が残存する。口縁端部は上下に拡張し、擬凹線を4条施す。調整はヨコナデである。229は口縁部の約1/3が残存する。口縁部は外反し端部を四角く収める。口縁部外面は縦方向のミガキ調整がわずかに残り、頸部外面には斜め方向のハケ調整を施す。内面は磨耗するため調整は不明である。230は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は大きく外反し、端部を若干肥厚させ四角く収める。調整は内面が横方向のハケ、外面が縦方向のハケである。231は口縁端部の一部が残存する。口縁端部は上下に大きく拡張する。ヨコナデ調整の後、口縁端部には半円形の竹管文、外面には凹線の上下に線刻の鋸歯文を2段施す。232は口縁部の一部が残存する。口縁端部は上下に大きく拡張する。ヨコナデ調整の後、口縁部内面に櫛状工具による刺突文、口縁端部に竹管文を2列、口縁部外面には刺突文と線刻の鋸歯文を施す。233は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は外反して立ち上がり、端部は内湾して四角く収める。調整は頸部内面がナデ及びハケ、口縁部内面が横方向のハケ、口縁端部はヨコナデ、外面が縦方向のハケである。外面には櫛状原体による刺突文と波状文がみられる。234は複合口縁壺とみられ、口縁部の約1/3が残存する。口縁部は頸部より外上方に立ち上がった後内傾する。調整は内面が

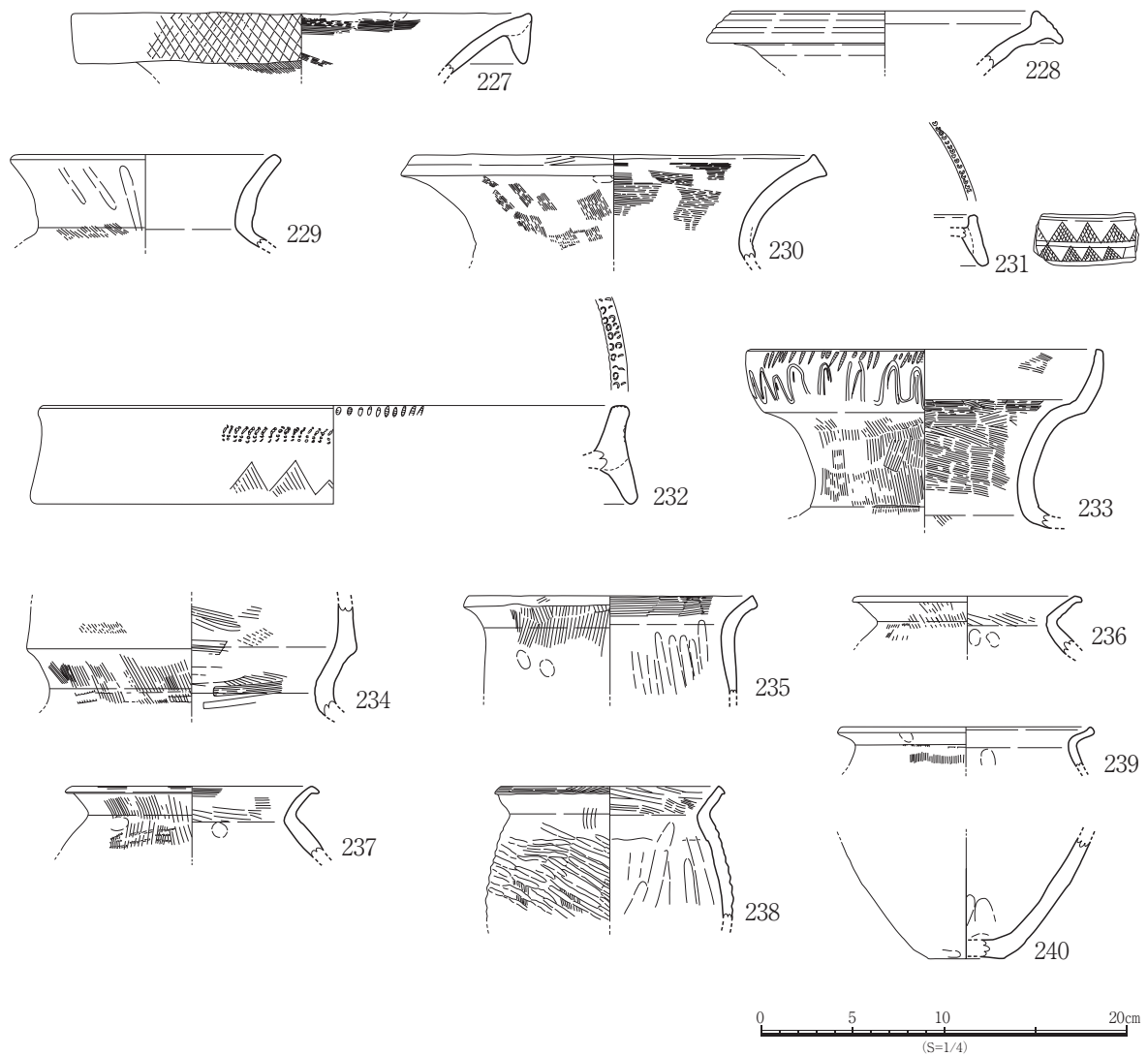


図45 Ⅲ・Ⅳ区第Ⅲ層出土遺物実測図1 (弥生土器)

横方向のハケ後一部ナデ, 外面が縦方向のハケ及びヨコナデである。

235～244は甕である。235は口縁部の約1/4が残存する。頸部は絞まらず緩やかに湾曲する。調整は胴部内面が縦方向のナデ, 口縁部内面が横方向のハケ, 口縁部外面が縦方向のハケ, 胴部外面がナデである。口縁端部は面取りを行う。236は口縁部の約1/3が残存する。小型で, 頸部はくの字状に屈曲する。調整は胴部内面がナデ, 口縁部は内面に斜め方向のハケ, 外面に縦方向のハケを施した後ヨコナデ及びナデを加える。237は口縁部の約1/8が残存する。頸部はくの字状に屈曲し, 口縁端部は短く下方へ伸びる。調整は胴部内面がナデ, 口縁部内面が横方向のハケ, 外面はタタキ後縦方向のハケで, その後口縁部にヨコナデ, 胴部にナデを加える。238は口縁部の約1/3が残存する。器壁が厚く, 口縁端部は四角く収める。調整は胴部内面が縦方向のナデ, 口縁部内面が横方向のハケ, 外面は縦方向のハケ後左上がりの螺旋状のタタキである。外面には煤が付着する。239は口縁部の一部が残存する。器壁が薄く, 口縁部は短く伸びた後上方に摘む。調整は頸部内面がナデ, 口縁部がヨコナデ, 胴部外面が縦方向のハケである。讃岐からの搬入品である。240～243は平底を呈するものである。240は底部の約1/3が残存する。胴部は緩やかに内湾する。調整はナデ

とみられるが磨耗するため不明である。241は底部の約1/4が残存する。胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がナデでわずかにハケが残り、胴部外面は縦方向のハケがわずかに残る。底部外面はナデ調整とみられる。242は底部が完存する。小さな平底を呈し、胴部は内湾する。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦方向の粗いハケで黒斑がみられる。底部外面はタタキである。243は底部の約1/4が残存する。器壁が厚く、胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面がナデである。244は底部の約1/3が残存する。底部の器壁は厚く、丸底を呈する。調整は内面が縦方向のハケ、外面がタタキである。内面には全面に黒斑がみられる。

245は甌で、底部がほぼ完存する。尖底を呈し、中央には径4mmの円孔を1孔穿つ。調整は内面がナデでしぼり目が残り、外面はタタキ後縦方向のハケ、底部はナデとみられる。

246～250は鉢である。246は約1/4が残存する。平底を呈し、口縁部は屈曲して外上方に伸びる。調整は体部内面がナデ、口縁部内面は横方向のハケがわずかに残る。体部外面はタタキ後ナデ調整、底部外面はナデ調整である。247は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は真っすぐ伸び端部を四角く収める。調整は内面が密なハケ、口縁部がヨコナデ、外面がナデで、体部下半はケズリ後ナデである。口縁端部は面取りを行う。248は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は内湾し、端部を丸く収める。調整は内面が斜め方向の細かいハケ、口縁部がヨコナデ、外面には縦方向のハケがわずかに残る。249は口縁部の約1/8が残存する。大型のもので、口縁部は頸部より屈曲して外上方に伸び端部を肥厚させる。調整は体部内面がハケ及びナデ、口縁部はヨコナデ後内面に横方向のハケ、体部外面はナデとみられるが磨耗するため不明瞭である。250は底部の約1/4が残存する。底部は器壁が厚く平底を呈する。調整は内面がナデでわずかにハケが残り、体部外面には縦方向のハケ、底部外面にはナデが残る。

251～257は高杯である。251・252は口縁部が外反するものである。251は口縁部の約1/8が残存するもので、口縁端部を四角く収める。調整は杯部内面が縦方向のハケ、口縁部がヨコナデ、杯部外面は丁寧なナデで、口縁端部は面取りを行う。口縁部内面は磨耗するため調整は不明瞭である。252は口縁部の一部が残存する。口縁部は大きく外反し、端部を細く仕上げる。調整は内面が横方向のハケまたはミガキとみられるが磨耗するため不明瞭である。杯部外面はナデ調整で、口縁部外面は磨耗するため調整は不明である。讃岐からの搬入品である。253～257は脚部が残存し、中空でハの字状に開くものである。253は器壁が厚く、2箇所に円孔の一部が残存する。調整は杯部内面がハケ、脚部外面は一部ハケが残るが磨耗するため不明瞭である。脚部内面にはしぼり目が残る。254は径が若干太いもので、2箇所に円孔の一部が残存する。調整はナデで、脚部内面にはしぼり目が残る。255は脚柱部がほぼ完存する。裾部は器壁が厚く脚柱部より緩やかに屈曲して開く。調整は脚柱部内面にナデを施すが、その他は磨耗するため不明である。256は脚柱部の約1/3が残存する。脚柱部は直立し、裾部は緩やかに開く。調整は杯部内面がミガキ、脚部外面が縦方向のハケ後ミガキがわずかに残り、脚部内面は横方向のケズリで上部にはしぼり目が残る。裾部には径5mmの円孔が1箇所に残る。257は脚部の約1/3が残存する。小型で、脚柱部は中実である。調整は外面に縦方向のミガキがわずかに残り、内面はナデ及びハケがわずかに残る。裾部には円孔が4箇所に配置されていたとみられ、その内2箇所が残存する。

258は器台である。裾端部の一部が残存する。調整は外面が横方向のハケ、端部がヨコナデ、内面



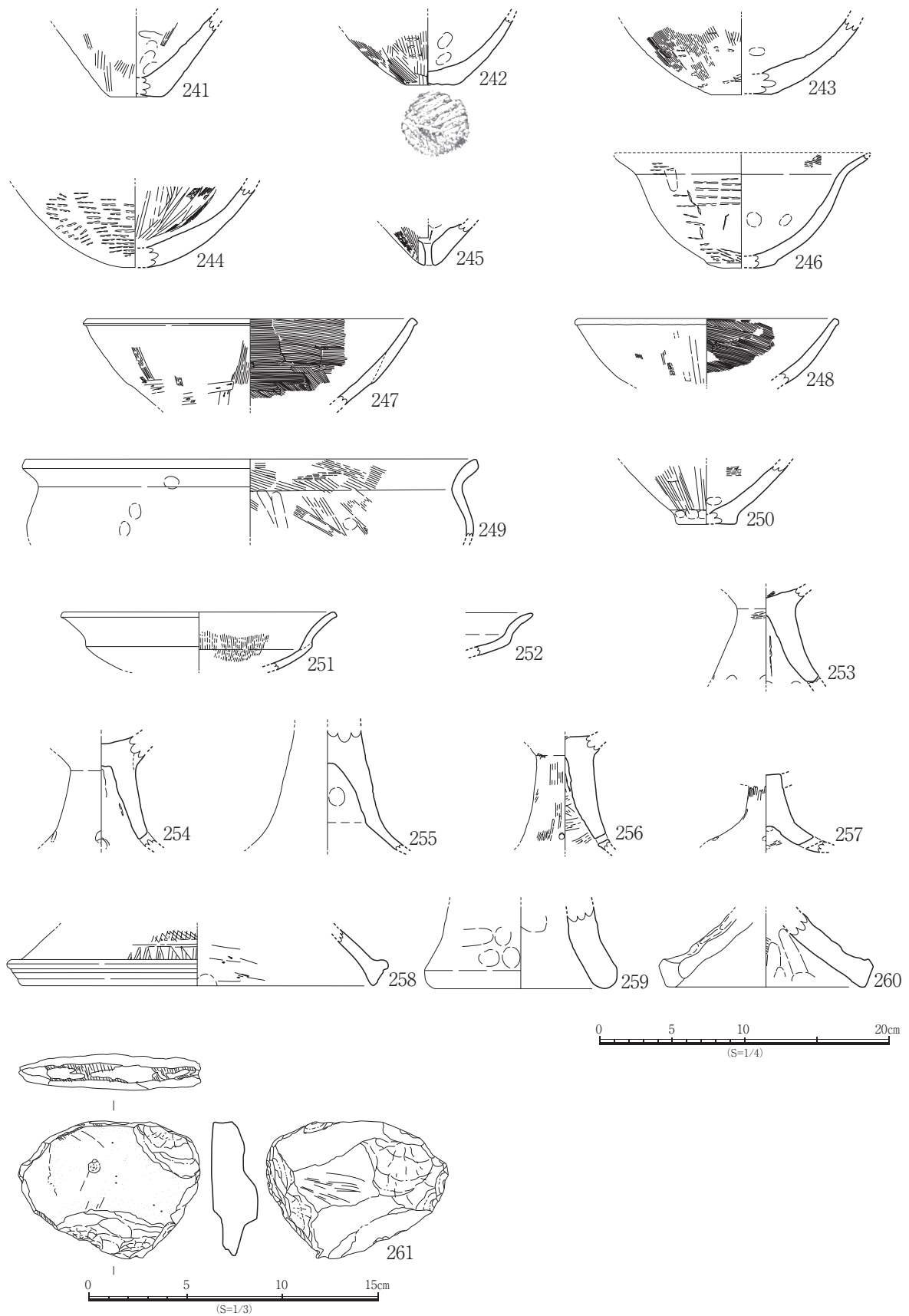


図46 Ⅲ・Ⅳ区第Ⅲ層出土遺物実測図2 (弥生土器・土製品・石製品)

が横方向のケズリで、外面にはヘラ描きの斜格子文と鋸歯文、端部には凹線が1条巡る。

土製品(図46-259・260)

259は支脚で、約1/8が残存する。中空で、器壁が厚くハの字状に開く。調整はナデで、指頭圧痕が残る。被熱の痕跡が残る。260は支脚とみられるもので、一部が残存する。ハの字状に開き、端部を丸く収める。裾部は馬蹄形または半円形を呈していたものとみられ、一部が透かし状に開く。調整はナデで指頭圧痕が顕著に残り、内面には一部ハケが残る。

石製品(図46-261)

261は石包丁の未成品である。表面及び二側面には研磨の痕跡が残る。石材は粘板岩とみられる。

(4) 検出遺構

i 掘立柱建物跡

SB3(図47)

Ⅲ区の東部で検出した梁間1間(2.15m)、桁行2間(3.00m)の身舎の西側に下屋がつく南北棟建物(N-6°-E)である。柱間寸法は梁間(東西)が2.15m、桁行(南北)が1.35~1.65mで、下屋の出が1.20mである。柱穴は径20~40cmの円形または楕円形で、埋土は黒褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片7点、青磁片1点がみられたが図示できるものはなかった。

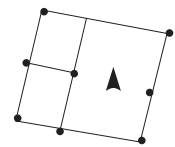


図47 SB3

SB4(図48)

IV区の中央部で検出した梁間1間(3.75m)、桁行3間(4.95m)の南北棟建物(N-4°-W)である。柱間寸法は梁間(東西)が3.75m、桁行(南北)が1.50~1.75mで、柱穴は径35~60cmの円形または楕円形で、柱径は25~35cmとみられる。埋土は黒褐色粘土質シルトまたは黒褐色シルトであった。出土遺物には弥生土器片51点、土師質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

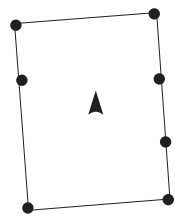


図48 SB4

SB5(図49)

SB4の西で検出した梁間1間(4.75m)、桁行4間(8.08m)の南北棟建物(N-3°-W)である。柱間寸法は梁間(東西)が4.75m、桁行(南北)が1.65~2.30mで、柱穴は径0.55~0.70mの円形または楕円形で、埋土は黒褐色粘土質シルトまたは黒褐色シルトであった。出土遺物には弥生土器片541点、須恵器片3点、土師質土器片1点、土製品1点がみられ、東側柱の南から1間目の柱穴より出土した弥生土器(262)と土製品(263)が図示できた。

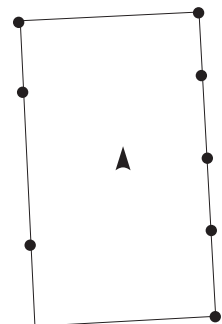
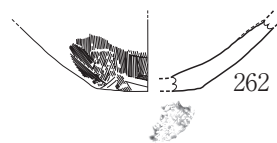


図49 SB5

出土遺物

弥生土器(図50-262)

262は甕で、底部の約1/4が残存する。平底を呈し、胴部は直線的に立ち上がる。調整は内面がナデ、外面が細かいハケである。外面には黒斑がみられる。



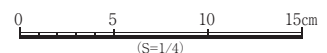
262

土製品(図50-263)

263は支脚とみられ、端部を欠損する。小型で低脚である。調整はナデで、中央には径3.5mmの円孔を穿つ。



263



(S=1/4)

図50 SB5出土遺物実測図(弥生土器・土製品)

ii 土坑

SK5

Ⅲ区の北部に位置し、平面形は楕円形を呈す。長径1.06m, 短径0.98m, 深さは21cmを測り、断面形は逆台形を呈す。長軸方向はN-69°-Wを示す。底面は水平な面をなす。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片5点, 須恵器片1点がみられたが図示できるものはなかった。

SK6(図51)

Ⅲ区の中央部に位置し、SD18に切られる。平面形は楕円形を呈する。長径1.15m, 短径1.00m, 深さは10cmを測り、断面形は皿状を呈す。長軸方向はN-21°-Eを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片22点, 須恵器片1点, 土師質土器片5点, 鉄製品1点がみられ, 土師質土器3点(264~266)と鉄製品(267)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図53-264~266)

264・265は杯である。264は約1/3が残存する。底径が大きく, 口縁部は比較的上方に立ち上がる。調整は回転ナデとみられるが著しく磨耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。265は約1/4が残存する。口縁部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転糸切りである。

266は小皿で, 完存する。口縁部は底部より緩やかに湾曲して立ち上がる。手捏ね成形とみられ, 調整はナデまたはヨコナデで, 指頭圧痕が残る。

鉄製品(図53-267)

267は刀子で, 一部が残存する。平造りで, 刃部はほぼ直線的に伸びる。表面には木質が残る。全長10.1cm, 全幅2.1cm, 全厚0.5cm, 重量22gを測る。

SK7(図52)

Ⅲ区の中央部に位置し、一部攪乱を受けている。平面形は楕円形を呈する。長径1.84m, 短径0.93m, 深さは5cmを測り、断面形は皿状を呈す。長軸方向はN-32°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片13点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK8

Ⅲ区の南西部に位置し、平面形は円形を呈する。径1.10m, 深さは13cmを測り、断面形は船底状を呈す。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片54点, 須恵器片2点がみられ, 須恵器1点(268)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図53-268)

268は杯で, 底部の約1/6が残存する。器壁が薄く, 平底を呈する。体部の調整は回転ナデで, 外面下半には回転ヘラケズリを加

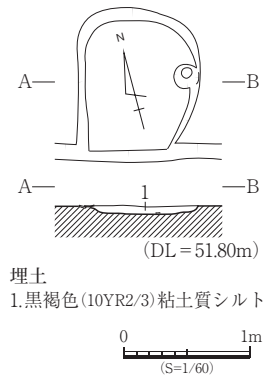


図51 SK6

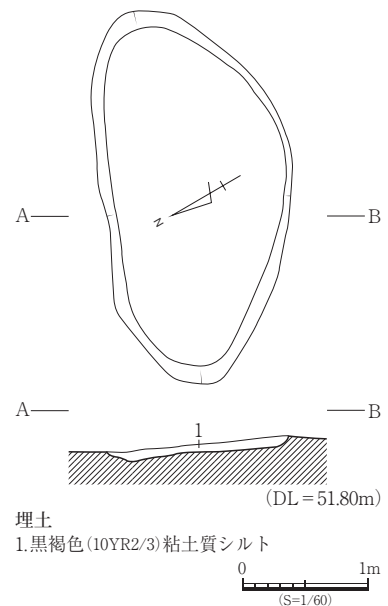


図52 SK7

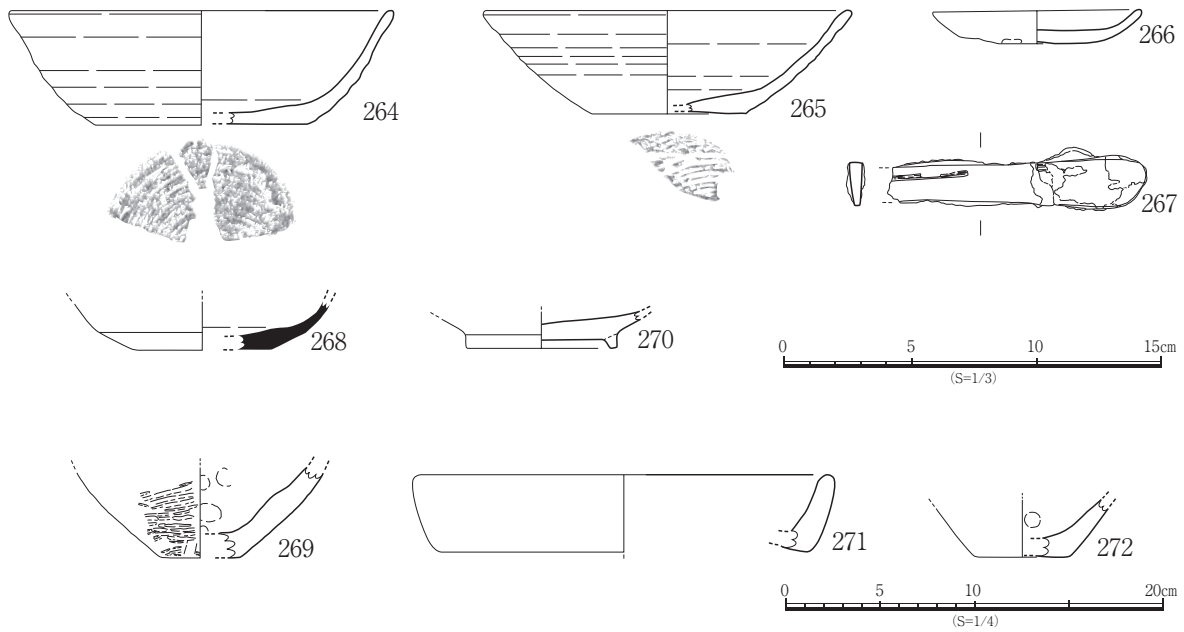


図53 SK6・8～10出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師質土器・鉄製品)

える。底部外面はナデ調整である。

#### SK9

Ⅲ区の南西部に位置し、平面形は円形を呈する。径1.10m、深さは15cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片60点、土師質土器の碗1点がみられ、弥生土器1点(269)、土師質土器1点(270)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 弥生土器(図53-269)

269は甕で、底部の約1/4が残存する。平底を呈し、胴部は直線的に伸びる。調整は内面がナデ、外面がタタキである。

##### 土師質土器(図53-270)

270は碗で、底部の約1/4が残存する。底部には断面半円形を呈する高台を貼付する。調整はナデとみられるが、著しく磨耗するため不明である。

#### SK10

Ⅲ区の南西部に位置し、平面形は楕円形を呈する。長径1.10m、短径1.00m、深さは23cmを測り、断面形は逆台形を呈す。長軸方向はN-23°-Wを示す。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器の壺1点、甕2点、細片60点がみられ、弥生土器2点(271・272)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 弥生土器(図53-271・272)

271は壺で、口縁部の一部が残存する。広口壺で、口縁部は真っすぐ立ち上がり端部を丸く収める。著しく磨耗するため調整は不明である。272は甕で、底部の約1/4が残存する。平底を呈し、胴部は外上方に真っすぐ立ち上がる。著しく磨耗するため調整は不明である。外面には黒斑がみられる。

#### SK11(図54)

Ⅳ区の東部に位置し、平面形は円形を呈す。径1.05m、深さは22cmを測り、断面形は舟底状を呈す。

埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトで黄色ブロックを含む。出土遺物には弥生土器片52点, 須恵器片1点, 土師質土器片10点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK12(図55)

Ⅳ区の東部に位置し, 一部は攪乱を受けている。平面形は円形を呈す。径1.15m, 深さは20cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。埋土は上層が黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト, 下層が黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトで黄色ブロックを含む。出土遺物には弥生土器片30点, 土師質土器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

iii 溝跡

SD13(図56)

Ⅲ・Ⅳ区で検出した溝跡で, SD14に切られる。この溝跡は大きく蛇行し, Ⅲ区の北東部から南西部(N-82°-E)へ向かい, Ⅳ区の中央部付近で南側(N-65°-E)へ緩やかに向きを変える。溝跡の東端はSD15に切られ, 西端は調査区外へ続く。基底面は東(51.710m)から西(51.330m)へ緩やかに傾斜する。検出長57.70m, 検出幅2.50m, 深さは20cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。埋土は黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルトで, 埋土中に多量の土器を含んでいた。出土遺物には弥生土器の壺131点, 甕676点, 甑3点, 鉢111点, 高杯39点, 手捏ね土器2点, ミニチュア土器1点, 細片20743点, 土製品4点, 石製品4点がみられ, 弥生土器126点(273~398), 土製品4点(399~402), 石製品4点(403~406)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図57~63-273~398)

273~301は壺である。273は頸部の一部が残存する。頸部は内傾し, 粘土帯を貼付する。調整は外面が横方向のナデで, 内面は磨耗するため不明である。粘土帯には櫛状原体による斜格子文がみられる。274~276は長頸壺である。274は口縁部の約1/8が残存する。口縁端部は外反し四角く収める。調整はナデとみられるが磨耗するため不明である。275は口縁部の約1/3が残存する。口縁端部は外反し四角く収める。調整は内面がナデまたは斜め方向の粗いハケ, 口縁端部はヨコナデ, 外面

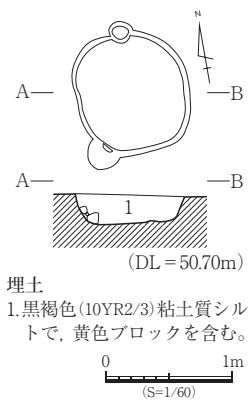


図54 SK11

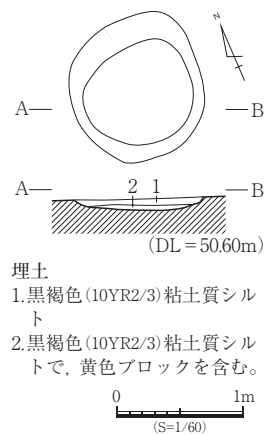


図55 SK12

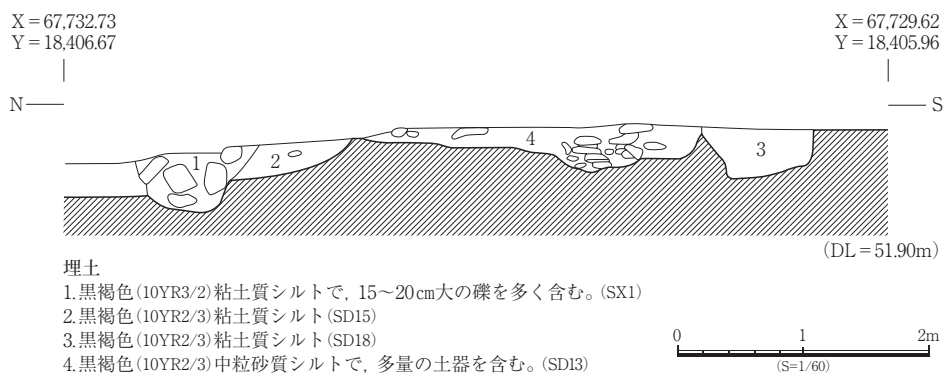


図56 SD13・15・18・SX1

が粗い縦方向のハケである。口縁端部は面取りを行う。276は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は外反し端部を下方に肥厚させる。調整は内面が横方向のハケ、口縁端部がヨコナデ、外面が縦方向のハケである。277～291は広口壺である。277は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は上方に立ち上がった後外反する。調整は内面がナデまたは横方向のハケ、口縁端部がヨコナデ、外面はタタキ後縦方向のハケである。278は口縁部の一部が残存する。口縁部は器壁が厚く、直線的に外上方に伸び、端部を四角く収める。調整はナデで、内面にはハケがわずかに残る。著しく磨耗するため調整は不明瞭である。279は口縁部がほぼ完存する。口縁部は大きく外反し、端部を丸く収める。外面の調整は縦方向のハケで、その他は磨耗するため調整は不明である。280は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は外反し、端部を肥厚させ四角く収める。外面の調整は縦方向のハケ後ミガキまたはヨコナデである。内面は頸部にナデ調整を施すが、その他は磨耗するため調整は不明である。281は口縁部の約1/8が残存する。口縁端部は水平に伸び、肥厚する。調整は内面に横方向のハケがわずかに残り、口縁端部はヨコナデを施す。その他は磨耗するため調整は不明である。282は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は上方に立ち上がった後外反して水平に伸びる。著しく磨耗するため調整は不明である。283は口縁部の約1/3が残存する。口縁部は外反し端部を四角く収める。調整は端部がヨコナデ、外面がナデである。内面は磨耗するため調整は不明である。284は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は頸部より緩やかに湾曲して外上方に真っすぐ伸びる。調整は頸部内面がナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面が縦方向のハケである。285は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は大きく外反し、端部を四角く収める。調整は内面が横方向のナデ、端部がヨコナデ、外面が縦方向のナデである。端部には刻み目がみられる。286は口縁部の一部が残存する。口縁部は外上方に大きく伸び、端部を上下に肥厚させる。調整はヨコナデで、端部にはヘラ描きの鋸歯文の一部がみられる。内面は磨耗するため調整は不明である。287は頸部から胴部の約1/3が残存する。頸部は胴部より緩やかに外反して立ち上がる。調整は胴部内面が板ナデ、頸部がナデまたはハケ、頸部外面は縦方向のハケ、胴部外面はタタキ後ハケで一部に黒斑がみられる。288は口縁部の一部が残存する。口縁部は上方に立ち上がり端部を肥厚させる。ヨコナデ調整で、外面には櫛描の波状文、端部には凹線が2条みられる。著しく磨耗するため調整は不明瞭である。289は口縁部の一部が残存する。口縁部は上方に立ち上がり、端部を細く仕上げる。器面は磨耗するため調整は不明で、外面には櫛描による文様が残る。290は口縁部の一部が残存する。口縁部は上方に立ち上がり、端部は肥厚し水平な面を有する。調整はヨコナデ後外面にはハケを施す。口縁端部及び外面には櫛描の波状文がみられる。291は口縁部の一部が残存する。口縁端部は上下に大きく拡張し、内傾する面を有する。調整はヨコナデで、口縁端部に半円形の竹管文、外面には線刻の鋸歯文と凹線を施す。在地産である。292・293は複合口縁壺である。292は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は外上方に短く伸びた後内傾する。内外面に斜め方向のハケ調整が残るが、磨耗するため不明瞭である。外面には赤色顔料が塗彩される。293は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は大きく外上方に外反した後短く内傾する。調整は内面が横方向のハケ後ミガキ、口縁端部がヨコナデ、外面が斜め方向のハケである。外面には櫛描の波状文風の文様が施される。294は二重口縁壺で、口縁部の約1/8が残存する。口縁部は短く外反する。調整は内面に横方向のハケがわずかに残り、口縁端部はヨコナデ、外面はナデである。内面には赤色顔料が塗彩される。295は広口壺で、口縁部の約1/8が残存する。口縁部は外反し端部を下方に拡張する。調整は口縁端部がヨコナデ、外面がナデである。口縁端部には凹線を4条施した後、円形浮文

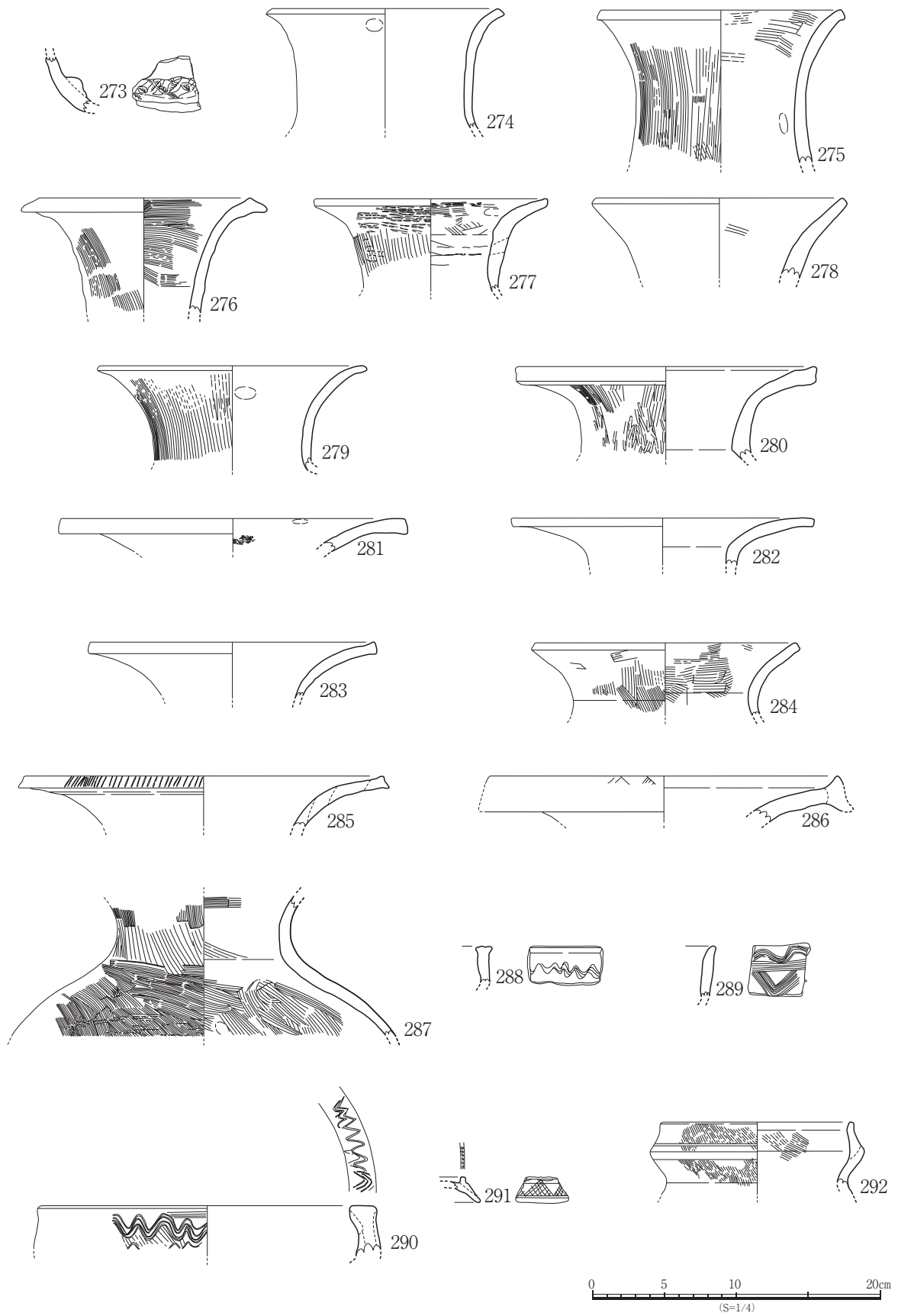


図57 SD13出土遺物実測図1 (弥生土器)

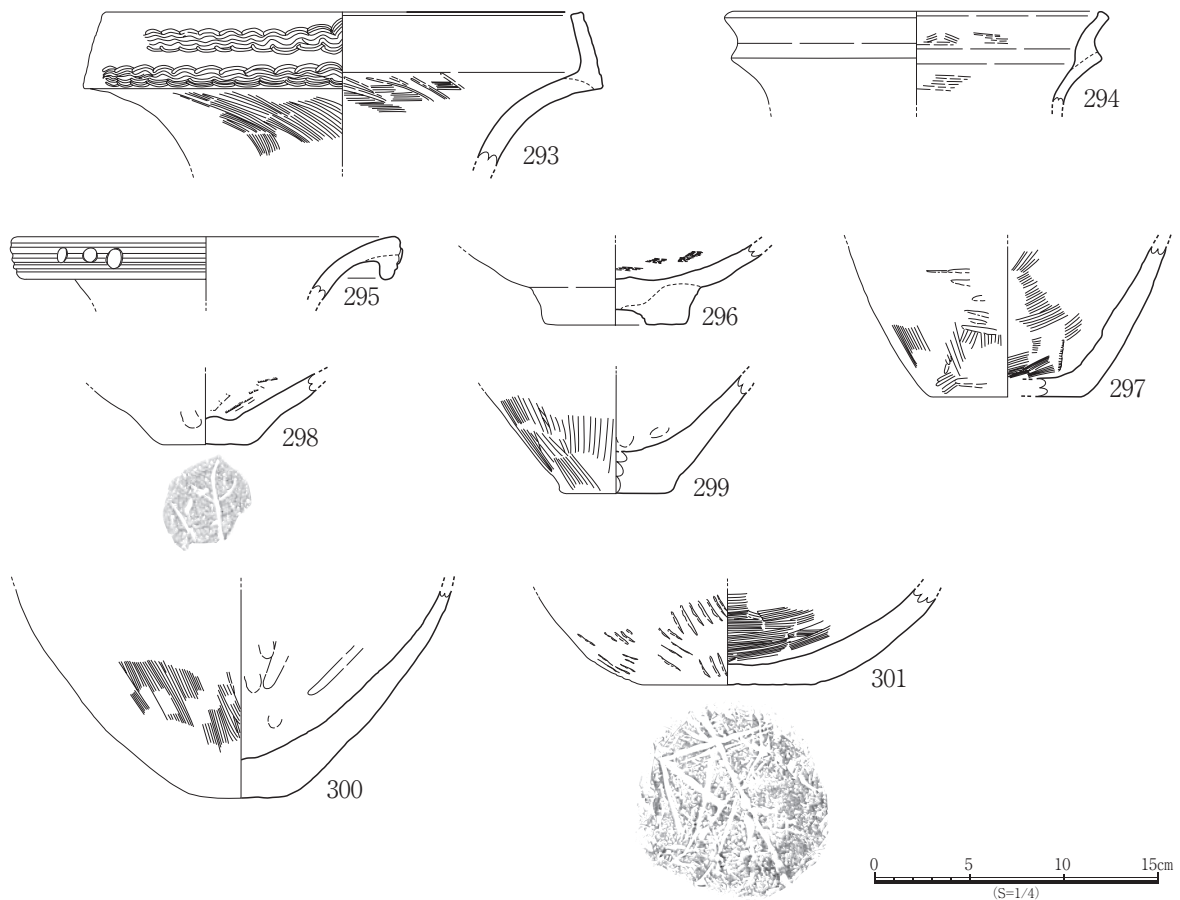


図58 SD13出土遺物実測図2 (弥生土器)

を貼付する。河内からの搬入品とみられる。296～301は底部が残存する。296は底部の約1/4が残存する。底部は平高台状を呈する。内面にはわずかにハケ調整が残るが、その他は摩耗するため調整は不明である。297は底部の約1/5が残存する。平底を呈し、胴部は比較的上方に立ち上がる。調整は内面がハケ後一部ナデ、胴部外面はタタキ後ハケで一部にミガキを施し、底部外面はナデである。298は底部の約2/3が残存する。平底を呈し、胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面に横方向のハケがわずかに残り、底部外面には木葉痕がみられる。外面は摩耗するため調整は不明である。299は底部の約1/2が残存する。器壁が厚く、平底を呈する。外面は縦方向の粗いハケ調整で、内面と底部外面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明である。300は底部の約1/3が残存する。小さな平底を呈し、胴部は底部より緩やかに湾曲して立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面はナデである。胴部外面には黒斑がみられる。301は底部が完存する。平底を呈し、胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がハケ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面には工具の圧痕が残る。

302～354は甕である。302は口縁部の約1/5が残存する。口縁端部は若干肥厚し四角く収める。調整は口縁部がヨコナデ後内面に横方向のハケ、胴部外面は縦方向のハケである。胴部内面は指頭圧痕が顕著に残るが摩耗するため不明である。303は口縁部の約1/5が残存する。胴部は膨らまず上方に立ち上がり、口縁部は大きく外傾する。調整は胴部内面が斜め方向の板ナデ、口縁部内面が横方向のハケ、胴部外面が縦方向のハケである。口縁端部は面取りを行う。304は口縁部の約1/5が残存



する。口縁部は外反し端部は下方へ大きく屈曲させる。全面にハケ調整を行う。305は口縁部の約1/5が残存する。器壁が薄く、胴部上位に最大径を有する。調整は内面が縦または横方向のハケ、外面がナデ後縦方向のハケである。外面は器面の凹凸が著しく、一部に煤が付着する。306は口縁部の約1/8が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は四角く収める。調整は胴部内面が斜め方向の細かいハケ、口縁部内面が横方向の粗いハケ、外面が斜め方向のハケである。口縁端部は面取りを行う。307は口縁部の約1/4が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部はやや細く仕上げる。調整は胴部内面が横方向のナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面が縦方向の粗いハケである。口縁端部は面取りを行う。308は口縁部の約1/5が残存する。頸部は緩やかに湾曲し、口縁部は外反する。調整は胴部内面がナデ後一部ハケ、口縁部はヨコナデ、外面は口縁部にヨコナデ後、縦方向のハケを加える。309は口縁部の一部が残存する。頸部は緩やかに湾曲し、口縁端部は四角く収める。調整は口縁部にヨコナデを行った後、内面に横方向のハケ、外面に縦方向のハケを加える。胴部内面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明瞭である。310は口縁部の約1/10が残存する。大型で、頸部は緩やかに湾曲し、口縁部は短く伸びる。調整は胴部内面がハケ後一部ナデ、外面はハケ後口縁部にヨコナデを施す。口縁部内面は摩耗するため調整は不明である。311は口縁部の約1/6が残存する。器壁が薄く、口縁端部は細く仕上げる。調整は内面が斜め方向の板ナデ、外面は螺旋状のタタキである。口縁部は叩き出し成形で、外面には一部に煤が付着する。312は口縁部の約1/5が残存する。胴部は器壁が非常に厚く、口縁部は大きく外傾する。著しく摩耗するため調整は不明である。313は口縁部の約1/4が残存する。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は胴部内面がナデ後一部ハケ、口縁部内面が斜め方向のハケ、外面はタタキで一部ナデを加える。口縁端部は面取りを行う。314は口縁部の約1/8が残存する。肩部が張るもので、口縁部は薄く仕上げる。調整は胴部内面がナデで工具の圧痕が残り、口縁部内面が横方向のハケ、外面はタタキ後口縁部にヨコナデを行う。口縁部は叩き出し成形で、端部は面取りを行う。315は口縁部の約1/4が残存する。胴部は膨らまず上方に立ち上がり、口縁部は短く内湾する。調整は胴部内面が縦方向のナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面がタタキで口縁部にはヨコナデを加える。316は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は短く、端部は丸く収める。調整は内面が斜め方向の粗いハケ、外面はタタキで口縁部にはヨコナデを加える。317は口縁部の約1/5が残存する。頸部はあまり絞まらず緩やかに湾曲し、口縁部は比較的上方に立ち上がり端部を細く仕上げる。調整は胴部内面が縦方向のハケ後一部ナデ、外面が右上がりの極太のタタキである。口縁部内面は横方向のハケ調整がわずかに残るが摩耗するため不明瞭である。口縁部は叩き出し成形である。318は口縁部の一部が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、端部は四角く収める。調整は胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケである。讃岐からの搬入品である。319～344は平底を呈するものである。319は底部の約1/2が残存する。底径が大きいものである。調整は内面が強いナデで指頭圧痕が残り、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。320は底部の約1/4が残存する。底径が大きく、胴部は比較的上方に立ち上がる。全面にナデ調整を施し、内面には黒斑がみられる。321は底部の約1/4が残存する。底部が小さく、胴部は外上方に真っすぐ伸びる。全面にナデ調整を施す。胴部は縦方向にナデ調整を行う。322は底部の約1/6が残存する。胴部は内湾して比較的上方に立ち上がる。調整は胴部内面が強い縦方向のナデで、その他は摩耗するため不明である。323は底部が完存する。胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面が細かいハケ、外面がナデで黒斑がみられる。324は底部の約1/3が残存する。胴部は底部

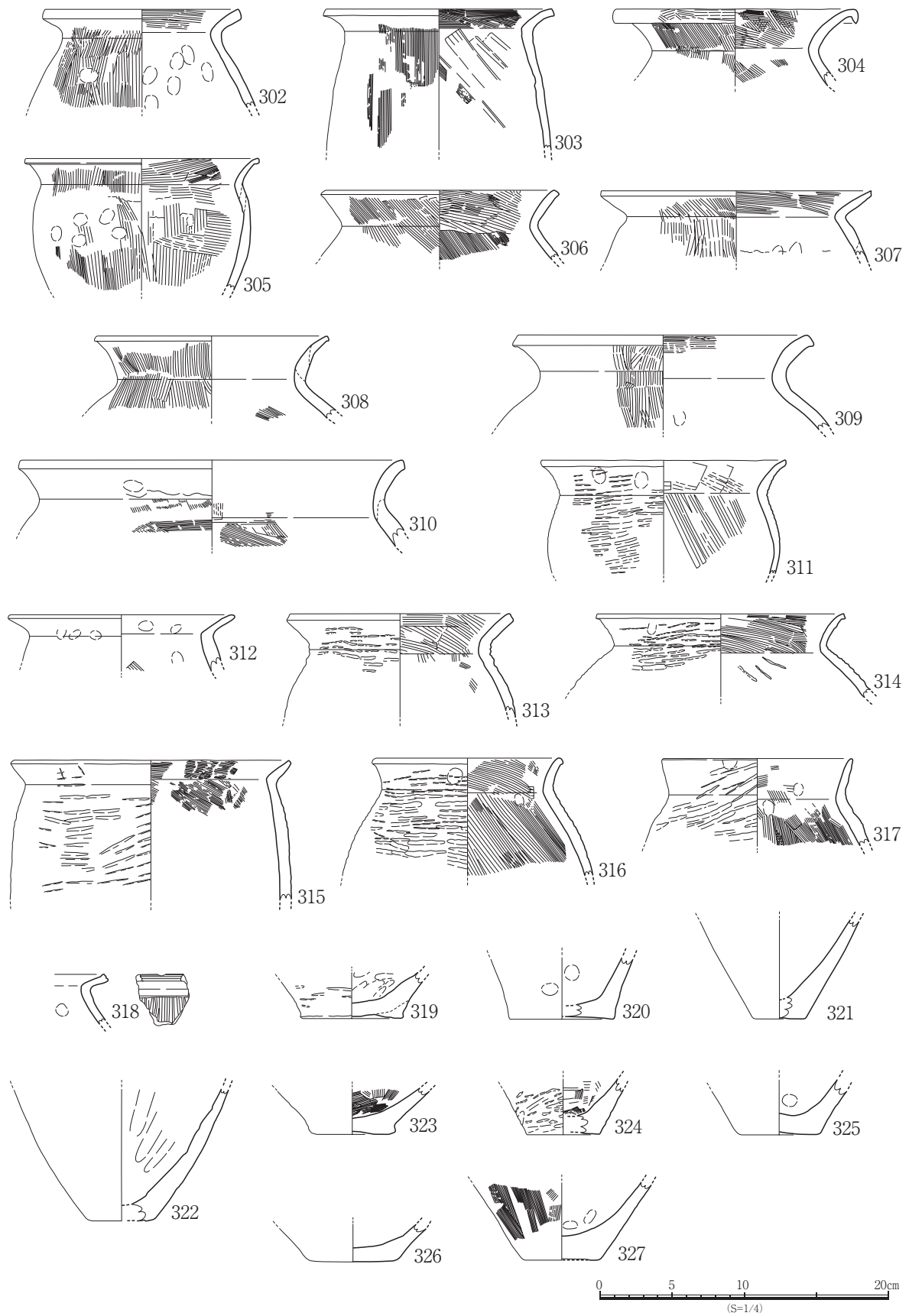


图59 SD13出土遗物实测图3 (弥生土器)

より屈曲して立ち上がる。調整は内面がハケ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。325は底部が完存する。胴部は外上方に真っすぐ立ち上がる。調整はナデである。326は底部の約1/2が残存する。底径がやや大きいものである。全面にナデ調整を施したとみられるが、著しく摩耗するため調整は不明である。327は底部がほぼ完存する。底部は器壁が厚く、胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケである。底部外面は剥離するため調整は不明である。328は底部の約1/6が残存する。底径が大きく、胴部は外上方に真っすぐ立ち上がる。調整は内面がナデまたはハケ、外面はタタキ後胴部上半にハケ、胴部下半にナデを加える。底部外面はナデ調整である。329は底部が完存する。底部は器壁が厚く、胴部はやや内湾して立ち上がる。調整は胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面がナデである。内面は著しく摩耗するため調整は不明である。330は底部の約1/4が残存する。胴部は底部より緩やかに湾曲して立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。331は底部の約1/5が残存する。器壁が厚く、胴部は外上方へ大きく開く。調整は内面がナデ、外面が左上がりのタタキである。332は底部の約1/2が残存する。底部は器壁が厚く、小さな平底を呈する。調整は内面がナデ、外面がタタキである。333は底部が完存する。胴部は底部より緩やかに湾曲して立ち上がる。調整は内面がハケの後底部にナデを加え、胴部外面はタタキ後縦方向のナデ、底部外面がナデである。334は底部の約1/2が残存する。胴部はやや内湾して立ち上がる。調整は内面が強い縦方向のナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。胴部外面には黒斑がみられる。335は底部の約1/8が残存する。器壁が薄く、胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面がナデである。胴部外面には黒斑がみられる。336は底部が完存する。胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面にヘラナデ、外面に縦方向のハケがわずかに残るが摩耗するため不明瞭である。底部外面は著しく摩耗するため調整は不明である。337は底部が完存する。器壁が厚く、胴部は内湾する。調整は内面が密なハケ、外面がナデで亀裂が入る。底部外面は一部粘土を掻き取り凹む。338は底部の約1/4が残存する。器壁が厚く、胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は全面ナデで、内面は特に強く行う。内面は全面に黒斑がみられる。339は底部の約1/4が残存する。胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。胴部外面には黒斑がみられる。340は底部の約1/6が残存する。胴部は内湾して立ち上がる。調整は底部内面がナデ、胴部内面が縦方向のケズリ、胴部外面がタタキ後縦方向のナデ、底部外面がナデである。341は底部の約1/4が残存する。胴部は底部より緩やかに湾曲して外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面が縦方向のナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。342は底部の約2/3が残存する。小さな平底を呈し、胴部は膨らまず上方に立ち上がる。調整は内面が縦方向のナデ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がタタキである。343は底部の約1/2が残存する。底部は器壁が厚く、小さな平底を呈する。調整は内面が縦方向の強いナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。内面には煤が付着する。344は底部が完存する。器壁が厚く、胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面が縦方向のナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。345～350は尖底を呈するものである。345は底部が完存する。底部は凹凸が著しく、粗雑な作りである。調整は内面がハケ後底部にナデ、胴部外面はナデとみられるが摩耗するため不明瞭である。底部外面は強いナデにより凹み、わずかにタタキ調整が残る。346は底部がほぼ完存する。器壁が薄く、胴部は比較的上方に立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面がナデである。347は底部の約1/2が残存する。底部の器壁が厚く、胴部

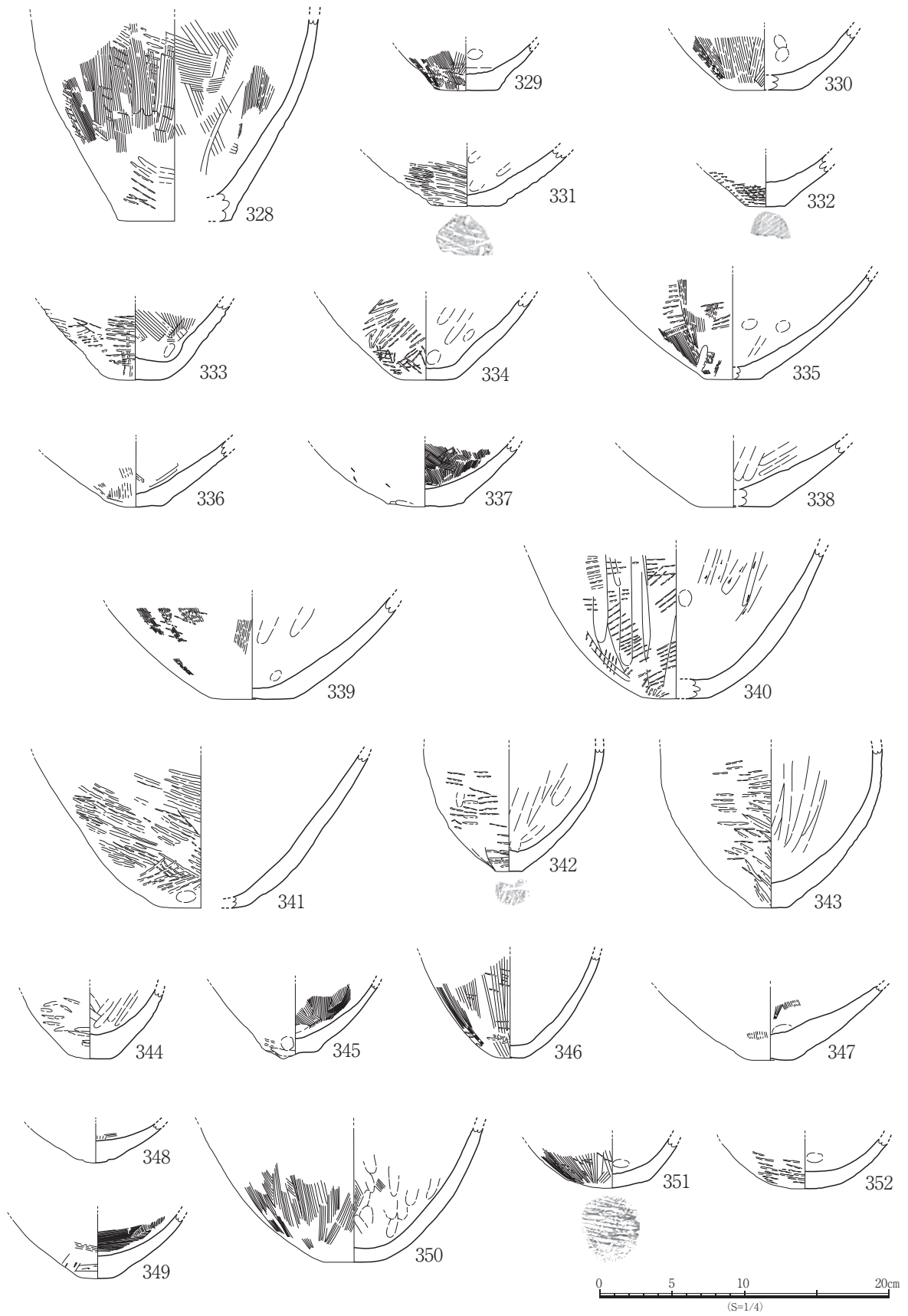


图60 SD13出土遺物実測图4 (弥生土器)

は外上方に大きく開く。調整はナデで一部にハケを施す。348は底部が完存する。胴部は底部より滑らかに立ち上がり、底部との境は不明瞭である。調整は内面にわずかにハケが残るが摩耗するため不明瞭である。349は底部が完存する。底部の器壁が厚く、胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がハケ、胴部外面はナデまたはハケで胴部下半にはケズリを施し、底部外面はナデである。350は底部の約1/2が残存する。胴部は下半部が膨らみ、緩やかに内湾して立ち上がる。調整は内面がハケ後縦方向の強いナデ、胴部外面が縦方向のハケである。底部外面は摩耗するため調整は不明である。351～353は丸底を呈するものである。351は底部が完存する。やや小型で、胴部は内湾して立ち上がる。調整は外面がタタキで胴部には縦方向のハケを加える。内面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明瞭である。352は底部の約1/2が残存する。胴部は底部より内湾して滑らかに立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキである。底部外面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明である。353は底部の約2/3が残存する。底部の器壁が厚いものである。調整は内面がヘラナデ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。354は底部の約1/4が残存する。器壁が薄く、平底を呈する。調整はナデで、外面には黒斑がみられる。讃岐からの搬入品である。

355～357は甑である。355は底部が完存する。平底を呈し、外面より底部中央に径5mmの円孔を1孔穿つ。調整はナデで、外面には黒斑がみられる。356は底部が完存する。小さな平底を呈し、底部は非常に器壁が厚く、内面より中央に径8mmの円孔を1孔穿つ。内面の調整はナデまたはハケである。外面は摩耗するため調整は不明である。357は底部の約1/4が残存する。底部は小さな平底を呈するものとみられ、中央よりやや外側に残存部で1孔がみられる。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキである。

358～380は鉢である。358は口縁部の約1/10が残存する。口縁部は内湾し、端部は短く外反させる。調整は内面が横方向のナデ後縦方向のミガキ、外面にはハケがわずかに残る。外面は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。359は口縁部の約1/8が残存する。器壁が薄く、口縁部は内湾し端部を丸く収める。調整は内面が斜め方向のハケ、外面にはタタキがわずかに残る。360は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は上方に立ち上がり端部を丸く収める。調整は内面が横方向のハケ後縦方向のナデ、外面はナデで亀裂が入る。361は口縁部の約1/10が残存する。口縁部は器壁が厚く、端部は四角く収める。調整は口縁部にヨコナデを施した後ナデを行う。内面には一部に黒斑がみられる。362は底部が完存する。やや大振り、口縁部は内湾し端部を四角く収める。調整は内面が密なハケ、底部外面はケズリで、口縁端部は面取りを行う。体部外面は摩耗するため調整は不明である。363は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は頸部より屈曲して外上方に伸びる。調整は体部がナデ、口縁部はヨコナデである。364は口縁部の一部が残存する。大型で、口縁部は頸部より緩やかに屈曲し、外上方に伸びる。外面にはタタキ調整及びハケ調整がわずかに残る。内面は摩耗するため調整は不明

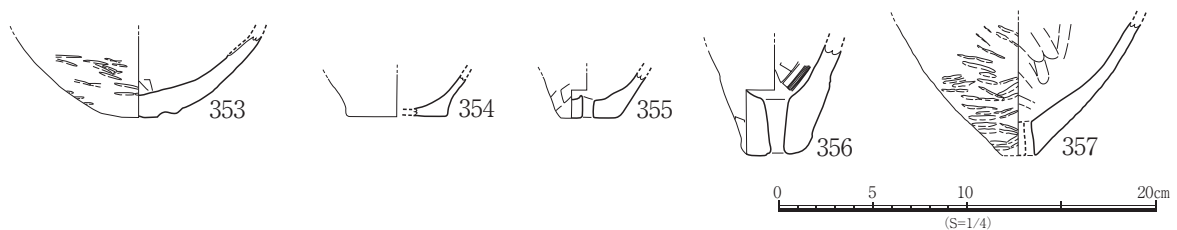


図61 SD13出土遺物実測図5 (弥生土器)

である。365は口縁部の約1/10が残存する。大型で、口縁部は頸部より屈曲し、水平に伸びる。調整は体部内面がハケ後ナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面は体部にハケを施した後ヨコナデである。366～368は底部が高台状を呈するものである。366は底部が完存する。底部は器壁が厚く、端部を若干摘む。調整は内面がナデ、体部外面はタタキ後ナデ、底部外面はナデである。367は底部の約1/4が残存する。底部は器壁が非常に厚く、端部を外へ大きく摘み出す。調整は内面がナデ、体部外面はハケ後ナデ、底部外面はナデである。368はほぼ完存する。底部は小さく、口縁部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がハケ後口縁部にナデ、外面はナデである。369～376は平底を呈するものである。369は底部の約1/4が残存する。体部は内湾して立ち上がる。内面の調整はナデである。外面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明である。370は底部が完存する。底部は小さな平底を呈する。調整は内面が横方向のハケ、外面はナデで体部には亀裂が入る。内外面には黒斑がみられる。371は底部の約1/4が残存する。体部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面にハケがわずかに残る。外面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明である。372は底部が完存する。底部の器壁が厚いものである。調整は内面がハケ後ナデ、外面はナデである。外面には黒斑がみられる。373は底部が完存する。底部は器壁が厚く、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面が斜め方向のハケ、外面はナデとみられるが摩耗するため不明で亀裂が残る。374は底部が完存する。器壁が厚く、体部は底部より屈曲して真っすぐ伸びる。調整は内面がナデ、体部外面がタタキ後ハケ、底部外面がタタキである。375は底部がほぼ完存する。底部は小さな平底を呈する。調整は内面がナデ、体部外面が縦方向のタタキ、底部外面がタタキである。376は約1/4が残存する。底径が大きく、器高が低いものである。調整は内面がハケ後底部にナデを加え、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。377～379は丸底を呈するものである。377は約1/2が残存する。体部は底部より内湾して滑らかに立ち上がる。調整は外面にタタキがわずかに残るが、内面は著しく摩耗するため不明である。378は底部が残存する。やや大振り、器壁が厚いものである。調整は内面がハケ後ナデまたはミガキ、外面がタタキ後ナデである。379はほぼ完存する。小型で、皿状を呈する。調整は内面が斜め方向のハケ後底部にナデを加え、外面が丁寧なナデである。380は約1/3が残存する。小型で、皿状を呈する。調整は内面が縦方向のハケを密に行い、外面はタタキ後丁寧なナデである。

381～395は高杯である。381・382は口縁部の一部が残存する。口縁部は外反し、端部を丸く収める。調整は外面がヨコナデ及びナデで、内面は摩耗するため不明である。383は杯底部から脚柱部が残存する。器壁が厚く、脚部は低くハの字状に開く。調整は杯部内面がミガキ、杯部外面がハケ後横方向のミガキ、脚部外面が縦方向のミガキ、脚部内面がハケ後ナデである。脚部には残存部で1箇所、円孔が残る。384は杯底部から脚柱部が残存する。器壁が厚く、低脚を呈するものとみられる。器面は摩耗するため調整は不明である。杯底部には赤色顔料が残る。385は脚柱部の約1/4が残存する。脚柱部はハの字状に開く。調整は外面に縦方向のハケがわずかに残り、脚部内面にはしほり目がみられる。摩耗するため調整は不明瞭である。386は杯底部から脚柱部が残存する。器壁が厚く、中空である。器面は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。387は脚部の約1/4が残存する。脚部はハの字状に大きく開く。調整は外面にミガキがわずかに残り、内面にはしほり目がみられるが、著しく摩耗するため不明瞭である。裾部には円孔が5箇所配置されていたとみられるが、残存部には2箇所が残る。388は脚部の約1/3が残存する。脚部はハの字状に大きく開く。調整はナデで、裾端部がヨコナデ、内面にはしほり目が残る。389は杯底部から脚柱部が残存する。脚部は細く、器高が高いもの

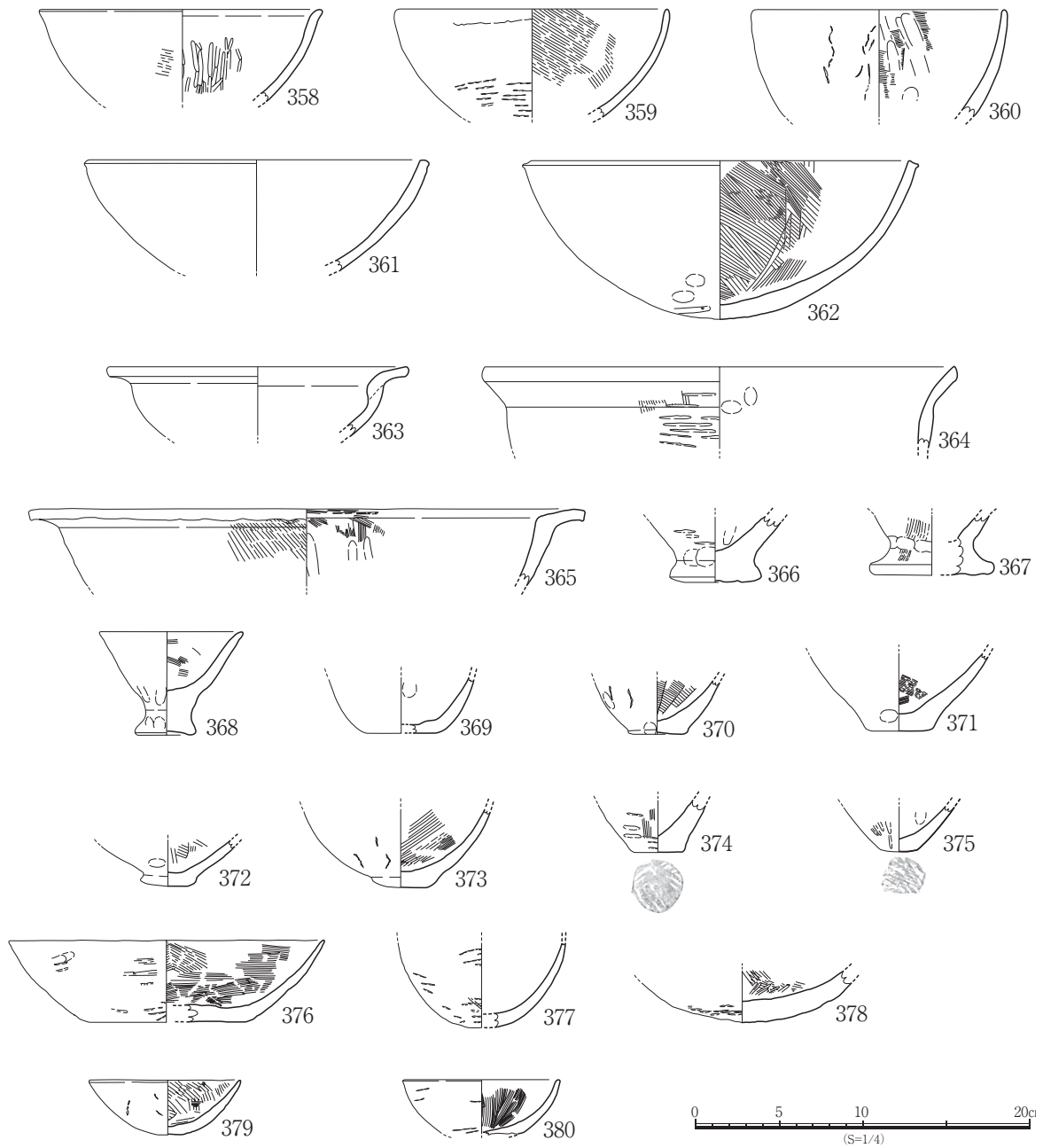


図62 SD13出土遺物実測図6 (弥生土器)

である。調整は杯部内面がナデ、脚部外面が縦方向の板ナデ、脚部内面がナデである。390は杯底部から脚柱部が残存する。調整は外面が縦方向の粗いハケ、脚部内面がナデである。杯部内面は摩耗するため調整は不明である。脚部には円孔の一部が1箇所に残存する。391は脚柱部が残存する。脚部は器壁が薄く、直線的に伸びる。調整は外面がハケ及びミガキがわずかに残り、脚部内面は強い縦方向のナデである。392は杯底部から脚柱部が残存する。器壁が厚いものである。調整は杯部内面と脚部内面がナデである。外面は摩耗するため調整は不明である。393は杯底部から脚柱部が残存する。脚柱部は直立し、裾部は屈曲して外へ広がる。調整は杯部内面がハケ、外面には縦方向のミガキがわずかに残り、脚部内面は裾部が横方向のハケ、脚柱部がヘラナデでしほり目が残る。394は裾部の約1/3が残存する。裾部はわずかに外反し、端部を四角く収める。著しく摩耗するため調整は不

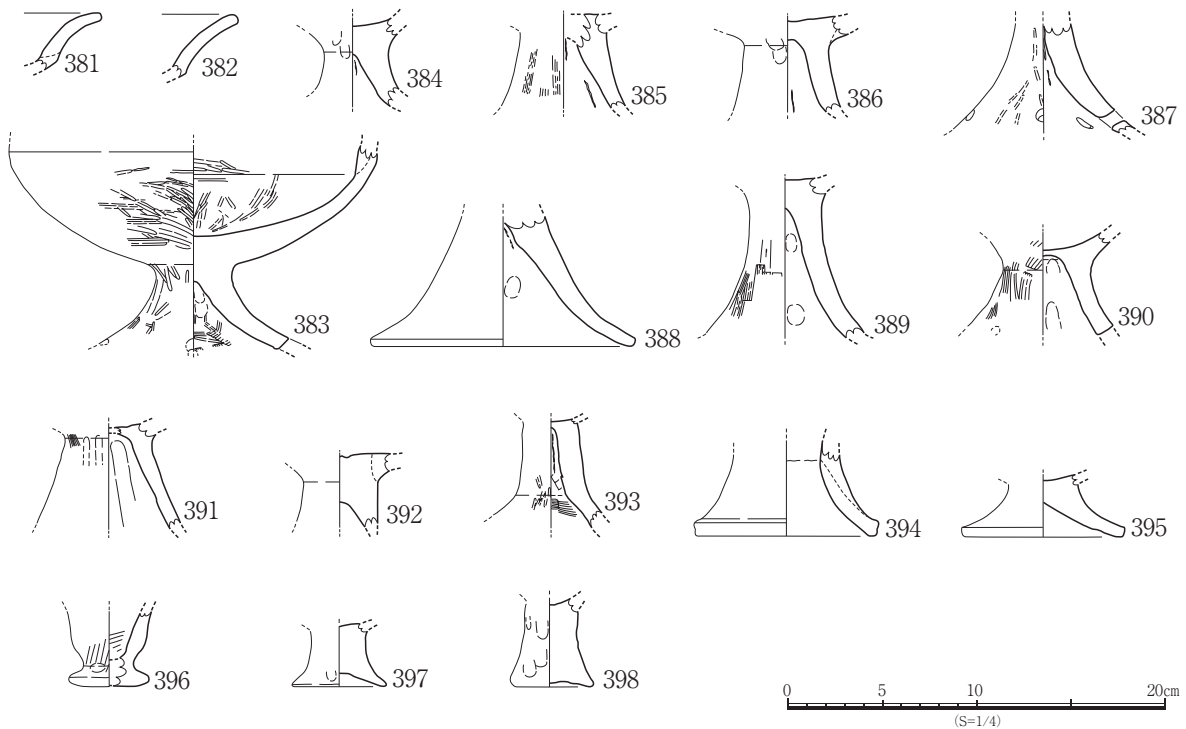


図63 SD13出土遺物実測図7 (弥生土器)

明である。395は杯底部から脚部の約1/3が残存する。小型で、低脚のものである。調整は杯部内面がナデ、その他はナデとみられるが摩耗するため不明である。

396は手捏ね土器で、約1/2が残存する。小型で、底部は平高台状を呈し端部を大きく摘む。調整はナデ後一部ハケである。

397・398はミニチュア土器である。397は高杯形を呈し、脚部が残存する。脚部は中実で裾部は短く開く。摩耗するため調整は不明である。398も高杯形を呈するものとみられ、脚部が残存する。脚部は中実でわずかにハの字状に開く。調整はナデで、指頭圧痕が顕著に残る。

土製品(図64-399~402)

399は杓子形土器で、基部が残存する。身部は楕円形を呈するものとみられ、柄部は身部より水平に伸びる。調整はナデである。400~402は支脚である。400は脚部の約1/3が残存する。器壁が厚く、中空を呈するものとみられる。調整はナデとみられるが、外面は摩耗するため不明である。内外面に黒斑と被熱の痕跡がみられる。401は脚部が残存する。中空で、脚柱部は斜め上方に立ち上がり、裾部は脚柱部より屈曲してハの字状に伸びる。調整はナデで、指頭圧痕が残る。402は脚部の約1/3が残存する。長脚で、中空を呈し、裾部はハの字状に広がる。調整は外面がタタキ、裾端部から内面がナデである。外面はタタキにより多角形を呈する。

石製品(図64-403~406)

403は打製の石包丁でほぼ完存する。刃部は直線的で、使用痕が残る。刃部と反対側の面には挟りがみられる。石材は粘板岩系とみられる。

404・405は叩石で、完存する。平面形及び断面は楕円形を呈する。404は一面の中央部に敲打痕が残る。石材は粗粒の砂岩である。405は両面に敲打痕が残る。石材は砂岩である。

406は砥石で、一部を欠損する。平面及び断面は長方形を呈していたものとみられる。表面と上下



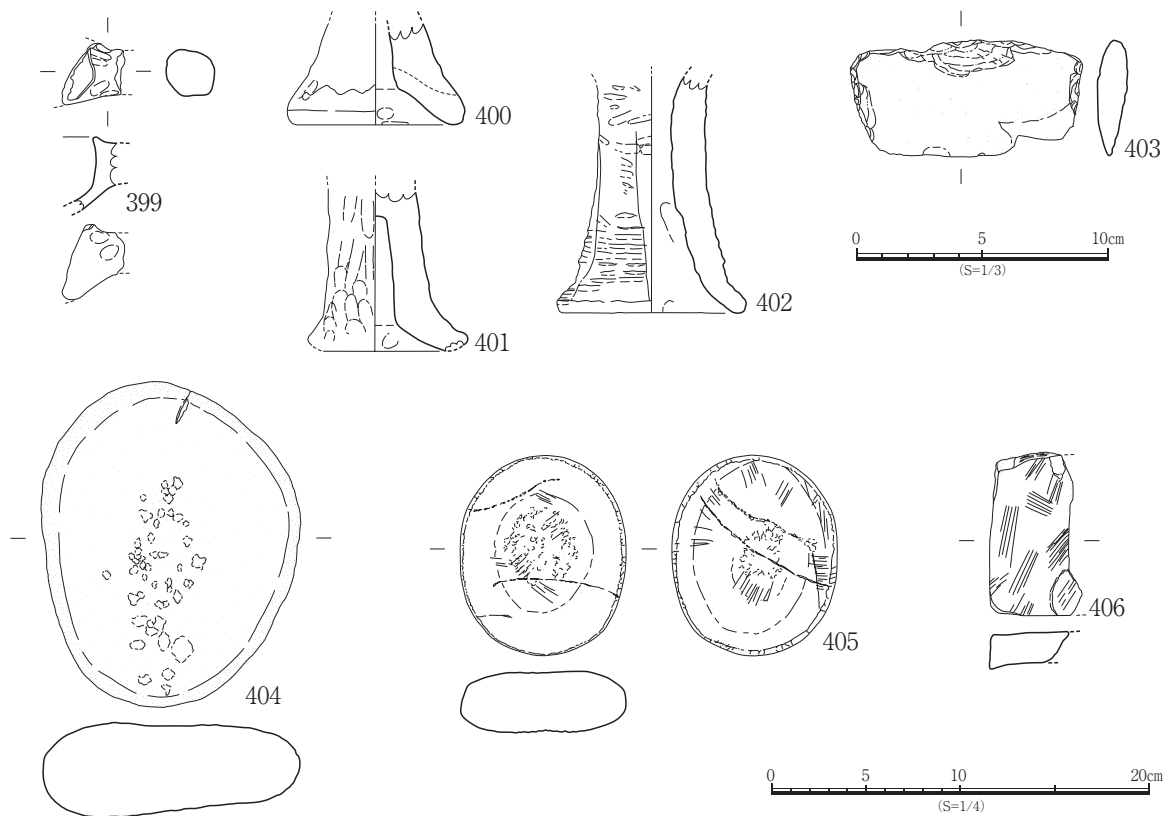


図64 SD13出土遺物実測図8 (土製品・石製品)

面の三面に使用痕が残る。石材は細粒の砂岩である。

SD14(図65)

IV区の中央部で検出した東西溝跡 (N-27°-W)であり, SD13を切る。大きく湾曲し, 南(N-34°-E)へ方向を変え, 西端は調査区外へ続く。検出長34.04m, 検出幅1.75m, 深さは30cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.340m)から西(51.209m)

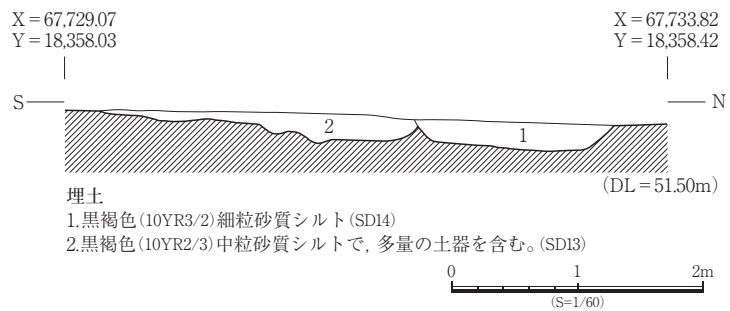


図65 SD13・14

へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。出土遺物には弥生土器片1457点, 須恵器片27点のほか鉄滓と焼石がみられ, 弥生土器3点(407~409)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図66-407~409)

407・408は壺である。407は長頸壺で, 口縁部の約1/6が残存する。口縁部は外反し端部を丸く収める。内面の調整はナデで, 外面は摩耗するため調整は不明である。408は底部の約1/4が残存する。底部は小さな平底を呈し, 胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面が強いナデ, 胴部外面がタタキ後縦方向のハケ, 底部外面がナデである。外面には黒斑がみられる。409は高杯で, 脚部の約1/3が残存する。裾部は脚柱部より屈曲してハの字状に開く。調整は外面がハケ, 内面がハケ及びナデで

ある。裾部には残存部で1箇所にも円孔が残る。

SD15(図56)

Ⅲ区の北部で検出した東西溝跡(N-80°-W)で、一部は攪乱を受け、SX1に切られる。東側は調査区外へ続く。検出長18.34m, 検出幅0.60m, 深さは10cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.655m)から西(51.311m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片51点, 須恵器片1点, 瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD16

Ⅲ区からⅣ区にかけて検出した東西溝跡(N-87°-W)であり、北側はSX1に切られる。検出長34.50m, 検出幅0.78m, 深さは35cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.303m)から西(51.026m)へ傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片69点, 須恵器片13点, 土師質土器片3点, 瓦質土器片2点, 備前焼片9点, 青磁1点, 土錘1点がみられ、須恵器(410), 土師質土器(411), 備前焼(412), 青磁(413)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図66-410)

410は蓋で、天井部の約1/3が残存する。天井部は平らで滑らかに口縁部に至る。調整は回転ナデで、天井部内面にはナデを加える。天井部外面は摩耗するため調整は不明である。

土師質土器(図66-411)

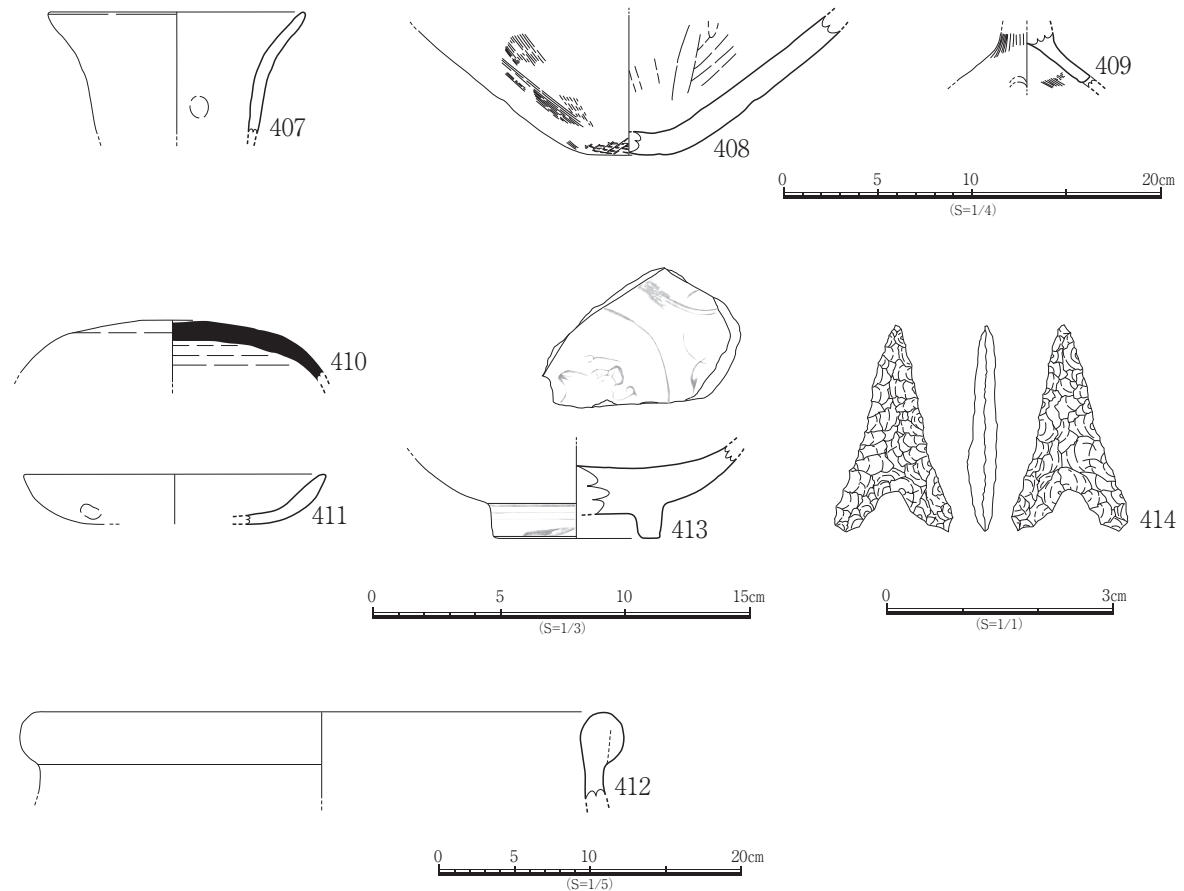


図66 SD14・16・17出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師質土器・備前焼・青磁・石製品)

411は手捏ねの皿で、約1/3が残存する。口縁端部は若干細く仕上げる。調整はナデとみられるが著しく摩耗するため不明である。

備前焼(図66-412)

412は甕の口縁部で一部が残存する。口縁部は断面が楕円形を呈し、調整はヨコナデである。

青磁(図66-413)

413は龍泉窯系の碗で、約1/6が残存する。底部は器壁が厚く、断面方形を呈する削り出し高台を有する。器面には明オリーブ色の釉を約1mmの厚さに施し、畳付と高台内は釉ハギを行う。内面には劃花文がみられる。

### SD17

Ⅲ区の北西部で検出した東西溝跡(N-88°-W)である。全長8.75m、全幅40cm、深さは20cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.541m)から西(51.478m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片12点、須恵器片1点、土師質土器片1点、石製品1点がみられ、石製品(414)が図示できた。

出土遺物

石製品(図66-414)

414は打製の石鎌で、完存する。凹基式で、全長2.7cm、全幅1.6cm、全厚0.4cm、重量0.9gを測る。石材はチャートである。

### SD18(図56)

Ⅲ区の中央部で検出した東西溝跡(N-83°-W)である。全長36.50m、全幅1.80m、深さは20cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.709m)から西(51.416m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片482点、須恵器片15点、土師質土器片18点、瓦質土器片7点、青磁片2点、備前焼片3点がみられ、弥生土器1点(415)、土師質土器1点(416)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図70-415)

415は小型の甕で、口縁部の約1/4が残存する。口縁部は頸部より屈曲し、外上方に短く伸びる。調整は胴部内面がナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面は摩耗するがわずかにハケが残る。

土師質土器(図70-416)

416は小杯で、底部の約1/4が残存する。小さな平底を呈し、体部は外上方に大きく開く。調整は回転ナデとみられるが著しく摩耗するため不明である。

### SD19(図67)

Ⅳ区の南東部で検出した東西溝跡(N-75°-W)である。SD13を切り、一部は攪乱を受ける。全長5.80m、全幅0.72m、深さは30cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.331m)から西(51.173m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片941点、土師器1点、須恵器片6点、土師質土器片10点、黒色土器片2点、瓦質土器片2点、白磁片1点がみられ、弥生土器1点(417)、土師器1点(418)、須恵器1点(419)が図示できた。

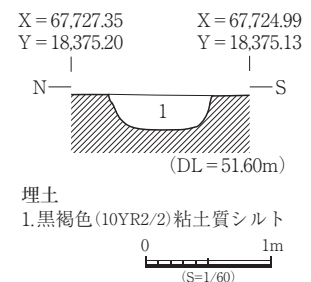


図67 SD19

## 出土遺物

## 弥生土器(図70-417)

417は鉢で、底部の約1/3が残存する。平底を呈し、体部は内湾して立ち上がる。調整はナデである。土師器(図70-418)

418は高杯で、脚柱部が残存する。脚柱部は中実で直立し、裾部はハの字状に短く開く。調整はナデとみられるが摩耗するため不明瞭である。裾部には残存部で2箇所にも円孔が残る。

## 須恵器(図70-419)

419は杯で、底部の約1/4が残存する。平底を呈し、底部の切り離しは回転ヘラ切り、調整は回転ナデである。

## SD20

IV区の北部で検出した東西溝跡(N-81°-W)である。両端は攪乱の影響を受ける。検出長31.90m, 検出幅0.73m, 深さは35cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.162m)から西(50.956m)へ傾斜する。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

## SD21

IV区の中央部北寄り検出したL字状を呈する溝跡である。南北方向(N-1°-W)から途中東西方向(N-81°-W)へ向きを変えており、西端はSD22に切られ、南端はSD14を切る。検出長13.50m, 検出幅0.70m, 深さは6cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は南(51.323m)からコーナー部(51.315m), 西(51.217m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR3/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片20点, 須恵器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

## SD22(図68)

IV区の中央部西寄り検出したL字状を呈する溝跡であり、SD20を切り、SX1に切られる。南北方向(N-16°-E)から途中東西方向(N-90°-W)へ向きを変えており、両端は調査区外に続く。検出長8.75m, 検出幅44cm, 深さは37cmを測り、断面形は逆台形を呈す。基底面は南(50.992m)からコーナー部(50.883m), 西(50.816m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。出土遺物には弥生土器片44点, 土師質土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

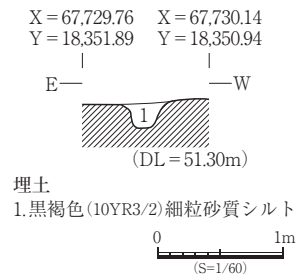


図68 SD22

## SD23

IV区の中央部西寄り検出した南北溝跡(N-26°-E)であり、SD14を切り、SD22に切られる。検出長8.93m, 検出幅0.73m, 深さは20cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は南(51.219m)から北(51.130m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトである。出土遺物には弥生土器片34点, 須恵器片2点, 土師質土器片11点, 備前焼片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

## SD24(図69)

IV区の西部で検出したL字状を呈する溝跡である。SD25を切り、一部は攪乱を受ける。東西方向(N-71°-W)から途中南北方向(N-17°-E)へ向きを変えており、両端は調査区外へ続く。検出長16.75m, 検出幅3.95m, 深さは20cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は西(51.083m)から東(50.974m), 南(50.967m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。出土遺

物には弥生土器片59点, 土師器片21点, 須恵器1点, 土師質土器片6点, 黒色土器片1点, 瓦質土器2点, 備前焼片1点がみられ, 須恵器(420), 瓦質土器2点(421・422)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図70-420)

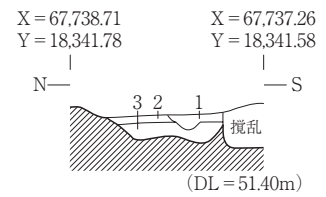
420は杯で, 底部の約1/4が残存する。平底を呈し, 底部の切り離しは回転ヘラ切りである。調整は回転ナデで体部下半には回転ヘラケズリを加える。

瓦質土器(図70-421・422)

421は釜とみられ, 口縁部の約1/8が残存する。肩部は大きく張り, 口縁部は短く直立する。調整は胴部内面が横方向のナデで指頭圧痕が顕著に残り, 口縁部はハケ後ヨコナデ, 外面は回転ナデである。胎土には石英を含み, 外面には炭素が吸着する。搬入品である。422は足釜で, 脚部の一部が残存する。断面は円形を呈し, ナデ調整を施す。外面には炭素が吸着する。

SD25(図69)

IV区の北西部で検出した東西溝跡(N-75°-W)であり, SD24に切られる。東端は攪乱を受ける。検出長3.18m, 検出幅0.66m, 深さは10cmを測り, 断面形は舟底状を呈す。基底面は西(51.086m)から東(50.987m)へ緩やかに傾斜する。埋土は上層が暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト, 下層が暗オリーブ褐



埋土  
 1. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト (SD24)  
 2. 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトで, 黄色ブロックを含む。(SD25埋土1)  
 3. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質シルトで, 黄色ブロックを含む。(SD25埋土2)

0 1m  
(S=1/60)

図69 SD24・25

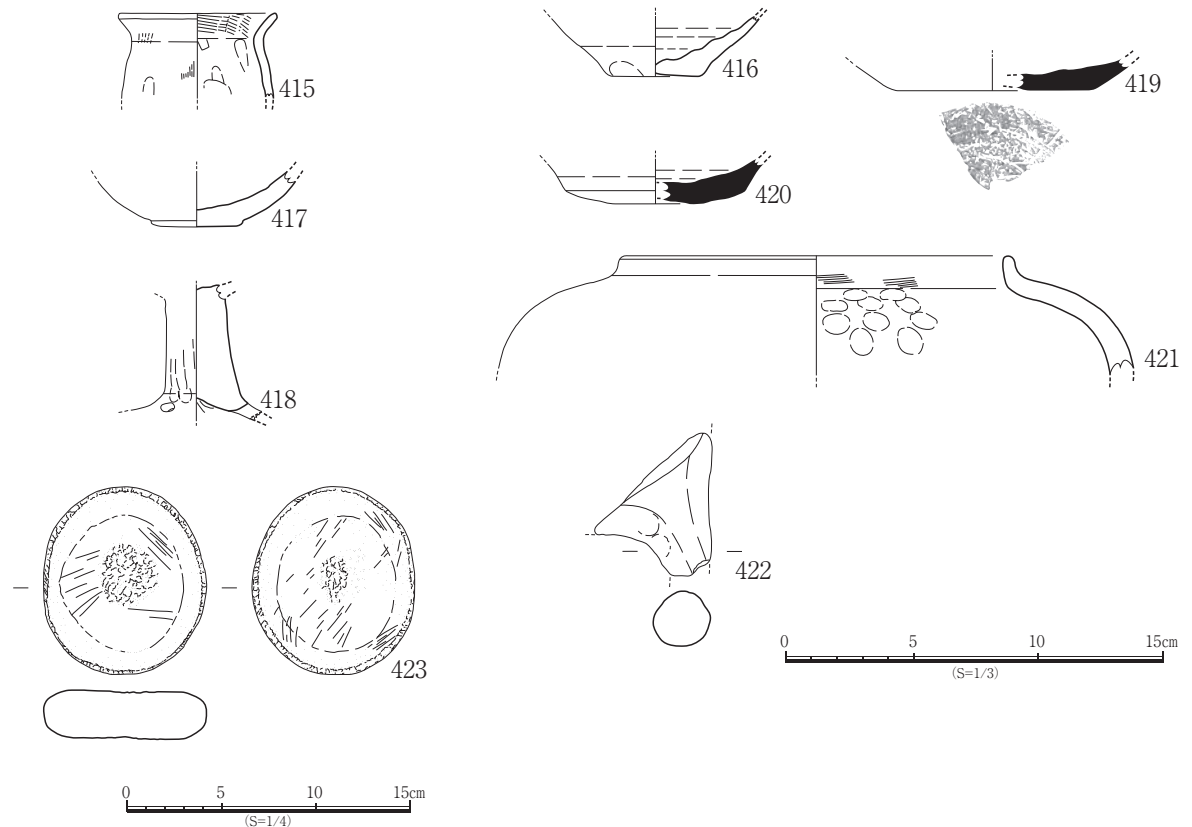


図70 SD18・19・24・25出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・石製品)

色(2.5Y3/3)粘土質シルトでいずれも黄色ブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器片140点, 土師器片21点, 須恵器片4点, 土師質土器片3点, 石製品1点がみられ, 石製品(423)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 石製品(図70-423)

423は叩石で, 完存する。平面及び断面は楕円形を呈する。両面の中央部に敲打痕が残る。石材は砂岩である。

##### iv 性格不明遺構

##### SX1(図71・72)

調査区北部で確認された東西方向(N-84°-W)の石列である。一部は攪乱を受け, SD15・16・22を切り, SD16とほぼ平行に伸びる。検出長69.20m, 検出幅0.85mを測る。また, 北側の一部は調査区外へ続いているが攪乱の影響もあり北辺は不明瞭で, 上部は削平を受けているものとみられる。断面は舟底状を呈し, 埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで多量の石を含んでいた。石列の南辺は比較的大きい石を配し, 内側は

小さい石を用いている。また, 西端は馬蹄形を呈し, 西側に開き, 長さ約20cmの大きい石を3段積んでいる部分もみられた。石材は河原石が主で, 割れ石もみられた。出土遺物には弥生土器片40点, 須恵器片46点, 土師質土器片4点, 備前焼片9点, 陶器片6点, 瓦1点, 石製品10点, 鉄製品1点, 鉄滓がみられ, 須恵器3点(424~426), 備前焼3点(427~429), 瓦(430), 石製品10点(431~440), 鉄製品(441)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 須恵器(図73-424~426)

424は杯で, 底部の約1/2が残存する。やや大振りりで, 平底を呈する。調整は回転ナデで底部内面にはナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りでその後ナデ調整を加える。425は蓋で, 天井部の約1/4が残存する。器壁が厚く, 小さく扁平なつまみの一部が残る。調整は回転ナデで, 外面には回転ヘラケズリ, 内面にはナデを加える。426は壺で, 底部の約1/8が残存する。平底を呈し, 胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がナデまたはヘラナデ, 胴部外面が回転ヘラケズリ, 底部外面がナデである。

##### 備前焼(図73-427~429)

427は播鉢で, 底部の約1/6が残存する。調整は回転ナデで, 外面には一部ナデを加える。底部外面はナデ調整で, 粘土塊が付着する。残存部には1箇所11条単位の摺目が残る。428・429は甕で, 口縁部の一部が残存する。428は口縁部が断面楕円形を呈し, 調整はヨコナデ及びナデである。429は口縁部の断面が扁平な楕円形を呈し, 調整はヨコナデ及びナデである。外面の肩部には自然釉が付着する。

##### 瓦(図73-430)

430は平瓦で, 一部が残存する。凹面には布目痕が残り, 凸面には縄目状のタタキ調整を施す。

##### 石製品(図73・74-431~440)

431は打製の石包丁で完存する。刃部は細く尖る。石材は蛇文岩である。432は叩石で, 一部が残存する。円柱状を呈し, 先端には敲打痕が残る。石材は砂岩の河原石である。433は叩石及び磨石

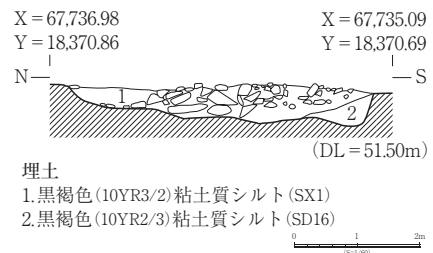


図71 SD16・SX1



図72 SX1平面図

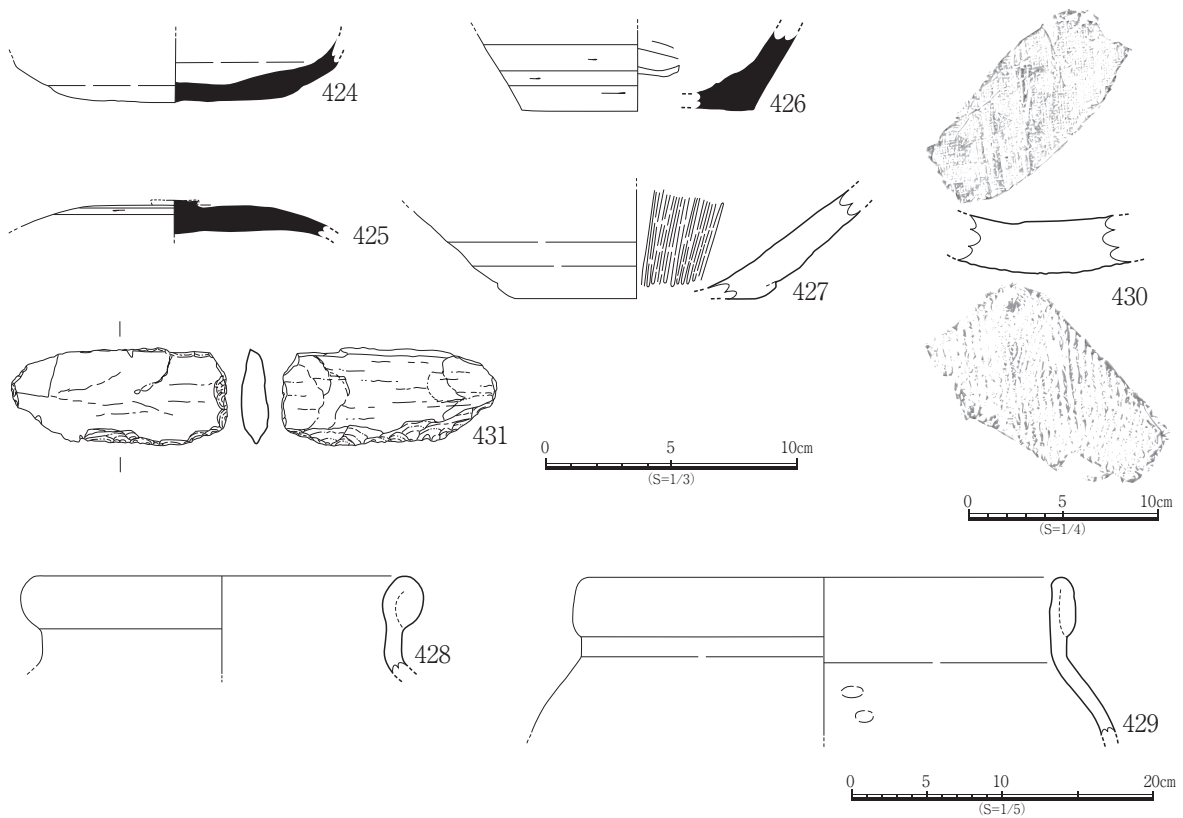


図73 SX1出土遺物実測図1 (須恵器・備前焼・陶器・瓦・石製品)

で、ほぼ完存する。平面は楕円形を呈し、断面は扁平で薄い。両面は摩耗し平滑で、両端には敲打痕が残る。石材は砂岩の河原石である。434は叩石及び砥石で、ほぼ完存する。平面は不整楕円形を呈し、断面は半円形を呈する。表面の中央には敲打痕がみられ、裏面は擦痕が残り摩耗して凹む。石材は砂岩の河原石である。435～440は砥石である。435は一部が欠損する。小型で、直方体または四角錐形を呈する。残存部には一面に擦痕が残る。石材は砂岩の割石である。436は一部を欠損する。平面は楕円形を呈し、断面は扁平で薄い。残存部には一面に擦痕が残る。石材は細粒の砂岩である。437は完存するものとみられ、割石の一部に擦痕が残る。石材は砂岩である。438は完存するものとみられる。表裏二面に擦痕がわずかに残り平滑になる。断面は摩耗して五角形を呈する。石材は砂岩の割石である。439は平面が台形、断面が長方形を呈し、表裏面と1側面の3面に擦痕が残る。石材は砂岩の割石である。440は残存部で一面に使用痕が残る。使用面は平滑になる。石材は砂岩の割石である。

鉄製品(図74-441)

441は釘で、一部を欠損する。頂部は丁字形を呈するものとみられ、先端は細く仕上げる。断面は矩形とみられるが、錆化が進み不明瞭である。

iv ピット

P8

III区の南部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は長径30cm、短径25cm、深さは14cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には図示した弥生土器(442)がみられた。

出土遺物





図74 SX1出土遺物実測図2 (石製品・鉄製品)

弥生土器(図75-442)

442は甕で、底部の約1/3が残存する。小さな平底を呈し、胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。外面には黒斑がみられる。

P9

III区の南部に位置し、平面形は円形を呈する。径48cm、深さは16cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器の壺1点、甕5点、細片93点がみられ、甕(443)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図75-443)

443は甕で、底部の約1/2が残存する。小さな平底を呈し、胴部は外上方へ大きく開く。調整は胴部外面がタタキ、底部外面はナデとみられる。内面は著しく摩耗するため調整は不明である。

P10

III区の南部に位置し、平面形は楕円形を呈する。長径55cm、短径42cm、深さは33cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器の高杯1点、細片18点がみられ、高杯(444)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図75-444)

444は高杯で、脚部の約1/4が残存する。脚部はハの字状に開く。調整は外面にわずかにヘラナデが残り、内面はナデである。裾部には円孔の一部が2箇所に残る。

P11

III区の南部に位置し、平面形は円形を呈する。径0.50m、深さは20cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器の壺1点、甕1点、鉢1点、細片38点がみられ、壺(445)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図75-445)

445は壺で、底部の約1/2が残存する。底部は器壁が厚く、小さな平底を呈する。調整は内面と底部外面がナデで、胴部外面は摩耗するため不明瞭である。内面には黒斑がみられる。

P12

III区の南部に位置し、平面形は円形を呈する。径0.53m、深さは28cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器1点、須恵器の壺2点、甕1点、細片33点がみられ、弥生土器(446)、須恵器2点(447・448)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図75-446)

446は甕で、口縁部の約1/8が残存する。口縁部は大きく外傾し端部を四角く収める。調整は頸部内面がナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面が縦方向のヘラナデである。口縁端部は面取りを行う。

須恵器(図75-447・448)

447は蓋で、口縁部の約1/8が残存する。調整は回転ナデで、外面には浅い凹線状の段を有する。

448は壺で、口縁部の一部が残存する。口縁部は内湾し、端部を細く仕上げる。調整は回転ナデで、外面には凹線が2条巡る。内面は器面が荒れる。

P13

Ⅳ区の東部に位置し、SK11を切る。平面形は円形を呈する。径20cm, 深さは23cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトである。出土遺物には図示した土師質土器(449)がみられた。

出土遺物

土師質土器(図75-449)

449は碗で、約1/3が残存する。器壁が薄く、底部には断面台形を呈する高台を貼付する。調整は回転ナデで、体部下半には回転ヘラケズリを加える。著しく摩耗するため調整は不明瞭である。

P14

Ⅳ区の北部に位置し、平面形は楕円形を呈する。長径25cm, 短径17cm, 深さは22cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器の細片2点, 須恵器の蓋1点がみられ, 須恵器(450)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図75-450)

450は蓋で、約1/3が残存する。天井部は器壁が厚く、平らである。調整は回転ナデで、天井部外面は丁寧なナデを加える。

P15

Ⅳ区の中央部に位置し、SD14を切る。平面形は楕円形を呈する。長径1.05m, 短径0.80m, 深さは30cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器の細片2点, 土師質土器3点がみられ, 土師質土器3点(451~453)が図示できた。

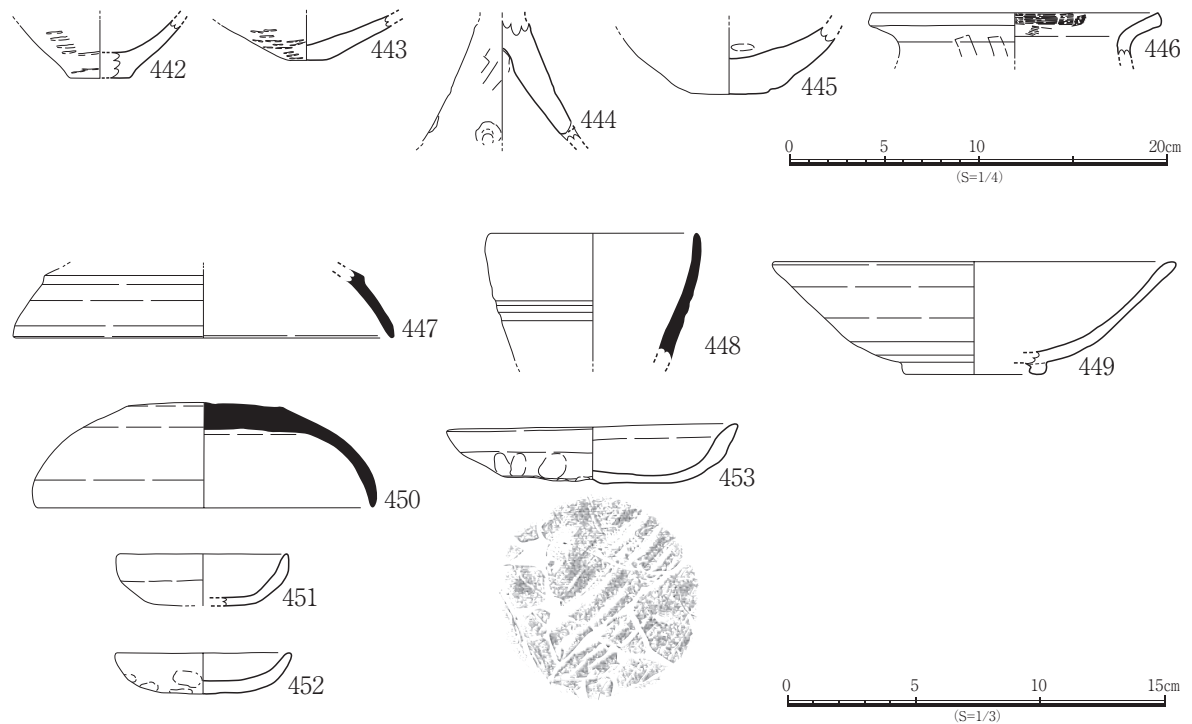


図75 P8～15出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・土師質土器)

4. V区

出土遺物

土師質土器(図75-451~453)

451・452は小皿で、いずれも約1/3が残存する。451は平底を呈し、口縁部は底部より屈曲して立ち上がる。手捏ね成形で、調整はナデである。452は平底を呈し、口縁部は底部より内湾して滑らかに立ち上がる。手捏ね成形で、丁寧なナデ調整を施し、指頭圧痕が顕著に残る。453は皿で、ほぼ完存する。器壁が薄く、口縁部は細く仕上げる。手捏ね成形で、調整はナデで、口縁部はヨコナデである。底部外面には板状圧痕が残る。

4. V区

(1) 調査区の概要

本調査区はIV区の西約50mに位置し、ひびのきサウジ遺跡に所在する。遺物包含層及び遺構は全面で確認され、調査面積は100㎡である。ひびのきサウジ遺跡の西端部に位置し遺構検出面の標高はIV区の西端より0.7m低く、遺構の密度も低かった。出土遺物は弥生時代から近世のものがみられたが少量であった。

(2) 基本層序

全面に厚さ約40cmの客土の堆積が認められ、攪乱を受けていた。調査区東部では以下の堆積が認められた。(図76)

第I層 におい黄褐色粘土質シルト層

第II層 におい黄褐色粘土質シルト層

第III層 黒褐色粘土質シルト層

第IV層 暗褐色細粒砂質シルト層

第V層 暗褐色細粒砂質シルト層

第I～III層は調査区全面でみられ、東から西に傾斜する。第I層は旧耕作土で、厚さ18～34cmを測る。第II層は厚さ7～28cmを測る。第III層は遺物包含層で、厚さ8～22cmを測る。第III層の下面で遺構検出を行った。

第IV層は自然堆積層で、調査区東部でのみみられた。

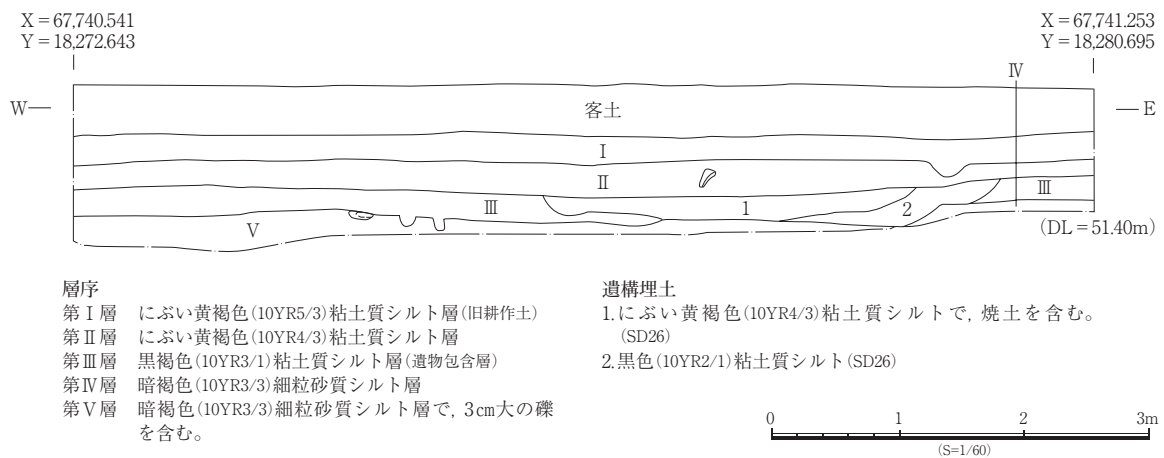


図76 V区北壁セクション図

第V層も自然堆積層で、3cm大の礫を含む。調査区中央部から西部でみられた。

(3) 堆積層出土遺物

第Ⅲ層出土遺物

須恵器(図77-454)

454は杯で、底部の約1/6が残存する。底部には断面台形を呈する高台を貼付する。調整は回転ナデで、底部内面にはナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。

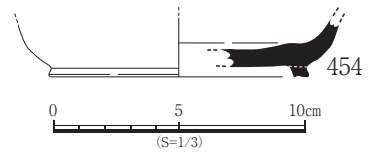


図77 V区第Ⅲ層出土遺物  
実測図(須恵器)

(4) 検出遺構

i 溝跡

SD26

東部から中央部で検出した東西溝跡で、大きく湾曲し、両端は調査区外へ続く。検出長8.61m, 検出幅1.38m, 深さは30cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(50.548m)から西(50.427m)へ緩やかに傾斜する。埋土は黒色(10YR2/1)粘土質シルトである。出土遺物は皆無であった。

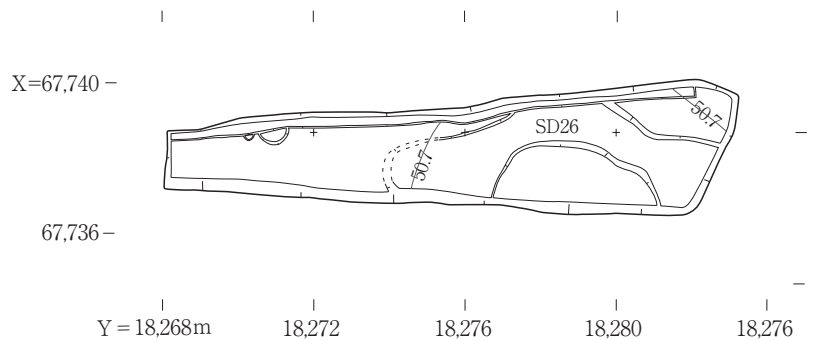


図78 V区遺構平面図(S=1/200)

5. VI区

(1) 調査区の概要

本調査区はⅡ区とⅣ区の上に位置する。現況は道路でアスファルトが敷かれており、攪乱を受けていた。遺物包含層及び遺構は全面で確認され、調査面積は30㎡である。

(2) 基本層序

厚さ約60cmの客土下に以下の堆積がみられた。(図79)

第Ⅰ層 黒褐色細粒砂質シルト層

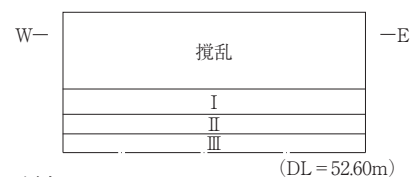
第Ⅱ層 灰黄褐色細粒砂質シルト層

第Ⅲ層 にぶい黄橙色砂質礫層

第Ⅰ層は厚さ約20cmを測る。

第Ⅱ層は土壌化し、厚さ約15cmを測る。第Ⅱ層の下面で遺構検出を行った。出土遺物は皆無であった。

第Ⅲ層は自然堆積層で、0.5~20cm大の礫を含んでいた。



層序  
第Ⅰ層 黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルト層  
第Ⅱ層 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルト層  
第Ⅲ層 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質礫層で、0.5~20cm大の礫を含む。

図79 VI区北壁セクション図

(3) 検出遺構

i 溝跡

SD27

VI区で検出した東西溝跡(N-88°-E)である。検出長5.65m, 検出幅1.60m, 深さは13cmを測り、断

6. VII区

面形は逆台形を呈するとみられるが、南端は調査区外へ続く。基底面は東(51.932m)から西(51.879m)へ緩やかに傾斜する。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトである。出土遺物には弥生土器片1点がみられたが図示できなかった。

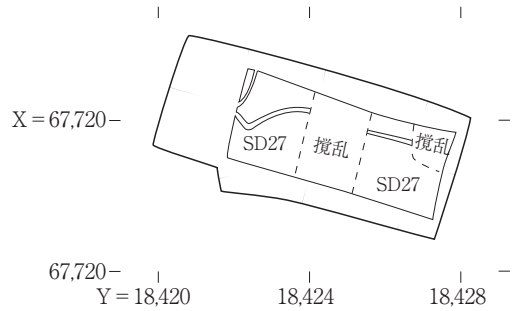


図80 VI区遺構平面図(S=1/200)

6. VII区

(1) 調査区の概要

本調査区はVI区の北に位置する。現況は道路でアスファルトが敷かれ、攪乱を受けていた。遺物包含層及び遺構は全面で確認され、調査面積は60㎡である。

(2) 基本層序

厚さ約0.5～0.95mの客土下に以下の堆積がみられた。(図81)

第I層 灰褐色シルト質中粒砂層

第II層 灰黄褐色シルト質中粒砂層

第III層 灰褐色シルト質中粒砂層

第IV層 褐色シルト質細粒砂層

第I・II層は削平を受けているものとみられ、一部でのみみられた。第I層は橙色の中粒砂を含み、厚さ約6cmを測る。第II層は厚さ5～16cmを測る。

第III層は遺物包含層で、第III層の下面で遺構検出を行った。一部は削平を受け、厚さ7～18cmを測る。第III層からは弥生土器片、備前焼片、陶器片、近世磁器片が出土したが図示できるものはなかった。

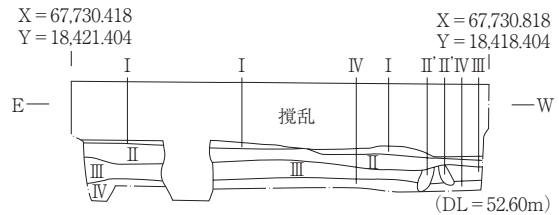
第IV層は自然堆積層で、全面にみられた。

(3) 検出遺構

i 溝跡

SD28(図83)

VII区で検出した東西溝跡(N-82°-W)であり、一部は攪乱の影響を受ける。溝跡の両端はともに調査区外へ続く。検出長5.45m、検出幅1.90m、深さは19cmを測り、断面形は舟底状を呈す。基底面は東(51.810m)から西(51.710m)へ緩やかに傾斜する。埋土は上層が灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒砂、中層が灰褐色(7.5YR4/2)中粒砂で土器を含み、下層が褐色(7.5YR4/3)シルト質細粒砂で褐灰色(5YR4/1)シル



- 層序
- 第I層 灰褐色(7.5YR5/2)シルト質中粒砂層で、橙色(7.5YR7/6)中粒砂を含む。
  - 第II層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂層
  - 第II'層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂層
  - 第III層 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質中粒砂層(遺物包含層)
  - 第IV層 褐色(7.5YR4/3)シルト質細粒砂層

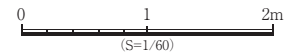


図81 VII区南壁セクション図

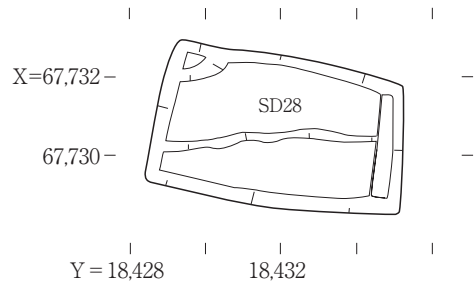
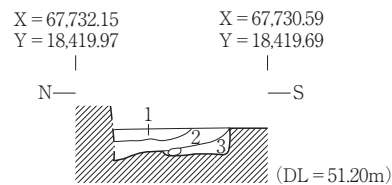


図82 VII区遺構平面図(S=1/200)



埋土

1. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒砂
2. 灰褐色(7.5YR4/2)中粒砂で、土器を含む。
3. 褐色(7.5YR4/3)シルト質細粒砂で、褐灰色(5YR4/1)シルト質細粒砂のブロックを含む。

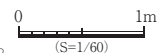


図83 SD28

ト質細粒砂のブロックを含む。出土遺物には弥生土器の壺1点, 甕10点, 鉢1点, 高杯1点, 細片97点がみられたが, 図示できるものはなかった。

## 7. VIII区

### (1) 調査区の概要

本調査区はV区の西約40mに位置する。今回の調査で最も西に位置し, 伏原遺跡に所在する。攪乱の影響を受けていたが, 遺物包含層及び遺構は全面で確認された。調査面積は22㎡である。

### (2) 基本層序

厚さ約20cmの客土下に以下の堆積がみられた。(図84)

- 第I層 灰褐色シルト質細粒砂層
- 第II層 にぶい褐色シルト質中粒砂層
- 第III層 褐色シルト質中粒砂層
- 第III'層 にぶい褐色シルト質中粒砂層
- 第IV層 褐色シルト質細粒砂層
- 第IV'層 褐色シルト質中粒砂層
- 第V層 明褐色シルト質細粒砂層

第I層は調査区東部でのみみられ, 厚さ約10cmを測る。旧耕作土で, マンガンを含んでいた。

第II層も調査区東部でのみみられた。厚さ8~32cmを測り, 小礫と土器を含んでいた。

第III層は全面でみられ, 厚さ5~25cmを測る。

第III'層は調査区北側の極一部でみられたブロック土である。

第IV層は遺物包含層で, 調査区北側は攪乱を受けていた。厚さ約8cmを測り, 東から西へ傾斜する。明褐色シルト質細粒砂を含んでいた。第IV層の下面で遺構検出を行った。

第IV'層は調査区北側の極一部でみられ, 小礫を含んでいた。

第V層は自然堆積層で, ほぼ全面で認められた。

### (3) 堆積層出土遺物

#### 第IV層出土遺物

##### 弥生土器(図85-455・456)

455は甕で, 底部が完存する。丸底を呈し, 胴部は底部より滑らかに立ち上がる。調整は内面がハケ後ナデ, 胴部外面がタタキ後ナデ, 底部外面がケズリ後ナデである。底部外面には黒斑がみられる。456は鉢で, 口縁部の約1/8が残存する。口縁部は外上方に真っすぐ伸び, 端部は四角く収める。

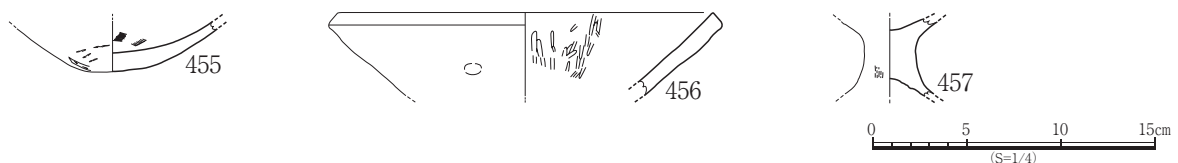
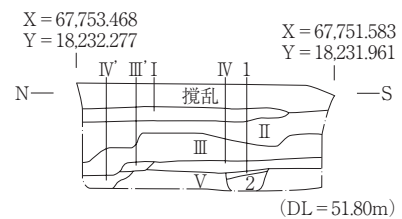


図85 VIII区出土遺物実測図(弥生土器)



- 層序
- 第I層 灰褐色(7.5YR3/2)シルト質細粒砂層で, マンガンを含む。(旧耕作土)
  - 第II層 にぶい褐色(7.5YR5/3)シルト質中粒砂層で, 小礫と土器を含む。
  - 第III層 褐色(7.5YR5/3)シルト質中粒砂層
  - 第III'層 にぶい褐色(7.5YR6/3)シルト質中粒砂のブロック土。
  - 第IV層 褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂層で, 明褐色(7.5Y5/6)シルト質細粒砂を含む。(遺物包含層)
  - 第IV'層 褐色(7.5YR4/3)シルト質中粒砂層で, 小礫を含む。
  - 第V層 明褐色(7.5YR5/6)シルト質細粒砂層埋土
1. 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質細粒砂(SD29)
  2. にぶい褐色(7.5YR5/3)シルト質細粒砂で, 明褐色(7.5YR5/6)シルト質細粒砂のブロックを含む。(SD29)

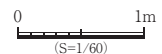


図84 VIII区東壁セクション図

7. VIII区

調整は体部内面がナデ後ミガキ，口縁部がヨコナデ， X=67,756 -  
体部外面がナデである。

(4) 検出遺構

i 溝跡

SD29(図87)

VIII区の東部で検出した東西溝跡(N-46°-W)である。溝跡の両端はともに調査区外へ続く。検出長3.31m，検出幅38cm，深さは15cmを測り，断面形は舟底状を呈す。基底面は西(50.329m)から東(50.268m)へ緩やかに傾斜する。埋土は上層が灰褐色(7.5YR4/2)シルト質細粒砂，下層が灰褐色(5YR5/2)シルト質細粒砂である。出土遺物には弥生土器片9点がみられたが，図示できるものはなかった。

ii ピット

P16

VIII区の中央部に位置し，平面形は楕円形を呈する。長径44cm，短径30cm，深さは21cmを測る。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)シルト質細粒砂である。出土遺物には弥生土器片10点がみられ，弥生土器(457)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図85-457)

457はミニチュア土器で，端部を欠損する。高杯形を呈し，脚部は中実で裾部はハの字状に開く。外面にはわずかに縦方向のハケが残るが，著しく摩耗するため調整は不明である。

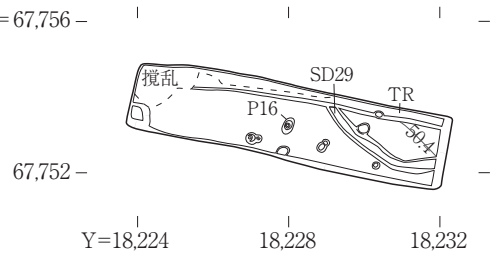
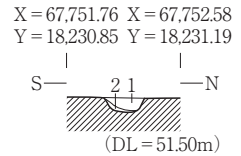


図86 VIII区遺構平面図(S=1/200)



埋土  
1. 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質細粒砂に灰褐色(5YR4/2)シルト質細粒砂が混じる。  
2. 灰褐色(5YR5/2)シルト質細粒砂

図87 SD29



# 第Ⅳ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社  
齊藤紀行

## はじめに

本分析では、発掘調査に伴う土層注記や記載の参考資料を得る目的として実施した、遺構および調査区を構成する堆積層の粒度分析結果を報告する。

## 1. 試料

粒度分析を実施する試料は4点である。遺構および調査区壁面より地山や包含層などの堆積物を採取した。試料の一覧を表3に示す。

表3 粒度分析試料一覧

試料番号	調査区	遺構・試料名
No.1	Ⅲ区	SD13埋土
No.2	Ⅲ区	第Ⅱ層(遺物包含層)
No.3	Ⅲ区	第Ⅴ層
No.4	Ⅲ区	第Ⅲ層(SD13の下層)

## 2. 分析方法

公文・立石編(1998)の方法を参考に礫・砂粒子画分は篩別法、シルト・粘土粒子画分はピペット法で行った。また、粒径区分はWentworth(1922)に従った。以下に分析操作工程を示す。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分ける。2mmφ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方、2mmφ篩下粒子は40.00gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤(4%カルゴン)を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分(0.063mm>), 粘土画分(0.0039mm>)を10ml採取し、105℃で24時間乾燥させた後、重量を測定し加積通過率(質量%)を求める。ピペット法終了後、懸濁液を63μm篩で水洗いする。63μm篩残留物を105℃で24時間熱乾後、1.0, 0.5, 0.25, 0.125mmφ篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率(質量%)を求める。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率(質量%)から粒径加積曲線を描き、Wentworth(1922)の粒径区分毎の質量を算出する。

## 3. 結果

粒度分析結果を表4, Folk & Ward(1957)による評価を総合して結果を表5に示す。また、各粒径頻度分布のグラフを図88, Folk(1954)の礫・砂・泥からなる堆積物区分を示した三角ダイアグラムを図89に示す。

## 4. 考察

No.1は礫をわずかに含む泥, No.2とNo.3が礫をわずかに含む砂質泥, No.4が泥質砂質礫に区分される。平均粒径は, No.1が8.68φ(0.002mm)で粘土, No.2が7.79φ(0.005mm), No.3が7.44φ(0.006mm)でそれぞれシルト, No.4が0.81φ(0.569mm)で粗粒砂である。なおNo.4は、本遺跡が立地する台地を構成

4. 考察

表4 粒度組成

粒径区分 試料名	礫					砂					シルト				粘土 0.0039mm >
	中礫				細礫 4 ~ 2mm	極粗 粒砂 2.00 ~ 1.00mm	粗粒砂 1.00 ~ 0.50mm	中粒砂 0.50 ~ 0.25mm	細粒砂 0.25 ~ 0.125mm	極細 粒砂 0.125 ~ 0.063mm	粗粒 シルト 0.063 ~ 0.031mm	中粒 シルト 0.031 ~ 0.016mm	細粒 シルト 0.016 ~ 0.008mm	微粒 シルト 0.008 ~ 0.0039mm	
	64 ~ 32mm	32 ~ 16mm	16 ~ 8mm	8 ~ 4mm											
No.1	0.0	0.0	0.0	1.1	1.1	0.7	1.2	2.0	2.6	3.1	5.2	7.6	9.1	7.6	58.7
No.2	0.0	0.0	0.0	0.5	1.2	1.5	2.3	3.4	5.1	5.5	6.4	9.5	7.8	8.4	48.4
No.3	0.0	0.0	0.0	2.0	1.2	0.9	2.1	3.5	5.4	7.2	8.3	7.9	8.3	7.9	45.3
No.4	0.0	0.0	9.0	21.5	15.7	10.6	14.2	9.0	3.9	2.0	2.0	1.4	1.4	1.2	8.1

注)単位は重量%で表示。

表5 粒度組成解析結果

試料名	M d (中央値)	M z (平均値)	M o (最頻値)	S k (歪度)	$\sigma$ (分級度)	K g (尖度)
No.1	8.48 $\phi$ (0.003mm)	8.68 $\phi$ (0.002mm)粘土	7.64 $\phi$ (0.005mm)	0.03ほぼ対称	2.92非常に悪い	1.88非常に突出
No.2	7.95 $\phi$ (0.004mm)	7.79 $\phi$ (0.005mm)シルト	7.64 $\phi$ (0.005mm)	-0.07ほぼ対称	3.35非常に悪い	1.70非常に突出
No.3	7.85 $\phi$ (0.004mm)	7.44 $\phi$ (0.006mm)シルト	7.64 $\phi$ (0.005mm)	-0.14負の歪み	3.52非常に悪い	1.59非常に突出
No.4	-0.33 $\phi$ (1.260mm)	0.81 $\phi$ (0.569mm)粗粒砂	-0.66 $\phi$ (1.585mm)	0.83著しい正	2.65非常に悪い	1.60非常に突出

注)評価はFolk & Ward (1957)による

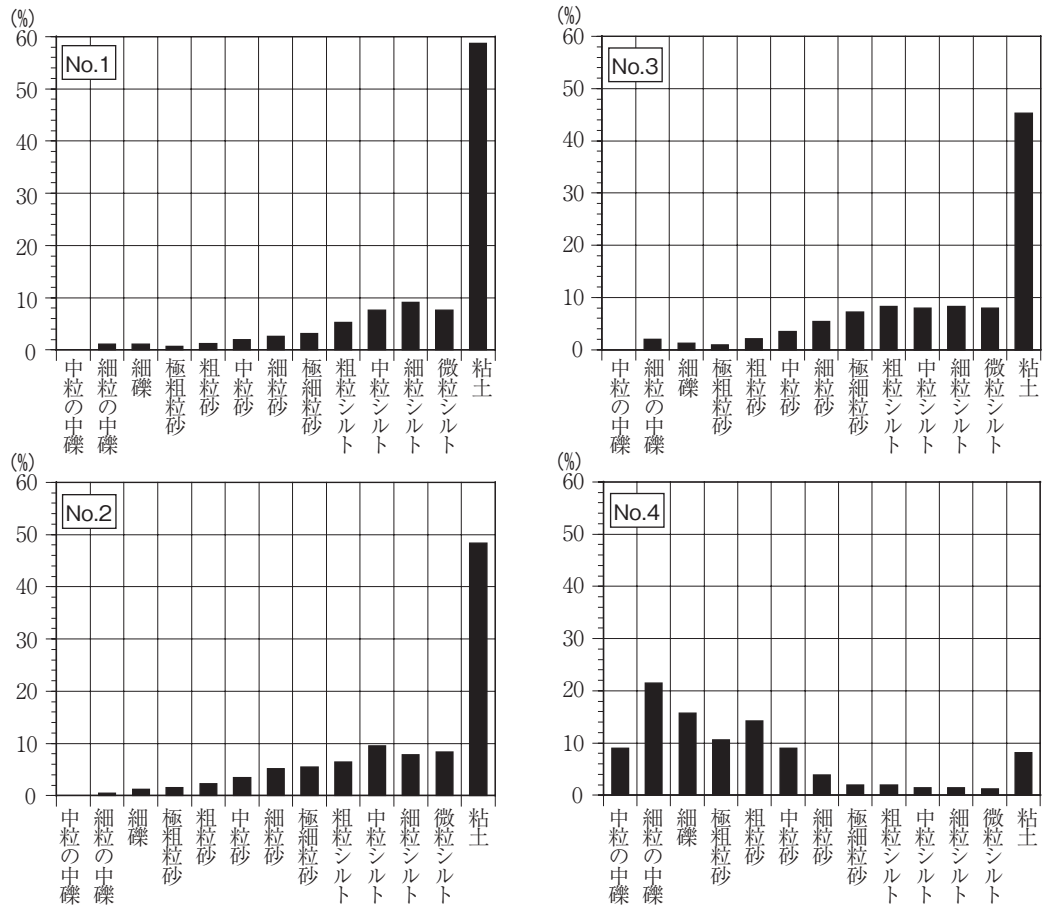


図88 粒度分析結果

する段丘構成層である。すべての試料では、分級度が非常に悪い。

溝埋土のNo.1は、包含層や遺構検出面を構成する黒ボク土のNo.2や明黄褐色土のNo.3より細粒な堆積物で構成される。このような粒度組成から、No.1のSD13の溝埋土は、非常に安定した堆積環境下において、周囲からの土壌物質の流れ込みや溝底部での滞水などによって堆積層が形成された可能性が示唆される。

引用文献

Folk,R.L.,1954,The distinction between grain size and mineral composition in sedimentary-rock nomenclature.J.Geol.,62,344-359.  
 Folk,R.L. and Ward,W.,1957,Brazons river bar,a study in the significance of grain size parameters. Journal of Sedimentary Petrology,27,3-26.  
 Friedman,1961,Distinction between dune,beach, and river sands from their textural characteristics. Journal of Sedimentary Petrology,31,514-529.  
 Wentworth,C.K.,1922,A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol,30,377-392.

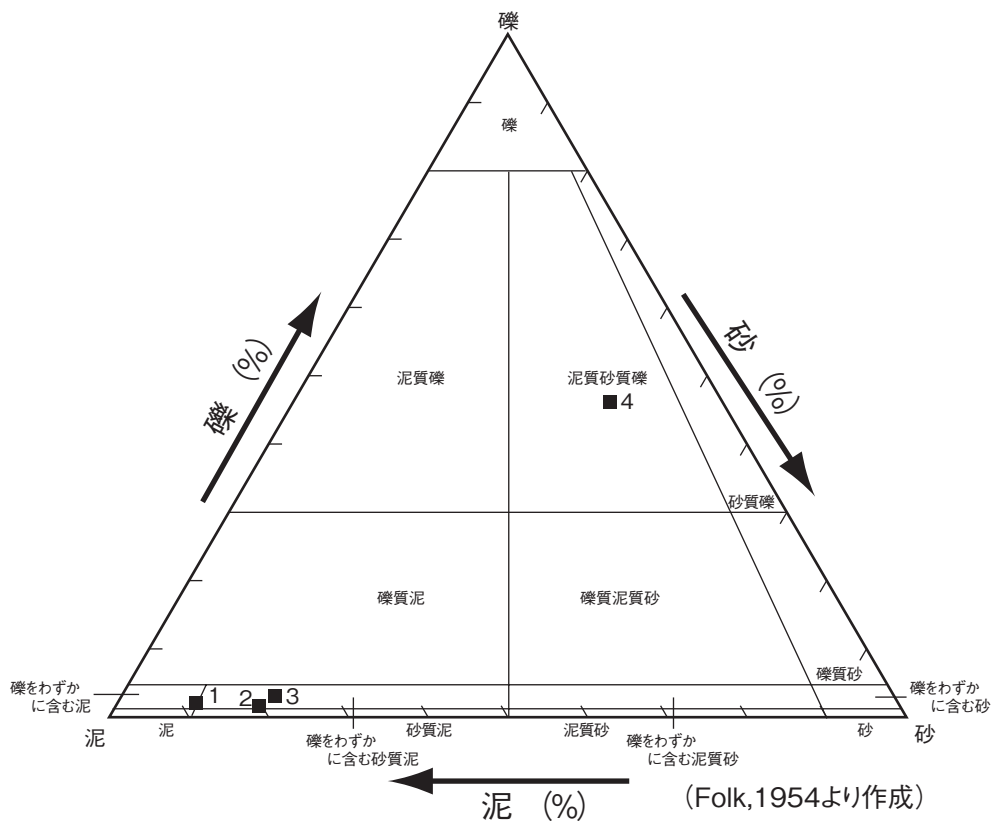
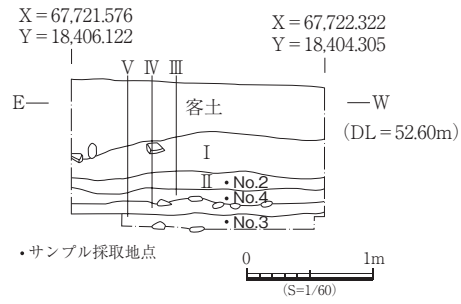


図89 粒度分析結果三角ダイアグラム

4. 考察

参考図面



層序

- 第I層 黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルト層(旧耕作土)
- 第II層 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト層  
(遺物包含層, IV区第III層に対応)
- 第III層 黒色(10YR2/1)粘土質シルト層
- 第IV層 黒色(10YR2/1)粘土質シルト層で, 5cm大の礫を含む。
- 第V層 暗灰黄色(2.5YR4/2)砂質礫層で, シルトと10cm大の礫を含む。  
(IV区第VII層に対応)

(高知県埋蔵文化財センター作成)

図90 III区南壁セクション図

# 第V章 考察

## 1. 弥生時代

弥生時代の遺構はほぼ全面で検出された。弥生時代の遺構に限らず標高の高い調査地東部では遺構が多くみられ、標高の低い調査地西部では遺構の密度が薄く、遺物も少ない傾向がみられた。弥生時代の遺構は溝跡8条、土坑1基である。遺構の時期は後期後葉から終末期と考えられるが、遺物については中期後葉のものも出土している。

溝跡はⅠ区のSD1～5、Ⅲ・Ⅳ区のSD13・14などである。SD1～3は並列し、SD1、SD2、SD3の順に作られており、南に作り直しあるいは拡張したものと考えられる。いずれも埋土に多量の遺物を含んでおり、遺物は中期後葉から古墳時代初頭のものがみられた。特に後期後葉から終末期にかけての遺物が多く、この時期にSD1～3はほぼ同時に機能していたと考えられる。また、西側に位置するⅦ区で検出したSD28は位置からみてSD1～3のいずれかと繋がる可能性が高い。さらに西側のⅢ・Ⅳ区で検出したSD13は検出された位置や、遺物についても埋土にSD1～3と同様な時期のものを多量に含んでおり、この溝跡についてもSD1～3と繋がる可能性が高い。SD13は大きく蛇行しているものの、SD1～3からSD13の西端まで繋がっていたと仮定すると全長は推定85mになる。

明確な弥生時代の土坑としてはⅡ区で検出したSK4のみである。SK4からは弥生土器の甕と高杯がまとまって出土している。後期後葉の良好な一括資料である。

今回の調査では竪穴式住居跡は確認されなかった。後期後葉から終末期の竪穴式住居跡は南側に位置する平成元年度の調査や、東に隣接するひびのき遺跡<sup>(1)</sup>で確認されており、この時期の集落の中心は今回の調査地点の南側であったと考えられる。今回の調査では比較的規模の大きい東西方向の溝跡が確認されており、集落の北側を画していた可能性もある。また、調査対象地は西に向かって地形が下がっており、Ⅴ区からⅧ区にかけては遺構の密度は低く、遺物も非常に少量であった。ひびのきサウジ遺跡の西側に隣接する伏原遺跡<sup>(2)</sup>では同時期の集落が確認されおり、Ⅴ区からⅧ区の付近が弥生時代の集落の境であると考えられる。今回の調査では石包丁が4点出土しており、Ⅴ区からⅧ区の周辺に生産域が存在する可能性も考えられよう。また、今回の調査では中期の遺物が出土しているが、中期の遺構は確認されなかった。ひびのき遺跡についても同じような状況である。ひびのきサウジ遺跡の北側に隣接するひびのき岡ノ神母遺跡<sup>(3)</sup>では後期前葉の遺構が確認されており、中期の遺物も出土している。中期及び後期前葉には今回の調査地の北側に集落が展開していたものとみられる。

## 2. 中世

中世の遺構は調査地東側のⅠ～Ⅲ・Ⅳ区で確認された。主な遺構は掘立柱建物跡5棟、土坑2基、溝跡9条である。掘立柱建物跡は詳細な時期が不明であるが、溝跡と同様な時期とみられる。

溝跡は北を向くものとそれに垂直方向を示すものが多く、L字状を呈するものもみられた。Ⅰ区で検出したSD6はL字状を呈し、屋敷の南西を画する溝跡と考えられる。Ⅲ・Ⅳ区で検出したSD22とSD24・25もL字状を呈するもので並行し二重に屋敷を囲んでいたものとみられる。SD24・25につ

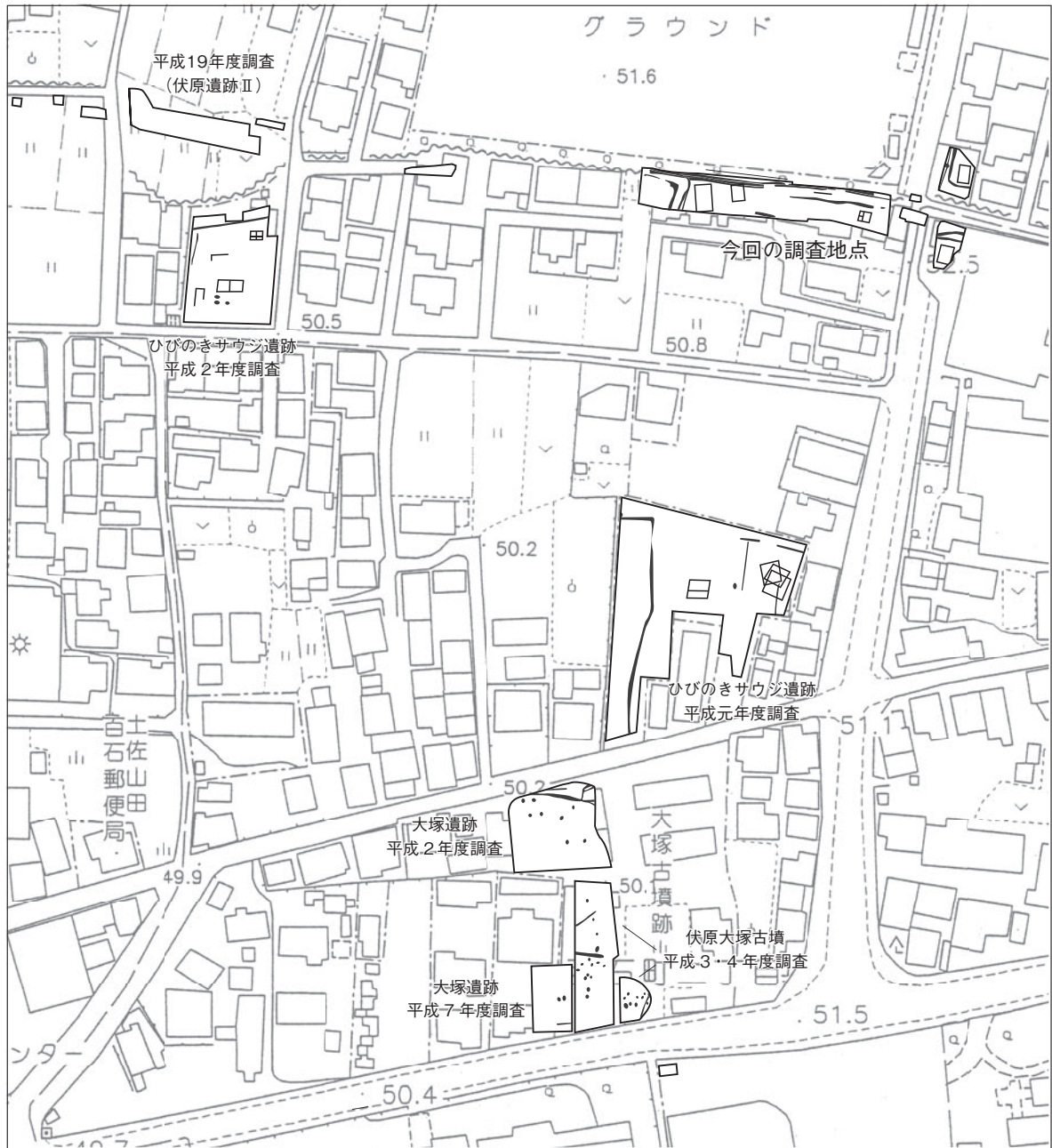


図91 調査区周辺の中世の遺構(S=1/2,000)

いては西端が南下しており屋敷地の東西幅は9.1mとなり非常に小さいものである。また、SB4と5が検出されたⅢ・Ⅳ区中央部も屋敷地であるとみられる。これらの溝跡の時期は遺物が少なく不明瞭であるが概ね15世紀から16世紀前半の範疇で捉えられるものと考えられる。Ⅲ・Ⅳ区で検出したSD15・16・18はいずれも東西方向に伸びる溝跡である。SD15・16は接しており併せた長さは約52mになる。このSD15・16とSD18は並行しその間は2.2~3.2mを測り、道路状遺構の可能性が高い。検出された位置はちょうど現在の小字の境であり、Ⅰ区とⅡ区の間にある道路の延長部分にあたる。時期は16世紀前半とみられる。

今回の調査地の周辺における15~16世紀前半の遺構はひびのきサウジ遺跡<sup>(4)</sup>と大塚遺跡<sup>(5)</sup>、伏原

大塚古墳<sup>6)</sup>で確認されている。ひびのきサウジ遺跡の平成元年度と平成2年度の調査地点では、今回の調査と同様な溝で囲まれた屋敷跡が確認されており、今回の調査で当該期の屋敷跡がさらに北側に展開されていたことが確認されたといえる。平成元年度の調査地点の南側には大塚遺跡と伏原大塚古墳があり、ここでは当該期の集石墓や火葬墓が多数確認されており、屋敷跡の南側には墓地が展開していたことが窺える。またその南東には「西市」「東市」の小字が残り、市が存在していたと言われている。この時期は調査地の北東の山頂に位置する楠目城跡に山田氏が居城を構え勢力を振るっていた。戦国期には屋敷地、墓地、市などの区割りが明確になっており城下町が形成されていたとみられる。今回の調査で確認された15～16世紀前半の屋敷跡も城下町に含まれていたと考えられる。また今回確認された道路状遺構は山田に残る条里に合致する。山田の城下町の中心とされる楠目から今回の調査地点までは現在でも一部に条里に合致する道路が通っており、おそらく16世紀前半頃には道路として機能していたものとみられる。長宗我部地検帳<sup>7)</sup>にも「道」や「大道」といった記載が多く見られるが今回調査を行っていた地点やその南の「サウジ」、北に位置する「岡ノ神母」、東に位置する「大河内」や「ヒビノキ」といった小字がみえないのは残念なことである。山田の城下町構造の復元については今後の課題である。

### 3.SX1について

SX1はⅢ・Ⅳ区の北部で検出した東西方向に伸びる石列遺構である。検出長は約70mを測り、残存幅は約0.85mを測る。南辺は比較的大きめの20cm大の石を配し、内側部分には5～10cm程度の小礫を入れている。北辺は調査区外に続いている部分があることや攪乱の影響を受けており確認はできていない。Ⅲ・Ⅳ区の北側は平成17年度に立会調査を行っているが、この際には石列は確認されていない。この石列は幅2.30mの溝跡に入り込むような形で検出されており、石列を構築する際に地固めのために掘り込むような形で作られた可能性がある。また、西端部分は馬蹄形を呈し、20～30cm大の石を3段積んでいる箇所もみられた。西側については攪乱を受けており削平された可能性もあるが、内側部分は面を揃えており、おそらく西側に開口していたものとみられる。埋土中から出土した遺物には15世紀のものがみられるが、SD15・16・22埋没後に構築されていることから16世紀前半以降とみられる。

この遺構の性格としては、道路状遺構とみられるSD16と並行し、またSD15・16埋没後に構築されていることから字境を示すものと考えられる。今回の調査地点の東側は長宗我部地検帳に「楠目土居」「御南ノ土居」「マトコロヤシキ」などの名がみえる地域である。長宗我部地検帳には「ホリ」の字がみられ、土居には堀があったと考えられる。この石列の上部構造として土塁状のものが構築されていた可能性も考えられよう。

### 4.おわりに

今回の発掘調査では、古くは弥生時代後期から近世までの遺構・遺物が確認された。弥生時代の遺構として溝跡が確認され、溝跡から大量の遺物が出土したが完形になるものが確認されなかったのは残念であった。しかし当時の様相がわずかながら垣間見えたことにはこれら一帯の解明に繋がるものとして喜ぶべきものであろう。Ⅳ区を調査中に石列が検出された時は喜ばしい反面、これからのように調査を進めていくかで大いに悩まされた。この石列の調査では、暑さの中黙々と作業

にあたっていただいた現場作業員の方々や測量補助員、調査員の方々の助言をいただいたことは大きな励みとなった。また、調査中には道路工事期間と発掘調査の進行状態から頭を悩ませることが度々あったが、事故も無くこうして無事終えたことに安堵している。今回の発掘調査は私にとってかけがえのない一つの財産に成り得るものである。

#### 註

- (1) 『ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会 1977
- (2) 『伏原遺跡Ⅰ－都市計画道路高知山田線発掘調査報告書Ⅰ－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第108集 (財)高知県埋蔵文化財センター 2010
- (3) 『鏡野中学校校庭遺跡』土佐山田町教育委員会 1984  
『ひびのき岡ノ神母遺跡』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 土佐山田町教育委員会 2004
- (4) 『ひびのきサウジ遺跡』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 土佐山田町教育委員会 1990  
『ひびのきサウジ遺跡Ⅱ－土佐山田観光開発株式会社寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集 (財)高知県埋蔵文化財センター 1992
- (5) 『大塚遺跡発掘調査報告書－個人宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』土佐山田町埋蔵文化財報告書第9集 土佐山田町教育委員会 1991  
『大塚遺跡Ⅱ－個人病院駐車場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』土佐山田町埋蔵文化財報告書第24集 土佐山田町教育委員会 2004
- (6) 『伏原大塚古墳』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 土佐山田町教育委員会 1993
- (7) 『長宗我部地検帳 香美郡下』高知県立図書館 1962

#### 参考文献

- 『楠目城跡(山田城跡)』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第26集 土佐山田町教育委員会 2002
- 小林健太郎「戦国末期土佐国における地方的中心集落－香我美郡山田市の事例研究－」『歴史地理研究と都市研究(上)』藤岡謙次郎先生退官記念事業会



# 遺物觀察表

#### 凡 例

1. カッコ付きの数値は残存値である。
2. 赤色風化礫は赤色礫と略した。
3. ナデ調整をナデ、ハケ調整をハケ、ミガキ調整をミガキ、ヘラ削り調整を削りと略した。

遺物観察表 1

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
1	I区 第II層	弥生土器 壺	14.6	(5.5)	—	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	頸部は粗いハケ。	広口壺。 摩耗する。	
2	〃	〃	18.6	(4.7)	—	橙 明赤褐	やや 不良	〃	内面が横方向のハケ, 外面が縦方向 のハケ。	広口壺。 摩耗する。	
3	〃	〃	17.6	(3.3)	—	橙 橙	やや 良好	密。粗粒砂を少 し含む。	口縁端部に円形浮文を貼付。	広口壺。 摩耗する。	
4	〃	〃	22.2	(1.6)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	粗。細粒砂を非 常に多く含む。	ヨコナデ。	広口壺。	
5	〃	〃	12.8	(3.0)	—	灰黄褐 にぶい橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	ヨコナデ。	複合口縁壺。	
6	〃	〃	—	(3.1)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面が横方向のハケ, 外面が縦方向 のハケ。	複合口縁壺。 摩耗する。	
7	〃	〃	—	(8.0)	—	橙 橙	良好	密。極粗粒砂を 少し含む。	内面が横方向の粗いハケ及びナ デ, 外面が縦方向の粗いハケ。口縁 部外面に櫛描の波状文。	複合口縁壺。	
8	〃	〃	—	(3.4)	4.6	黄灰 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	内面が粗雑なナデ, 胴部外面は縦方 向のハケ, 底部外面はナデ。	内面に黒斑 あり。	
9	〃	〃	—	(11.2)	3.0	明褐 橙	〃	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	底部内面がハケ, 胴部内面が縦方向 のナデ, 外面はタタキ後縦方向のハ ケ。	著しく摩耗 する。	
10	〃	〃	—	(2.5)	6.0	橙 橙	やや 不良	やや密。極粗粒 砂と赤色礫を 含む。		著しく摩耗 する。	
11	〃	〃	—	(3.0)	6.0	褐灰 にぶい橙	良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面がナデ, 胴部外面が縦方向のハ ケ, 底部外面はナデ。		
12	〃	〃	—	(2.5)	4.6	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	〃	内面がナデ, 胴部外面は縦方向のハ ケがわずかに残る。底部外面はナ デ。	摩耗する。	
13	〃	〃	—	(5.2)	7.2	にぶい橙 橙	〃	やや粗。粗粒砂 と極粗粒砂, 赤 色礫を含む。		摩耗する。	
14	〃	〃	—	(5.8)	8.6	にぶい黄橙 にぶい黄橙	〃	やや密。	内面がハケ後一部ナデ, 胴部外面は 粗いハケがわずかに残る。底部外面 はナデ。	摩耗する。	
15	〃	〃	—	(4.7)	7.6	橙 橙	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	胴部外面はナデ。	摩耗する。外 面底部に黒 斑あり。	
16	〃	弥生土器 甕	15.8	(4.6)	—	〃	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	頸部内面が横方向のハケ, 口縁部が ヨコナデ, 頸部外面がナデ。		
17	〃	〃	15.4	(3.5)	—	〃	やや 良好	やや密。粗粒砂 を多く含む。		摩耗する。	
18	〃	〃	12.0	(3.9)	—	〃	良好	密。細粒砂を含 む。	口縁部は叩き出し成形。胴部内面が ハケ後ナデ, 口縁部がハケ, 胴部外 面がタタキ。		
19	〃	〃	13.6	(4.0)	—	にぶい黄橙 褐灰	やや 不良	粗。極粗粒砂を 多く含む。	胴部内面が斜め方向のハケ, 胴部外 面はタタキがわずかに残る。	著しく摩耗 する。	
20	〃	〃	15.0	(4.5)	—	橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	胴部内面がナデ, 口縁部はヨコナデ 後内面に横方向のハケ。外面はタタ キ後ナデ。	摩耗する。	

遺物観察表 2

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
21	I区 第II層	弥生土器 甕	—	(5.5)	40	にぶい橙 にぶい黄褐	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面はナデ。	摩耗する。
22	〃	〃	—	(4.2)	48	にぶい赤褐 にぶい赤褐	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	胴部外面は縦方向のハケ、底部外面 はナデ。	摩耗する。
23	〃	〃	—	(4.1)	4.6	にぶい橙 褐灰	やや 良好	やや密。細粒砂 を含む。		摩耗する。 外面に黒斑 あり。
24	〃	〃	—	(4.2)	5.0	黒褐 にぶい褐	〃	やや粗。粗粒砂 を含む。	内面がナデ、胴部外面は縦方向のハ ケ、底部外面はナデ。	摩耗する。 内面に黒斑 あり。
25	〃	〃	—	(6.1)	4.0	にぶい橙 にぶい黄橙	良好	やや密。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦 方向のハケ。底部外面はタタキ。	
26	〃	〃	—	(3.6)	5.0	〃	〃	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面がヘラナデ、胴部外面がタタ キ、底部外面がナデで工具の圧痕が 残る。	
27	〃	〃	—	(2.4)	3.4	橙 橙	やや 良好	やや粗。細粒砂 を多く含む。	胴部外面にわずかにハケが残る。	摩耗する。 外面に黒斑 あり。
28	〃	〃	—	(2.2)	3.4	灰黄褐 褐灰	良好	〃	内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦 方向のハケ、底部外面がタタキ。	内外面に黒 斑あり。
29	〃	〃	—	(4.3)	2.8	にぶい黄褐 黒褐	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	ナデ。	外面に黒斑 あり。
30	〃	〃	—	(4.6)	3.6	にぶい褐 にぶい橙	やや 良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面が縦方向のナデ、胴部外面がタ タキ、底部外面がナデ。	
31	〃	〃	—	(4.7)	1.8	にぶい黄褐 にぶい褐	良好	粗。粗粒砂を多 く含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナ デ、底部外面がナデ。	外面に黒斑 あり。
32	〃	〃	—	(4.6)	3.0	褐灰 灰褐	やや 良好	〃	内面がナデ、外面はタタキ。	外面に煤が 付着。
33	〃	弥生土器 甌	—	(3.3)	1.6	にぶい橙 灰黄褐	〃	やや粗。粗粒砂 を含む。	底部がナデで、径1.4cmの円孔を1孔 穿つ。	摩耗する。
34	〃	弥生土器 鉢	—	(5.9)	4.0	黒 橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	内面が横方向のハケで、底部にナデ を加える。	摩耗する。 内面に黒斑 あり。
35	〃	〃	32.0	(7.4)	—	にぶい橙 にぶい褐	〃	粗。極粗粒砂を 多く含む。	体部内面が横方向のハケ、口縁部外 面には斜め方向のハケがわずかに 残る。	摩耗する。
36	〃	弥生土器 高杯	—	(5.0)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。細粒砂を多 く含む。	脚部内面が横方向のケズリで上部 にははしほり目が残る。脚部外面はナ デ。櫛描の直線文あり。	
37	〃	〃	—	(5.7)	—	明褐 褐	やや 不良	やや粗。粗粒砂 を非常に多く 含む。	脚部外面に縦方向のハケがわずかに 残る。	摩耗する。
38	〃	土師質土器 小皿	5.8	1.3	4.1	にぶい橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。	回転糸切り。	摩耗する。
39	〃	土製品 支脚	—	(4.1)	7.0	— にぶい橙	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	中空。ナデで、脚柱部にははしほり目 と指頭圧痕が残る。	
40	I区 SB1	〃	—	(3.6)	7.6	橙 橙	〃	密。粗粒砂を少 し含む。	中空。ナデ。	

遺物観察表 3

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
41	I区 SK2	弥生土器 手捏ね土器	—	(3.8)	3.8	橙 橙	良好	密。細粒砂を含 む。	粗雑なナデ。	外面に黒斑 あり。
42	〃	土師質土器 杯	—	(2.4)	3.8	〃	〃	やや粗。細粒砂 を多く含む。	回転ナデ。	摩耗する。
43	〃	瓦質土器 鍋	15.0	(3.0)	—	灰 灰黄	やや 良好	やや密。極細粒 砂を少し含む。		著しく摩耗 する。
44	〃	土製品 土錘	全長 (3.5)	全幅 (1.4)	孔径 (0.7)	— 浅黄	〃	密。	円柱形。	摩耗する。 重量48g
45	I区 SD1	弥生土器 壺	14.9	(4.7)	—	灰 にぶい黄橙	やや 不良	粗。極粗粒砂を 非常に多く含む。	口縁部外面に粗い縦方向のハケが わずかに残る。	広口壺。 摩耗する。
46	〃	〃	16.8	(7.3)	—	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。細粒砂 を含む。	胴部内面がナデ、頸部内面がハケ、 口縁部がナデ、口縁端部がヨコナ デ、外面が縦方向のハケ。	広口壺。
47	〃	〃	17.6	(4.0)	—	橙 明赤褐	良好	〃	頸部内面が横方向のハケ、口縁端部 がヨコナデ、外面が縦方向の細かい ハケ。	広口壺。
48	〃	〃	—	(6.6)	—	橙 橙	やや 良好	やや粗。極細粒 砂、チャート、赤 色礫を含む。		複合口縁壺。 著しく摩耗 する。
49	〃	〃	15.6	(6.4)	—	にぶい黄橙 橙	〃	やや密。粗粒砂 を多く含む。	胴部内面がナデ後ケズリ、口縁部が ヨコナデ、胴部外面がタタキ後縦方 向のハケ。	
50	〃	〃	—	(5.1)	6.2	にぶい黄橙 にぶい橙	良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面はナデ。	摩耗する。
51	〃	〃	—	(8.6)	8.4	橙 黄灰	やや 良好	やや密。粗粒砂、 赤色礫、チャート を含む。	内面が粗いハケ後ナデ、胴部外面が タタキ後縦方向の粗いハケ。	摩耗する。 外面に黒斑 あり。
52	〃	〃	—	(23.6)	—	橙 橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。	胴部内面が縦方向のナデ、頸部内面 がヘラナデ、胴部外面が縦方向の粗 いハケ。	摩耗する。
53	〃	弥生土器 甕	15.0	(5.7)	—	にぶい褐 にぶい褐	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	胴部内面がナデ、口縁部はヨコナデ 後内面に横方向のハケ、胴部外面は 縦方向のハケ。口縁端部に凹線2条。	
54	〃	〃	15.8	(4.8)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	胴部内面にハケ、口縁部はヨコナデ 後端部を面取り、胴部外面は細かい 縦方向のハケ。	
55	〃	〃	16.2	(6.6)	—	橙 橙	〃	密。粗粒砂と チャートを含む。	胴部内面が縦方向の強いナデ、口縁 部はヨコナデ後端部を面取り、胴部 外面はタタキ後縦方向のハケ。	
56	〃	〃	13.8	(5.4)	—	にぶい橙 にぶい赤褐	〃	密。粗粒砂を少 し含む。チャート を含む。	胴部内面がナデ、胴部外面はタタ キ。口縁部は内面がハケ、外面がタ タキ後ナデ、端部は面取り。	外面に煤が 付着。
57	〃	〃	14.8	(9.9)	—	橙 橙	〃	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	胴部内面が斜め方向のハケ、外面は タタキ後口縁部にヨコナデ、端部は 面取り。	
58	〃	弥生土器 甌	—	(3.0)	3.7	灰黄褐 にぶい橙	〃	〃	内面はナデ。底部中央に径4mmの円 孔を1孔穿つ。	摩耗する。
59	〃	弥生土器 鉢	18.7	(4.7)	—	橙 明褐	やや 良好	やや密。粗粒砂 を少し含む。	口縁部にヨコナデ、内面に横方向の 細かいハケ、外面は丁寧なナデ。	
60	〃	〃	12.0	(6.7)	—	にぶい黄橙 にぶい橙	良好	密。	体部内面がナデ、口縁部内面が横方 向のハケ、外面が丁寧なナデで亀裂 が入る。	

遺物観察表 4

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
61	I区 SD1	弥生土器 鉢	—	(4.7)	3.6	橙 橙	やや 良好	密。粗粒砂を少 し含む。	内面が横方向の粗いハケ、外面はナ デ。		
62	〃	〃	—	(2.9)	3.7	にぶい褐 にぶい赤褐	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ、体部外面には縦方向の ハケがわずかに残り、底部外面はタ タキ。		
63	〃	〃	—	(2.4)	1.3	にぶい橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を多く含む。	内面がナデ、体部外面には縦方向の ハケがわずかに残り、底部外面はナ デ。		
64	〃	〃	—	(3.7)	4.6	橙 にぶい黄橙	良好	密。粗粒砂を含 む。	内面が密なミガキ、体部外面がナ デ、底部外面には木葉痕が残る。	底部に黒斑 あり。	
65	〃	〃	14.8	(7.3)	—	橙 橙	〃	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	口縁部内面に横方向のハケ後縦方 向のナデ、外面がナデ。		
66	〃	〃	16.2	(5.0)	—	〃	〃	密。極粗粒砂を 含む。	内面はわずかにハケが残り、外面は タタキ後ナデ。	著しく磨耗 する。	
67	〃	〃	13.0	6.6	7.4	黄褐 にぶい橙	やや 不良	粗。極粗粒砂を 多く含む。チャ ートを含む。	内面はヘラ状工具の圧痕がわずか に残り、外面はナデ。		
68	〃	弥生土器 手捏ね土器	6.0	4.1	3.4	にぶい橙 橙	良好	やや密。粗粒砂 を少し含む。	ナデで、指頭圧痕が残る。		
69	〃	鉄製品 釘	全長 (3.3)	全幅 (1.2)	全厚 (0.8)	—	—	—	断面は矩形。全面に錆化。	重量4.9g	
70	I区 SD2	弥生土器 壺	—	(5.7)	—	にぶい橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。極粗粒砂と 極細粒砂、赤色 礫を含む。	内面がナデで指頭圧痕が残り、外面 はナデで口縁部に櫛描文、頸部に縦 方向の沈線文。		
71	〃	〃	13.0	(3.6)	—	橙 明赤褐	不良	密。極粗粒砂を 少し含む。チャ ートを含む。	外面に縦方向のミガキがわずかに 残る。	磨耗する。	
72	〃	〃	12.2	(6.4)	—	にぶい赤褐 にぶい赤褐	やや 良好	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。	口縁部にわずかにハケが残る。	広口壺。 磨耗する。	
73	〃	〃	—	(5.7)	—	橙 にぶい橙	やや 不良	密。粗粒砂を含 む。	胴部内面が横方向の細かいハケ、口 縁部外面には縦方向のハケがわず かに残る。	広口壺。 磨耗する。	
74	〃	〃	20.0	(6.6)	—	橙 橙	良好	密。粗粒砂と チャートを含 む。	胴部内面がヘラナデ及びナデ、口縁 部内面が横方向のハケ、外面は縦方 向のハケ後胴部にナデ。	広口壺。	
75	〃	〃	21.0	(4.4)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 と赤色礫を含 む。	内面はハケで工具の圧痕が残る。 外面は横方向のナデ後縦方向のハ ケ。	広口壺。 著しく磨耗 する。	
76	〃	〃	—	(2.3)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。極粗粒砂を 少し含む。	外面は縦方向のハケ後口縁端部に ヨコナデ。	広口壺。 内面は磨耗 する。	
77	〃	〃	—	(3.7)	—	〃	〃	やや密。粗粒砂 とチャートを含 む。	外面は斜め方向のハケ。	複合口縁壺。 内面は磨耗 する。	
78	〃	〃	—	(1.8)	—	橙 橙	やや 良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	外面にヘラ状工具の圧痕が残る。口 縁部の屈曲部には刻み目を施し、波 状口縁風になる。	複合口縁壺。 摩耗する。	
79	〃	〃	22.6	(4.8)	—	〃	良好	密。粗粒砂を少 し含む。	ハケで、口縁端部はヨコナデ。口縁 部外面には櫛描の直線文及び波状 文。	複合口縁壺。	
80	〃	〃	—	(2.7)	4.0	明褐 明褐	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面がハケ、胴部外面がタタキ後縦 方向のハケ、底部外面がタタキ。		

遺物観察表 5

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
81	I 区 SD2	弥生土器 壺	—	(4.6)	6.6	橙 橙	良好	密。極粗粒砂を少 し含む。チャート を含む。	ナデ。	外面は磨耗 する。底部に 黒斑あり。
82	〃	〃	—	(4.8)	5.7	〃	やや 良好	密。粗粒砂を少 し含む。	内面がナデ、胴部外面は縦方向のハ ケ。	磨耗する。 外面に黒斑 あり。
83	〃	弥生土器 甕	—	(2.0)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。細粒砂と 赤色礫、チャート を含む。	ヨコナデ。口縁端部に凹線を4条。	
84	〃	〃	15.2	(1.4)	—	橙 橙	〃	やや密。細粒砂を 非常に多く含む。 赤色礫を含む。	ヨコナデ。口縁端部に凹線を2条。	
85	〃	〃	10.0	(4.9)	—	〃	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。チャート を含む。	胴部内面の一部にケズリ、口縁部は ヨコナデ後外面に縦方向のハケ、胴 部外面は斜め方向のハケ。	煤が付着。
86	〃	〃	12.0	(3.5)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。粗粒砂を少 し含む。	胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデ 後外面に縦方向のハケ。口縁端部は 面取り。	
87	〃	〃	14.6	(5.3)	—	〃	〃	やや密。粗粒砂を 少し含む。	胴部内面がナデ後ハケ、口縁部内面 がハケ、外面はタタキ。口縁部は叩 き出し成形で、端部は面取り。	
88	〃	〃	16.5	(4.5)	—	明黄褐 明黄褐	〃	やや粗。極粗細 粒を少し含む。	内面が横方向のハケ、口縁部外面が ナデ、胴部外面にはわずかにタタキ が残る。口縁端部は面取り。	
89	〃	〃	18.0	(3.7)	—	にぶい赤褐 にぶい赤褐	〃	やや粗。粗粒砂 を含む。	内面が斜め方向の細かいハケ、外面 がタタキ。口縁部は叩き出し成形 で、端部は面取り。	
90	〃	〃	15.8	(4.7)	—	にぶい黄橙 にぶい褐	〃	やや密。細粒砂 と粗粒砂を含 む。	胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデ 後内面にハケ、外面はタタキ。口縁 部は叩き出し成形。	
91	〃	〃	12.7	(5.0)	—	橙 橙	〃	やや粗。極粗粒 砂とチャート を含む。	胴部内面がナデ、口縁部内面がハ ケ、外面がタタキ。口縁部は叩き出 し成形。	
92	〃	〃	12.0	(5.1)	—	にぶい橙 橙	やや 良好	密。細粒砂を含 む。赤色礫と雲 母を含む。	胴部内面がナデ後ハケ、口縁部がヨ コナデ、外面はタタキ後ナデ。口縁 部は叩き出し成形。	
93	〃	〃	11.2	(7.7)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面の胴部下半がハケ、外面はタタ キ後口縁部にナデ、端部は面取り。 口縁部は叩き出し成形。	煤が付着。
94	〃	〃	18.4	(5.0)	—	橙 にぶい褐	やや 良好	密。細粒砂を含 む。	胴部内面が縦方向のハケ、口縁部内 面が斜め方向のハケ、外面はタタキ 後口縁部に縦方向のハケ。	煤が付着。
95	〃	〃	16.4	(4.7)	—	橙 橙	良好	やや密。極粗粒 砂と粗粒砂を含 む。	内面がナデ及びハケ、外面がタタ キ。口縁部は叩き出し成形、端部は 面取り。	外面に黒斑 あり。
96	〃	〃	15.2	(5.9)	—	浅黄橙 浅黄橙	〃	密。極粗粒砂を 少し含む。	内面がハケ、外面はタタキ後口縁部 にナデ。口縁部は叩き出し成形。	
97	〃	〃	15.3	(6.7)	—	にぶい橙 橙	やや 良好	密。極粗粒砂を 含む。		著しく磨耗 する。
98	〃	〃	31.0	(10.5)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。極粗粒 砂とチャート を含む。	胴部内面が縦方向のハケ、口縁部が ヨコナデ、胴部外面が丁寧なナデ。	
99	〃	弥生土器 甕か	—	(5.7)	4.9	褐灰 にぶい黄橙	やや 不良	粗。粗粒砂を多 く含む。	底部外面に工具の圧痕のような凹 みがある。	著しく磨耗 する。 黒斑あり。
100	〃	弥生土器 甕	—	(3.3)	5.7	橙 橙	やや 良好	密。極粗粒砂を 含む。		著しく磨耗 する。

遺物観察表 6

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
101	I 区 SD2	弥生土器 甕	—	(2.6)	4.8	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや 良好	密。極細粒砂を 多く含む。	内面にヘラナデがわずかに残る。	搬入品。	
102	〃	〃	—	(8.7)	5.2	橙 明赤褐	やや 不良	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。		著しく磨耗 する。	
103	〃	〃	—	(4.9)	3.0	褐灰 橙	良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面が強いナデ、胴部外面にはわず かにハケが残り、底部外面はナデ。		
104	〃	〃	—	(2.9)	4.0	黒 橙	〃	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面が板ナデ、外面がナデ。		
105	〃	〃	—	(5.1)	4.2	明赤褐 橙	やや 不良	やや密。極粗粒 砂を含む。	内外面にわずかに縦方向のハケが 残る。	磨耗する。煤 が付着。黒斑 あり。	
106	〃	〃	—	(4.2)	3.4	橙 明褐	良好	密。極粗粒砂を 含む。	胴部外面が右上がりの螺旋状のタ タキ、底部外面はナデ。	磨耗する。	
107	〃	〃	—	(3.2)	4.1	浅黄 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面がナデ、胴部外面にはタタキと 縦方向のハケがわずかに残る。	黒斑あり。	
108	〃	〃	—	(5.0)	4.0	橙 にぶい褐	〃	粗。極粗粒砂を 含む。	内面がナデ、底部外面がタタキ。	磨耗する。	
109	〃	〃	—	(4.7)	2.0	にぶい黄橙 橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	内面がハケ後底部にナデ、胴部外面 はタタキ後縦方向のハケ、底部外面 はナデ。	黒斑あり。	
110	〃	〃	—	(15.4)	3.0	にぶい褐 にぶい橙	〃	やや粗。粗粒砂 を多く含む。8mm 大の礫を含む。	内面がナデ、胴部外面は左上がりの タタキ後縦方向のハケ。	煤が付着。	
111	〃	〃	—	(6.6)	3.4	明赤褐 橙	良好	やや密。細粒砂 を含む。5mm大の 礫を少し含む。	内面がナデ、胴部外面がハケ、底部 外面がナデ。		
112	〃	〃	—	(3.3)	5.2	黄橙 黄橙	〃	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	底部内面がナデ、胴部内面がハケ、 胴部外面がタタキ後丁寧なナデ、底 部外面がナデ。		
113	〃	〃	—	(6.3)	—	灰褐 橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナ デ、底部外面がナデ。	黒斑あり。	
114	〃	弥生土器 甌	—	(13.6)	1.5	橙 橙	〃	やや密。粗粒砂 を少し含む。	内面がナデ、胴部外面はタタキ。底 部中央に径8mmの円孔を穿つ。		
115	〃	弥生土器 鉢	15.0	(6.0)	—	〃	やや 良好	やや密。極粗粒 砂を含む。9mm 大の礫を含む。	内面は細かい斜め方向のハケ。	磨耗する。	
116	〃	〃	14.1	(6.9)	—	〃	〃	密。粗粒砂を含 む。	内面が板ナデ、外面はタタキ後丁寧 なナデ。		
117	〃	〃	17.4	(3.9)	—	〃	〃	密。	内面にわずかにハケが残り、外面は タタキ後ナデ。口縁端部は面取り。		
118	〃	〃	16.6	(6.4)	—	にぶい橙 にぶい黄橙	〃	やや密。細粒砂 を含む。	体部内面がナデ、口縁部内面が横方 向のハケ後ナデ、外面はタタキ後ナ デ。口縁端部は面取り。		
119	〃	〃	—	(3.5)	2.0	橙 橙	やや 良好	密。粗粒砂を少 し含む。	内面が横方向のハケ、外面がナデ。		
120	〃	〃	—	(4.7)	3.6	黒 にぶい黄橙	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面が縦方向の強いナデ、体部外面 がタタキ後ハケ。	磨耗する。	



遺物観察表 7

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
121	I 区 SD2	弥生土器 鉢	31.8	(7.0)	—	橙 橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面が横方向のハケ、外面が縦方向 の細かいハケで、口縁端部は面取 り。	黒斑あり。
122	〃	弥生土器 高杯	—	(3.6)	—	にぶい橙 橙	良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	杯底部と脚部外面にわずかにミガ キが残る。脚部内面はハケで、上部 はナデ。	
123	〃	〃	—	(5.7)	—	橙 橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を含む。	ナデ。	
124	〃	〃	—	(8.8)	—	〃	〃	やや密。粗粒砂 を多く含む。赤 色礫を含む。	外面の脚部上半が縦方向のハケ、下 半がナデ、内面はしほり目が残る。	
125	〃	〃	—	(6.5)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。細粒砂を含 む。	脚部内面にしほり目が残る。2箇所 に円孔あり。	磨耗する。
126	〃	土師器 壺	—	(6.8)	—	にぶい橙 橙	〃	やや粗。細粒砂 を多く含む。6mm 大の礫を含む。	底部内面がナデ、胴部内面が横方向 のハケ。	磨耗する。
127	〃	石製品 石包丁	全長 8.9	全幅 3.9	全厚 1.2	—	—	—	打製石包丁。両端に抉りを入れ、刃 部は鋭く尖る。石材は泥岩とみられ る。	重量55.7g
128	I 区 SD3	弥生土器 壺	13.3	(3.0)	—	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	外面は縦方向のミガキ。	広口壺。 磨耗する。
129	〃	〃	17.6	(2.2)	—	橙 橙	〃	やや密。細粒砂 を含む。	口縁部内面が横方向のハケ、外面が 縦方向のハケ。	広口壺。 磨耗する。
130	〃	〃	14.9	(3.7)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。粗粒砂 を少し含む。	内面が横方向のハケ、外面が斜め方 向のハケ。	広口壺。 磨耗する。
131	〃	〃	21.6	(2.0)	—	にぶい橙 にぶい赤褐	やや 不良	やや密。粗粒砂 を含む。	内面が横方向のハケ、外面が縦方向 のハケ。	広口壺。 磨耗する。
132	〃	〃	16.4	(5.2)	—	にぶい黄橙 橙	やや 良好	〃	内面がナデ及びハケ、外面が縦方向 のハケ。	広口壺。 磨耗する。
133	〃	〃	—	(2.6)	—	にぶい黄橙 にぶい橙	〃	やや密。粗粒砂 を少し含む。	ヨコナデ。外面に櫛描の波状文。	広口壺。
134	〃	〃	18.2	(5.1)	—	橙 橙	〃	やや密。	外面に縦方向の粗いハケが残る。	広口壺。 磨耗する。
135	〃	〃	19.2	(2.8)	—	〃	良好	やや粗。極粗粒砂 を少し含む。7mm 大の礫を含む。	口縁端部がヨコナデ、その他はナ デ。外面に鋸歯文風の沈線による文 様。	広口壺。
136	〃	〃	—	(3.5)	—	〃	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面は斜め方向のハケ。	磨耗する。
137	〃	〃	—	(3.9)	7.2	にぶい橙 橙	良好	やや密。極粗粒砂 と赤色礫、チャ ートを含む。	ナデ。	黒斑あり。
138	〃	〃	—	(5.0)	6.8	橙 橙	〃	密。	内面が細かいハケ、外面がナデ。	
139	〃	〃	—	(5.9)	5.0	明黄褐 橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面が強いナデ、外面にはわずかに 縦方向にハケが残る。	磨耗する。
140	〃	弥生土器 甕	—	(1.1)	—	褐 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。細粒砂 を含む。		磨耗する。

遺物観察表 8

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
141	I区 SD3	弥生土器 甕	10.0	(4.6)	—	橙 橙	良好	やや密。粗粒砂を含む。	胴部内面が縦方向の強いナデ、口縁部内面がハケ、外面はナデ。	
142	〃	〃	13.2	(3.9)	—	にぶい黄橙 明赤褐	〃	やや粗。	口縁部がヨコナデ、胴部外面はナデで、口縁端部は面取り。	磨耗する。
143	〃	〃	12.0	(4.5)	—	橙 橙	〃	やや密。極粗粒砂を多く含む。	口縁部がヨコナデ、胴部はナデで、口縁端部は面取り。	
144	〃	〃	13.9	(3.5)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや密。細粒砂を含む。	胴部内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面はタタキ後胴部にハケ。口縁部は叩き出し成形。	
145	〃	〃	—	(4.8)	—	〃	やや 良好	〃	胴部内面がナデ及びハケ、口縁部内面がヨコナデ後ハケ、外面はタタキ後縦方向のハケ。	
146	〃	〃	15.9	(3.4)	—	にぶい橙 明黄褐	〃	〃	胴部内面はナデ、口縁部内面がヨコナデ、外面はタタキ後ナデ。口縁端部は面取り。	煤が付着。
147	〃	〃	15.6	(9.2)	—	橙 にぶい橙	良好	やや密。粗粒砂を少し含む。	胴部内面が縦方向のナデ、口縁部内面が横方向のハケ、外面は左上がりのタタキ。	煤が付着。
148	〃	〃	—	(1.8)	5.2	褐灰 にぶい橙	〃	密。粗粒砂を少し含む。9mm大の礫を含む。	ナデで、外面には指頭圧痕が残る。	黒斑あり。
149	〃	〃	—	(6.8)	5.4	橙 橙	〃	やや密。極粗粒砂とチャートを含む。	内面が縦方向のケズリ、胴部外面には細かいハケがわずかに残り、底部外面はナデ。	
150	〃	〃	—	(5.8)	—	〃	やや 良好	密。	内面が縦方向のナデ、胴部外面がタタキ後丁寧なナデ、底部外面がナデ。	
151	〃	〃	—	(4.8)	6.8	〃	やや 不良	密。粗粒砂を含む。		著しく磨耗する。
152	〃	〃	—	(4.2)	4.2	橙 明赤褐	やや 良好	やや粗。粗粒砂を多く含む。	内面はハケ。	磨耗する。
153	〃	〃	—	(4.3)	4.3	橙 橙	〃	やや粗。極粗粒砂を含む。		著しく磨耗する。
154	〃	〃	—	(3.4)	5.2	オリーブ褐 黄橙	〃	やや粗。粗粒砂を多く含む。		著しく磨耗する。
155	〃	〃	—	(5.6)	4.6	明赤褐 橙	良好	やや粗。極粗粒砂を少し含む。	底部内面がナデ、胴部内面が粗いハケ、外面はナデ。	
156	〃	〃	—	(7.0)	5.6	にぶい褐 にぶい橙	やや 良好	粗。粗粒砂を多く含む。		著しく磨耗する。 煤が付着。
157	〃	〃	—	(3.6)	3.0	橙 橙	良好	粗。極粗粒砂を多く含む。	内面がナデ、底部外面はタタキ。	磨耗する。
158	〃	〃	—	(3.3)	3.8	〃	〃	やや密。粗粒砂を少し含む。	内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデ。	
159	〃	〃	—	(3.8)	4.0	〃	〃	やや粗。極粗粒砂を少し含む。	内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデ。	
160	〃	〃	—	(4.3)	3.0	明赤褐 橙	やや 良好	やや粗。極粗粒砂を多く含む。	胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデ。	磨耗する。

遺物観察表 9

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
161	I区 SD3	弥生土器 甕	—	(4.1)	2.9	橙 橙	良好	やや密。粗粒砂を含む。	底部内面がハケ、外面がタタキ。	黒斑あり。
162	〃	〃	—	(6.0)	4.4	明赤褐 明赤褐	やや 良好	粗。極粗粒砂を含む。細粒砂を多く含む。	内面はナデ。	摩耗する。
163	〃	〃	—	(4.0)	1.6	橙 黄橙	良好	やや密。粗粒砂と赤色礫、チャートを含む。	内面がナデ、胴部外面が細かいハケ、底部外面がナデ。	
164	〃	〃	—	(2.8)	2.7	橙 橙	〃	やや粗。粗粒砂を多く含む。8mm大の礫を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面がナデ。	
165	〃	〃	—	(5.2)	—	にぶい黄橙 明黄褐	〃	密。細粒砂を含む。	胴部内面にハケ後底部にナデ、外面は縦方向のハケ。	内外面に黒斑あり。
166	〃	〃	—	(4.1)	2.0	橙 橙	〃	密。	内面が丁寧なナデで一部ハケ、胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面がナデ。	黒斑あり。
167	〃	〃	—	(13.1)	—	明黄褐 にぶい黄橙	やや 不良	粗。粗粒砂を多く含む。チャートを含む。	内面がハケ、外面がタタキ後胴部下半にハケ。	磨耗する。
168	〃	〃	—	(4.4)	4.0	橙 橙	やや 良好	やや密。極粗粒砂を少し含む。	内面がナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデ。	
169	〃	〃	—	(6.0)	6.8	にぶい橙 にぶい橙	〃	密。粗粒砂を少し含む。チャートを含む。	内面がハケ及びナデ、外面は丁寧なナデ。	
170	〃	弥生土器 甌	—	(4.2)	—	〃	〃	やや粗。粗粒砂を多く含む。極粗粒砂を含む。	内面がナデで一部ハケとケズリが残る。底部中央には径5mmの円孔を1孔穿つ。	磨耗する。
171	〃	弥生土器 鉢	13.8	(5.1)	—	にぶい橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。極粗粒砂を含む。	口縁部にヨコナデ後体部内面に縦方向のナデ、口縁端部は面取り。	磨耗する。
172	〃	〃	18.6	6.5	5.7	橙 橙	やや 良好	やや密。粗粒砂を多く含む。赤色礫を含む。	体部内面が横方向のハケ後縦方向のナデ、口縁部がヨコナデで端部は面取り。底部外面はナデ。	
173	〃	弥生土器 高杯	—	(2.1)	—	明赤褐 明赤褐	〃	やや密。極粗粒砂を含む。		磨耗する。
174	〃	〃	—	(4.1)	—	橙 橙	やや 不良	やや粗。細粒砂を非常に多く含む。		磨耗する。
175	〃	〃	—	(3.7)	11.6	にぶい褐 にぶい赤褐	やや 良好	やや密。粗粒砂を含む。	外面が縦方向のミガキ、内面にはわずかにハケが残る。	磨耗する。
176	〃	〃	—	(4.1)	—	明赤褐 明赤褐	〃	やや密。細粒砂を含む。粗粒砂を少し含む。		著しく磨耗する。
177	〃	〃	—	(1.5)	17.8	にぶい赤褐 にぶい赤褐	〃	やや密。細粒砂を多く含む。	裾端部がヨコナデ、内面が横方向のケズリ。	讃岐。
178	〃	弥生土器 手捏ね土器	4.8	4.5	2.0	褐灰 褐灰	良好	やや密。細粒砂を含む。	ナデで指頭圧痕が顕著に残り、内面にはしほり目あり。	黒斑あり。
179	〃	〃	—	(4.3)	—	橙 橙	〃	やや粗。粗粒砂と0.5~1mm大の礫を含む。	内面と体部外面がナデ、底部外面はタタキ。	
180	〃	土製品 支脚	—	(6.9)	—	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	粗。細粒砂を多く含む。赤色礫を含む。	中空。外面はタタキ後ナデ、内面にはしほり目が残る。著しく凹凸あり。	被熱の痕跡あり。 黒斑あり。

遺物観察表 10

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面	内面・外面				
181	I 区 SD3	ガラス製品 小玉	全長 4.5mm	全幅 4.0mm	全厚 1.9mm	明青色	—	—		重量0.1g	
182	I 区 SD4	石製品 石鏃	全長 2.1	全幅 1.3	全厚 0.4	—	—	—	打製石鏃。凹基式。石材は姫島産黒曜石。	重量0.6g	
183	〃	石製品 叩石	全長 12.5	全幅 11.0	全厚 5.3	—	—	—	平面形は不整楕円形。一面に敲打痕が残る。石材は砂岩の河原石。	重量1.1kg	
184	I 区 SD6	弥生土器 壺	—	(8.1)	6.8	黒橙	やや 良好	粗。粗粒砂を多く含む。	内面はハケ後縦方向のナデ。外面に粗粒砂が残る。	磨耗する。 黒斑あり。	
185	〃	弥生土器 甕	22.0	(3.6)	—	にぶい橙 橙	良好	やや密。粗粒砂と赤色礫を含む。	胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデで外面にはハケがわずかに残る。		
186	〃	須恵器 壺または甕	—	(3.8)	10.0	黄灰 灰	やや 良好	やや粗。細粒砂を多く含む。	胴部が回転ナデで内面にはナデを加える。底部外面はナデ。		
187	〃	青磁 碗	—	(2.2)	—	オリーブ灰 オリーブ灰	良好	やや密。黒色砂粒を含む。	龍泉窯系。濃緑色の釉を約1mmの厚さに施す。外面に鑄蓮弁文。		
188	I 区 P1	弥生土器 鉢	17.7	(5.2)	—	橙 橙	〃	密。	口縁部にヨコナデ後内面にハケ、外面にタタキ後ナデまたはハケ。口縁端部は面取り。		
189	I 区 P2	鉄製品 釘	全長 (5.7)	全幅 0.8	全厚 (0.6)	—	—	—	上端は丁字形、断面は方形。	重量2.7g	
190	I 区 P3	弥生土器 甕	—	(2.2)	4.6	黄灰 にぶい橙	良好	粗。極粗粒砂を多く含む。	内面がナデ、胴部外面がハケ、底部外面がナデ。		
191	I 区 P4	〃	16.1	(7.7)	—	橙 橙	〃	密。粗粒砂を少し含む。	胴部内面はハケ後ナデ、口縁部内面が板ナデ、外面はタタキ後ナデ及びハケ。口縁部は叩き出し成形。		
192	〃	〃	—	(4.5)	5.2	にぶい黄橙 にぶい黄橙	〃	やや粗。細粒砂を多く含む。	外面にハケがわずかに残る。	磨耗する。	
193	〃	〃	—	(2.4)	5.4	橙 橙	やや 良好	やや密。極粗粒砂を多く含む。	内面にハケがわずかに残り、胴部外面は左上がりのタタキ、底部外面はタタキ後ナデ。		
194	〃	弥生土器 高杯	—	(3.6)	11.0	〃	やや 不良	密。細粒砂を含む。	外面に縦方向のハケがわずかに残り、内面は横方向のナデ。裾部に径1cmの円孔が1箇所に残存。		
195	〃	石製品 砥石	全長 (18.5)	全幅 (6.8)	全厚 (4.7)	—	—	—	残存部で一面に擦痕が残る。使用面は平滑になる。石材は砂岩の割石。	重量1.0kg	
196	I 区 P5	弥生土器 甕	21.0	(3.7)	—	橙 橙	やや 不良	やや密。粗粒砂を含む。	頸部外面には縦方向のハケ。口縁端部は面取り。	著しく磨耗する。	
197	I 区 P6	弥生土器 壺	—	(4.3)	—	明黄褐 明黄褐	やや 良好	密。チャートを含む。極粗粒砂を少し含む。	内面が横方向のハケ及びナデ、外面はタタキ後縦方向のハケ。		
198	〃	弥生土器 鉢	—	(3.3)	2.6	黒 橙	良好	やや密。粗粒砂を多く含む。	内面がナデ、体部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデ。		
199	I 区 P7	土師質土器 杯	—	(2.5)	5.0	浅黄橙 浅黄橙	やや 良好	密。		著しく磨耗する。	
200	II 区 第三層	弥生土器 甕	15.4	(13.9)	—	橙 にぶい橙	良好	密。極粗粒砂を含む。	胴部内面がナデ、口縁部はヨコナデ後内面に横方向のハケ、外面は縦方向のハケ。	煤が付着。	

遺物観察表 11

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
201	Ⅱ区 SK4	弥生土器 甕	12.1	(13.5)	—	灰黄褐 にぶい褐	良好	密。	胴部内面が縦方向のナデ、口縁部内 面と外面がハケ。	外面は煤が 付着。黒斑あ り。
202	〃	〃	17.4	(6.5)	—	橙 にぶい橙	〃	密。極粗粒砂を 含む。	胴部内面がナデ、頸部内面が横方向 のハケ、外面は縦方向のハケ後口縁 部にヨコナデ。	
203	〃	〃	—	(5.5)	—	にぶい黄橙 にぶい褐	〃	密。細粒砂を少 し含む。	内面がナデ、外面が縦方向のハケ。	外面に煤が 付着。
204	〃	〃	—	(3.7)	4.2	橙 橙	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ、胴部外面が縦方向のハ ケ、底部外面がナデ。	
205	〃	〃	—	(7.2)	5.0	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや密。極粗粒 砂とチャート、 赤色礫を含む。	内面と胴部外面が縦方向のハケ、底 部外面がナデ。	
206	〃	〃	—	(5.0)	4.2	橙 橙	〃	やや密。細粒砂 を含む。	内面は縦方向の強いナデ。外面はナ デ。	外面は磨耗 する。
207	〃	〃	—	(9.5)	4.6	〃	やや 良好	粗。極粗粒砂を 非常に多く含 む。	底部外面はナデ。	著しく磨耗 する。
208	〃	〃	—	(22.0)	4.2	明黄褐 明黄褐	〃	密。5mm大の礫 と赤色礫を含 む。	底部外面はナデ。	著しく磨耗 する。黒斑あ り。
209	〃	弥生土器 高杯	—	(8.0)	15.6	にぶい褐 にぶい褐	良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	外面が縦方向の粗いハケ、端部がヨ コナデ、裾部内面が横方向のハケ、 脚柱部内面が縦方向のナデ。	
210	〃	〃	—	(10.4)	19.2	橙 明赤褐	〃	密。粗粒砂を含 む。	外面が裾部に縦方向のハケ後ミガ キ、端部はナデ、内面は横方向のハ ケ、脚柱部にしぼり目が残る。	円孔が3箇所 にあり。
211	〃	〃	25.6	(17.7)	—	明赤褐 橙	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	杯部は内面にミガキ、外面はハケ。 脚部外面にヘラナデ、脚部内面はハ ケでしぼり目が残る。	2孔1対の円 孔を4箇所に 配置。
212	Ⅲ・Ⅳ区 第Ⅱ層	須恵器 蓋	13.6	(2.5)	—	灰 灰	〃	やや密。	回転ナデ。	
213	〃	須恵器 高杯	—	(7.6)	—	にぶい黄褐 にぶい黄褐	〃	密。極細粒砂を 含む。	回転ナデ後内面に一部ナデ。外面に は凹線が2条と長方形の透かしが2 段あり。	
214	〃	須恵器 椀	—	(1.7)	6.0	灰黄 灰黄	やや 良好	密。	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸 切り。	
215	〃	土師質土器 椀	—	(2.1)	6.3	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや密。細粒砂 を含む。	断面台形を呈する扁平な高台を貼 付。	著しく磨耗 する。
216	〃	土師質土器 杯	—	(1.5)	6.4	灰白 灰白	〃	密。	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸 切り。	
217	〃	土師質土器 小杯	10.3	4.0	4.8	橙 にぶい橙	良好	密。細粒砂を含 む。	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸 切り。	
218	〃	土師質土器 小皿	8.4	1.7	3.8	にぶい黄橙 にぶい黄橙	〃	密。極細粒砂を 含む。	内面が板ナデ、外面はナデで著しく 亀裂が入る。	
219	〃	土師器 不明	—	(7.2)	—	黄灰 にぶい黄橙	〃	やや粗。粗粒砂 を多く含む。赤 色礫を含む。	回転ナデ後胴部外面の下半に回転 ヘラケズリ。底部外面は回転ヘラ切 り後ナデ。	黒斑あり。
220	〃	土師器 鍋	32.4	(6.3)	—	浅黄橙 灰黄褐	やや 不良	粗。極粗粒砂を 非常に多く含 む。		磨耗する。外 面に煤が付 着。備前型。

遺物観察表 12

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
221	Ⅲ・Ⅳ区 第Ⅱ層	土師器 釜	全長 (6.5)	全幅 2.5	全厚 2.0	浅黄 黄灰	良好	やや粗。粗粒砂 を非常に多く 含む。		脚部。 摩耗する。	
222	〃	備前焼 播鉢	27.5	(6.1)	—	黄灰 黄灰	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	回転ナデ。内面に残存部で6条の摺 目が残る。	口縁部に重 ね焼き痕が 残る。	
223	〃	〃	25.0	(5.7)	—	灰褐 にぶい赤褐	〃	密。	回転ナデ。内面に残存部で7条の摺 目が残る。		
224	〃	〃	—	(4.5)	14.0	灰黄 黄灰	〃	密。粗粒砂を含 む。	回転ナデで、底部外面はナデ。内面 には8条単位の摺目が1箇所に残 存。		
225	〃	近世磁器 皿	13.2	2.9	6.7	呉須：暗オ リーブ灰 生地：灰白	〃	密。	全面に透明釉。畳付を釉ハギ、見込 みに蛇の目釉ハギを行う。内面に草 花文と圏線の染め付け。	重ね焼き痕が 残る。肥前系 (波佐見)	
226	〃	古銭 寛永通宝	銭径 2.54	穿径 0.57	銭厚 0.13	—	—	—	背面には「文」字。	重量2.8g	
227	Ⅲ・Ⅳ区 第Ⅲ層	弥生土器 壺	24.9	(3.4)	—	橙 橙	良好	密。細粒砂を含 む。	内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外 面がハケ。口縁部外面にヘラ描きの 斜格子文。	広口壺。	
228	〃	〃	16.4	(3.2)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや粗。粗粒砂 を非常に多く 含む。	ヨコナデ。擬凹線を4条。	広口壺。	
229	〃	〃	14.0	(5.1)	—	橙 橙	やや 良好	密。極粗粒砂を 含む。	口縁部外面は縦方向のミガキ、頸部 外面には斜め方向のハケ。	広口壺。 磨耗する。	
230	〃	〃	21.8	(5.9)	—	黄灰 橙	良好	やや密。粗粒砂 を多く含む。	内面が横方向のハケ、外面が縦方向 のハケ。	広口壺。	
231	〃	〃	—	(2.8)	—	にぶい橙 橙	〃	密。極粗粒砂を 含む。	ヨコナデ後、口縁端部に半円形の竹 管文、外面に凹線の上下に線刻の鋸 歯文を2段施す。	広口壺。	
232	〃	〃	31.5	(5.4)	—	〃	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	ヨコナデ後、口縁部内面に刺突文、 口縁端部に竹管文を2列、口縁部外 面に刺突文と線刻の鋸歯文。	広口壺。	
233	〃	〃	18.8	(9.8)	—	明赤褐 明赤褐	〃	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	頸部内面がナデ及びハケ、口縁部内 面と外面がハケ、口縁端部はヨコナ デ、外面に刺突文と波状文。	広口壺。	
234	〃	〃	—	(6.2)	—	橙 にぶい黄橙	良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。 粗粒砂を含む。	内面が横方向のハケ後一部ナデ、外 面が縦方向のハケ及びヨコナデ。	複合口縁壺。	
235	〃	弥生土器 甕	15.5	(5.4)	—	にぶい褐 にぶい褐	〃	密。粗粒砂を含 む。	胴部内面が縦方向のナデ、口縁部が ハケ、胴部外面がナデ。口縁端部は 面取り。		
236	〃	〃	11.8	(3.2)	—	橙 橙	やや 良好	密。極粗粒砂を 少し含む。	胴部内面がナデ、口縁部は内面に斜 め方向のハケ、外面は縦方向のハケ 後ヨコナデ。		
237	〃	〃	13.0	(3.9)	—	〃	良好	密。極粗粒砂を 含む。	胴部内面がナデ、口縁部がハケ及び ヨコナデ、外面はタタキ後縦方向の ハケで、その後胴部にナデ。		
238	〃	〃	12.0	(7.2)	—	橙 にぶい橙	〃	密。粗粒砂を含 む。	胴部内面が縦方向のナデ、口縁部内 面が横方向のハケ、外面は縦方向の ハケ後螺旋状のタタキ。	外面に煤が 付着。	
239	〃	〃	13.6	(2.2)	—	にぶい褐 にぶい褐	〃	やや密。細粒砂 を多く含む。赤 色礫を含む。	頸部内面がナデ、口縁部がヨコナ デ、胴部外面が縦方向のハケ。	潰岐。	
240	〃	〃	—	(6.7)	4.2	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。極粗粒 砂を多く含む。		磨耗する。	

遺物観察表 13

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
241	Ⅲ・Ⅳ区 第Ⅲ層	弥生土器 甕	—	(5.6)	3.6	にぶい黄橙 橙	良好	やや密。粗粒砂と極粗粒砂を多く含む。	内面がナデでわずかにハケが残 り、胴部外面は縦方向のハケがわず かに残る。	
242	〃	〃	—	(4.7)	3.5	橙 橙	やや 不良	やや粗。極粗粒砂を非常に多く含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦 方向の粗いハケ。底部外面はタタ キ。	外面に黒斑 あり。
243	〃	〃	—	(5.3)	4.2	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。極粗粒砂を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦 方向のハケ、底部外面がナデ。	
244	〃	〃	—	(5.6)	—	黒褐 にぶい黄橙	〃	やや粗。極粗粒砂を多く含む。	内面が縦方向のハケ、外面がタタ キ。	内面は全面 に黒斑あり。
245	〃	弥生土器 甌	—	(2.8)	—	にぶい褐 橙	〃	やや密。粗粒砂を含む。	内面がナデでしぼり目が残り、外面 はタタキ後縦方向のハケ、底部はナ デ。底部中央に円孔が1孔あり。	
246	〃	弥生土器 鉢	—	(7.8)	4.8	橙 明赤褐	〃	やや密。極粗粒砂を含む。	体部内面がナデ、口縁部内面は横方 向のハケ。体部外面はタタキ後ナ デ、底部外面はナデ。	
247	〃	〃	22.4	(6.0)	—	橙 橙	〃	やや粗。粗粒砂を含む。	内面が密なハケ、口縁部がヨコナ デ、外面がナデで、体部下半はケズ リ後ナデ。口縁端部は面取り。	
248	〃	〃	17.6	(4.5)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや密。細粒砂を含む。	内面が斜め方向の細かいハケ、口縁 部がヨコナデ、外面には縦方向のハ ケがわずかに残る。	
249	〃	〃	31.0	(5.4)	—	橙 橙	〃	やや密。粗粒砂を少し含む。	体部内面がハケ及びナデ、口縁部は ヨコナデ後内面に横方向のハケ。	
250	〃	〃	—	(4.1)	4.0	灰黄褐 橙	やや 良好	やや粗。粗粒砂を含む。	内面がナデでわずかにハケが残 り、体部外面には縦方向のハケ、底 部外面にはナデ。	
251	〃	弥生土器 高杯	18.6	(4.0)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。極粗粒砂を少し含む。	杯部内面が縦方向のハケ、口縁部が ヨコナデ、杯部外面は丁寧なナデ で、口縁端部は面取り。	磨耗する。
252	〃	〃	—	(3.0)	—	にぶい褐 褐	〃	やや密。細粒砂を多く含む。結 晶片岩を含む。	内面が横方向のハケまたはミガ キ。外面はナデ。	讃岐。
253	〃	〃	—	(6.5)	—	明赤褐 明赤褐	やや 良好	やや粗。極粗粒砂を多く含む。	杯部内面がハケ、脚部外面は一部ハ ケが残る。2箇所に円孔の一部が残 存。	
254	〃	〃	—	(7.7)	—	浅黄橙 明赤褐	良好	やや密。粗粒砂を含む。	ナデで、脚部内面にはしぼり目が残 る。2箇所に円孔の一部が残存。	
255	〃	〃	—	(8.3)	—	橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや粗。極粗粒砂を非常に多く含む。	脚柱部内面はナデ。	磨耗する。
256	〃	〃	—	(7.9)	—	橙 橙	良好	やや密。粗粒砂を含む。	杯部内面がミガキ、脚部外面がハケ 後ミガキ、脚部内面はケズリでしぼ り目が残る。裾部に円孔あり。	
257	〃	〃	—	(5.4)	—	〃	〃	密。	外面に縦方向のミガキがわずかに 残り、内面はナデ及びハケ。裾部の4 箇所に円孔あり。	
258	〃	弥生土器 器台	—	(3.9)	24.2	〃	〃	やや粗。粗粒砂を多く含む。	外面がハケ、端部がヨコナデ、内面 が横方向のケズリ。外面に斜格子文 と鋸歯文、端部に凹線が1条。	
259	〃	土製品 支脚	—	(5.7)	11.8	にぶい褐 橙	〃	やや粗。細粒砂を多く含む。	ナデで、指頭圧痕が残る。	被熱の痕跡 あり。
260	〃	土製品 不明	—	(5.1)	13.4	にぶい褐 にぶい褐	〃	やや密。極粗粒砂を多く含む。	ナデで指頭圧痕が顕著に残り、内面 には一部ハケが残る。	裾部は馬蹄 形または半 円形か。

遺物観察表 14

図版番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
261	Ⅲ・Ⅳ区 第Ⅲ層	石製品 石包丁	全長 9.4	全幅 7.0	全厚 1.8	—	—	—	表面及び二側面に研磨の痕跡が残る。石材は粘板岩か。	石包丁の未成品。 重量144.4g	
262	Ⅲ・Ⅳ区 SB5	弥生土器 甕	—	(3.8)	5.8	橙 橙	やや 良好	やや粗。粗粒砂を含む。	内面がナデ, 外面が細かいハケ。	外面に黒斑あり。	
263	〃	土製品 支脚か	—	(3.0)	3.5	にぶい橙 にぶい橙	良好	〃	ナデ。中央には径3.5mmの円孔を穿つ。		
264	Ⅲ・Ⅳ区 SK6	土師質土器 杯	15.1	4.6	6.3	橙 橙	やや 不良	密。細粒砂を含む。		著しく磨耗する。	
265	〃	〃	14.3	4.1	6.0	灰白 灰白	〃	密。粗粒砂を少し含む。	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。		
266	〃	土師質土器 小皿	8.3	1.4	4.8	灰黄 灰白	良好	やや密。粗粒砂を少し含む。	手捏ね成形。ナデまたはヨコナデで, 指頭圧痕が残る。		
267	〃	鉄製品 刀子	全長 10.1	全幅 2.1	全厚 0.5	—	—	—	平造りで, 刃部はほぼ直線的に伸びる。表面には木質が残る。	重量22g	
268	Ⅲ・Ⅳ区 SK8	須恵器 杯	—	(2.0)	5.6	灰黄 灰黄褐	良好	密。	回転ナデ後外面下半に回転ヘラケズリ。底部外面はナデ。		
269	Ⅲ・Ⅳ区 SK9	弥生土器 甕	—	(4.8)	4.1	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。粗粒砂を含む。	内面がナデ, 外面がタタキ。		
270	〃	土師質土器 椀	—	(1.5)	6.0	浅黄橙 浅黄橙	〃	密。粗粒砂を少し含む。		著しく磨耗する。	
271	Ⅲ・Ⅳ区 SK10	弥生土器 壺	22.0	(4.1)	—	にぶい橙 にぶい橙	やや 不良	密。粗粒砂を含む。		広口壺。 著しく磨耗する。	
272	〃	弥生土器 甕	—	(3.1)	4.8	黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。粗粒砂を含む。		著しく磨耗する。 黒斑あり。	
273	Ⅲ・Ⅳ区 SD13	弥生土器 壺	—	(3.9)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。粗粒砂を多く含む。	外面が横方向のナデ。頸部に粘土帯を貼付し, 櫛状原体による斜格子文。		
274	〃	〃	15.6	(8.4)	—	橙 橙	やや 良好	密。粗粒砂を含む。		長頸壺。 磨耗する。	
275	〃	〃	16.6	(10.7)	—	にぶい赤褐 にぶい赤褐	良好	やや粗。極粗粒砂とチャートを含む。	内面がナデまたはハケ, 口縁端部はヨコナデ, 外面が粗い縦方向のハケ。口縁端部は面取り。	長頸壺。	
276	〃	〃	14.6	(8.0)	—	黄橙 黄橙	やや 良好	やや粗。極粗粒砂を多く含む。	内面が横方向のハケ, 口縁端部がヨコナデ, 外面が縦方向のハケ。	長頸壺。	
277	〃	〃	16.0	(6.5)	—	橙 橙	良好	粗。極粗粒砂と1cm大の礫を含む。	内面がナデまたは横方向のハケ, 口縁端部がヨコナデ, 外面はタタキ後縦方向のハケ。	広口壺。	
278	〃	〃	17.0	(5.6)	—	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。粗粒砂を多く含む。	ナデで, 内面にはハケがわずかに残る。	広口壺。 著しく磨耗する。	
279	〃	〃	18.2	(7.3)	—	橙 橙	やや 不良	やや密。粗粒砂を含む。	外面は縦方向のハケ。	広口壺。 磨耗する。	
280	〃	〃	20.5	(6.4)	—	明黄褐 にぶい黄橙	良好	やや密。極粗粒砂を含む。	外面は縦方向のハケ後ミガキまたはヨコナデ。内面は頸部にナデ。	広口壺。 磨耗する。	



遺物観察表 15

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面				
281	Ⅲ・Ⅳ区 SD13	弥生土器 壺	23.8	(2.3)	—	橙 橙	良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面が横方向のハケ、口縁端部はヨ コナデ。	広口壺。 磨耗する。
282	〃	〃	20.9	(3.4)	—	黄橙 黄橙	〃	やや粗。極粗粒 砂と赤色礫を 含む。		広口壺。 著しく磨耗 する。
283	〃	〃	19.6	(3.9)	—	橙 橙	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	端部がヨコナデ、外面がナデ。	広口壺。 内面は磨耗 する。
284	〃	〃	18.0	(5.1)	—	橙 にぶい橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	頸部内面がナデ、口縁部内面が横方 向のハケ、外面が縦方向のハケ。	広口壺。
285	〃	〃	24.8	(3.5)	—	明赤褐 明赤褐	〃	密。粗粒砂を含 む。	内面が横方向のナデ、端部がヨコナ デ、外面が縦方向のナデ。端部に刻 み目あり。	広口壺。
286	〃	〃	24.0	(3.2)	—	橙 にぶい黄橙	やや 良好	〃	ヨコナデ。端部にはヘラ描きの鋸歯 文の一部がみられる。	広口壺。 内面は磨耗 する。
287	〃	〃	—	(9.9)	—	にぶい赤褐 にぶい赤褐	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	胴部内面が板ナデ、頸部がナデまた はハケ、頸部外面は縦方向のハケ、 胴部外面はタタキ後ハケ。	広口壺。 外面に黒斑 あり。
288	〃	〃	—	(2.5)	—	橙 橙	〃	やや密。粗粒砂 を多く含む。	ヨコナデで、外面に櫛描の波状文、 端部に凹線が2条。	広口壺。 著しく磨耗 する。
289	〃	〃	—	(3.5)	—	浅黄 にぶい黄橙	良好	密。極粗粒砂を 少し含む。	外面に櫛描による文様あり。	広口壺。 磨耗する。
290	〃	〃	20.0	(3.5)	—	橙 明赤褐	〃	密。極粗粒砂を 含む。	ヨコナデ後外面にはハケ。口縁端部 及び外面には櫛描の波状文あり。	広口壺。
291	〃	〃	—	(1.8)	—	明褐 明褐	〃	やや密。赤色礫 を含む。	ヨコナデ。口縁端部に半円形の竹管 文、外面に線描きの鋸歯文と凹線あ り。	広口壺。
292	〃	〃	13.4	(5.0)	—	にぶい黄褐 橙	やや 不良	やや密。チャー トと赤色礫、極 粗粒砂を含む。	内外面に斜め方向のハケが残る。	複合口縁壺。 磨耗する。
293	〃	〃	25.2	(8.2)	—	橙 橙	良好	密。粗粒砂を含 む。	内面がハケ後ミガキ、口縁端部がヨ コナデ、外面がハケ。外面には櫛描 の波状文風の文様あり。	複合口縁壺。
294	〃	〃	19.3	(5.0)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	密。粗粒砂を少 し含む。	内面が横方向のハケ、口縁端部はヨ コナデ、外面はナデ。内面に赤色顔 料塗彩。	二重口縁壺。
295	〃	〃	20.0	(3.4)	—	にぶい赤褐 にぶい赤褐	〃	やや密。結晶片 岩を含む。	口縁端部がヨコナデ、外面がナデ。 口縁端部に凹線を4条施した後、円 形浮文を貼付。	広口壺。 河内。
296	〃	〃	—	(4.3)	7.4	橙 橙	やや 良好	密。極粗粒砂を 含む。	内面にわずかにハケ残る。	磨耗する。
297	〃	〃	—	(8.0)	8.2	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。細粒砂 を含む。	内面がハケ後一部ナデ、胴部外面は タタキ後ハケで一部にミガキ、底部 外面はナデ。	
298	〃	〃	—	(3.8)	4.4	橙 明赤褐	やや 良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面に横方向のハケがわずかに残 り、底部外面には木葉痕あり。	外面は磨耗 する。 黒斑あり。
299	〃	〃	—	(6.3)	6.0	浅黄 にぶい橙	良好	やや粗。極粗粒 砂と1cm大の礫 を含む。	外面は縦方向の粗いハケ、内面と底 部外面はナデ。	磨耗する。
300	〃	〃	—	(11.0)	5.0	にぶい黄橙 明黄褐	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ、胴部外面が縦方向のハ ケ、底部外面はナデ。	胴部外面に 黒斑あり。

遺物観察表 16

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
301	Ⅲ・Ⅳ区 SD13	弥生土器 壺	—	(5.1)	9.0	明赤褐 明赤褐	良好	やや密。極粗粒 砂を非常に多 く含む。	内面がハケ、胴部外面がタタキ後ナ デ、底部外面には工具の圧痕が残 る。	
302	〃	弥生土器 甕	13.4	(6.9)	—	にぶい褐 にぶい褐	やや 良好	やや密。粗粒砂 とチャートを含 む。	口縁部はヨコナデ後内面にハケ、胴 部外面はハケ。胴部内面は指頭圧痕 が顕著に残る。	摩耗する。
303	〃	〃	15.6	(9.8)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	胴部内面が斜め方向の板ナデ、口縁 部内面と胴部外面がハケ。口縁端部 は面取り。	
304	〃	〃	16.6	(5.4)	—	〃	〃	密。	全面にハケ。	
305	〃	〃	16.1	(9.2)	—	橙 橙	〃	やや密。極粗粒 砂とチャート を含む。	内面が縦または横方向のハケ、外面 がナデ後縦方向のハケ。外面は器面 の凹凸が著しい。	外面の一部 に煤が付着。
306	〃	〃	15.8	(4.9)	—	〃	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	全面にハケ。口縁端部は面取り。	
307	〃	〃	18.6	(5.0)	—	にぶい褐 にぶい褐	〃	やや密。	胴部内面が横方向のナデ、口縁部内 面が横方向のハケ、外面が縦方向の 粗いハケ。口縁端部は面取り。	
308	〃	〃	15.9	(5.7)	—	橙 橙	〃	密。粗粒砂を含 む。	胴部内面がナデ後一部ハケ、口縁部 はヨコナデ、外面はヨコナデ後縦方 向のハケ。	
309	〃	〃	20.0	(6.6)	—	明赤褐 明赤褐	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	口縁部にヨコナデ後、内面に横方向 のハケ、外面に縦方向のハケ。胴部 内面はナデ。	摩耗する。
310	〃	〃	26.4	(6.0)	—	にぶい褐 にぶい赤褐	良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	胴部内面がハケ後一部ナデ、外面は ハケ後口縁部にヨコナデ。	口縁部内面 は摩耗する。
311	〃	〃	16.8	(7.9)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	密。	内面が斜め方向の板ナデ、外面は螺旋 状のタタキ。口縁部は叩き出し成 形。	外面に煤が 付着。
312	〃	〃	15.4	(3.9)	—	〃	やや 良好	密。8mm大の礫 を含む。		著しく摩耗 する。
313	〃	〃	15.0	7.3	—	にぶい褐 明褐	〃	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	胴部内面がナデ後一部ハケ、口縁部 内面がハケ、外面はタタキ後一部ナ デ。口縁端部は面取り。	
314	〃	〃	17.0	(5.8)	—	にぶい褐 にぶい褐	良好	やや密。粗粒砂 を含む。	胴部内面がナデ、口縁部内面が横方 向のハケ、外面はタタキ。口縁部は 叩き出し成形で端部は面取り。	
315	〃	〃	19.0	(9.7)	—	橙 にぶい黄橙	〃	密。粗粒砂を少 し含む。	胴部内面が縦方向のナデ、口縁部内 面が横方向のハケ、外面がタタキ後 口縁部にヨコナデ。	
316	〃	〃	12.6	(8.2)	—	にぶい赤褐 にぶい赤褐	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	内面が斜め方向の粗いハケ、外面は タタキ後口縁部にヨコナデ。	
317	〃	〃	13.0	(6.1)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	密。粗粒砂を少 し含む。	胴部内面がハケ後一部ナデ、外面が タタキ。口縁部内面は横方向のハ ケ。口縁部は叩き出し成形。	
318	〃	〃	—	(3.6)	—	にぶい褐 にぶい褐	〃	やや密。石英と 結晶片岩を含 む。	胴部内面がナデ、口縁部がヨコナ デ、胴部外面が縦方向のハケ。	讃岐。
319	〃	〃	—	(3.2)	7.1	にぶい赤褐 にぶい褐	〃	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面が強いナデで指頭圧痕が残 り、胴部外面がタタキ後ナデ、底部 外面がナデ。	
320	〃	〃	—	(4.3)	7.2	褐灰 にぶい黄橙	〃	〃	全面にナデ。	内面に黒斑 あり。

遺物観察表 17

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
321	Ⅲ・Ⅳ区 SD13	弥生土器 甕	—	(6.9)	3.6	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。粗粒砂 を含む。	全面にナデ。	
322	〃	〃	—	(9.2)	4.6	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。	胴部内面が強い縦方向のナデ。	摩耗する。
323	〃	〃	—	(3.2)	5.7	橙 橙	良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面が細かいハケ、外面がナデ。	外面に黒斑 あり。
324	〃	〃	—	(3.9)	5.0	にぶい褐 にぶい褐	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面がハケ、胴部外面がタタキ、底 部外面がナデ。	
325	〃	〃	—	(3.8)	5.7	灰黄褐 にぶい橙	〃	やや粗。粗粒砂 を含む。	ナデ。	
326	〃	〃	—	(2.6)	6.0	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。		著しく摩耗 する。
327	〃	〃	—	(5.4)	5.3	にぶい褐 にぶい褐	良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ、胴部外面が縦方向のハ ケ。	
328	〃	〃	—	(14.0)	7.8	橙 橙	〃	やや密。細粒砂 を多く含む。	内面がナデまたはハケ、外面はタタ キ後胴部上半にハケ、胴部下半にナ デ。底部外面はナデ。	黒斑あり。
329	〃	〃	—	(3.3)	4.4	明赤褐 橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を非常に多 く含む。	胴部外面がタタキ後縦方向のハ ケ、底部外面がナデ。	内面は著し く摩耗する。
330	〃	〃	—	(4.3)	5.2	にぶい赤褐 にぶい橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	内面がナデ、胴部外面が縦方向のハ ケ、底部外面がナデ。	
331	〃	〃	—	(3.9)	4.8	明赤褐 にぶい黄褐	〃	〃	内面がナデ、外面が左上がりのタタ キ。	
332	〃	〃	—	(3.6)	2.6	橙 にぶい黄橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ、外面がタタキ。	
333	〃	〃	—	(5.3)	4.0	にぶい黄橙 にぶい橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を少し含む。	内面がハケ後底部にナデ、胴部外面 はタタキ後縦方向のナデ、底部外面 がナデ。	
334	〃	〃	—	(5.6)	4.0	にぶい黄橙 にぶい黄橙	〃	密。極粗粒砂を 多く含む。	内面が強い縦方向のナデ、胴部外面 がタタキ、底部外面がナデ。	胴部外面に 黒斑あり。
335	〃	〃	—	(7.3)	4.0	明赤褐 にぶい橙	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦 方向のハケ、底部外面がナデ。	胴部外面に 黒斑あり。
336	〃	〃	—	(4.6)	4.2	明褐 にぶい黄橙	やや 良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面がヘラナデ、外面に縦方向のハ ケ。	著しく摩耗 する。
337	〃	〃	—	(4.4)	5.3	橙 にぶい黄橙	良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面が密なハケ、外面がナデで亀裂 が入る。底部外面は一部粘土を掻き 取り凹む。	
338	〃	〃	—	(4.6)	5.4	黒褐 橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	全面にナデ。	内面は全面 に黒斑あり。
339	〃	〃	—	(7.1)	6.0	にぶい黄橙 橙	やや 良好	やや密。極粗粒 砂と赤色礫を 含む。	内面がナデ、胴部外面が縦方向のハ ケ、底部外面がナデ。	胴部外面に 黒斑あり。
340	〃	〃	—	(10.4)	4.7	にぶい橙 橙	良好	粗。極粗粒砂と チャートと赤 色礫を含む。	底部内面がナデ、胴部内面が縦方向 のケズリ、胴部外面がタタキ後縦方 向のナデ、底部外面がナデ。	

遺物観察表 18

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
341	Ⅲ・Ⅳ区 SD13	弥生土器 甕	—	(10.6)	6.9	橙 橙	良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面が縦方向のナデ、胴部外面がタ タキ、底部外面がナデ。	
342	〃	〃	—	(8.5)	1.9	橙 にぶい赤褐	〃	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	内面が縦方向のナデ、胴部外面がタ タキ後ナデ、底部外面がタタキ。	
343	〃	〃	—	(11.0)	2.4	明赤褐 明赤褐	やや 不良	やや密。粗粒砂 を含む。	内面が縦方向の強いナデ、胴部外面 がタタキ、底部外面がナデ。	内面に煤が 付着。
344	〃	〃	—	(4.9)	3.0	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面が縦方向のナデ、胴部外面がタ タキ、底部外面がナデ。	
345	〃	〃	—	(5.2)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。極粗粒砂を 少し含む。	内面がハケ後底部にナデ、底部外面 は強いナデにより凹み、わずかにタ タキが残る。	摩耗する。
346	〃	〃	—	(7.1)	2.4	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後縦 方向のハケ、底部外面がナデ。	
347	〃	〃	—	(5.2)	4.0	灰黄褐 明赤褐	〃	やや粗。極粗粒 砂を含む。	ナデで一部にハケ。	
348	〃	〃	—	(2.7)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	〃	密。粗粒砂を少 し含む。	内面にわずかにハケが残る。	摩耗する。 黒斑あり。
349	〃	〃	—	(4.5)	2.7	にぶい橙 橙	〃	密。粗粒砂を含 む。	内面がハケ、胴部外面はナデまたは ハケで胴部下半にはケズリ、底部外 面はナデ。	
350	〃	〃	—	(9.3)	4.3	赤褐 赤褐	やや 良好	やや密。細粒砂 を多く含む。1cm 大の礫を含む。	内面がハケ後縦方向の強いナデ、胴 部外面が縦方向のハケ。	底部外面は 摩耗する。
351	〃	〃	—	(3.5)	—	灰黄褐 にぶい黄橙	良好	やや密。粗粒砂 を含む。	外面がタタキ後胴部に縦方向のハ ケ。	摩耗する。 黒斑あり。
352	〃	〃	—	(3.5)	—	明赤褐 明赤褐	〃	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ。	摩耗する。
353	〃	〃	—	(4.3)	—	にぶい橙 橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	内面がヘラナデ、胴部外面がタタキ 後ナデ、底部外面がナデ。	
354	〃	〃	—	(2.2)	5.3	灰黄褐 黒	〃	密。細粒砂を非 常に多く含む。	ナデ。	外面に黒斑 があり。 讀岐。
355	〃	弥生土器 甌	—	(2.4)	3.0	橙 にぶい褐	〃	やや密。極粗粒 砂を含む。	ナデで、外面より底部中央に径5mm の円孔を1孔穿つ。	外面に黒斑 あり。
356	〃	〃	—	(5.9)	2.9	にぶい橙 橙	〃	やや粗。細粒砂 を多く含む。	内面はナデまたはハケ。内面より中 央に径8mmの円孔を1孔穿つ。	外面は摩耗 する。
357	〃	〃	—	(7.0)	—	明褐 明褐	〃	やや密。細粒砂 を含む。7mm大 の礫を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ。中 央よりやや外側に残存部で1孔がみ られる。	
358	〃	弥生土器 鉢	16.7	(5.5)	—	橙 橙	やや 良好	やや密。細粒砂 を含む。	内面が横方向のナデ後縦方向のミ ガキ、外面はハケがわずかに残る。	外面は著し く摩耗する。
359	〃	〃	16.0	(6.5)	—	〃	やや 不良	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面が斜め方向のハケ、外面にはタ タキがわずかに残る。	
360	〃	〃	14.9	(6.4)	—	〃	良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面が横方向のハケ後縦方向のナ デ、外面はナデで亀裂が入る。	

遺物観察表 19

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
361	Ⅲ・Ⅳ区 SD13	弥生土器 鉢	19.6	(6.7)	—	橙 橙	良好	密。粗粒砂を含 む。	口縁部にヨコナデ後ナデ。	内面に黒斑 あり。
362	〃	〃	22.5	9.5	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。	内面が密なハケ、底部外面はケズリ で、口縁端部は面取り。	体部外面は 摩耗する。
363	〃	〃	17.8	(4.2)	—	褐 にぶい赤褐	〃	密。	体部がナデ、口縁部はヨコナデ。	
364	〃	〃	28.0	(4.9)	—	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	密。粗粒砂を含 む。	外面はタタキ及びハケがわずかに 残る。	内面は摩耗 する。
365	〃	〃	33.1	(4.6)	—	にぶい橙 橙	良好	密。極粗粒を少 し含む。	体部内面がハケ後ナデ、口縁部内面 が横方向のハケ、外面は体部にハケ を施した後ヨコナデ。	
366	〃	〃	—	(4.0)	5.5	浅黄橙 にぶい黄橙	〃	粗。極粗粒砂を 非常に多く含 む。	内面がナデ、体部外面はタタキ後ナ デ、底部外面はナデ。	
367	〃	〃	—	(3.6)	7.2	にぶい黄褐 にぶい黄褐	〃	やや密。細粒砂 を多く含む。	内面がナデ、体部外面はハケ後ナ デ、底部外面はナデ。	
368	〃	〃	8.4	6.2	3.6	明黄褐 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面がハケ後口縁部にナデ、外面は ナデ。	
369	〃	〃	—	(3.3)	4.4	橙 橙	良好	密。粗粒砂を含 む。	内面はナデ。	外面は摩耗 する。
370	〃	〃	—	(3.2)	3.5	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	内面が横方向のハケ、外面はナデで 体部には亀裂が入る。	内外面に黒 斑あり。
371	〃	〃	—	(4.7)	4.0	にぶい橙 橙	やや 良好	〃	内面にハケがわずかに残る。	外面は摩耗 する。
372	〃	〃	—	(2.8)	3.3	橙 橙	良好	密。	内面がハケ後ナデ、外面はナデ。	外面に黒斑 あり。
373	〃	〃	—	(4.7)	3.4	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面が斜め方向のハケ、外面には亀 裂が残る。	外面は摩耗 する。
374	〃	〃	—	(3.2)	3.0	明赤褐 明赤褐	〃	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。	内面がナデ、体部外面がタタキ後ハ ケ、底部外面がタタキ。	
375	〃	〃	—	(2.7)	2.2	褐灰 にぶい褐	良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	内面がナデ、体部外面が縦方向のタ タキ、底部外面がタタキ。	黒斑あり。
376	〃	〃	18.8	4.9	9.4	にぶい赤褐 にぶい橙	〃	密。粗粒砂を少 し含む。	内面がハケ後底部にナデ、体部外面 がタタキ後ナデ、底部外面がナデ。	
377	〃	〃	—	(5.1)	—	橙 橙	やや 良好	密。	外面にタタキがわずかに残る。	内面は著し く摩耗する。
378	〃	〃	—	(3.1)	—	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面がハケ後ナデまたはミガキ、外 面がタタキ後ナデ。	
379	〃	〃	9.0	3.3	—	〃	〃	密。	内面が横方向のハケ後底部にナ デ、外面が丁寧なナデ。	
380	〃	〃	9.4	(3.2)	—	明赤褐 明赤褐	〃	密。細粒砂を含 む。	内面が縦方向のハケを密に行い、外 面はタタキ後丁寧なナデ。	

遺物観察表 20

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
381	Ⅲ・Ⅳ区 SD13	弥生土器 高杯	—	(3.0)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。粗粒砂 を少し含む。	外面がヨコナデ及びナデ。	内面は摩耗 する。
382	〃	〃	—	(3.4)	—	にぶい橙 橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	外面がヨコナデ及びナデ。	内面は摩耗 する。
383	〃	〃	—	(10.9)	—	橙 橙	〃	やや密。極粗粒 砂を多く含む。	杯部内面と脚部外面がミガキ, 杯部 外面がハケ後ミガキ, 脚部内面がハ ケ後ナデ。脚部に円孔あり。	
384	〃	〃	—	(4.6)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	杯底部には赤色顔料が残る。	摩耗する。
385	〃	〃	—	(5.0)	—	橙 橙	やや 良好	やや密。極粗粒 砂を少し含む。	外面に縦方向のハケがわずかに残 り, 脚部内面にはしほり目がみられ る。	摩耗する。
386	〃	〃	—	(5.1)	—	にぶい黄橙 にぶい黄橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。		著しく摩耗 する。
387	〃	〃	—	(5.8)	—	橙 橙	良好	密。	外面にミガキがわずかに残る。内面 はしほり目がみられる。裾部には円 孔が2箇所に残る。	著しく摩耗 する。
388	〃	〃	—	(6.9)	13.7	灰褐 にぶい橙	〃	やや密。細粒砂 を含む。	ナデで, 裾端部がヨコナデ。内面 はしほり目が残る。	
389	〃	〃	—	(8.4)	—	明赤褐 明赤褐	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	杯部内面がナデ, 脚部外面が縦方向 の板ナデ, 脚部内面がナデ。	
390	〃	〃	—	(5.4)	—	明赤褐 明赤褐	〃	密。粗粒砂を少 し含む。	外面が縦方向の粗いハケ, 脚部内面 がナデ。円孔の一部が1箇所残る。	摩耗する。
391	〃	〃	—	(5.6)	—	にぶい褐 にぶい橙	〃	密。細粒砂を含 む。	外面がハケ及びミガキがわずかに 残り, 脚部内面は強い縦方向のナ デ。	
392	〃	〃	—	(3.9)	—	にぶい赤褐 にぶい赤褐	〃	密。粗粒砂を含 む。	杯部内面と脚部内面がナデ。	外面は摩耗 する。
393	〃	〃	—	(5.8)	—	橙 橙	〃	密。粗粒砂を多 く含む。	杯部内面がハケ, 外面はミガキ, 脚 部内面は裾部がハケ, 脚柱部がヘラ ナデでしほり目が残る。	
394	〃	〃	—	(5.0)	9.4	にぶい黄橙 にぶい黄橙	〃	やや粗。粗粒砂 を非常に多く 含む。		著しく摩耗 する。
395	〃	〃	—	(3.3)	8.4	明赤褐 明赤褐	やや 良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	杯部内面がナデ。	摩耗する。
396	〃	弥生土器 手捏ね土器	—	(4.0)	4.1	にぶい赤褐 橙	良好	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。	ナデ後一部ハケ。	
397	〃	弥生土器 ミニチュア 土器	—	(3.3)	5.0	黄橙 黄橙	やや 良好	やや密。極粗粒 砂を含む。		摩耗する。
398	〃	〃	—	(4.7)	4.0	にぶい赤褐 にぶい赤褐	良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	ナデで, 指頭圧痕が顕著に残る。	
399	〃	土製品 杓子形土器	—	残存長 (3.9)	—	橙 にぶい橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	ナデ。	黒斑あり。
400	〃	土製品 支脚	—	(5.4)	8.5	にぶい黄橙 橙	〃	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。	ナデ。	摩耗する。黒 斑と被熱の 痕跡あり。

遺物観察表 21

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面				
401	Ⅲ・Ⅳ区 SD13	土製品 支脚	—	(8.7)	8.5	橙 橙	良好	やや密。粗粒砂 を含む。	ナデで、指頭圧痕が残る。	
402	〃	〃	—	(12.6)	9.4	褐灰 にぶい橙	やや 良好	やや粗。粗粒砂 と細粒砂を多 く含む。	外面がタタキ、裾端部から内面がナ デ。断面はタタキにより多角形を呈 する。	黒斑あり。
403	〃	石製品 石包丁	全長 9.2	全幅 4.6	全厚 1.2	—	—	—	刃部と反対側の面には抉りあり。石 材は粘板岩系か。	重量62.6g
404	〃	石製品 叩石	全長 17.3	全幅 13.8	全厚 5.0	—	—	—	一面の中央部に敲打痕が残る。石材 は粗粒の砂岩。	重量1.70kg
405	〃	〃	全長 10.7	全幅 8.7	全厚 3.2	—	—	—	両面に敲打痕が残る。石材は砂岩。	重量501g
406	〃	石製品 砥石	全長 8.7	全幅 4.9	全厚 2.0	—	—	—	表面と上下面の三面に使用痕が残 る。石材は細粒の砂岩。	重量114.7g
407	Ⅲ・Ⅳ区 SD14	弥生土器 壺	13.4	(6.5)	—	にぶい橙 にぶい赤褐	やや 良好	密。粗粒砂を含 む。	内面はナデ。	長頸壺。 摩耗する。
408	〃	〃	—	(7.4)	4.6	褐灰 にぶい橙	〃	やや密。粗粒砂 を多く含む。	内面が強いナデ、胴部外面がタタキ 後縦方向のハケ、底部外面がナデ。	外面に黒斑 あり。
409	〃	弥生土器 高杯	—	(3.0)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	脚部外面がハケ、脚部内面がハケ及 びナデ。裾部には残存部で1箇所 に円孔が残る。	
410	Ⅲ・Ⅳ区 SD16	須恵器 蓋	—	(2.5)	—	褐灰 褐灰	〃	やや密。細粒砂 を含む。	回転ナデ後、天井部内面にナデ。	摩耗する。
411	〃	土師質土器 皿	11.9	2.0	8.0	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや密。細粒砂 を多く含む。		著しく摩耗 する。
412	〃	備前焼 甕	37.6	(5.8)	—	にぶい褐 にぶい赤褐	良好	やや粗。粗粒砂 を含む。	ヨコナデ。	
413	〃	青磁 碗	—	(3.7)	6.4	明緑灰 明緑灰	〃	密。	明オリープ色の釉を約1mmの厚さに 施し、畳付と高台内は釉ハギ。内面 に劃花文。	龍泉窯系。
414	Ⅲ・Ⅳ区 SD17	石製品 石鏃	全長 2.7	全幅 1.6	全厚 0.4	—	—	—	打製。石材はチャート。	重量0.9g
415	Ⅲ・Ⅳ区 SD18	弥生土器 甕	8.2	(4.5)	—	にぶい橙 にぶい褐	良好	密。細粒砂を含 む。	胴部内面がナデ、口縁部内面が横方 向のハケ、外面は摩耗するがわずか にハケが残る。	
416	〃	土師質土器 小杯	—	(2.4)	3.4	橙 橙	〃	密。		著しく摩耗 する。
417	Ⅲ・Ⅳ区 SD19	弥生土器 鉢	—	(3.0)	4.8	にぶい橙 橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	ナデ。	
418	〃	土師器 高杯	—	(7.3)	—	橙 橙	〃	密。粗粒砂を含 む。	残存部で2箇所に円孔が残る。	摩耗する。
419	〃	須恵器 杯	—	(1.3)	8.0	黄灰 黄灰	〃	やや密。	回転ナデ。底部の切り離しは回転ヘ ラ切り。	
420	Ⅲ・Ⅳ区 SD24	〃	—	(1.8)	7.1	灰 灰黄褐	〃	密。	回転ナデ後、体部下半に回転ヘラケ ズリ。底部の切り離しは回転ヘラ切 り。	

遺物観察表 22

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
421	Ⅲ・Ⅳ区 SD24	瓦質土器 釜	15.0	(4.7)	—	にぶい褐 黒	良好	密。石英を含む。	胴部内面が横方向のナデ、口縁部はハケ後ヨコナデ、外面は回転ナデ。外面に炭素が吸着。	搬入品。	
422	〃	〃	—	(5.7)	—	灰 黄灰	やや 良好	やや密。細粒砂を多く含む。	ナデ。外面に炭素が吸着。		
423	Ⅲ・Ⅳ区 SD25	石製品 叩石	全長 9.9	全幅 8.6	全厚 2.6	—	—	—	両面の中央部に敲打痕が残る。石材は砂岩。	重量397g	
424	Ⅲ・Ⅳ区 SX1	須恵器 杯	—	(2.6)	9.0	灰白 灰	やや 良好	やや密。細粒砂を含む。	回転ナデ後、底部内面にナデ。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ。		
425	〃	須恵器 蓋	—	(1.3)	—	灰 灰	良好	やや密。粗粒砂を少し含む。	回転ナデ後、外面は回転ヘラケズリ、内面にナデ。		
426	〃	須恵器 壺	—	(3.2)	9.2	暗灰黄 黄灰	〃	やや密。粗粒砂を含む。	内面がナデまたはヘラナデ、胴部外面が回転ヘラケズリ、底部外面がナデ。		
427	〃	備前焼 播鉢	—	(4.4)	9.6	灰 灰	〃	やや粗。粗粒砂を多く含む。	回転ナデ後外面の一部にナデ。11条単位の播目が残る。		
428	〃	備前焼 甕	24.4	(6.5)	—	にぶい赤褐 にぶい赤褐	〃	やや粗。粗粒砂を少し含む。	ヨコナデ及びナデ。		
429	〃	〃	31.2	(10.5)	—	灰褐 浅黄	〃	やや密。8mm大の礫を含む。	ヨコナデ及びナデ。	外面の肩部には自然釉が付着。	
430	〃	瓦 平瓦	全長 (11.0)	全幅 (12.5)	全厚 (2.8)	灰黄 灰黄	〃	密。粗粒砂を少し含む。	凹面には布目痕が残り、凸面は縄目状のタタキ。		
431	〃	石製品 石包丁	全長 8.5	全幅 3.9	全厚 1.0	—	—	—	打製の石包丁。石材は蛇文岩。	重量48.0g	
432	〃	石製品 叩石	全長 (14.1)	全幅 7.5	全厚 7.0	—	—	—	石材は砂岩の河原石。	重量1.05kg	
433	〃	石製品 磨石・叩石	全長 9.5	全幅 5.7	全厚 2.3	—	—	—	両面は摩耗し平滑で、両端に敲打痕が残る。石材は砂岩の河原石。	重量200g	
434	〃	石製品 叩石・砥石	全長 16.7	全幅 8.5	全厚 4.2	—	—	—	表面の中央には敲打痕がみられ、裏面は擦痕が残り摩耗して凹む。石材は砂岩の河原石。	重量985g	
435	〃	石製品 砥石	全長 8.9	全幅 4.3	全厚 3.7	—	—	—	一面に擦痕が残る。石材は砂岩の割石。	重量273.4g	
436	〃	〃	全長 (11.5)	全幅 6.9	全厚 3.2	—	—	—	一面に擦痕が残る。石材は細粒の砂岩。	重量354.1g	
437	〃	〃	全長 22.1	全幅 7.8	全厚 3.2	—	—	—	割石の一部に擦痕が残る。石材は砂岩。	重量840g	
438	〃	〃	全長 11.2	全幅 9.8	全厚 9.2	—	—	—	残存部で表裏二面に擦痕がわずかに残り平滑になる。石材は砂岩の割石。	重量1.45kg	
439	〃	〃	全長 17.4	全幅 15.6	全厚 6.1	—	—	—	表裏面と一側面の三面に擦痕が残る。石材は砂岩の割石。	重量2.48kg	
440	〃	〃	全長 13.5	全幅 18.2	全厚 12.1	—	—	—	残存部で一面に使用痕が残る。使用面は平滑になる。石材は砂岩の割石。	重量2.75kg	



遺物観察表 23

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
441	Ⅲ・Ⅳ区 SX1	鉄製品 釘	全長 (7.5)	全幅 (0.7)	全厚 (0.7)	—	—	—	—	頂部は丁字形を呈するものとみられ、先端は細く仕上げる。錆化が進む。	重量5g
442	Ⅲ・Ⅳ区 P8	弥生土器 甕	—	(3.1)	3.2	にぶい橙 褐灰	良好	密。極粗粒砂を 少し含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ、底 部外面がナデ。	外面に黒斑 あり。	
443	Ⅲ・Ⅳ区 P9	〃	—	(2.4)	2.2	浅黄橙 にぶい黄橙	やや 不良	密。	胴部外面がタタキ、底部外面はナ デ。	内面は著し く摩耗する。	
444	Ⅲ・Ⅳ区 P10	弥生土器 高杯	—	(6.4)	—	にぶい黄橙 にぶい黄褐	やや 良好	密。粗粒砂と石 英を含む。	外面にわずかにヘラナデが残り、内 面はナデ。裾部には円孔の一部が2 箇所に残る。		
445	Ⅲ・Ⅳ区 P11	弥生土器 壺	—	(3.6)	4.0	褐灰 にぶい橙	良好	やや粗。細粗粒 砂を多く含む。	内面と底部外面がナデ。	内面に黒斑 あり。	
446	Ⅲ・Ⅳ区 P12	弥生土器 甕	15.1	(2.4)	—	にぶい橙 にぶい赤褐	やや 良好	やや粗。細粗粒 砂を多く含む。	頸部内面がナデ、口縁部内面が横方 向のハケ、外面が縦方向のヘラナ デ。口縁端部は面取りを行う。		
447	〃	須恵器 蓋	15.0	(2.8)	—	灰黄 灰黄	〃	密。	回転ナデ。外面には浅い凹線状の段 を有する。		
448	〃	須恵器 壺	8.2	(5.1)	—	灰黄褐 褐灰	良好	〃	回転ナデ。外面には凹線が2条巡 る。	内面は器面 が荒れる。	
449	Ⅲ・Ⅳ区 P13	土師質土器 椀	15.9	4.5	5.6	浅黄橙 浅黄橙	やや 不良	〃	回転ナデ後、体部下半に回転ヘラケ ズリ。断面台形を呈する高台を貼 付。	著しく摩耗 する。	
450	Ⅲ・Ⅳ区 P14	須恵器 蓋	13.3	(4.2)	—	灰 灰	良好	〃	回転ナデ後、天井部外面は丁寧なナ デ。		
451	Ⅲ・Ⅳ区 P15	土師質土器 小皿	6.6	2.1	4.4	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 不良	緻密。	手捏ね成形で、調整はナデ。		
452	〃	〃	6.8	1.6	3.4	浅黄橙 浅黄橙	良好	緻密。細粒砂を 含む。	丁寧なナデで、指頭圧痕が顕著に残 る。		
453	〃	土師質土器 皿	11.4	2.4	7.9	橙 橙	やや 不良	緻密。	手捏ね成形で、調整はナデ、口縁部 はヨコナデである。底部外面には板 状圧痕が残る。		
454	V区 第Ⅲ層	須恵器 杯	—	(2.3)	10.3	灰 灰	良好	やや密。	回転ナデ後、底部内面にナデ。回転 ヘラ切り。		
455	Ⅷ区 第Ⅳ層	弥生土器 甕	—	(2.7)	—	にぶい橙 にぶい橙	〃	やや密。極粗粒 砂と9mm大の礫 を含む。	内面がハケ後ナデ、胴部外面がタタ キ後ナデ、底部外面がケズリ後ナ デ。	底部外面に 黒斑あり。	
456	〃	弥生土器 鉢	19.8	(4.4)	—	橙 橙	〃	やや密。粗粒砂 を含む。	体部内面がナデ後ミガキ、口縁部が ヨコナデ、体部外面がナデ。		
457	Ⅷ区 P16	弥生土器 ミニチュア 土器	—	(4.1)	—	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	高杯形。外面にわずかに縦方向のハ ケが残る。	著しく摩耗 する。	
試掘	H18年度 立会	青磁 碗	14.1	6.1	5.3	にぶい黄 にぶい黄	〃	密。	削り出し高台。内面と外面の畳付ま で0.5mmの厚さに灰オリーブ色の釉 を施す。外面に線描きの蓮弁文。	龍泉窯系。	



# 圖 版





IV区調査前風景（東より）



V区調査前風景（東より）



I区上面遺構検出状態（北より）



I区上面遺構完掘状態（北より）



I区下面遺構完掘状態(北より)



I区 SD3 完掘状態(南より)



Ⅱ区遺構検出状態(南より)



Ⅱ区遺構完掘状態(南より)





Ⅱ区西壁セクション(東より)



Ⅱ区 SK4 検出状態(南より)



Ⅲ区遺構検出状態（東より）



Ⅲ区遺構検出状態（西より）



Ⅲ区遺構完掘状態（東より）



Ⅲ区遺構完掘状態（西より）



Ⅲ区 SD17 完掘状態 (西より)



Ⅲ区 SD16・SX1 完掘状態 (西より)



IV区遺構検出状態（東より）



IV区遺構完掘状態（東より）



IV区下面遺構検出状態 (西より)



IV区南壁セクション (北より)



IV区 SX1 検出状態 1 (東より)



IV区 SX1 検出状態 2 (西より)



Ⅳ区 SX1 検出状態 3 (西より)



Ⅳ区 SX1 検出状態 4 (南より)





IV区 SX1 検出状態 5 (南より)



IV区 SX1 セクション (西より)



IV区 SD24・25 完掘状態 (東より)



IV区 SD16・22・23 完掘状態 (北より)



V区遺構検出状態（西より）



V区遺構完掘状態（西より）



Ⅶ区 SD28 遺物出土状態 (西より)



Ⅶ区遺構完掘状態 (西より)



Ⅷ区遺構検出状態（東より）



Ⅷ区遺構完掘状態（西より）



H19 年度試掘調査 (TP5) 検出状態 (東より)



H19 年度試掘調査 (TP5) 北壁セクション (南より)



SK2 完掘状態 (南より)



SD1・2 セクション (西より)



SD2 完掘状態 (南より)



SD2 遺物出土状態 1 (南より)



SD2 遺物出土状態 2 (南より)



SD2 弥生土器高杯 (124) 出土状態 (西より)



SD2 石製品石包丁 (127) 出土状態 (南より)



SD3 完掘状態 (南より)



SD3 遺物出土状態 1 (南より)



SD3 遺物出土状態 2 (南より)



SD3 弥生土器高杯 (174) 出土状態 (南より)



SD3 弥生土器手捏ね土器 (179) 出土状態 (南より)



SD6 セクション (南より)



P2 鉄製品釘 (189) 出土状態 (南より)



第Ⅲ層弥生土器甕 (200) 出土状態 (南東より)



SK4 セクション (北東より)





SK4 弥生土器高杯(210) 出土状態(南より)



SD11 セクション(東より)



SD11・12 完掘状態(東より)



柱穴礎板検出状態(南より)



Ⅲ区西部遺構検出状態(北より)



Ⅲ区東部南壁セクション(北より)



Ⅲ区西部南壁セクション(北より)



第Ⅲ層石製品石包丁(261) 出土状態(南より)



SK5 根石検出状態 (南より)



SK6 セクション (南より)



SK6 土師質土器小皿 (266) 出土状態 (南より)



SK6 鉄製品刀子 (267) 出土状態 (南より)



SK8 セクション (南より)



SK10 セクション (南より)



SK12 セクション (南より)



SD13・18 セクション (東より)



SD13 弥生土器壺 (301) 出土状態 (西より)



SD13 遺物出土状態 1 (南より)



SD13 遺物出土状態 2 (北より)



SD13 弥生土器壺 (283) 出土状態 (北より)



SD13 弥生土器壺 (287) 出土状態 (北より)



SD13 弥生土器壺 (300) 出土状態 (南より)



SD13 弥生土器高杯 (383) 出土状態 (北より)



SD15 検出状態 (東より)



SD15・SX1 検出状態 (南より)



SD15 セクション (東より)



SD16・20・SX1 完掘状態 (東より)



SD17 石製品石鏃(414) 出土状態 (北より)



SD19 セクション (西より)



SD19 完掘状態 (西より)



SD22 セクション (北より)



SD24・25 完掘状態 (北より)



P15 根石検出状態 (南より)



P15 土師質土器皿 (453) 出土状態 (南より)



SX1 検出状態 1 (南より)



SX1 検出状態 2 (北より)



SX1 検出状態 3 (南より)



SX1 検出状態 4 (南より)



SX1 セクション 1 (西より)



SX1 セクション 2 (西より)



SX1 須恵器蓋 (425) 出土状態 (南より)



SX1 瓦 (430) 出土状態 (北より)



V区遺構完掘状態 (東より)



V区焼土検出状態 (南より)



VI区遺構検出状態 (北東より)



VI区遺構完掘状態 (北西より)



VII区遺構検出状態 (東より)



VII区南壁セクション (北より)



Ⅷ区遺構検出状態 (東より)



Ⅷ区遺構完掘状態 (東より)



Ⅷ区土坑セクション (北東より)



SD29 セクション (東より)



H19 年度試掘調査 TP1 検出状態 (東より)



H19 年度試掘調査 TP1 セクション (南より)



H19 年度試掘調査 TP2 検出状態 (西より)



H19 年度試掘調査 TP6 セクション (東より)



弥生土器(甕)



弥生土器(高杯)

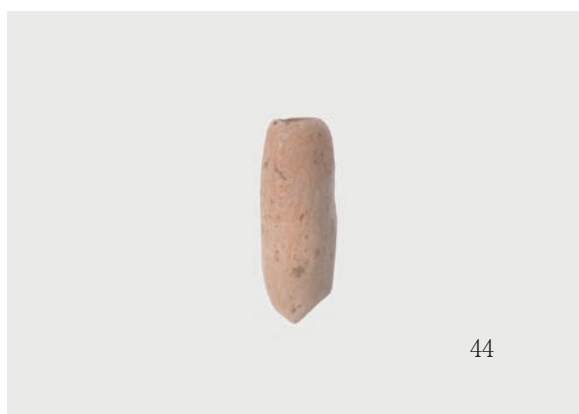




弥生土器(壺・甕・高杯)



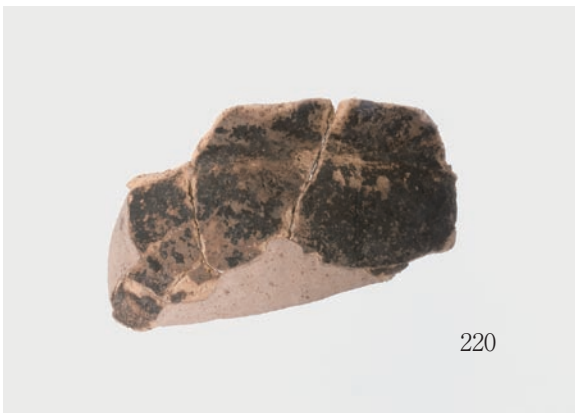
弥生土器(壺・甕・高杯), 須恵器(蓋), 土製品(支脚)



弥生土器(壺・甕・鉢), 土製品(支脚・土錘)



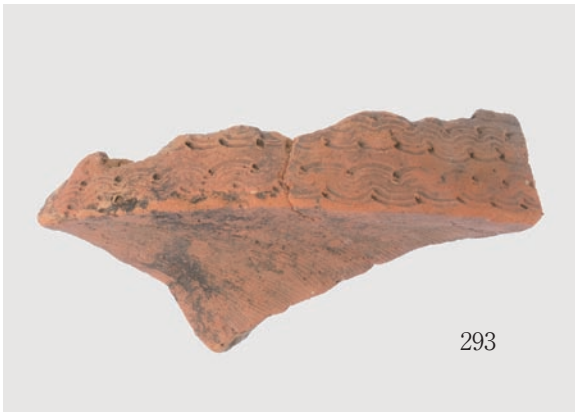
弥生土器(壺・甕・鉢・高杯), 石製品(石包丁)



弥生土器(壺・甕・手捏ね土器), 土師器(鍋), 土師質土器(小杯), 近世磁器(皿)



弥生土器(壺・鉢・高杯・器台), 土師質土器(杯), 石製品(石包丁)

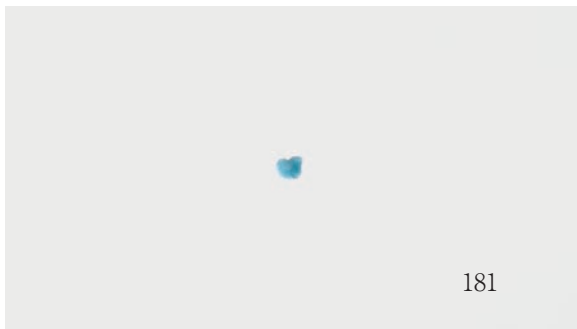


弥生土器(壺・甕・鉢)



弥生土器 (ミニチュア土器), 備前焼 (甕), 瓦質土器 (釜), 青磁 (碗), 瓦 (平瓦), 土製品 (支脚), 石製品 (石包丁)





弥生土器 (壺・手捏ね土器), 土師質土器 (杯・小皿), 石製品 (石鏃), 鉄製品 (刀子), ガラス製品 (小玉)



弥生土器（壺・高杯・手捏ね土器），土師質土器（皿・小皿），土製品（杓子形土器），石製品（石鏃）

報告書抄録

ふりがな	ひびのきさうじいせきさん							
書名	ひびのきサウジ遺跡Ⅲ							
副書名	都市計画道路高知山田線発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第110集							
編著者名	坂本幸繁・徳平涼子							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2010年1月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひびのき サウジ遺跡	〒782-0051 高知県 香美市 土佐山田町 楠目	39212	190114	33° 36' 40"	133° 41' 54"	2007.5.21 ) 2008.2.8	1,212㎡	都市計画道路高知山田線建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ひびのき サウジ遺跡	集落跡	弥生時代	土坑 溝跡	1基 8条	弥生土器 土製品 石製品 ガラス玉	弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての溝跡を検出した。 中世では溝で囲まれた屋敷跡と道路状遺構などを確認した。		
		中世	掘立柱建物跡 土坑 溝跡	5棟 2基 9条	土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 備前焼 青磁			
要約	遺構は地形の高い調査区東部で多く検出された。弥生時代の遺構は溝跡が主で、溝跡からは弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が多量に出土した。 中世の主な遺構は掘立柱建物跡5棟と溝跡9条である。溝跡はL字状を呈する屋敷の区画溝とみられるものや、平行に走る道路状遺構とみられるものがある。また、石列を伴う遺構を確認した。いずれも15世紀から16世紀のものと考えられる。							



本書作成データ

システム：MacOS X (10.5.8)

ソフト：Adobe Photoshop®10.0.1, Adobe Illustrator®13.0.3, Adobe Indesign®5.0.4など

フォント：モリサワOTF基本7書体, Times New RomanItalic

データ：図版以外はすべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第110集

ひびのきサウジ遺跡Ⅲ

都市計画道路高知山田線発掘調査報告書Ⅲ

2010年1月25日

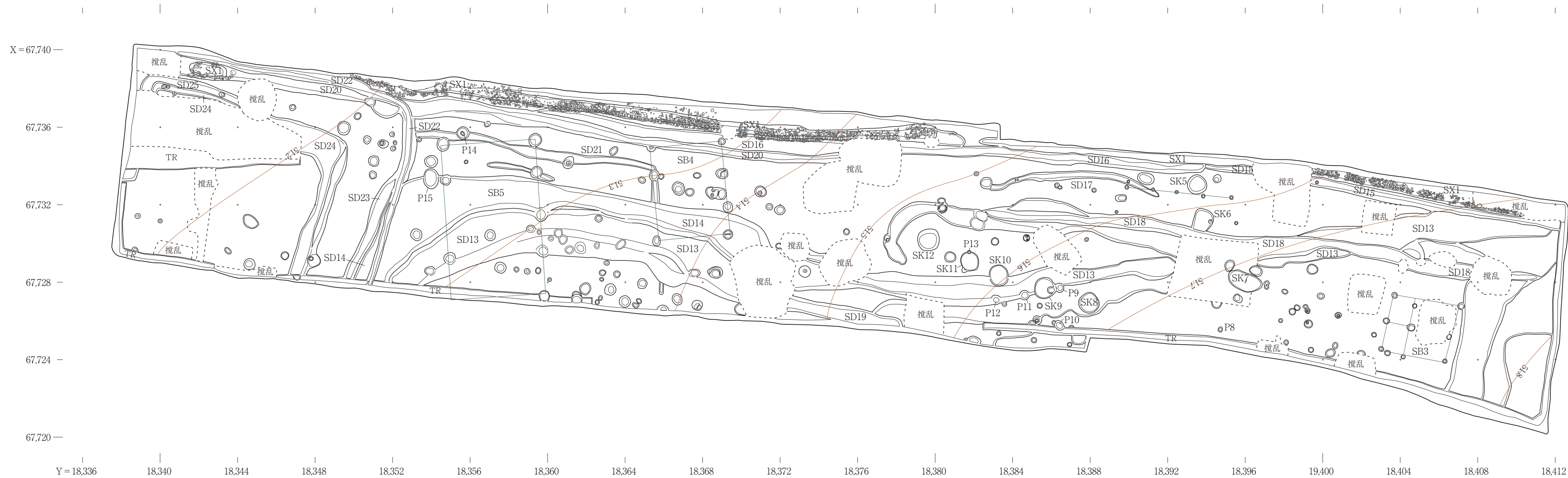
発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社





付图 1 III·IV区遺構平面図 (S=1/150)

